

超・世紀王デク

たあたん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

原作沿いのストーリー、原作通りの緑谷出久主人公。

しかしこの出久、暗黒結社ゴルゴム、そしてクライシス帝国を滅ぼした伝説の仮面ライダー!?

これは「世紀王」を超える力を得た少年が、最高のヒーローになるまでの物語である！

## 目次

緑谷出久：アフター	1
再臨!!RX（前）	10
再臨!!RX（後）	17
変身—BLACK—	26
死闘—CENTURY KING—	33
進化—BLACK RX—	45
明日—KAMEN RIDER—	54
超・英雄のtruth!?(前)	69
超・英雄のtruth!?(後)	76
継承!ワン・フォー・オール	82
ヤバ—イ!?!ハザードボーイ!	91
サードライン（前）	102
サードライン（後）	110
合格!新たな未来へレディ・ゴー!（前）	125
合格!新たな未来へレディ・ゴー!（後）	135
クラスメイトは仮面ライダー!?!見せつける体力測定（前）	140
クラスメイトは仮面ライダー!?!見せつける体力測定（後）	148
超・世紀王vsかつちゃん（前）	158
超・世紀王vsかつちゃん（後）	167
爆豪勝己：ロストオリジン（前）	182
爆豪勝己：ロストオリジン（後）	190
flashback—悪魔の実験室—（前）	196
flashback—悪魔の実験室—（後）	204
ダメだやめとけライドロン（前）	212

ダメだやめとけライドロン (後)	220
flashback—光の車ライドロン— (前)	234
flashback—光の車ライドロン— (後)	243
甦る悪夢 (前)	250
甦る悪夢 (後)	260
ボーイ・ミーツ…… (前)	271
ボーイ・ミーツ…… (後)	280
月に吼える (前)	288
月に吼える (後)	295
緑谷：ブレイジング (前)	304
緑谷：ブレイジング (後)	314
涙 (前)	322
涙 (中)	330
涙 (後)	334
幕間—GW・廃屋の怪／恋は及第点— (前)	346
幕間—GW・廃屋の怪／恋は及第点— (後)	363
開幕！体育祭 (前)	379
開幕！体育祭 (後)	391
独走!! (前)	398
独走!! (後)	408
魔王邀撃 (前)	413
魔王邀撃 (後)	422
凍てつく記憶 (前)	429
凍てつく記憶 (後)	438

## 緑谷出久：アフター

——こっこれいじょうはっ、ぼくがゆるしやなへぞっ！

——ムコセーのクセに、ヒーローきどりかア……。

——デクウっ!!

……人は、生まれながらに平等じゃない。

これが、齢4歳にして知った社会の現実。

そして僕の、最初の挫折だ。

——だいじょうぶ、たてる？

——きみは……だれ……？

——ぼく？……ぼくはね、

\*

「――」

少年が目を醒ましたのは、朝日の差し込む自宅の寝室。”平和の象徴”No.1ヒーロー・オールマイト風のデザインがなされた枕元の目覚まし時計が、セツトした時間のちょうど五分前を指している。

——夢を、見ていた。挫折と……唯一無二の、親友との出会い。いまとなつてはととも懐かしい、日だまりのような温かな記憶だ。

でもそれはもう、記憶でしかなくて。

緩慢に身体を起こした少年はスマートフォンを手にとり、検索エンジンに何かを打ち込む。表示される文字列、そして画像。——黒と緑の装甲を纏った逞しいボディと、真つ赤な複眼をもつ異形の怪人。バツタ男……そうと形容するに相応しい姿か。

《謎のヴィラン軍団”クライシス”壊滅から三ヶ月……仮面ライダーはズンゴウ?》

《謎の都市伝説ヒーロー、仮面ライダーは何者なのか?》

「仮面、ライダー……」

つぶやく少年の胸に、壮絶な記憶が甦る。二年。たった二年の間に、多くのものを得て、多くのものを失った……。

「……信彦、くん」

写真立ての中で、彼とともに無邪気な笑顔を浮かべている少年。

名を呼んだともう、応えてはくれない。

\*

超常は日常に。架空<sup>ゆめ</sup>は、現実に。

世界総人口の八割が”個性”と呼ばれる特別な能力をもつようになった超人社会。

その中であって残りの二割——”無個性”という烙印を突きつけられて十年。緑谷出久は14歳、中学三年生になっていた。

出久はずつと、”ヒーロー”を目指していた。この超常社会には明確な光と陰がある。陰の部分——個性を悪用し犯罪を起こす”ヴィラン”。その脅威から市民の安全を守るのがヒーローだ。

無個性とわかっていてもあきらめきれなかった荒唐無稽な夢は、あるときを境に”背負うべきもの”へと変わった。

(僕は絶対、ヒーローにならなきゃいけないんだ)

出久少年の、ただの憧れにしてはあまりに重すぎる決心。

それを知らず、ゆえに目の前の幼なじみは出久を見下ろし、嘲笑う。「没個性どころか無個性の teme が、なんで俺と同じ土俵に立ってるんだ? アゝア!?」

憤怒と侮蔑。血の色そのままの紅い瞳に、それらが滲んでいる。

幼なじみであつても、この男は”信彦”とは違う……出久は改めてそう感じざるをえなかった。

——ところは出久の通う折寺中学校、朝の教室。ホームルームにて進路の話題が出たこと、この幼なじみ”爆豪勝己”が得意満面でヒーロー養成の総本山”雄英高校”へ進学、オールマイトをも超えるヒー

ローになると豪語したこと、それに水を差すように無神経な担任が「そういえば緑谷も英雄志望だったな」と口走ってしまったこと。そんな一連の流れがいまの状況をつくり出した要因である。

勝己のことばに同調するかのようには、彼の取り巻きでもあるクラスメイトのひとりが声をあげる。

「大体さあ緑谷、おまえ個性以前に内申ヤベーンじゃねーの？2年の最後のほうまでほとんど学校来てねえじゃん。なあ先生？」

「ん、ああ……」担任がうなずく。「学力テストの成績は申し分ないんだけどな。出席日数がちよつと、なあ……」

担任のことばに、クラス中に白けた雰囲気広がっていく。「今さら出てきても遅いのに」なんて声まで聞こえてくる。ただでさえ無個性で地味な風貌、さらに少し前まで不登校だったときで、出久の味方などこの教室のどこにもいないのだった。

でも、

「……それでも、僕は英雄に行くよ」

「ア、ア？」

か細い声ながら、出久はきっぱりと断言した。

「きみと張り合おうってわけじゃない。でも、ヒーローにならなきゃいけない理由は僕にだってある。だから——」

「おつ、お互いががんばろうねつ、かつちゃん！」

「……は、ア？」

妙に“らしい”ことを言ったかと思えば、一転へらりと笑ってそう言い放つ。なんだか底知れないものを見せる出久を前に、勝己は暫し呆気にとられていたが。やがて、その額にビキビキと青筋が浮かんでいく——

「ほつ、ほら、まだホームルームは終わってないぞ！爆豪、緑谷、席に戻れ」

「！、は、はいー！」

「……チツ」

担任の注意でこの場は収まったものの……一部始終を目の当たり

にしたクラスメイトたちは、出久に対し侮蔑ともまた異なる感情を向けていて。

(ま、マジかコイツ……)

ひと言に集約すれば、これだった。

\*

爆豪勝己は苛立っていた。

この平凡な公立中学校で唯一の雄英合格者——目指すNo. 1ヒーローの座のためデビュー前から徹底的に箔をつける、彼なりの人生設計の一環であった。

それがよりによつて、彼が一番見下している幼なじみに邪魔されようとしている。いや別に、本当なら邪魔にもならないだろう。どうせ何もできない無個性の木偶の坊——デクなのだから。

だが、だとしても許せなかった。ましてあいつは、きつぱりと逆らってきたうえに「お互いがんばろうね」なんてのたまいやがった。この引きこもりのクソナードが、なんと自分を同格だと勘違いしている。ふざけるな。そんな勘違い、徹底的に正してやる。そう決心した勝己は放課後再び出久に絡み、彼の熱心につけている”将来のためのヒーロー分析”とかいうノートの表紙を燃やしベランダから投げ捨てた。さらに、

——そんなにヒーローに就きたきやいい方法があるぜ。来世は個性が宿ると信じて……屋上からのワンチャンダイブ！

軽い気持ちで言った。舐め腐った態度をやめさせられればそれによかった。逆上して殴りかかってくるなら徹底的に打ちのめしてやるつもりだったし……本気でショックを受けて実行するとは微塵も思っていないかった。いけしやあしやあとあんな態度をとれる奴が自殺なんてするわけない——その点だけ、勝己は出久を評価していたのだった。

だが、そのことばは結果的に己の苛立ちをさらに深めてしまった。受けた出久は刹那的にこそ表情を険しくしたものの……すぐに、それ



を困ったような微笑みに塗り替えてしまった。そして、

——かつちゃん、ヒーロー志望なんだから……。そんなこと言ったらだめだよ？

その表情、声音。どこかで見聞きしたことがあったと思ったら、自分の父親だった。母とは対照的におっとりした気弱な性格で、声を荒げて怒るところは生まれてこのかた見たことがない。そんな父が勝己の不行状をやりわり窘めるときの言い方とそっくりだった——つまりは同格どころか、この俺を見下している。

そう解釈した勝己はそれこそ我を忘れて出久の顔面を爆破しようとしたが、さすがに取り巻き連中に止められた。彼らに喫煙も許さないくらい、勝己は内申を気にしている——あからさまな怪我をさせたりしたら、それにも響く。万策尽きて「死ねッ!!」と余計に子供じみた罵声を浴びせて、勝己は下校の途についていたのである。

「〜ッ」

「か、カツキ……」

未だ怒り冷めやらぬ勝己を宥めようと、一步後ろを歩く取り巻きの少年たちは声をあげた。

「そうカツカすんなって……。ムカつくのはわかるけどよ、学校もろくに来てねえ奴の言うことにまともに取りあうだけ時間の無駄だって」「そーそー。あいつアレだろ、引きこもってるうちに頭のネジ飛んじやったんだろ。現実見えてないどころか、完全に別のものが見えちやっってる的な？」

「まあカワイソーではあるよな……。無個性なんか生まれちゃったばっかりに。カツキもさあ、幼なじみなんだしもつと優しくしてやれば？ 慈善事業だとも思ってるさ」

不良ぶっているわりにこういうことを言えるこいつらの性根は嫌いではなかった——だから傍に置いている——が、正直いまは腹立たしいだけだった。かといって、彼らにあたっては仕方ないと思う自分もいて。

「……るせーわ。あんなのと幼なじみつつーのが俺の経歴唯一の汚点だわ」

「アーハハ……そう……」

二度とあいつの話はするなど言外に示せば、彼らは黙り、次いで別の他愛もない話題を口にしはじめる。

「……………」

だが、せつかくやめさせたにもかかわらず、少年の脳裏から幼なじみの影は消えなかった。彼は本当に、現実には押し潰されて壊れてしまったのだろうか。――授業中、休み時間。ふと視界に入れたときの彼は、いつもどこか遠くを見ているような気がした。夢想ではなく、深い哀しみをその翠にたたえて……。

(……俺には関係ねえわ、クソっ)

いずれにせよ、あいつとは中学を卒業すればそれっきりなのだから。どうでもいい。

どうでも、いい。

\*

時を同じくして、緑谷出久もまた帰路を歩んでいた。表紙の焼け焦げたノートを抱えて。

苦笑を口許に浮かべて、独りごちる。

「かつちゃんめ……表紙焼くのは器物破損で、そのあとの暴言は自殺教唆だぞ。ヒーロー志望なんだから、もっと考えて行動しろよ……」

特にワンチャンダイブ発言に関しては、本気で怒ろうかとも思った。――結局感情を抑え込んだのは、勝己はただゆがんだ自尊心が肥大化しただけの子供でしかないからだ。自分がこれまでにぶつかってきた悪意の数々に比べれば、勝己にはまだ成長という改心の余地がある。あの幼なじみは自力でそこにたどり着いてくれると、出久は信じていた。

それに、

「……僕はもう、飛び降りたくらいじゃ死ねないんだよ」

浮かんできた仄暗い考えを、ぶんぶん頭を振って振り払う。

「……それはそれとして、僕も偉そうに他人を論評できる身分じゃ

ないんだ。せっかくあの人に効率的なトレーニング方法を教えてもらったわけだし、この一年でさらに力を磨いていかないと。……玲子さん、今日来てるかな？でも久々にジョーさんとガチバトルもしてみたいな、武者修行の成果も見せてもらいたいしなあ……………」

ブツブツとつぶやきながら、トンネルを歩く少年。傍目には勝己の取り巻きコンビが言うとおりの危ない子である、悲しいかな。

——そんな彼の背後に、本当に危ない存在が蠢きはじめていた。

「Mサイズの……隠れミノ……」

さながらヘドロに似た流動体は、下卑た声でつぶやきながら、ゆつくりと少年に忍び寄る。少年は気づかず歩き続ける。ある程度まで距離を詰めたところで、一気に覆いかぶさり——

「……………」

気づけば、少年の姿が消えていた。当然自身の身体に呑み込めたわけでもない。

「僕に何か御用ですか？」

「ッ!?!」

彼がギョロギョロ周囲を見回しているうちに、気づけば少年は真正面に現れていた。こちらがヴィランとわかっているだろうに、幼い顔立ちにニコニコと笑みを貼りつけている。——その瞳はまったく笑っていないかったが。

「僕の身体を乗っ取るのをおすすめしません。死んじやいますよ、下手したら」

「な、ナニ……………」

このガキは気でも触れているのか。だが柔らかな童顔とは対照的に、その瞳からあふれる気迫は先ほどまで対峙していたとあるヒーローにも匹敵するのではないかとすら思われた。

(そんなわけあるか、しつかりしろオレエ!!)

こんな小さくてひよろい中学生、どうせ強がっているだけ。彼はそう思い込むことによって、自らを叱咤した。

「この、ガキが——ッ!」

再び、出久に襲いかかる。彼が右手を高く掲げるようなしぐさを見

せたことを気にする精神的余裕はなかった。

しかし双方の行動は、刹那響いた声により強制的に中断させられることとなる。

「もう大丈夫だ少年！——私が来たッ!!」

「!?!」

逆光を浴びて立つ巨大な人影。その拳が振りかぶられ、

「TEXAS……SMAAASH!!」

凄まじい暴風が、トンネル内で躍り狂う。ヘドロのヴィランは一瞬にして吹き飛ばされ、出久はその場に蹲って耐えることしかできない。

(こ、これって……!)

きつと、いや間違いない。——あの人だ。

風が止み、出久はちら、と伏せていた顔をあげた。そこにはもうヘドロのヴィランの姿はなく……いや、あつた。巨大な人影の握るペツトボトル。よく見ればその中に、凝縮されてしまったそれが詰め込まれている。

そしてその人影は、

「悪かったな少年、ヴィラン退治に巻き込んでしまった」

「!、あ……」

「本当はきちんとお詫びをしたいところだがすまないッ、急いでいてね。それで勘弁してくれ」

「いや、じゃなくて……あつ!」

よく見たら、風圧で開いたノートのページにしっかりとサインがしてあるではないか。いつの間に? 出久は目を瞠った。

「それでは……今後とも、ヨロシクっ!!」

「!?!」

そうこうしているうちに、”彼”はトンネルの外まで駆けていく。まだだ、こちらの話は終わっていない。

「まっ、待って!」

そのあとを追って、出久は走り出す――

「――オールマイトっ!!」

トンネルを出るや否や全力で跳躍した。平和の象徴”オールマイトは、脚に普段は感じないような重みと違和感を覚えた。まるで、何かしがみついているような……。

「つて、ええッ!?!」

本当にしがみついていた。先ほど救けた学ラン姿の少年が。風圧のせいで顔面がとんでもない変形を晒している。

「くぁwせdrftgyふじこーp!?!」

「何やつとんだキミは熱狂が過ぎるぞ!?!」

振り落とそうと図りかけたオールマイトであったが、ここが上空十数メートルだということを思い出して断念した。ちよつとしつこいフアンの中学生を墜落死させたとあつてはヒーロー失格どころではない。

やむをえず、彼は手近なビルの屋上へと降り立った。少年は「死ぬかと思った……」なんてぼやきながら肩で息をしている。

「まったく、おじさん本当に時間がないんだから……――ン?」

少年の容貌を明確に認識できる状態となつて、ようやくオールマイトは気がついた。この少年、出会うのはこれが初めてではない――

「……緑谷、少年? きみ、緑谷少年か!?!」

「や、やつと……気づいてくれた……ハア」

呼吸を整えながら、少年は立ち上がる。そのエメラルドグリーンの双眸は、三ヶ月前と変わらない強い輝きをたたえていて。

「またお会いできて光栄です、オールマイト」

卵形を細めて、緑谷出久は再会を祝うことばを放った。

つづく

## 再臨!!RX (前)

まぶしい太陽の光のもとで、ふたりの英雄が対峙している。

一方は”平和の象徴”と呼ばれる生ける伝説、No. 1ヒーロー・オールマイト。

そしてもう一方は、ダークグリーンの装甲に身を包む、バツタに似た異形の戦士。頭部の真つ赤な瞳だけが、燦然と輝きを放っている。彼らは互いにゆっくりと歩み寄り——がつちりと、手と手を握りあつた。”これまで”を称え合い、”これから”を誓い合うかのごとく……。

——それから、三ヶ月。

「またお会いできて光栄です、オールマイト」

まぶしい太陽のもとで、少年は英雄と対峙していた。その翠の瞳が、怖じることなく光を反射している。

何度相まみえても、こんな小さな子供がああなるのが信じられないと内心思っているオールマイトだが、その強い輝きを向けられると、やはり本物と認めざるをえない。

が、ほどなくその表情は年齢相応に崩れて。

「つて、ていうか酷いですよオールマイト！高速でサインまでしておきながら僕だつて気づいてもくれないなんて！」

「い、いやあ……ハハハ、すまない。暗くて顔がよく見えなかったし、さつきはさつきで顔がとんでも変形していたし……その状態で認識するには、キミ地味すぎるからねえ」

「ガーン!？」

出久はあからさまにショックを受けている。無論、見ず知らずの少年であればオールマイトもそんなことは言わないが。

それに何より、オールマイトは焦っていた。平和の象徴、No. 1ヒーローたる彼は忙しい——それもなかったが、彼はもつと切羽詰まった事情……”秘密”を抱えていたのである。

「あ、あのさ少年、再会できたのは本当に嬉しいんだけど……私いま、本当に急いでて……」

「あっ、そ、そうですね。すみません、邪魔してしまつて……」菱みつつも、「でも、改めてお礼を言いたくてっ！あと、あと……ちやんとお伝えしたかつたんですつ、あのときの約束は必ず果たしますから、つて！」

「緑谷少年……」

この少年が、別れの際に告げた決意。

——僕は必ず、あなたみたいなヒーローになります。

嬉しかったし、頼もしかった。光が強ければ影も濃くなる。並ぶ者なき栄光の頂点は、裏を返せばたった独りの荒野だ。この少年は己が手にした力をもって、そこに並び立つてくれる——それも遠くない将来に。

だが、オールマイトにはふたつの懸念があった。それは、

「——ッ!？」

突如身体を押さえて苦しみはじめるオールマイト。筋骨隆々の全身から、濃い湯気のごときものが噴き出す。

「Shiしまttた……時間切れか……ッ」

「オールマイト!?!ど、どうし——」

出久が駆け寄ろうとした瞬間、ボシユウと音をたてて膨大な湯気……否、白煙がオールマイトの身体を包み込み、

「ゲホッ、ゲホッ、な……何が……」

その身に一体、何が起きたというのか。もはや近づくこともできず、出久はただ煙が風に流されるのを待つほかない。

やがて、煙が去り——

「え……う？」

「……」

そこに現れたシルエットに、出久は目を剥くほかなかった。

\*

ふたりが再会したビルのほど近くに存在する、田等院商店街。そこは買い物に訪れた主婦や会社帰りのサラリーマンなどで賑わっている。

そんな彼らが見向きもすることのない建物と建物の隙間……薄暗い路地裏に、からんとペットボトルが落下してきた。転がるそれには飲料はなく、代わりにヘドロのような不気味な物体が詰め込まれている。

「……ッ、……ッ！」

チャンスを得た”彼”はひたすらに脱出を試みた。蓋を突き上げ、わずかな隙間から身体の一部を染み出し、開こうとする。きつく締まっただけでなかなか動かない。それでもあきらめない。そうした姿勢は奇しくも、彼を捕らえたヒーローと共通するところだった。

「あと、ちよつと……あと——グギャアッ!」

そのとき凄まじい衝撃が走り、彼はペットボトルごと吹っ飛ばされた。蹴られたのだ、と知覚するのに時間はかからない。まさしく踏んだり蹴ったり……と頭によぎったそのとき、彼は頭にぶつかる障害物の感触が失われていることに気づいた。

「……クソがつ」

見上げた先に、手から爆発を起す学ラン姿の少年。なんだ、踏んだり蹴ったりどころか、至れり尽くせりじゃないか。自分はやはりヴィランに向いている、ここまで悪運が強いんだから。

少年はこちらに背を向け、友人らと話している。彼——ヘドロのヴィランは気づかれぬようゆつくりと、ペットボトルから這い出し、「良い個性の……隠れミノ——ッ!!」

かの少年に、襲いかかった。

\*

「し……」

「萎んでるうううッ!?!」



オールマイトの変わり果てた姿を目の当たりにして、少年は芯からそう叫ぶほかなかった。

煙の中から現れたオールマイトは、筋肉も脂肪も何もかも剥げ落ちたかのように痩せ細っていた。頭髮にかろうじて面影がなければ、もはや別人と認識するほかなかったであろう——それほどに。

「えっ、なっ、どどどというコト!?ニセモノ……いや僕のことちゃんとかわかってるしそんな……ハッ!?まさかおまえ、クライシスの残党かッ!?!」

身構える出久。「違う違う!」とオールマイト……だった男は慌てて否定した。

「私は真正銘のオールマイト……ゴハッ!?!」

「吐血!?!」

「だっ、だいじょうぶ……ゴホン、プールでよく腹筋力み続けてる人がいるだろう?あんな感じさ!」

「そんな理屈なの!?!」

出久は混乱した。この人は嘘を言っていない——つまりは本物のオールマイト。

しかし覇気を失ったその姿は、自分の憧れ続けた英雄とはかけ離れたものだった。

「オールマイトは強くてカッコよくて、恐れ知らずの笑顔で皆を救ってくれるヒーローで……あのとときだって、ずっと……」

「恐れ知らずの笑顔、か……」

ずるずるとその場に座り込んだオールマイトは、「見られたからには仕方ない」とごちたあと、シャツをまくり上げ、

「……!?!」

出久は思わず息を呑んだ。脇腹に走る、痛々しい傷痕。

「……五年前、とある事件で負った傷だ」傷をなぞるように、「呼吸器官半壊、胃袋全摘。度重なる手術と後遺症で憔悴してしまっってね。

……一日三時間、それがいまの私の、ヒーローとしての活動限界さ!」  
「そんな……。五年前って、毒々チェンソーと戦ったとき……?」

「詳しいな……だがあんなチンピラにやられはしないさ。これは世間に公表されていない、私が公表しないでくれと頼んだ。——きみにならわかるだろう、その理由が」

「……英雄が敗北すれば、世界は絶望に包まれる。そして、悪に屈してしまう……」

出久の脳裏に、鮮烈な記憶が呼び起こされる。——黒き光が、白き闇に葬り去られる。そのとき世界は、確かに白き闇に靡きかけた。黒き光が奇跡の復活を遂げなければ、あるいはあのまま……。

「——それが現実なんだ、少年」

「……！」

男は笑みを浮かべた。オールマイトのそれとはかけ離れた、どこまでも捨て鉢な。

「きみがたった独りの英雄として多くのものを失ってきたのは、きみが弱かったからじゃない。どんなに強くなったとしても……いや強ければ強いほど、何かを失う恐怖と苦しみに耐え続けなければならぬ。恐れ知らずの笑顔なんて、仮面までひっつけてね……」

「……！」

少年は、沈黙している。シヨックから立ち直れていないのか、自分のことばを噛みしめているのか。

いずれにせよタイムリミットが来てしまった以上、彼には時間がなかった。

「光がその輝きを増せば、影もまた濃くなる。そして影は、やがて光をも呑み込んでしまうかもしれない。……それだけは覚えておいてくれ、少年」

出久の顔を見ることなく、背中越しにそう告げてオールマイトは屋上を出た。階段を下りながら……拳を握りしめる。

(……だからきみには、託せないんだ)

強すぎる光が、影に呑み込まれればどうなるか。——彼の脳裏には、この世界を地獄へと変えていくバツタに似た異形の戦士の姿が浮かんでいた。どんなヒーローも兵器も意味をなさない、絶対的で絶望的な力。そんなものが、善も悪もなくすべてを蹂躪していく。

あの少年がそうならないという保証は、どこにもなかった。

「ツ、とにかく早く、こいつを引き渡さないと——」

捕らえたヴィランのことをようやく思い出し、なんとはなしにズボンのポケットを探る。——ない。

「え……!?!」

慌ててもう片方も探る。ない。周囲を見回す。ない。

そのときいずこからか、爆発音のようなものが響いてきて。

「ま、まさか……!?!」

\*

田等院商店街は地獄と化していた。

巻き起こる爆発が窓ガラスを粉々にし、建物そのものを破壊していく。その中心にはかのヘドロのヴィランがいた。——そして、

「がアツ、ク、ソがあああ………ツ!!」

囚われの身となりながら、離脱しようと懸命に爆破を起こし続ける爆豪勝己の姿も。

”デステゴロ”ら駆けつけたヒーローが攻撃を仕掛けるが、流動体たるヘドロのボディには通用しない。さらには勝己が爆破を起こし続けているせいで、もはやまともに接近すらできなくなってしまう。

「駄目だつ、誰か有利な個性のヒーローが来るまで待つしかねえ!」

「何、すぐに誰か来るさ! あの子には悪いが、それまで耐えてもらおう」

こんな会話がなされる始末。実力が足りない、だからどうしようもない。悔しがりながらも、恥ずかしげもなく。

——そしてそれは、野次馬にまぎれたオールマイトも同じだった。

(情けない……)

救きたい。でもタイムリミットのために、自分はもう戦える身体ではない。

(情けない……!)

へドロに取り込まれた少年が、もがいている。

(情けない——ッ！)

見開かれたその瞳が、そこにいるヒーロー全員へと継りついて——

そのとき、

群衆をかき分けるようにして、小柄な人影が飛び出していく。乱れた緑の髪が、風を切って揺れている。

(あれは——!?)

オールマイトがその正体を悟ると、デステゴロが「馬鹿野郎、止まれ!!」と制止するのがほとんど同時。

だが、学ランを纏ったかの少年は止まらない。右腕を天高く掲げ、焼け焦げたノートを放り上げる。

「あのガキ……!」

(デ、ク……?)

左の拳を固く握りしめた少年——緑谷出久は、すべてを劈くような勇ましき声で……その”再臨”のときを告げた。

「変——身ッ!!」

腹部にベルト状の装飾品——”サンライザー”が出現する。そこから眩い光が、無数の火花が放たれ、出久の身体を覆い尽くす。

それらを尽く食い破るようにして、姿を現したのは——

「なッ!？」

「あ、あれって……!？」

「いや、そんなわけ……」

「でも……そうだよ!」

野次馬、ヒーロー——場に居合わせた全員が、口を揃えてその名を呼ぶ。

「仮面、ライダー……!」

## 再臨!!RX（後）

「仮面、ライダー……!!」

約2mの屈強な体軀を誇る、緑と黒の異形なる戦士。ほとんどのヒーローが手出しできなかったふたつの巨悪とたった独りで戦い、世界を守り抜いた生ける伝説。

彼は落下してきたノートをその手に掴み取ると、そのままヘドロヴィランに向かって投げつけた。

（25ページ……!!）

《相手の面前に素早くウデ（ツル）を伸ばしてひるませ、その隙に拘束》  
そんな戦法が綴られたノート自身も、まさか自分が気円斬のごとく扱われるとは思ってもみなかったろうが。

「グギャアアッ!!」

凶器と化した角が眼球に突き刺さり、ヘドロは絶叫する。その身から力が抜け、勝己の拘束がわずかに緩んだ。

その隙を、仮面ライダーは逃さない。

「——リボルケインッ！」

サンライザーに手をかざせば、光輝たる杖”リボルケイン”が出現する。

突き刺し、光のエネルギーを送り込むことで幾多の人ならざる怪物を葬り去ってきた伝説の武器。しかし彼はいま、それを”救ける”ためだけに使おうとしていた。

「はッ！」

棒状部分が鞭のように軟らかくしななったかと思えば、勝己目がけて一瞬の間に伸長する。思わず目を背けかける勝己だったが、

「掴まれ——かっちゃんッ！」

「……!!」

我に返る。巨大な赤い複眼は、本来の幼なじみとは対照的な色。だが、その輝きは——

「ク、ソオ……!!」

何かを呪うことばを吐きながら、それでも勝己は鞭の先端を強く掴

んだ。刹那、仮面ライダーがリボルケインを力いっぱい引いたことで、その身体は宙へと放り出される。

意識が朦朧としていた勝己は、受け身をとることもできない。でも、大丈夫。

「——ッ」

仮面ライダーが、その身をがっちり受け止めてみせたのだ。

「かっちゃん、しっかりしてっ、かっちゃん！」

「デ、ク……」

なんで、

「……ン、で。テメエ、が……」

「……」わずかな沈黙のあと、「きみが、助けを求める顔してたから」

「……ッ」

違う、そうじゃない。訊きたいのは、そんなことじゃない。

でも、まだすべてが終わったわけではなかった。ヘドロヴィランは、彼らの目前で蠢き続けていたのだから。

「……」

勝己を抱えたまま戦って、これ以上危険に晒すわけにはいかない。

ライダーは一計を案じ……再び、叫んだ。

「アクロバッター!!」

刹那、固唾を呑んで見守る群衆たちの頭上を、一台のバイクが飛び越した。

青に黄のラインが入ったボディ。バッタに似たフォルムとカウル部の赤い複眼は、仮面ライダーと共通している。——アクロバッター、仮面ライダーがその名を民衆によつて与えられた所以たる存在だった。

駆けつけた“彼”に、ライダーは命じる。

「アクロバッター、かっちゃんをヒーローたちのところまで避難させるんだ」

『任せろ、ライダー』

人語まで使いこなして応じると、アクロバッターはライダーによつて乗せられた勝己を振り落とさぬように離脱していった。

あとは、決着をつけるだけ。

「……ヴィラン。僕の友達を傷つけたこと、後悔させてやる」

「ふぎ、ケンナ……！こんな、こんなコトが……！」

ヘドロはもはや正常な判断力を失っていた。恐怖でおかしくなっていたと言つてもいい。抱えきれない恐怖を恐怖と認識しきれず、ゆえに降伏ではなく特攻を選ぶ。

しかしその腕が振り下ろされた先に、ライダーの姿はなかった。

「へ……？」

頭上に、影が差す。つられて、見上げる。視界の動きが、異常なスローモーション――

――そこには、太陽を背に跳ぶバツタに似た異形の姿。

それは、こちら目がけて両足を突き出し、

「――RX……キイック!!」

彼が意識を刈り取られる前に見た、聞いた、それが最後だった。

\*

仮面ライダーの活躍により、すっかりノびてしまったヘドロヴィランは無事に逮捕された。

「……………」

野次馬や事後処理に動き回るヒーロー&警察官たちで相変わらず騒がしいなかで、勝己は悄然と座り込んでいる。「すごいタフネス」「すごい個性」「ヒーローになつたら是非ウチに来てくれ」――ヒーローたちからかけられる称賛のことばは、彼の耳には入りはしない。それに。ほどなくして、彼らは波を打つたように静まりかえった。未だ燦る炎の中から、かの異形の英雄がゆつくりと歩いてくるからだ。

「仮面、ライダー……」

「まさか、あんな子供が……」

ヒーローたちの関心は、もはやそちらに移ってしまう。変身したと

いうだけなら、なんらかの個性で外見をコピーしただけという解釈もできただろう。しかしまったく手こずることなく人質を救出し、ヴィランを鎮圧したそのパワー……本物と、認めざるをえない。

そんな彼らを一瞥することもなく、ライダーはアクロバッターに手をかける。デステゴロが慌てて呼び止めた。

「ま、待つんだ！きみには訊かなきゃならんことが——」  
「……………」

刹那、ヒーローたちは尽くその身を震わせた。向けられた巨大な赤い瞳——表情のないそれが、しかし凄まじい気迫を宿している。視線だけで命を奪われると錯覚してしまうほどに。

「——あなたたちは何者だ？」

思わぬ、問い。ヒーローたちはただ、呆けることしかできない。

「あなたたちは、何者だ？」

もう一度、繰り返される。意図の読めないそれに苛立ったデステゴロが「わからないのか？ヒーローだ」と返すと、ライダーの拳に力がかもった。ひとりでに、足が一步後ろへと下がる。

「なら、どうして助けようとしなかった？」

「そ、それは……………」

「た、助けようとしたさ！だが我々の個性が通用する相手じゃなかった、だから応援を待っていて——」

「そうやって自分に言い訳をしてツ、彼の味わった苦しみや恐怖から目を逸らすのか!？」

空気を震わせるような怒声に、いよいよヒーローたちは口がきけなくなつた。

「力が足りないのは仕方のないことかもしれない。合理的に判断するのは正しいことかもしれない。——でもツ、目の前で助けを求める人に手を伸ばすこともできないで、何がヒーローだ!!」

「……………」

ヒーローたちは、息を呑んだ。仮面ライダー——中学生の少年。彼は二年以上も前から、そうしてたった独りで世界を守ってきた。恐ら



くは、同級生が皆まだランドセルを背負っていた、そのときから……。反論などできようはずもなかった。それどころか口が縫いつけられたかのように開かない。身体も動かない。

そんなとき、ヒーローたちの間を縫って、ライダー以上の巨躯が進み出てきた。

「！、オールマイト……」

——オールマイト、どうして？ライダーは……出久は内心驚愕した。世に知られた筋骨隆々の姿で現れた彼。でも、時間制限のためにその姿は保ってられないのではなかったか。

いや、実際そうなのだろう。その息は荒く、明らかに何かに耐えていた。必死に力を振り絞っている。

そんな彼が、ライダーに向かって深々と頭を下げた。

「……すまなかった。きみの言うとおりだ、ライダー」

「……！」

「私にも気の弛みがあった、そのせいでこんなことになってしまった。我々職業ヒーローの不手際、不心得、どうか許してほしい——少年も」勝己に向かっても、頭を下げる。No. 1ヒーローがそうしている以上、ほかのヒーローたちがそれに倣わないはずがない。

ライダーはまだ何か言おうとしたものの、結局口を噤み……アクロバッターを駆って、風のように去っていった——

\*

人気のないところで変身を解いた出久は、アクロバッターと別れて帰路についていた。その表情はまったく曇りきってしまっている。

(やっちゃった……)

ヘドロヴィランを鎮圧して、勝己を助けられたことはよしとするにしても。その前後が問題だった。まず群衆の前で変身してしまったこと。雄英に入ればその時点で緑谷出久Ⅱ仮面ライダーだと世間に明らかになるし、かつての戦いで得た伝手を使えば拡散はある程度抑えられる。ゆえにそちらは致命的な問題ではないにしても、

「オールマイトに……謝らせちゃった……」

もとはといえば、自分があそこでオールマイトにしがみついたりしていなければ。あのヘドロヴィランを逃がすこともなかったかもしれない。だから謝罪すべきは自分のほうだったのに、彼の秘密のこともあつて何も言えず、結局無言で立ち去ってしまった。” 恩人 ” に対して、とても失礼なことをしてしまったのだ。

「……帰ったら、ホームページからでもメッセしてみよう。そうしたらどこかで会って、改めて……」

後悔しても、過ぎたことは変えようがないのだから。そう決心して気持ちを入れ替えようとした出久の背中に向かって、「デクっ！」と呼び止める声が響いた。

「！、かっちゃん……？！」

「ッ、……」

肩で息をする幼なじみの姿。その赤い瞳がひどく揺れている。

「もう帰されたの？あ、怪我、だいじょう——」

最後まで言いきれないうちに、勝己は爆破で勢いをつけ、出久に飛びかかっていた。

「クソ、デク……！——」

「ッ、」

躲そうと思えば、できた。しかしあえてそうしなかった。勝己の激情の理由は、考えるまでもなかったから。

「……痛いよ、かっちゃん」

「テメエどういうことだッ、ア、ア!? あんな力アずつと隠してやがったんか!? いままで俺を騙してたんか!!? ずっとずつとッ、俺を影で嘲ってやがったんか!!?」

「そうじゃない。放して」

「つぎっけんな!!俺は……俺は——!」

胸ぐらを掴みながら、震える勝己の手を……自らの手で、出久は包み込んだ。

「放して、かっちゃん。じやなきや、僕も話せない」

「……ッ!」

わずかな逡巡のあと、勝己の手が離れた。出久の手を振り払うようにして。

そのことに一抹の寂しさを覚えつつ、

「騙してたわけじゃない。でも、そうとられても仕方がないと思う……謝るよ、ごめん」

「……ぎ、けんな」

今さら謝られたところで——それはそうだろう。

「わかっている、知られた以上、きみにはちゃんと話すよ。たぶん長い話になるから……移動しない？」

「……」

勝己が小さくうなずくのを認めて、出久は歩き出した。出久のほうが先を行く、そのことに勝己が何も言わないのは、おそらく初めてのことだった。

——ほどなくして彼らは、自宅近所の公園にたどり着いた。夕陽に照らされたそこは、記憶よりずいぶんと遊具が減らされている。子供たちの姿もなく、ひどく寂れてしまった印象を受けた。

「昔は（こ）、こんなじゃなかったのね。僕らが一緒に遊んでた頃は、もつと……」

「……んな話、聞きに来たんじゃねえわ」

「そっか。そうだよね」

苦笑しつつ、やや錆の入ったブランコへ腰を下ろす。昔は足がつかなかったけれど、いまはもう膝を曲げておかないと苦しいくらいだ。

勝己にも隣を勧めたが、拒否された。目の前に立ち尽くす彼の表情は、夕陽を背にしているためによく見えない。わずかに俯きながら、出久は過去をたぐり寄せはじめた。

「きみはもう覚えてないと思うけど……4歳の頃だったかな、きみと取り巻きの子たちが男の子を泣かせて、僕が割って入ったことがあったんだ」

「……覚えてるわ」

——こっこれいじょうはっ、ぼくがゆるしやなへぞっ！

忘れるわけがなかった。思えばあれが、燻り続ける己が憤怒のはじまりだったのだから。

「……クソ胸糞悪イ」吐き捨てる。

「そっか」力なく笑い、「結局、僕もボコボコにされちゃってさ……。僕ってホントに何もできないムコセーのデクなんだなあって思ったよ、あのときは。それに、きみとももう、もとの仲良しには戻れないような気がした」

「……………」

その予感、現実のものとなっていた。

「だからね、——あそこで信彦くんに出会えたことだけが、僕の救いだった」

「……信、彦？」

「たったひとりの……親友って呼べる人。ずっと、僕を励ましてくれた……」

「……………」

知らなかった。出久に友達、まして親友と呼べる人間なんて誰もいないと思っていたのに。

変身を目の当たりにした瞬間に芽生えた胸のつかえが、ますます大きく鮮明になるような気がした。

同時に、その口ぶりが引つかかった。励ましてくれた——とは。

「そいつはいま、どこで何してんだ？」

「……………」

一瞬の沈黙。そして、

「——もう……いないよ」

「……………」

目を見開き、ことばを失う勝己。そんな彼に追い打ちをかけるように、出久は語りはじめた。忘れもしない、12歳の誕生日……その蒸し暑い夜のこと。

あの夜、長きに渡る辛く哀しい戦いの日々が始まったのだ。

へいへい

## 変身―BLACK―

秋月信彦は出久と同じ無個性の子供だった。

さらには誕生日も同じ7月15日。その事実を知ったときには、子供ながらに運命の出会いだと思った。

とはいえ共通点はそれくらいで、あとは何もかもが違っていた。

出久が幼なじみに”デク”とあだ名されたのは何も無個性ばかりが理由ではなく、成長が遅く、それ以外のことも人よりうまくできない子供だったから。

その点信彦はなんでもできた。頭もよかったし、運動も得意。やっぱりどちらかといえばかっちゃんに近い……と幼い出久は思い直したけれども、性格だけは違っていて。いつも優しく、穏やかで、孤立しがちな出久を励ましてくれた。幼稚園や学校が違う――信彦は私立に通っていた――から毎日は会えなかったけれども、出久を対等な友人と認めて尊重してくれる信彦の存在は、幼い出久にとってほぼ唯一の心の拠り所だった。

本人だけでなく、信彦の家族も良い人たちばかりだった。母・克美は快活でありながら教養と美貌を兼ね備えた可憐な女性で、五歳年上の姉・杏子も出久を実の弟のように可愛がってくれた。父・総一郎は大学教授で研究が忙しいらしく会う機会は少なかったが、実父が海外に単身赴任している出久にとってはもうひとりの父と思える、尊敬できてる人だった。

出久の母・引子はいまでも、秋月一家への感謝をしきりに口にする。無個性の子供をほとんどひとりで育てなければならぬ彼女にとっても、その存在は大いなる救いだったのである。

――そうして家族ぐるみの付き合いが続いて、幾年。緑谷出久・秋月信彦12歳……運命の誕生日が訪れたのである。

出久と信彦の誕生日を祝う誕生日パーティーは、なんと船上で行われた。直前まで知らされていなかった緑谷母子は面食らい、ただただ

恐縮するほかなかつた。秋月家が裕福なことは知っていたが、まさかここまでとは――

生まれて初めて着る白いタキシード。それに包まれた小柄な身体をぶるぶる震わせる出久を見て、信彦はくすりと笑った。

「出久おまえ、いくらなんでも緊張しすぎだぞ」

「だつ、だつてこんな……船の上でパーティーなんて、映画でくらいしか見たことないよ僕……。しかも主役だなんて……。本当に良かったの？僕までそんな……」

「良かったの！俺とおまえは兄弟みたいなモンなんだから」

「信彦くん……」

「俺が兄貴でおまえ弟なっ！」

「お、同い年なんだからせめて双子にしてよ、もうっ」

優しいことばだけでなく、和ませてくれる。太陽のような笑みを浮かべて。まぶしくて、嬉しかった。――同時に、もしも幼なじみと未だに親しくあつたならとも思った。彼にもとづくに信彦を紹介して、この場にも招待できたかもしれない……と。

センチメンタルな思考を振り払って、出久は改めて招待客らを見渡した。秋月総一郎はよほど顔が広いとみえ、様々な人々が訪おとつている。教授仲間や政財界の要人、さらには有名女優など――

「あつ、つ、月影ゆかり……！すごい、本物だ！」

「ん、ファンなの？」

「ふあ、ファンって言っていていいかはわかんないけど……」

「まあすげえ美人だもんな。あとでサインもらってこようぜ」

「！、う、うん」

それはいとも容易く果たされた。総一郎が彼女を含めた数人をふたりに紹介したのだ。

精神医学と脳外科の世界的権威である黒松教授に、無所属ながら永田町で存在感を示す坂田衆議院議員、そして経済界のドンとも言われる大宮コンツェルンの大宮会長――彼女以外の面々も錚々たるメンバーであった。

もうくらくらと目が回るような心持ちの出久だったが、月影ゆかり

が不意に放ったことばには引つ掛かりを覚えた。

「あなたたちは選ばれし子供なのよ。しつかりね」

そのひと言に怪訝な思いを抱いたのは信彦も同じらしかった。彼が「選ばれしつて、何にですか？」と訊くと、

「あら、何も知らないの？あなたたちは明日、日食の時——」

が、月影ゆかりの口からすべてが語られることはなかった。慌てた様子でやってきた総一郎に「息子たちをからかわれては困ります」と制止されてしまったのだ。彼女は「酔ってしまつて」と言い訳して口を噤んだが……総一郎や黒松教授らが一瞬見せた鬼気迫った様子に、やはり不可解なものを感じた。

——そのときのことを、出久はいまでも後悔している。もしもそこで陰謀に気づき、信彦ともども逃げ出すことができたなら。その後の悲劇は、なかったかもしれない……。

だが現実には、自分はただの無個性の子供——そう信じて疑わなかった当時の出久が、そんな行動をとれるはずもなく。

直後、突如として現れたバツタの大群に襲われ、そのまま意識を失つて……。

「さあ——一緒に……我らが御子よ……！」

そんな声が、聞こえた気がした。

\*

そして目を覚ましたとき、出久も信彦も一糸まとわぬ姿でおびただしい管に繋がれていた。——白布でその身を頭まで覆った、異形型のごとき顔をもつ醜悪な三人の男女に見下ろされている。

「人間としての記憶はすべて消し去るのみ——」

「——約束が違う！それだけはやめてくれ!!」

石灰岩のような皮膚の老人に抗議したのは、総一郎だった。「ふたりとも私の息子だ!」——平時であれば、こんなに嬉しいことばもな



かっただろうが。

老人は聞き入れず、出久、そして信彦の身体に光線を照射する。身体に激痛が走る。体内の何もかもが破壊され、同時に創造されていく。その凄絶な感覚に、ふたりの少年は泣き叫ぶほかなかった。

それが脳まで達しようとしたそのとき、総一郎がこちらに飛びかかってくるのが目に入った。弾みで管はすべてちぎれ、出久は自由の身となる。

「私に構わず逃げろ——ッ!!」

覚えているのはそこまでだった。気づけば出久はバツタの意匠を施されたバイクに凭れるようにして、その場を逃げ出していた。

——その後、”暗黒結社ゴルゴムの三神官”を名乗るかの怪人らに追われるなかで、出久は思い知った。自らがもう、ふつうの人間ではなくなってしまったことを。

三神官の執拗な攻撃に、いよいよ少年の小さな肉体が限界を迎えようとしたそのとき……出久はにわか”変身”を遂げた。バツタに似た、異形の怪人の姿——

「——グルルルルウツ、グオオオオオツ!!」

狂暴な闘争本能が身体を突き動かす。怪人——バツタ男は出久少年のそれとは似つかぬ唸り声とともに、三神官へと襲いかかった。念動力による直接攻撃も、頭上より落とされた鉄骨ものともしない。その猛攻は、彼らを一時撤退へと追い込むことに成功したのだ。

「バトル、ホッパ——」

朦朧とするなか、無意識に呼んだ名前。——あのバツタに似たバイクが独り駆けてくる。それこそが”バトルホッパ”——長きに渡る死闘をともにくぐり抜けることとなる、唯一無二の相棒の名だった。

\*

夜明けを過ぎた頃、出久はモトバイクに擬態したバトルホッパーとともに自宅へ戻った。母・引子が涙すら浮かべて抱きついてくる。その腕の温かさにわずかばかり安堵したのもつかの間、出久はすぐさま次なる行動に移らざるをえなくなつた。引子とともに信彦の帰りを待っていた秋月母娘より、総一郎からの伝言を受け取つたのだ。出久ひとりで、某工場跡地に来い――

心配して同行を申し出る母らを宥め、出久は指示された場所へ向かつた。――予想どおり、そこにはかの信彦の父の姿があつて。

ゴルゴムとはなんなのか、総一郎とはどういう関係なのか……問いただす出久に対し、彼はすべてを語つた。研究への膨大な資金援助と引き替えにゴルゴムのメンバーとなつたこと。ゴルゴムは悪魔の集団であり、一度目をつけられたら逃げる術などないこと。

そして十二年前の皆既日食の日、時を同じくして生まれたふたりの子供が、ゴルゴムの支配者「創世王」となる資格をもつこと――その子供こそが、出久と信彦であつたこと。

「じゃあ僕と信彦くんは、そのために……？」

「そうだ。きみと信彦は“世紀王”……きみの体内に埋め込まれた“キングストーン”こそが、その証だ」

「……！」

あの空間を脱出してからずっと覚えていた、腹部の違和感。それはキングストーンなどという謎の物質がもたらしたものだったのだ。

真相を知つた出久の胸に湧いてきたのは、己ばかりか実の息子までもを裏切り、ゴルゴムへと売つた目の前の男への稚い怒りだった。

「おじさんは、最初から知つてたんですか……？ 僕が……僕らが、そんな化け物にされるって……」

「これからの世界はゴルゴムによつて選ばれた人間しか生きられない、人類は淘汰されるんだ……ヒーローもヴィランも、市民もなく……」

「やめて……そんなの、聞きたくない……」

「聞くん出久くん。きみと信彦は世紀王、選ばれた存在なんだ。だ

から新世界でも生きられるし、愛する者を生かすことだってできる。だから——」

「ッ、おじさんにはわからないの!? 僕も信彦くんも、無個性ってただそれひとつで、ずっと選ばれない側の人間だったんだよ!? だから信彦くんは、将来そんな世の中を変えるんだって、そう僕に約束してくれたのに……それなのに……!」

ゴルゴムのやろうとしていることは、自分や信彦が望む真逆だ。決して認められるものではなかった。

話が平行線を辿る——そんな折、ゴルゴムから刺客が送り込まれた。"クモ怪人"——クモの遺伝子を移植され数万年の寿命を得た古代人の成れの果て……彼らに言わせれば、人類の上位種であった。複数のクモ怪人によって出久が翻弄されているうちに、総一郎は捕らわれ……そして、鉄塔の上から突き落とされた。

——その身が、地面に叩きつけられる。

「おじさん、おじさんッ!!」

「克美……杏子……信彦、を……頼む……」

息子と同一年の少年にそう言い残し……彼は——事切れた。

初めての身近な人間の死に、出久はあふれ出す激情のまま慟哭した。確かに彼はゴルゴムのメンバーだったかもしれないが、それでも父のような存在であったことに変わりはなかった。それを冷たく奪い去ったのだ——悪魔の集団、ゴルゴムが。

先ほどの総一郎に対する怒りとは比べものにならない烈しい感情が、出久の中に巻き起こった。腹の奥で、何かがどくと疼く。

迫るクモ怪人に向き直る。もはや恐怖など感じない。戦え、倒せと、本能が訴えかける。

突き動かされるように、出久はふたつの拳を握り締めた。血の滲むほど力のこもったそれらから、ギチギチギチと常人ではありえない音が響く。そして、

「変、身……!」

腕を振り上げた瞬間、出久の腹部にベルトのような物体が浮き出た。そこから放たれる閃光が、出久の肉体を醜いバツタ男へと変貌さ

せる。

”変身”はそれだけに留まらない。バツタ男の全身を、漆黒の装甲——強化皮膚”リプラスフォーム”が覆っていく。本能のままに暴れ回るのではなく、知性と勇気を兼ね備えた……世紀王”ブラックサン”にふさわしい姿。

ブラックサンへの変身を遂げた出久は、己の全身全霊をこめてクモ怪人と戦った。同級生との喧嘩の経験すらない彼だったが、世紀王の肉体、バトルホッパーの援護、そして蓄積してきたヒーローの知識によつて互角に渡り合う。そして必殺のライダーパンチ、ライダーキックを放ち、クモ怪人打倒を成し遂げたのだった——

己の”変身”と総一郎の死——哀しい現実は、その後出久を心配して駆けつけてきた引子と秋月母娘の知るところとなる。

彼女らを守り、信彦を救け出す。そして人間の自由のため、人類の敵ゴルゴムと戦うことを少年は誓った。これより待ち受ける過酷な運命を、その小さな身体で予感しながら。

——緑谷出久、12歳。

彼の幼年期はその日終わりを告げた。同年代の誰よりもずっと早く、たった独り、ヒーローとしての第一歩を踏み出したのだ。

つづく

## 死闘―CENTURY KING―

緑谷出久の戦いは熾烈を極めた。

各地で暗躍するゴルゴムの怪人たち。陥れられ、苦しめられる人々。彼らを救うために、出久は東奔西走、たった独り戦わねばならなかった。わずかな間隙を縫って信彦を捜すが、手がかりすら見つけ出せぬまま時は過ぎていく。

三神官の陰謀、怪人たちによる蹂躪、そして現れる、創世王の座を手によく出久の持つキングストーンを狙う剣聖ビルゲニア。幾度となく繰り広げられる激戦の中で、確実に出久は磨り減っていく。

疲弊するのは肉体ばかりではなかった。身勝手な欲望のために悪魔に魂を売り、他者を苦しめることになんの良心の呵責も抱かぬゴルゴムの協力者たち。その中には政財界の要人や、出久が憧れていた人氣ヒーローまでも存在していた。彼らによってゴルゴムの蠢動は揉み消され、数多いヒーローたちの大多数もまた圧力に屈して見て見ぬふりを決め込んだ。自分が憧れていたのは、こんなものだったのか――出久は大いに失望し、一時はヒーローノートをつけることもやめてしまった。

しかし、それでも出久は逃げ出さなかった。信彦を救いたいから。出久を支え、ときには危険も厭わず手を差し伸べてくれる――そんな母や克美・杏子を守りたかったから。それが大きな理由だったが、それだけではなかった。

ゴルゴムの存在に気づいた一部のヒーローたちの中には、表立っては動けないながらも出久を支援してくれる者がいて、それがヒーローへの憧憬の想いをかろうじて繋ぎとめてくれた。そして第二の超<sup>スーパー</sup>マジン、ロードセクターの獲得。力でもぎ取ったわけではない、さる人たちの信頼を得て託されたという事実。

託されたといえ、呼び名もそう。出久が変身する、漆黒の鎧を纏ったバツタの怪人……ゴルゴムの世紀王・ブラックサン。

だが、戦いの中で出久は、守るべき人々によって英雄としての名を与えられたのだ。――”仮面ライダー”。異形の仮面で哀しみを覆

い隠し、マシンを駆って颯爽と人々を救う戦士。

仮面ライダーBLACKを誇りをもつて名乗り、出久はいつ終わるとも知れない死闘に挑み続ける。すべてが始まった夏は終わり、秋、冬が過ぎ、気づけば戦場に花が芽吹こうとしていた。

——そんな慎ましやかな命の営みを踏み躪るようにして……もうひとりの世紀王が遂に、産声をあげた。

「久しぶりだな、出久……いやブラックサン」

「！、——」

「信彦、くん……」

信彦……否、世紀王シャドームーン。

世紀王の剣”サタンサーベル”を創世王より与えられ起死回生を図るビルゲニアの動きに危機感を抱いた三神官が、攫った杏子、そして彼らの命の源である空・海・地の石のエネルギーを使って彼を強化、覚醒させたのである。

ブラックサンより堅固な白銀の鎧を身に纏い、彼もまた世紀王としての一步を踏み出した。ビルゲニアを抹殺、サタンサーベルを奪還し、本来の姿である大怪人に戻った三神官を従えゴルゴムの総指揮をとる——本来の世紀王に相応しい姿。

信彦はもはや、救い出すべき親友から討たねばならない宿敵となつてしまったのか。出久の苦悩は深まる一方だった。

(いやだ……)

(きみと戦うなんていやだ……信彦くん……！)

そう思ったのは出久ひとりではない。引子も克美も杏子も、息子(弟)とその親友が殺しあう姿なんて見たくはなかった。

とりわけ杏子の想いは烈しかった。仮面ライダーの戦いを間近で支えているうちに、彼女にとって出久は弟の親友でも、もうひとりの弟でもなくなっていた。

「どうして!? どうしてあなたばかり、そんな過酷な目に遭わなけれ

ばならないの!？」

「杏子、ちゃん……」

「もういい、もういいじゃない出久くん……。私がなんとかするから……。なんとか説得して、信彦をもとに戻してみせるから……。そのあとは強いヒーローに直談判でもなんでもしてゴルゴムと戦ってもらうから……。だからもう、あなたひとりが苦しい思いをすることないじゃないっ!!」

その涙に、抱擁に、弱っていた出久の心は確かに流されかけた。たったひとりの親友と争ってまで、自分が戦い続ける意味が本当にあるのか。まだ子供でいられたはずの自分が。同級生は今頃、真新しい制服を纏って新生活に胸膨らませているのに。

切れかけた糸を強引に繋いだのは、ゴルゴムによる全世界への宣戦布告だった。

大怪人ダロム・バラオム・ビシユムが突如として街に出現、人々を蹂躪した。大怪人の強大なパワーを前に、出動したヒーローたちも太刀打ちできない。

苦痛に呻き、救いを求める無辜の民。彼らが呼ぶ名は”平和の象徴” オールマイトでも、N.O. 2ヒーロー・エンデヴアーでもなく。

「仮面、ライダー……!」

その光景を目の当たりにして、出久は立ち上がった。立ち上がるほかなかった。憧れに裏切られても、裏切ることなんてできはしなかったから。

「たとえ何と戦うことになっても……。何を失っても……。ツ、僕は――僕は戦う、戦い続けるツ!!」

「――変、身ツ!!」

”救ける”ため、再び仮面ライダーBLACKとして立ち上がった出久。己が傷つくことも厭わぬ奮戦により、彼は大怪人を一時撃退することに成功した。

「僕は絶対にあきらめない。ゴルゴムを滅ぼして……信彦くん、この手で必ず、きみを救い出すんだ……！」

\*

そうして、死闘は続く。

「なぜですッ、シャドームーン様……！シャドームーン様あ——！！」  
ライダーと心中を図ったビシユムは、しがみつくと杏子ごと貫くことを躊躇したシャドームーンにより独り犬死にを遂げ、

「俺が死んだとて、シャドームーン様がおられる……！シャドームーン様、万歳！創世王、万歳ッ！！ゴルゴム、万歳——ッ！！」

不穏分子となったクジラ怪人ごとライダーを葬り去ろうとしたバラオムもまたクジラ怪人の反撃を受け、ライダーの手で倒された。

——そして迎える、シャドームーンとの決戦。

「信彦くん……ッ」

「勝負だ……ブラックサン！」

スペックで勝るシャドームーンに対し、仮面ライダーBLACKは積み重ねてきた経験にモノを言わせて互角に立ち回る。必殺のライダーキックとシャドーキックの激突すらも、決定打には至らない。

決着の見えない死闘。しかし痺れを切らした創世王の介入により、潮目が変わった。

「いず、く……！」

「……！」

信彦の姿に戻されたシャドームーン。ライダーは……出久は攻撃を躊躇してしまふ。

それこそが創世王の狙いだった。即座に世紀王の姿に戻され、シャドームーンは猛攻を仕掛けてくる。張り詰めた緊張がわずかに緩んでしまったライダーは態勢を立て直すこともできず、追い詰められていく。

そして、



「……ッ」

「私の勝ちだな……ブラックサン」

ライダーは遂に倒れ、サタンサーベルを突きつけられる。

「どうし、て……わかって、くれないんだよ……」

この地球を、世界を、生きとし生けるものを——力なきものを救い、守る。そういう存在に、自分も信彦もなりたかったはずなのに。

親友の悲痛な声を断ちきるかのように——シャドームーンは、その腹を貫いた。

\*

仮面ライダーは、死んだ。その亡骸はキングストーンを宿したまま、天変地異に巻き込まれて海へと消えていった。

シャドームーンは躊躇ったのだ。出久の腹を裂いてキングストーンを取り出すのを。その身を、辱めるのを。

（私は……俺は出久のキングストーンなどなくても、創世王の役割を果たしてみせる……！）

それこそがキングストーンを奪わなかった理由だと自分に言い聞かせることで、彼はあくまで世紀王たろうとした。——創世王の叱責を受け、結局はその行方を捜すことになるのだが。

いずれにせよ、ゴルゴムと独り戦っていたライダーがいなくなったことで、日本はいよいよ危機に陥った。ヒーローたちの多くはゴルゴムシンパの要人から圧力をかけられ動けないまま。それを振りきったごく一部の有志たちだけでは、あちこちで暴れる怪人たちへの対処が追いつかない。

人々は三種類に分かたれた。国外へ脱出しようとする者、ただじつと嵐が過ぎ去るのを願う者……そしてゴルゴムに取り入り、自ら悪に墮ちる者。ヴィランばかりでなく、一般市民までもが”ゴルゴム親衛隊”を名乗り暴徒化した。希望を失った人々の心は、荒みきってしまったのだ。

日本が、やがては地球が、ゴルゴムの望む弱肉強食の世界へと変

わかっていく——もはや誰も、その流れを止められる者はいないかのよう  
に思われた。

だが、そうではなかった。——仮面ライダーは……緑谷出久は甦つたのだ。バラオムから助け、海へと帰したクジラ怪人……彼の与えてくれた命のエキスによって。

命のエキスの効果で強化されたライダーは、最後の大怪人ダロムを打倒、その復活を世に知らしめた。人々の心に、希望の灯がともされる——

\*

地球に生きる、生きとし生けるもの——そのすべての希望を小さな身体に背負って、出久は最終決戦へと臨んだ。ゴルゴム本拠地への突入——ゴルゴムを棄て戦友となった、クジラ怪人の尊い犠牲と引き替えに。

「悔しいか？俺が憎いかブラックサン？ならばかかってこい、今度こそ決着の時だ！」

「ッ、シャドーン……ムーン……！」

戦わねばならない。勝たねばならない。命を落としたクジラ怪人、そして無辜の人々のためにも。

再び始まる、かつての親友同士、ふたりの世紀王の対決。命のエキスで強化された仮面ライダーBLACKに対し、シャドームーンもまた創世王のエネルギーを受けその力の一部を受け継いでいた。それはライダーばかりでなく、戦場に咲く花々までもを吹き飛ばしていく。

死闘のなかで、出久はふと信彦が好きだった歌を思い出していた。緑や花々、青く澄んだ海——美しい自然に、人々の心にはぬくもりと優しさ……そんな古き良き時代を懐かしむ歌。考古学者の息子ゆえに、少年らしくない渋い趣味になってしまったと自嘲していたけれど。



\*

もう止まらない。止まるわけにはいかない。

シャドームーンの落としたサタンサーベルを手に、仮面ライダーは独り突き進んだ。

「俺は、勝つ……！必ず貴様を、地獄へ送る……！」

その鎧がところどころヒビ割れ、その隙間から赤い血を流しながらなお、シャドームーンは向かってくる。

「死ぬ——ライダーツ!!」

「ツ、もういい……、もういいだろ——!!」

満身創痍の身体を犠牲に、放たれるシャドーキック。振りかざされるサタンサーベル。膨大なエネルギーがぶつかり合い、閃光が散る。

やがてもとの暗闇が戻ったとき、立っていたのは——

「……………」

「……………」

仮面ライダーと呼ばれた、漆黒の世紀王のほうだった。

シャドームーンは刃をキングストーンに受けてしまっていた。遂に限界を迎え、倒れ込む白銀の世紀王。

「ハハ、ハ……俺の、負けか……」

「信彦、くん……」

「だが、哀れなのはおまえのほうだ、出久……。たったひとりの親友を……この信彦を殺め、生き延びたんだから……。一生、後悔を抱えて生きていくんだ……」

ふたりの世紀王の死闘は、こうしてブラックサンが制した。勝者となった彼に、創世王はゴルゴムの真実を語った。創世王は五万年周期で代替わりをする、その瞬間が目の前に来ていること。代替わりの度にその力を増してきたこと。次なる創世王は、宇宙をも支配する力を得るであろうこと。

そうして創世王は、出久に甘い誘いをかけるのだ。「おまえが次期

創世王だ」と――

「ふざけるな!!おまえの……おまえたちの身勝手のせいで、どれだけの命が……!」

『命?そんなものに、一体なんの価値がある?』

『そやつらがおまえに何かしてくれただか?おまえを慈しんでくれたか?』

『そうではあるまい。蔑み、虐げたはずだ。なんの罪もない優しいおまえを、ただ無力であるというだけで!』

「……ッ」

確かに、創世王の言うとおりであった。無個性であるというだけで、自分は誰からも見下され、夢をぐちゃぐちゃに踏みにじられてきた。そんな人間たちは、自ら虐げてきた子供であるとも知らず、仮面ライダーに助けを求めた。ライダーが死ねば、今度は一転してゴルゴムに縋りつく――他人を踏み台にして。

汚い。汚い汚い汚い!

この世界は、歌のように美しくはない。それが現実だ。

『哀れなブラックサン……。だがそんな日々ももう終わりだ。おまえは全知全能の神となる。おまえを虐げた者どもの命はもはや、すべておまえの手の内にあるのだ!!』

全知全能。それを手にしてしまえばもう、傷つく必要はない。夢見る必要もない。命の生き死にも、善悪も、すべてが思うままとなるのだから。そんな存在になれたら、どんなにかこの心は楽になれるだろう。

――だが、

「僕は……」

――それでも、

「僕だけは……ッ、僕を裏切るわけにはいかないんだあ——ッ!!」  
どんな苦難にも笑顔で打ち勝ち、力なき者を救ける超カッコイ  
ヒーロー——そうなりたいと夢見ていた、幼き日の自分。  
いまここにいる自分までもが、彼を見捨てることはできなかつた。

寿命が尽き、心臓部だけになった創世王。晒されきつた弱点を貫く  
べく、仮面ライダーはサタンサーベルを携え、駆ける。

「うおおおおおおお——ッ!!」

創世王は最後のエネルギーで迎撃してくる。既にボロボロになっ  
ていたリプラスフォームが弾き飛ばされ、醜いバツタ男の姿を露わに  
してゆく。それでもライダーは止まらない。止まらない。

「ウッウウ……ッ、——ウオオオオオオオオッ!!」

クラッシュャーを剥き出しにして絶叫しながら、バツタ男は創世王に  
迫る。そして、

『グ、ガア……!?!』

貫いた。

「グルルルルウウウウ……!」

『おの、れ……ブラックサン……! 私は、必ず甦る……人間の心に悪が  
ある限りッ、必ず……! 忘れるなア——!!』

そうしてその身が、大爆発を起こす。爆炎の膨大なエネルギーは本  
拠地じゆうに伝播し、柱を突き崩し、すべてを燃やし尽くしていく。

——シャドームーンの身体もまた、炎の中に消えてしまった。

「ッ、バトル……ホッパ……」

無意識に呼んだ、相棒の名。しかし彼は来ない。もう、いないのだ。  
代わりに飛び込んできたのは、ロードセクターだった。精根尽き果  
てた主を乗せたマシンは、崩壊するゴルゴム本拠地を風のように去っ  
ていった。

\*

雨が降りしきっていた。

「……………」

雨粒に打たれ、少年は佇んでいた。たった独りで。その小さな背中に、ゴルゴムを滅ぼし勝利したという、英雄としての誇りと喜びは微塵もない。

だって、彼には何も残されていなかった。ずっと苦楽をともにしてきたバトルホッパーは死んだ。心通わせあったクジラ怪人もまた倒れた……「海を守ってくれ」と言い残して。

杏子と克美ももう、この日本にはいない。ほかならない少年自身が、ふたりに国外へ逃げるよう告げたのだ。

それに、何より。

——たったひとりの親友を……この信彦を殺め、生き延びたんだからな……。一生、後悔を抱えて生きていくんだ……。

信彦の——宿敵シャドームーンの声が、脳裏に染みついて反響し続けている。

「信彦……くん………」

たった独りの親友を、宿敵として葬り去らねばならなかった。それと引き換えに世界を救えたという事実は、少年の心を欠片も癒しはしない。

唯一、手を差し伸べる者があるとすれば、

「出久………」

「……………かあ、さん」

母、緑谷引子。彼女は日本に残っていた。肉親として、出久の帰る場所を守る——ただ、そのために。

「よく、がんばったね。……おうち、帰ろう?」

「……………ッ」

力なんて要らない世界。誰が傷つくこともない、優しい世界。世界がいまこの瞬間のようであればいいのにと、抱きしめる母の腕の中、少年は思った。

——緑谷出久、13歳の誕生日のことだった。

う  
う  
う  
う



ゴルゴムとの決戦から母に連れられ帰還したのち、出久は泥のように眠り続けた。窓の外で降り続く雨に共鳴するかのごとく、何日も、何日も。

ようやく雨が止んだのと時を同じくして、出久もまた目を覚ました。しかし雲ひとつなく晴れ渡る青空とは対照的に、少年の心は何ひとつ晴れることはなく。――彼は、抜け殻のようになってしまった。ここから暫くに限っては、幼なじみやその取り巻きの言ったとおりだった。自宅どころか、自室からすら満足に出られない。何もせず、ただぼんやりと睡眠と排泄、無理矢理に詰め込むような食事を繰り返すだけの日々。脳裏に浮かび消えるは、信彦や杏子と過ごした幼き日の想い出。そして、

『たったひとりの親友を……この信彦を殺め、生き延びたんだからな……。一生、後悔を抱えて生きていくんだ……』  
シャドームーン……信彦の最期のことばが、怨嗟のごとく響き続ける。

「信彦、くん……ッ」

抱えた膝がぐずぐずに湿っていく。

たった独りの英雄という役割を遂げた少年の哀しみなど知ることもないまま、世界は加速度的に日常を取り戻していく。ゴルゴムも仮面ライダーも、最初から存在しなかったかのように。

\*

深く傷ついた少年が佐原一家と出会ったのは、本当に偶然だった。

ある日手洗いに行こうと部屋を出た出久は、母が電話しているのを聞いてしまったのだ。相手は海外赴任中の父・久。出久の身に起きたことを身を寄せている秋月母娘から聞き、妻子にも移住を勧めてきたのだった。

「そうね……。いまのあの子に、日本は辛いだけかもしれないわね

……」

(……!)

日本を、離れることになるかもしれない。それがわかった途端、出久はあの決戦の日以来初めて外に出た。着の身着のまま足向けたのは——秋月邸。総一郎が亡くなった直後から売りに出されていて、もう秋月一家の痕跡は残っていないかった。

そこに引越してきたばかりだったのが、佐原一家だった。佐原航空を経営する俊吉に妻の唄子、小学生の茂・一水ひとみの姉弟。そして佐原航空と業務提携しており、頻繁に遊びに来る若きフリーカメラマン、白鳥玲子。彼らは憔悴しきった出久を追い返すことなく温かく迎え入れてくれた。明るい彼らに囲まれていると、やはりかつての秋月家が思い出されて涙したけれども、そうするたび傷が癒されていくような感じがした。

新たな居場所を得て、出久はようやく立ち直りはじめた。笑顔を、取り戻した。

——そうして半年が経ったある雪の夜……かりそめの平和は吹雪に覆い隠され、さらなる邪悪が少年に牙を剥いた。

\*

突如、各地に出現した謎の楔。それに呼応するかのごとく街に現れた髑髏の一団。彼らは茂と友人たちの自転車を盗むなど小さい悪事を働く一方、街のあちこちで不可思議な現象を引き起こした。

そして、茂から連絡を受けて現場に急行した出久。彼は髑髏怪人——スカル魔の襲撃を受けることとなった。

「ッ、——変、身ッ!!」

こいつら、ただのヴィランではない。直感した出久は、およそ半年ぶりに変身の構えをとった。しかし憂鬱に沈んでいた精神のためか、リプラスフォームは未だ修復されておらず。彼はバツタ男の姿での戦いを強いられることとなった。

「グルルルッ、グガアアアアッ!!」

獣のごとく咆哮しながら独り奮戦するバツタの異形。しかし複数体で連携をとって戦うスカル魔相手に次第に追い込まれ、遂には変身解除させられてしまう。

スカル魔たちは少年をその場で始末することなく捕縛した。彼が連行されたのは、昆虫のような姿をした不気味な艦——異次元からの侵略者”クライシス帝国”のクライス要塞だった。

そこで待ち受けていたのは、地球攻撃兵団の幹部たち。貴族然とした傲岸不遜な海兵隊長ボスガンに、飄々としたロボットの機甲隊長ガテゾーン、小柄で卑しい牙隊長ゲドリアン、紅一点で冷たい美貌の諜報参謀マリバロン。

——そして個性豊かな四大隊長を統率する、威風堂々たる黄金の仮面……ジャーク将軍。

彼の口から語られたのは、恐るべき計画。日本を戦略基地として地球を侵略する。そして五十億のクライシスの民を移民させる——地球人類を滅ぼして。

「人間どもに委ねたままでは遠からずこの星は滅ぶ。しかし我らであれば理想の王国を作ることが出来る」

「ッ、だから滅ぼすっていうのか、人間を……!」

「そうだ、だが例外はある。——まず緑谷出久、おまえだ」

「何……!?!」

「おまえがクライシス帝国のために働くというなら、余より皇帝陛下に奉じておまえを名誉市民にしてやってもよい。おまえひとりではない、おまえが望む人間たちもだ」

「……!」

「あんたのことは調べさせてもらったぜ、緑谷出久」ガテゾーンが追随する。「あんたゴルゴムに改造される前は無個性で、周りから蔑まれてたらしいじゃねえか。仮面ライダーBLACKとして必死こいてゴルゴムに立ち向かってる間、ヒーローとかいう連中の多くは見て見ぬふりだったとも聞く。そんな人間どもに義理立てする必要があるのかい？」

「……ッ」

心に傷もつ身である出久が、彼らのことばにまったく心動かされな  
いはずがなかった。もしも傷つき鬱ぎこんだひとりの少年であるだ  
けならば、その甘言に惹かれてしまったかもしれない。

だが半年前のあの日、出久は創世王の誘惑を振り払ってゴルゴムを  
滅ぼしたのだ。英雄でありたいと願う自分は、決して死んだわけでは  
ない。

「確かに、おまえたちの言うとおりかもしれない……。でもッ、僕は人  
間だ！義理立てとか、そんなんじゃない……人間だから、人間の中で  
生きていたいんだ!!」

「つまり、拒絶すると？」 最後通牒のように、ボスガンが訊く。

「当たり前、前だ……!」

「……健気だな。その幼さでその心意気たるや見事。だが、」

「クライシス帝国に反抗する以上、生かしておくわけにはいかぬ。――

――緑谷出久、おまえを処刑する」

――出久は変身機能を完全に破壊され、そのうえで宇宙空間に放り  
出された。冷たく暗い星屑の海の中で、呼吸もできず、出久の身体は  
凍りついていく。

「……」

遠のく意識のなか、出久は地球を美しく照らし出す燃えさかる恒星  
――太陽を見た。その光が身体に降りかかる。

――その時、不思議なことが起こった。

再び目を覚ましたとき、出久は地球上にいた。宇宙に生身を晒し、  
大気圏を突き抜け墜落してもなお、彼は生きていたのだ。

それどころか、全身に力が漲っているのを感じる。これまでに経験  
したことない、凄まじい力。――湖面に姿を映して、その理由がよう  
やくわかった。

「これは……BLACKの身体じゃない……?」

バッタ男でも、仮面ライダーBLACKでもない。以前より太く頼もしくなった全身を、黒と緑の鎧が覆っている。ベルトの形状も変化している。——そして胸には、”RX”の文字。

太陽の光を受けたことよって、キングストーンが宿主にさらなる進化を促した。新たな仮面ライダー——”BLACK RX”へと。

そして進化は、思わぬ副産物をももたらしてくれた。

『久シブリダナ、ライダー』

「!、バトル、ホッパー……!」

甦ったバトルホッパー——主とともに進化を遂げたそれは、自らを”アクロバッター”と名乗り、再び仮面ライダーの頼もしい相棒となってくれた。

『トモニ戦オウ、ライダー』

「……うん!」

——この世界は、歌のように美しくはない。

それでもこの世界が好きで、守りたいと思った。守るために戦う。それを脅かす者が現れる限り、戦い続ける——

仮面ライダーBLACK RX。彼は刺客として差し向けられたスカル魔、怪魔ロボット・キューブリカンを激戦の果てに打倒、進化した世紀王の力をクライシス帝国に思い知らせた。

リボルケインを右手に携え、戦場を去りゆくRX。少年の面影なき大きな背中は、しかし再びの激戦の予感、そして哀愁を背負っていた。自分はまた、孤独な戦いに身を投じることになる——

\*

クライシスとの戦いは、確かに激しいものとなっていった。ゴルゴムの怪人を上回る力をもつクライシスの怪魔たち。彼らの実行するより露骨で凶悪な侵攻作戦を前に並みのヒーローたちでは太刀打ちできず、やはり仮面ライダーが矢面に立たなければならなかった。

しかしゴルゴムのときとは異なり、出久はもう磨り減っていくばかりではなかった。

”風の騎士” 怪魔獣人・ガイナギスカンとの戦いの際、怪魔界で出会ったワールド博士より託され、出久の手で造り出した光の車”ライドロン”。その完成に必要な不可欠な”勇敢なる戦士の魂”として選ばれたのは、

『ライダー、オレは正義の戦士として生まれ変わった。この地球の美しい海を守るため、あなたの矛となり盾となろう』

ゴルゴムとの最終決戦で、命を落としたクジラ怪人。聖なる海の洞窟で眠っていた彼の魂が目覚め、ライドロンを新たな肉体として甦ったのだ。

アクロバッターにライドロン。BLACK時代に出会った彼らだけでなく、新たな仲間たちも現れた。

まずクライシス襲来前から親しい仲だった白鳥玲子。アグレッシブで開放的な性格の彼女は、出久が仮面ライダーだと知っても特に態度を変えることはなく、事件あるところどこにでも駆けつけて出久をサポートしてくれた。子供扱いしてくるのも相変わらさずだったが。

そして、気兼ねなく肩を並べることのできる仲間。

いや、出会ったときには仲間ではなかったのだ。彼はクライシスから送り込まれた刺客だったのだから。

——怪魔ロボット・デスガロン。

クライシス皇帝の細胞より生まれしガロニア姫の横死に端を発する、マリバロンによる佐原一水誘拐事件の際に送り込まれた怪魔ロボット。対RXに特化した強大な戦闘能力をもちながら、RXに自らの能力を利用され、怪魔界に乗り込まれるという失態を犯してしまった。そのために見限られ、捨て駒にされ——自暴自棄になって襲いかかってくる彼を、出久は処断することができなかった。

「デスガロン！どんな目的であれ、おまえだつてこの世に生まれてきた命じゃないか！僕は……僕はできるなら、おまえを救いたい！独りぼっちで、死なせたくなかないッ!!」

「何を馬鹿な……俺は、怪魔ロボットだぞ……」

「命は命だ！そんなこと——関係ない!!」

「——!」

出久のことばに心動かされたデスガロンは、彼と協力して罫の仕掛けられた石室を脱出した。その後ともに怪魔界を彷徨い歩き、同じ怪魔ロボット・ネックスティッカーのコントロール電波によって再びRXと対決する一幕もあったものの、RXの得た新たな力のおかげで再び救われている。

もとより誇り高い精神をもつ彼が、二度命を救われたことを恩義に感じないはずがなかった。事件が解決し、一水と茂——人質として怪魔界に拉致されていた——を出久が連れ帰った際、彼もまたあとを追ってきた。そして、

「RX……いや出久どの。あなたには返しても返しきれない借りができてしまった。クライシスにもはや戻れないし、今さら戻る気もない。……だから俺を、あなたの配下にしてほしい」

「お、大袈裟だよそんな……。しかも配下って……」

怪魔ロボット軍団を引きずっているな、と出久は内心思ったが、気持ちは嬉しくないといえは嘘だった。このどことなくシャドームーンに似た機械じかけの戦士は、自分の力になりたいと言ってくれている。宿敵であったはずの彼にそう決心させたのが、他ならぬ自分自身であるという事実も。

「……」仲間なら、いいよ」

「ナカ、マ……?」

「うん。哀しみを一緒に乗り越えて、喜びを分かち合う……そういう、かけがえのない人のことだよ」

「出久どの……ナカマ。俺は、あなたの仲間だ……!」

「うん……よろしく、デスガロン!」

こうしてクライシスの怪魔ロボットは、仮面ライダーBLACK RXの頼もしい相棒となった。

——のだが、

「さすがにその姿でうろついていると注目されちゃうね。悪さしなければ異形型だと思われるだろうから、騒ぎにはならないだろうけど

……」

「なるほど、出久どのは衆目を集めたくないのだな。そういうことから心配ない」

「？」

「あなたが最初に戦った怪魔ロボット、キューブリカンが人間に擬態していたのを忘れたか？」

言うが早いか、デスガロンの身体は人間のそれに変わった。二十代半ばくらいの青年、身体つきは本来よりずいぶん細くなっている。確かにカモフラージュとしては――

「うむ、悪くないな。――せっかくだから、徹底的にデスガロンの面影を排除するか」

「？」

「すう……――つーわけでアニキ、これからはアンタについてくぜ！」

「あ、アニキ!? どうしちやったのデスガロン、キャラ変が過ぎるよ!」

「怪魔ロボットにかかりや、言葉遣いを変えるのなんかお茶の子さいさいってヤツよ! あ、いつそ名前も変えたほうがいいな……。――」

「ジョー」、俺のことは「鋼のジョー」とでも呼んでくれ!」

「は、鋼のジョー……さん?」

仲間なのは間違いない。しかし日常のデスガロン――鋼のジョーは出久の舎弟とでもいうべきポジションに収まってしまったのだ。た。

その後も出久がRXであることを知り、支えてくれる仲間と呼べる存在は増えていく。クライシスに両親を殺され、敵討ちを望む念動力を操る少女・的場響子に佐原航空の食堂で働くコック・吾郎。佐原兄妹もそうだ。クライシスとの戦いにおいて、出久の周囲には常に多くの仲間の姿があった。

それに応えるように、出久はさらなる力を得た。一水誘拐事件の際、怪魔界において二度にわたって危機に陥ったRX。

しかしその時不思議なことが起こり、RXはその姿を変えたのである。



「悲しみの王子……！——RX！ロボライダー！！」

そして、

「怒りの王子……！——RX！バイオライダー！！」

百発百中の射撃手であり、同時に堅牢な不陥要塞たるロボライダー。液化化能力をもち、どんな攻撃もすり抜けてしまう変幻自在、無敵のバイオライダー。

14歳に差し掛かろうとする少年の身でありながら、緑谷出久の力は既に多くのヒーローを超えてしまっていた。そんな少年と仲間たちの前にクライシスの陰謀はことごとく粉碎され、怪魔たちは斃れてゆく。

ゴルゴムのときは違う。険しいが、それでも充実した日々——出久の心の傷は癒え、やがて悪夢を見ることもなくなった。

少年はまだ、気づいていなかったのだ。過去は消せないものだと。癒えたとして、深い傷痕は永遠に残り続けるのだと。

「俺は誰だ……？何者なんだ……？わからない、何も——いや、ひとつだけわかることがある……。それは仮面ライダー、貴様を倒さねばならないということだ！！」

白銀の、影の王子。

拭えぬ過去である彼が、いまこのとき、再び出久の前に姿を現そうとしていた——

つづく

## 明日―KAMEN RIDER―

新たな仲間たちとの絆を深めながら、クライシス帝国への勝利を積み重ねていく緑谷出久——仮面ライダーBLACK RX。

そんな彼の前に過去の亡霊が姿を現したのは、ある日突然のことだった。

『緑谷出久……仮面ライダーBLACK RX。貴様はこの俺の手で討つ……！』

「シャドームーン……どうして……」

ホログラムとして出久の前に姿を現したシャドームーン。彼は洗脳にかけてデスガロン——鋼のジョーの命と引き換えに、勝負を要求してきた。本物なのか、生きていたのか……そうした出久の悲痛なる疑問には、いつさい答えることなく。

仲間の命を救うために、出久には戦いに赴く以外の選択肢はなかった。

対峙するシャドームーン。彼はさらなる力を得た代償に、信彦として、世紀王として、それらすべての記憶を失ってしまった。残されたのは、仮面ライダーとの決着をつけるという執着心ただひとつ。「信彦くん……ッ、ゴルゴムはもう滅びたんだ……。もう、僕らが戦う必要なんてどこにもないんだ!!」

「戦え……RX!」

「……ッ」

どんな説得にも反応すらしらない、ただ戦いを求めるだけのシャドームーン。結局出久は変身し、彼に立ち向かうほかなかった。

(信彦くん……それでも、僕は……！)

戦いたくない。防戦を強いられつつ、RXはロボライダーに変身した。しかしシャドームーンのパワーは、ロボライダーのそれと互角。ならばとバイオリライダーへと変身すれば、苦手とする灼熱を浴びせられる。

ライダーは、その場に膝を折るほかなかった。——その後、功を

焦ったゲドリアンと怪魔異生獣・アントロントの乱入がなければ、二度目の敗北を喫していたかもしれない。

「あいつにはもう、人間の心なんて残ってない……。あいつは、シャドームーンは敵だ！クライシスと同じ、どんなことがあっても倒さなきゃならない敵なんだ……！」

戦いのあと、無事に洗脳を解かれたジョーに対して、出久はそう告げた。まるで自分に言い聞かせるかのように。その瞳は、溢れだすものを押さえつけるかのようにひどく歪んでいて。

——そしてほどなく、決戦の時は訪れた。

暗躍していた怪魔異生獣・マツトボットを力ずくで従え、RXを戦場へと誘い込んだシャドームーン。もはやRXにも迷いはなく、互角の死闘が続く。

しかしそんな折、RXとシャドームーン双方の抹殺という使命を帯び、マツトボットが幼い兄妹を人質に再出現して。

「ッ、あの子たちを救けないと……！シャドームーン、おまえとの決着は——」

そのあとでつける——そんなRXのことばを、シャドームーンは一蹴した。

「知ったことか！一分一秒でも早く、俺は貴様を倒したいのだ!!」

「おまえ……っ！そんなことのために、苦しんでる子供を見殺しにできるってのか……！そうだって言うなら、僕は——」

「——僕は、おまえを許さないッ!!」

RXは跳んだ。どんな攻撃にも怯むことなく。そしてRXキックを浴びせ、シャドームーンをよろけさせる。

そして、

「リボルケインッ!!」

サンライザーから出でしリボルケインが、シャドームーンの新たな武器であるシャドーセイバーと凄絶な剣闘を演じる。

「終わりだ——ッ!!」

シャドーセイバーの切っ先が、RXの左肩を切り裂く。しかしそのために、シャドームーンは腹部が空っぽになった。

刹那、リボルケインがそこを貫いていた。

「……………」

「…………ツ、見事、だ、RX…………俺の負けだ」

「シャドームーン……………」

「一緒に逃げよう」——そう手を差し伸べる宿敵に対し、拒否した彼が語ったのは、クライシスの真の目的だった。爆弾を使って大噴火を起こし、街を火の海にする…………。マットボットは既に、その作戦のため動いていた。

「行け、RX」

「でも……………」

子供を見捨てては行けない。縛りつけられた彼らは、周囲を巻く炎でいまにも火炙りに処されようとしているのだ。

「心配するな、俺にはまだ力が残っている…………。あの子たちは…………俺が、救ける……………」

「……………」

その声音には、間違いなく信彦の面影があった。——取り戻されていた。

「信彦、くん……………」

「…………俺は、シャドームーンだ。仮面ライダー、おまえの、永遠の宿敵…………。俺は何度でも甦る…………そしていつか、おまえを倒す……………」

「……………」

「ぐずぐずするな…………行けツ！」

「ツ、…………シャドームーン、頼んだぞ！」

溢れる想いをすべて呑み込んで、RXはシャドームーンに背を向けた。アクロバッターとともに遠ざかっていく。

「元気でな…………出久……………」

だからそのつぶやきを、親友が知ることは永遠になかった。

マットボットを打倒してクライシスの陰謀を阻止し、兄妹の住む麓

の牧場に急行した出久が見たのは、花々に包まれて横たわるシャドームーンの姿。

不安そうにこちらを見つめる幼い兄妹に、出久は精一杯笑いかけた。

「大丈夫だよ。ちよつと疲れて、眠ってるだけだから」

「お父さんのところに帰るんだ」——そう諭すと、ふたりは父のもとへ駆けていった。

彼らの背中を見送って……出久はそつと、親友の前にしゃがみ込んだ。

「信彦くん……」

親友としても過ごした日々、ふたりの世紀王として死闘を演じた日々——あらゆる記憶が、雫となって瞳から溢れてくる。

「僕は、生きるよ……きみのぶんまで……。きみのぶんまで、戦い続けるから……だから……」

「おやすみ……信彦くん……ッ」

二度目の別れ。しかしあのときとは違う。

出久は誓った。クライシス帝国を——この世界のあらゆる悪を、この手で。その先に、信彦と自分が思い描いた夢があるはずだから。

親友の決意を聞き届けて……もとの心優しい少年の姿を取り戻した信彦は、かすかに微笑んでいるように見えた。

\*

親友への誓いを胸に、緑谷出久——仮面ライダーBLACK RXは戦い続ける。

シャドームーン事件の直後、クライシスには新たな動きがあった。クライシス皇帝直属、査察官ダスマダーの登場。不穏な気配を漂わせながらも、彼らの陰謀は各地に張り巡らされる。出久と仲間たちは、時には遙か四国にまで出向き、敵の作戦を叩き潰したこともあった。

そして、クライシスの民第一陣の移住作戦をも失敗に追い込んだこ

とで——遂に皇帝がしびれを切らし、戦いは佳境へと転がっていく。

皇帝より派遣された最強の怪魔異生獣・ゲドルリドル。あらゆるエネルギーを吸収するその力は、RXに対してもいかなく効果を発揮した。絶体絶命に追い込まれるRX。しかし作戦指揮を買って出たゲドリアンをスケープゴートにするダスマダーらの卑劣な企みにより、囷らずも命を救われた。

哀れなる牙隊長ゲドリアン。純粋なクライシス人でなかった彼は、それでも幹部としての意地と矜持を見せ、ゲドルリドルに膨大なエネルギーを託して散っていった。そこまでしてもなお、太陽ある限りエネルギーなど無限に得られるRXを倒すことはできず、ゲドルリドルはエネルギーを吸収する0.1秒の隙を突かれて倒されてしまったのだが——

次に立ちはだかるは、機甲隊長ガテゾーン。ダスマダーと手を組み、最強の怪魔ロボット・ヘルガテムとともに、愛馬ネオストームダガーを駆って勝負を挑んできた。

受けて立つRXはダスマダーの策略によってキングストーンの力を封じられ、変身が解けてしまう。再び、絶体絶命。

しかし彼はまたも救われた。かつてはガテゾーンの配下だった、鋼のジョー——怪魔ロボット・デスガロンによって。

「俺のアニキに、指一本触れさせはせん!!」

出久が戦えぬ間、デスガロンはたった独りその盾となり、ガテゾーン、ヘルガテムの猛攻から守り抜いてくれた。その堅牢なボディを、大破寸前まで傷つけながらも。

そして玲子・響子の水面下での働きにより、ダスマダーの策略は破られ、出久は再び変身を遂げた。

「よくも僕の仲間を傷つけたな……絶対に許さないッ!!」

その怒りのパワーを前に、ヘルガテムはなすすべなくリボルケインでその身を貫かれる。がら空きになった背中にガテゾーンが組み付き、首と切り離れたボディを自爆させるが、そんなものは液状化で脱出できるバイオリダーの前には無意味だった。

「地獄で待ってるぜ……！RX——ッ!!」

残った頭部はRXキックによつて容易く破壊され——そんな断末魔とともに、爆散したのだった。

\*

その直後から、クライシス帝国はいよいよ全面攻撃を仕掛けてきた。

日本国政府とクライシス帝国代表——マリバロン——の交渉は決裂。クライシス帝国による日本総攻撃は避けられぬ情勢となった。ゴルゴムの侵略から一年半、人々は再び疎開を始めた。

出久の恩人というべき、佐原一家も。

当然残る出久は、一家ひとりひとりに自分なりに選んだ餞別を渡した。皆、喜んで受け取ってくれた——俊吉を除いて。

「何もいらないよ、出久。俺はな……家族が無事に、笑顔で過ごしてくれりゃそれでいいんだ」

その”家族”の中には、出久や引子も入っている——彼ははつきりと、そう言ってくれた。

そして、別れのとき。

「出久、戻ってこいよ。絶対に戻ってこいよ……死ぬんじや、ないぞ！」

「あなたには茂と一水の勉強、みてもらわなくちゃならないんだから……。ちゃんとここに、帰ってくるのよ……！」

「おじさん、おばさん……」

あふれ出す想いをこらえて、出久もまた笑顔をつくった。

「……わかつてます。僕、必ずまた帰ってきますから——絶対に。約束、します」

「出久……」

「——行ってきます！」

こんな自分を、家族だと言ってくれた人たち。彼らとの約束を嘘に

しないために。出久は帰るべき場所に背を向けて、戦場へと走り出した。これが今生の別れになるという予感めいたものを、一方では抱えながら。

\*

「変、身ッ!!」

RX、そして仲間たちが相手取ることになったのは、いよいよ自ら出陣したボスガンと兵士チャップ——そして、皇帝より送り込まれた最強怪人・グランザイラス。

”最強”と銘打っているだけあって、グランザイラスはこれまでの怪人たちとは格が違っていた。RXのあらゆる攻撃が通用しない。必殺のリボルケインすら弾かれてしまった。

「ぐ、う……ッ」

「RX……覚悟ッ!!」

遂に膝をついたRXに、ボスガンとグランザイラスがトドメを刺さんと迫った——その瞬間、

「——S……MAAAAAAAAAASH!!」

気づけばボスガンらは弾き飛ばされ……RXの目前には、筋骨隆々とした巨大な背中が立ちはだかっていた。

「あ、あなたは……!」

その背中、知っているなどというものではなかった。緑谷出久の原点、唯一絶対の最高のヒーロー。

「待たせたな仮面ライダー、もう大丈夫だ。——何故って?」

「私が、来たからさッ!!」

「オール……マイト……!!」

”平和の象徴”——No. 1ヒーロー・オールマイトと、彼に賛同



するヒーローたち。彼らの救援のおかげで、出久は命を拾うことができた。

「オールマイト……まさかあなたが、助けに来てくれるなんて……」

夢のようだ、と思った。世紀王ブラックサンとなって、仮面ライダーBLACKとなつて、RXとなつて——ヒーロー同様に戦い続けてきた出久だったけれども、やはりオールマイトだけは遥か彼方の存在だと思つていたから。

そんな少年に対しまずオールマイトがとつた行動は、深々と頭を下げるこゝろだった。

「すまなかつた、少年！ここまでずっと、たった独りで戦わせてしまつて……！」

「そ、そそそそんな!!あつ、頭上げて下さいッ、オールマイト……皆さんも……」

オールマイトがゴルゴムやクライシス相手に行動を起こさなかつたのは、海外で極秘の重要任務についていたから——そう認識していたために、出久は彼への憧憬までは失わずに済んでいた。……のちに極秘任務というのは、大怪我からのリハビリテーションをそれらしく言い換えたものと知ることにはなるが、いずれにせよやむをえない。

他のヒーローたちについてもそうだ。ここに集っている彼らは皆、秘密裏に出久の戦いを支援してくれた者たち。職業ヒーローという立場に雁字搦めになりながらも、正義の魂を力強く燃やしている者たちだ。

「出久くん」そのひとり、インゲニウムが呼ぶ。「弟と同年のきみに、とんでもなく重いものを背負わせてしまった。今さらそれをすべて取り上げることができようもないけれど……これからは一緒に背負わせてほしい。ヒーローとして、大人として！」

「……はい！」

出久より実力が勝るのは、正直なところオールマイトだけ。でもそんなことは関係ない。

——この世界には、ヒーローがいる。

彼らの存在そのものが、少年には心強かつた。

\*

ほどなくして決戦を挑んできたボスガン。ヒーローたちに兵士チャップを任せ、RXに変身した出久は一騎打ちに臨んだ。

誇り高き貴族であるボスガン。そのプライドを守るためなら、どんな卑劣な手段も厭わない。

だが小手先の策を弄したところで、もはやRXとの実力差は埋まらなかった。その身は二度もリボルケインに貫かれ、

「私は、負けん……。こん、な……。地球人の小僧に……。わた、しは……」

最期の瞬間まで負けを認めることもできぬまま、ボスガンは逝った。

——その裏で、街を破壊し尽くさんとしていたグランザイラス。

最強最悪の怪人に、RXひとりでは敵わない。

でも、”彼”となら。

「DETR OIT——SM A A A A A S H!!」

オールマイトの最大の一撃が炸裂し、

「バイオブレードッ！——スパーク、カッター!!」

バイオライダーの斬撃が、その身を切り裂く。

そうして皇帝の切り札グランザイラスもまた、英雄たちの前に敗れ去ったのだった。

\*

安息は未だ、遠い。

RXとヒーローたちは、各地で人々を襲撃するチャップ部隊を倒してまわった。戦闘員である兵士チャップであれば、オールマイト以外のヒーローたちでも十分に立ち向かえる。インゲニウムらチームメンバーが現地のヒーローたちを糾合、連携し、反クライシスのネット

ワークは拡大し続けていた。

依然厳しい状況ながら、確実に差し込みつつある光明。……しかしながら、出久は不可解な胸騒ぎを覚えていた。一水が怪魔界に誘拐されたときのそれを、もっと激しくしたような――

——その予感、現実のものとなった。

ヒーローたちが保護した、襲撃を受けた人々。その中に、茂と一水の姿もあつたのだ。

彼らは出久と再会するなり、涙ながらに顛末を告げた。

「出久、おにいちゃん……ッ、」

「パパとママが……ッ、僕らを、守ろうとして――！」

あ……一瞬視界がブラックアウトしたけれど、出久はすぐに自分を取り戻した。

「茂くん、一水ちゃん……。――ごめん……。助けられなくて、ごめん……。――！」

ふたりはぶんぶんと首を振った。

「兄ちゃんのせいじゃない……。でも、クライシスは許せない……。僕らも戦うッ、クライシスと！ 仇を、討つんだ……。――！」

「茂くん一水ちゃん、私の両親もクライシスに殺されたわ」響子のことば。「でも、憎しみだけに囚われちゃだめ。平和のために、一緒に戦いましょう！」

「……。うん！」

幼い兄妹の瞳に、憎しみとは違うまつすぐな何かが宿った。――強い。彼らは。改めて思い知った出久の胸のうちには、夫妻の笑顔が浮上していた。

「出久くん……。大丈夫？」

玲子が小声で問いかけてくる。

「……。うん」うなずきつつ、「おかしいんだ……。悲しいはずなのに、涙が出ない……。信彦くんときは、そうじゃなかったのに……」

気づいていないだけで、自分の心は人の生き死にというものに慣れてしまったのだろうか。それとも、思っていたほど佐原夫妻を大切に

思っていないかったのか。……いずれにせよ、それは人間ではなく、その原形をとどめぬバツタ男の冷たい心だ。

けれど玲子は、「そんなことない」と否定してくれた。

「出久くんは優しすぎるのよ。いまだって、真っ先に出たのは”救けられなくてごめん”だったでしょう？自分の悲しみより、茂くんと一水ちゃんの悲しみを想って……いまは心のうちに秘めようとしてるんじゃないかな」

「……玲子さん」

「でも……泣きたいと思ったら、いつでも泣いていいんだからね？あたしとか、引子さんとか……出久くんの泣き顔、案外キラじゃないんだから」

仮面ライダーの戦いぶりを間近で見てもなお、弟扱い。でもいまはそれが嬉しかった。母や、かつての杏子がそうであったように……戦士でいなくてもいい場所があるというのが、泣いている子供の部分を殺せずにいる出久の救いだっただ。

そしてそういう場所があるからこそ、出久はいつだって悪に立ち向かうことができる。

自ら出陣し、一対一での勝負を望むジャーク将軍。彼は怪人ジャークミドラに改造されており……佐原夫妻を殺害した張本人でもあった。

「貴様に討たれたガテゾーン、ボスガンの無念……晴らしてみせるぞ！」

そう宣言するジャークに対し、

「それはこっちの台詞だ!!おじさんとお婆さんの……お前らに殺された人たちのぶんまでッ、僕は戦う!!」

——そして始まる、RXとジャークミドラの一騎打ち。

ジャークミドラは強かった。凄まじく強かった。RXは防戦一方で、咄嗟に変身したロボライダーのボルテックシューターも容易く見切られてしまう。

絶体絶命の危機を救ったのは、オールマイトでも他のヒーローたち

でもなく——茂と、一水だった。

ふたりの個性はそれぞれ、砂から植物、水を生成するというもの。一水が水を頭上から浴びせて注意を逸らし、茂が蔓でジャークミドラを拘束する。

無論、それらは一秒となくして破られるもの。——だが、0.1秒すら隙と捉えるRXに対して、明らかな命取りだった。

「リボルケインツ！」

「——！」

ロボライダーから戻ったRXのリボルケインが……ジャークミドラを、貫いた。

「わかるかジャーク將軍……。これが、命を命と思わない者の末路だ……！」

「く、ふ、ハハハハ……。つ。我が命ごとき……。！皇帝陛下こそが、貴様を必ず——！」

不気味な断末魔を残して……。ジャークもまた、斃れた。残るはダスマダー、マリバロン。

——そして、クライシス皇帝。

\*

手駒を失ったクライシス皇帝は、ダスマダーとマリバロンを特使としてなんと出久に対して会談を要請してきた。オールマイトたちと怪魔界突入作戦を検討していた矢先のできごとだった。

罍の可能性を危惧する仲間たちを抑え、出久は虎穴に飛び込む心持ちで会談に臨んだ。——結論から言えば、それは罍ではなかった。自ら出迎えた皇帝は出久を地球上に比類なき勇者と認め、クライシス帝国最高位”<sup>サ</sup>卿”の称号を与えて地球の支配を任せると提案してきた。地位と権力を与えることで、仮面ライダーを取り込もうと画策したのだ。

それを不服として皇帝に反抗したマリバロンは、貴族の権威など

あつてなきがごとく容易く処刑されてしまった。

元々、答えなど決まっていた。だがその光景を前に、出久はおよそ一年半ぶりの怒声を発した。——「ふざけるな」と。

「クライシス皇帝……おまえは哀れだ！他人を駒としてしか見ず、その誇りも想いも何ひとつ汲みとれない……。そんな独りぼつちの支配者なんかには、僕は死んでもなりたくない!!」

「僕が本当に欲しいのは、誰も傷つくことのない優しい世界だ！そんな世界を、一緒につくっていける仲間だっ!!」

交渉は、決裂に終わった。

すかさずダスマダーとチャップ兵隊が襲いかかってくる。しかし後者は密かに追跡していたオールマイトラが抑えてくれる。出久はRXに変身、クライス要塞にてダスマダーとの決戦に臨む。

死闘の中で、RXは知ることとなった。怪魔界は地球の影、双子の星。その調和が崩れたために、いま滅び去ろうとしている——人間どもが、地球を汚したために。

——そして、ダスマダーもまたクライシス皇帝の影であったことを。

「RX……余が死ねば怪魔界は五十億の民もろとも消滅する！」

「なっ……」

「移民が成らねばどのみちクライシスの民に生きる道はないのだ……。——愚かな人間のひとりである貴様に、それを奪う資格があるというのか!?!」

「……ッ」

RXの……出久の心に躊躇が生まれた。クライシス皇帝のことばは領きたくなる部分もあった。

この世界は歪んでいる。個性というものが生まれてから文明の歩みは止まり、ヒトは他人を見るのに「どの程度の個性を持っているのか」をまず値踏みする。そればかりに気をとられているから、ヒト以外の動植物、ひいては地球そのものがかえりみられることもない。クライシスの四大隊長のような人間が、この世界にはあふれている。

動きを止めたRXに、巨大な顔ひとつの皇帝が襲いかかった。

「死ねえツ、RX——!!」

だが、皇帝の望みは永遠に果たされることはなかった。瞬間的に抜かれたリボルケインが、その中心を貫いていたから。

「き、さま……ツ」

「……資格はなくても、覚悟はある。——さよならだ、クライシス！」  
「おろ、かな……人間どもが変わらぬ限り、新たな怪魔界が生まれ、地球を襲うであろう……！」

「すべてはおまえたち人間どもの罪じゃ——！」

そうしてクライシス皇帝の身体は粉々に吹き飛んだ。その爆炎は凄まじく、RXの姿すら覆い隠すほどで。

炎に包まれながら……英雄は、もうひとつの地球が滅び去るのを感じとった。

\*

出久と仲間たちは勝利を手にした喜びを分かち合い、そして犠牲になった者たちを悼んだ。クライシス五十億の民に、響子の両親——そして、佐原夫妻。子供たちを守って死んだ彼らは間違いなく英雄だと、出久は思った。

佐原夫妻といえ、引子のもとに密かな遺言を届けていた。「屋敷を譲るかわりに、茂と一水を育ててやってほしい」——夫妻に恩義を感じる引子は喜んでそれを承諾したし、なんなら独りになってしまおう響子とも一緒に暮らすことになった。そのうち父と克美・杏子が帰国すればかなりの大所帯になるだろう……その日が楽しみだ。相変わらず屋敷に入り浸るだろう玲子との関係が微妙なものになることまでは想像が及ばない。

——改めて、出久は思う。自分はこれだけたくさんの仲間に囲まれた。だからこそ転んでも立ち上がり、歩き続けることができたのだ。

「僕、決めたよ。——ヒーローになる」

「失ったもの、奪ってきたもの……全部、無駄にしないために」

創世王は言った。人間の心に悪がある限り、必ず甦ると。

クライシス皇帝は言った。人間が変わらない限り、第二第三の怪魔界が生まれると。

だったら、自分が世界を変える。誰もが悪を抱かずともよい——そんな、ずっと望み続けていた優しい世界を、自分が創ってみせる。世紀王を超えた、この力で。

あるいはそれは、ゴルゴムやクライシスと変わらぬ傲慢な願いなのかもしれない。——でも、大丈夫。自分だけの世界に囚われなければ。優しさと正しさ、そして友を大切に思う気持ちをお忘れな……そんな、オールマイトのようなヒーローであり続けるのならば。

(僕の世界は、僕らが変わえる)

世界を変える超・世紀王——その長き伝説の真のはじまり。この瞬間こそがそうなのだ、後世の人々は伝える。

つづく



## 超・英雄の t r u t h ! ? (前)

「——これで全部だよ、かっちゃん」

緑谷出久がそのひと言で話を終えたときには逢魔が時はとうに過ぎ、公園はほとんど真つ暗になっていた。街灯だけがぼうつと揺れている。

聞き手の爆豪勝己はというと、短気で傲慢な性格が嘘のように長い話を聞き届けていた。その場を一步も動くことなく。

だが不可解なことに、終わりを告げてもお勝己はなんの言動もとらない。口を噤んで立ち尽くしたままだ。やや俯きがちに話していたから、出久からはその足元しか見えていない。

そこに透明な水滴が零れるのを、彼は捉えてしまった。

(……雨?)

いや、そうではなかった。つられて顔を上げた出久は一瞬、呆然とした。

その美しく澄んだ雫は、血潮そのままの色をした瞳から流れ出たものだった。

「かつ、ちゃん……………」

(泣いて…………?)

あの強い幼なじみが。幼い頃から、瞳を潤ませることはあってもそれ以上は決して見せることのなかった爆豪勝己が。

はつと我に返った勝己は、制服の袖で乱暴にそれらを拭った。よく見れば手も震えている。

(……そう、だよな)

出久は密かに自嘲した。いくら勝己がずば抜けて強く逞しい心身をもっているとはいえど、本質は世間知らずの中学生にすぎない。……自分が乗り越えてきたものは、まだ義務教育も終えていないような子供には残酷すぎる。もちろん出久自身も、本当だったらその子供のひとりであったはずなのだが。

「ごめんね、かっちゃん」

「……ンで、テメエが謝ってんだ……ッ」

「だって……」

「そうじゃねえだろ……ッ、テメエが、しなきゃなんねえのは、それじゃねえだろ……！」

「……？」

キングストーンの影響で強化された知力をもってしても、出久には勝己のことばの意味がよく理解できなかった。昔からそうだったと言えればそれまでだけれども、いまこの瞬間はなおさらだ。

怪訝な表情を浮かべる幼なじみに業を煮やして、勝己は思いきり突き飛ばそうとした。だがその細く小さな身体はびくともしない。——もう人間の肉体ではないことを隠す必要もないのだ。

胸の奥に焼けつくような錯覚を覚えた勝己は、出久からわずかに距離をとって、そのまま踵を返した。

「あつ……か、かっちゃんっ！」呼び止める。

「……話したとおり、僕は地球を守るために五十億以上の命を犠牲にしてきた。たった独りの親友もこの手で殺さなきゃならなかった。でもそんなのもうイヤなんだ、僕はもう誰も死なせたくない。だからちやんとしたヒーローになって、仲間を増やして、いつかヒーローがいなくてもいいような世界を創りたいと思ってる。納得しろとも、まして協力しろとも言えないけど……それだけは理解してくれたら、うれしい」

「……ッ」

返答はなく、勝己はそのまま走り去っていった。足音が遠ざかり、入れ替わりに古ぼけた電灯の発する鈍い音だけがこだまする。

(かっちゃん……)

爆豪勝己——出久の最初の憧れで、オールマイトという同じものへの憧れをもつ幼なじみでもある。もう、随分と遠い存在になってしまったけれど。

理解してくれるだろうか、彼は。したとして、受け容れてくれるだろうか。自分の目指す世界は、愚直なまでに強くあろうとする彼には

酷かもしれない。

それでも出久が二年半かけて出した答えが揺らぐことはない。――同時に、そういう勝己の生き方にかつて覚えた憧憬が、消えうせたわけでもなかった。

「……僕も帰るか」

いまはそれ以外にどうしようもない。

出久が歩き出そうとしたとき、携帯に着信があった。番号を確認してそれをとる。

「――あ、もしも？うん……いや、ちよつとね。わかつてる、すぐ帰るよ。母さんによろしくね、茂くん」

\*

逃げるようにその場をあとにした勝己は、幼なじみがあとを追ってこないことを確認すると人気のない路地裏に飛び込んだ。

「う……ッ、ぐ…………！」

地面にへたり込み、口許を押さえて襲ってくる吐き気を懸命にこらえる。誰が見ているわけでもなくとも、それが彼の最後のプライドだった。そんなものを守ったところでなんの意味もないのは、彼自身よくわかつていたが。

(なん、だよ……。なんなんだよ……。！)

ヘドロの一件なんて頭から飛んでしまうくらいに、勝己の思考は混乱の中にあつた。何もできない無個性のデク――永遠にそうなのだと思っていた幼なじみが伝説の仮面ライダーで、改造人間で、自分の知らないたったひとりの親友を殺めなければならなくて……整理してそのひとつひとつに思いを致そうにも、何もかもが悪夢のようなそれらは勝己のすぐれた頭脳を蝕むだけだった。

ただひとつだけ、混沌のなかで鮮明に浮かび上がってくるものがあつて。

(だったら……俺は……っ)

出久が人知れず残酷な運命に立ち向かっている間、自分は何をして

いた？学校にも来なくなった彼を落伍者と思い込んで嘲り、自分こそが頂点に立つ男なのだと笑っていただけではないか。それができるのもすべて、底辺と蔑んでいた少年が心身を磨り減らしてまで戦っていたおかげなのだとも知らずに。

吐き気は時を置いて収まったが、紅い瞳からあふれる涙は止まりそうもなかった。それが自分のどの部分に促されたものなのかは勝己にはわからない。でもその脳裏には、まだ互いの関係に歪みなどなかった幼い頃、「かっちゃんすごい」と目をきらきらさせていた無邪気な幼なじみの姿が映し出されていた。

\*

——ヘドロ事件から一夜明け、翌朝。

いつもよりかなり遅め、遅刻ギリギリに登校した緑谷出久だったが、いつもとは違うかたちでの居心地の悪さを感じる羽目になっていた。

視線、視線、視線。同級生下級生と問わず、すれ違うすべての視線が出久に向けられる。これまでもまったく面識のない少年少女が自分を見て「あいつ無個性なんだってよ」とひそひそやっていたりはしたが、その比ではなかった。

(やっぱり、人の口に戸は立てられないよな……)

すべては昨日、衆目の集まるその場で仮面ライダーに変身してしまったことが原因だろう。あの場には折寺の生徒も何人かいた。その中に出久を知る者がいれば、こうして一気に広まるのも無理はない。いくらあのあと迅速に”対策”をとったといっても、こればかりはどうしようもなかった。

教室に入っても、状況は変わらない。それどころかさらに露骨だ。唯一の話題で騒然としていたのがぴたりと静かになり、視線がことごとく出久を捉える。苦笑とともに「おはよう」と告げてみたが、すぐ近くにいた数人が引きつったような表情で「お、おはよう……」と返してくるのがせいぜいだった。それ以外は気まぎれに目を逸らし、そ

そくさと自分の席に戻っていく。

肩をすくめつつ、出久も自分の席へ向かうことにしたが……その途上、必然的に爆豪勝己の席の横を通ることになる。彼は感情の読めない表情で頬杖をつき、窓の外を見つめている。こちらに気づいていないわけでもないだろうが、そういう反応も当然かもしれない。出久の二年半を知れば。

それでも最低限、クラスメイトという関係は保とうと、出久はその場で歩を止めた。

「おはよう、かつちゃん」

「……」

応答はないだろう。そう思っただけで歩き出したのだが、

「………はよ」

「！」

蚊の鳴くような声。しかし鮮明につぶやかれたことばだった。

想定外のことに出久はぎよつとしたが、クラスメイトたちの驚きはそれ以上だった。あの爆豪が、緑谷に対して挨拶を返すなんて。いつもなら嫌味で返すか無視か、ひどいときには爆破をかますというのに——かといって出久から挨拶がないとそれはそれでキレる厄介さである——。

しかしそのことでざわめけば勝己の射殺さんばかりのひと睨みが飛んでくる。教室が居たたまれない空気に支配されかかったとき、前方の扉ががらりと開き、担任が入ってきた。表情、「席につけ」という声も心なしか硬い。

ひとまず出久も足早に自分の席に座った。勝己の背中を見つめつつ、その心境の変化を想う。彼なりに折り合いをつけようとしてくれているのだろうか、だとしたらうれしいが。

ともあれ、ややぎこちない様子で担任が口を開く。さりげなく教卓にペーパーを置いたのを出久は見逃さなかった。

「え……昨日の放課後、田等院商店街でヒーローとヴィランの戦闘があったのは皆知ってるな？ 幸い怪我はなかったが、うちの生徒が一

名、巻き込まれて人質になった」

教室がにわかにならざわつきはじめた。氏名を挙げずとも、その模様がテレビニュース等でも放映されているために誰が人質になった生徒なのかは皆よく存じている。その張本人は射殺さんばかりの目で周囲を睨めつけ、沈黙を強制しているが。

もつとも、担任にとつてその部分はあらし、前座にしかすぎないようだった。「静かに静かに」と、彼にしては焦った様子で生徒たちを沈静化させ、”本題”に移った。

「それで、突如として現れてヴィランを退治したという仮面ライダーについてだが……」

「――！」

せつかく静かになりかけた生徒たちが、再び騒ぎはじめる。彼らは皆、その仮面ライダーがこの教室にいることを知っているのだ。

しかし担任教師のことは、彼らの予想を大きく裏切るもので。

「この学校の生徒が変身したなどという噂が流れてるみたいだが、それはで、デマだ。そういうことに加担しないように！」

「――！」

騒ぎがにわかにならなくなった。だって勝己の取り巻きなど、出久が実際に変身するのを目の当たりにした者がこの教室にもいるのだ。それを一方的にデマなどと断じられて、納得できるはずがない。

——彼らのほとんどは朝も夜もニュースなど真面目に観ないので気づかなかつたが、ヘドロ事件についての報道では仮面ライダーの姿は映つても、その正体が緑谷出久であることがわかる映像その他いっさいが排除されていた。

「静かにしろ!!」抗議する生徒たちを一喝する。「そういう噂を流したり広めたりした者は、高校には行けないと思え! いいな!」

「高校には行けない」——内申という具体的なものの存在を知る受験生たちに、その発言の影響は大きかった。一部はまだ反抗の目を向けているものの、そうした者も含めて静まらざるをえない。あるいは勘の鋭い者は、担任の様子のおかしさから裏で何らかの力が働いているのではないかと疑いもしたが。

「あー……それと緑谷」

「！、はい」

よりによってこのタイミングで呼ばれたので、クラスメイトらの視線は再び出久に集中した。勝己のようにひと睨みして……というの  
は彼の性格上できないので、無視して次のことばを待つ。

「ホームルームが終わったら校長室に行くように。長くなるようなら  
一時間目は出なくてもいい」

「！」

校長室への呼び出し？表向きデマなどと言っても、彼らも事実はお  
かっているのだ。昨日の件で釘を刺されるのかもしれない、何を言わ  
れようと今さら関係ないが。

「わかりました」と頷いた出久。彼を待つのが部屋の主ではなくサ  
プライズな客人であることまでは、流石に予期できなかった。

## 超・英雄の truth!?(後)

と、いうわけで。

校長室の扉を開けた緑谷少年は、待ち人の姿を認めて一瞬硬直<sup>フリーズ</sup>してしまっていた。

「私が、——待っていたアツ!!」

「お、オールマイトお!?!」

応接ソファに腰掛けていたのは、オールマイトともうひとり。オールマイト……といっても、よく知っている画風の違うマッスル超人ではなく、昨日初めて見た痩せ細った<sup>トゥルー・フォーム</sup>真実の姿だ。

出久の声が思った以上に大きいことに焦ったのか、彼は素に戻って慌てている。

「シーツ、外に聞こえたらどうするの!?!おじさん名目上オールマイトの使者つてことになってるんだから!」

「あつ、そ、そうなんです…すいません」

トゥルー・フォームは決して知られてはならない姿なのだと思出久は思い出した。ともにクライシスと戦った自分にすら昨日まで隠し通していたくらいだ。

となると、それを知っているのだろう隣の背広姿の男性は何者か? 体つきはがっしりしているが、ヒーローには見えない。とりたてて特徴のない、いかにも純日本人な風貌とは裏腹に、若くもそれなりに歳を重ねているようにも見える年齢不詳感が妙にミステリアスだ。

出久の視線が自分に向いていることに気づいたのか、彼はにこやかな笑みを浮かべて立ち上がった。

「失敬。はじめまして、僕は塚内直正と言って……こういうものです」  
彼が胸ポケットから取り出したのは……警察手帳。ぱつと上下に開かれたそれには顔写真と名乗りのとおりの氏名、そして”警部”の階級が記されていて。

「警察……?」

昨日の件の事情聴取かとも思ったが、

「色々思うところはあると思うけど、今日は警察官としてじゃなく、俊



典の付き添いできみに会いに来た」

「とし、のり？」

「ああ……」八木俊典——私の本名さ！」

「そうなんですか」以上の感想が出てこない名前だ。”オールマイト”の強烈な印象を覆すには平凡すぎる、悲しいかな。

まあ、それはそれとして。

「塚内さんはご存知なんですか？オールマイト……や、八木さんの秘密」

「まあね。一応協力者のようなことをやってる」

「きみにとつての白鳥玲子さんや鋼のジヨークンみたいなものさ！」

「ああ、なるほど」

出久としては実にわかりやすいたとえで塚内との関係を説明いただいたところで、三人は改めてソファに座り直した。少年が男たちと向かい合う形だ。

「今日はまた、どうしてわざわざ学校に？」

警察、それも管理職級の協力者がいるのなら、出久の自宅を調べることは可能なはずだ。何か話があるなら、そちらを訪問してくれてもよかつたと思うのだが。

「うん、そうなんだけどね。こうして我々オールマイトの関係者が顔を出して密談したとなれば、教諭の皆さん方にも事の重大さを理解してもらえらると思つたのさ！」

つまりは、出久の一件は軽々しく口にしてはならない……そう知らしめるということ。実際、そういう大人の配慮は意味をもつたはずだ。もしも出久がなんの対処もしていなければ、の注釈つきで。

「……しかし、不思議なくらいにきみが仮面ライダーだという情報が広がらないな」塚内が発言する。「何もしなければ今ごろきみは全国的な有名人になつてるよ。あの場にはマスコミも来てたし、それ以前に野次馬が大勢いた。SNSで広がれば一発だ」

「そうですね、あはは」

笑いごとじゃないだろう、と言いたげな表情を大人ふたりが浮かべたので、出久は慌ててごぼごぼと咳払いをして誤魔化した。

「英雄とか、どこかのヒーロー科に入れば認知されることになりますし、あの場で変身しちゃったのは完全に僕の落ち度なわけですから、そうなくても仕方なくはあるんですけど……。でも家族や周りの人に迷惑かけちゃ申し訳ないので、一応あのあとすぐ対策をとったんです」

「対策？」

「ええ。オールマイトにはもうお話しましたよね、裏でゴルゴムに協力して不老長寿を得ようとしていた奴らのこと」

「ああ、政財界の要人や著名な芸能人……ましてやヒーローにもそういう人間がいたんだったね」

ヴィランとの内通にも等しい裏切り行為に、さすがのオールマイトも憤慨したものだ。いまではそのほとんどが、また別の醜聞で零落してしまっているのだが。

「その件なら私も聞いている」塚内が口を挟む。「昨年解党したE.P.党の党首で、現在与党民自党に入党している坂田代議士はじめ与野党の大物の名前が複数捜査線上に浮上したが……残念ながら尻尾は掴めていない。賢しいからね、彼らは」

「そうですね、でもご心配なく。ちゃんと首輪はつけてありますから」「！、まさか……」

さすがに察しのいい大人ふたり。——出久は昨夕、ヘドロ事件の現場を去ってから勝己が追いついてくるまでの行動を思い出した。

「もしもし。前にお世話になった緑谷出久です、覚えてらっしゃいますか……坂田先生？」

『な、なんの用だ。私はもうゴルゴムとは……』

「過去に協力者だった事実はなくなりませんよね。僕が握ってる証拠もですけど」

『……な、何が望みだ？』

「話が早くて助かります。実は僕、さっき人前で変身しちゃいまして。できるだけ拡散しないように処置していただけないかと。あ、お仲間の先生方にも手伝っていたらいいかがですか？」

『わ、わかった。その件はこっちでなんとかするから、勘弁してくれ……』

「……そういうやり方は、ヒーローとしてどうなんだろうね？」

冷や汗まじりに、オールマイトが言った。出久は苦笑するほかない。これがヒーローらしからぬ、ダーティーな手段であることは理解しているのだ。

「まあ、褒められたことではないですよ。戒めについてわけでもないですけど、本当ににっちもさっちもいかなかったときにしかやらないつもりです」

「場合によってはこれからもやるんだね……」

「そこはケースバイケースってことで。あ、それに、警察だつてよくやるんじゃないですか？前に刑事ドラマで見ましたよ、公安が政治家脅して……ってやつ」

「ドラマと現実を一緒にしないでくれ。やってない……と思う、いや思いたいね」いまいち自信なさげな答えのあと、「それより、きみの握ってる証拠とやらの話……あとでじっくり聞かせてもらいたいもんだね」

「あ、はは……お手柔らかに……」

人倫に外れない程度に彼らを利用してようと目論んでいた出久はその計画の脆さを思い知ったが、ひとまずここでは追及されないとみてほっと息をついた。証拠を渡したとて、いきなり問答無用で全員検挙なんて真似をするほど警察も猪ではないだろうが。

「さて！」ぱん、と手を叩くオールマイト。「ややこしい話は後回しにして、そろそろ本題に入ろうか。きみの教育を受ける権利を一部取り上げてこうしているわけだしね！」

「本題……一体、なんのお話なんですか？」

昨日のことを咎める……一瞬それが頭に浮かんだが、そういう雰囲気ではない。ならば、一体――

「今日きみに会いに来たのは他でもない……私のもうひとつの秘密を、きみに話そうと思ったからさ」

「もうひとつの秘密……?」

怪我の後遺症で長くは戦えない身体になってしまっている以外に、まだ秘密があるのか?

「私の”個性”についてさ」  
「!」

オールマイトの個性……といえば、RXのそれすら凌ぐ怪力。これ以上ないシンプルな、だからこそ最強と銘打つにふさわしい力なのだと思います。自分だけでなく、世間も。

「私の力の真髄はそれじゃあない」ばつさりと否定する。「——個性を引き継ぐ”個性”、それこそが私……このオールマイトの個性”ワン・フォー・オール”なのさ!」

「ワン・フォー・オール……?引き、継ぐ……!?!」

呆気にとられた出久は、

「個性を引き継ぐ個性ってそんなまさか、全人口の八割がなんらかの個性をもつこの超常社会、色んなとんでも個性はあるけど有史以来そんな個性確認されていないわけで、いやオールマイトがそんな嘘つくわけないから真実なんだろうけども……まあ実際ありえない話ではないよな、キングストーンだって受け継がれる度に力が強化されて云々って創世王が言ってたし……」

ブツブツブツ。出久少年の昔からの悪癖、こればかりはゴルゴム、クライシスとの激闘を経ても治らないのだった。

「……前からこうなの?」塚内が耳打ちする。

「うん……根本がオタクな子だからね……」

ひとしきりやらせておくよりしようがない、とオールマイト。大人たちの生温かい視線を受けること約一分、ようやく思考をまとまったのか出久がふうう、と深く息をついた。

「……え、っと、お話はわかりました。でもどうして、それを僕に?まして、わざわざ忙しい中、こんなところに出向いてまで……」

「ああ、それはな……」

低められた声、厳かな表情。たとえ痩せ細った真実の姿であれ彼はNo.1ヒーロー。その”本気”の表情に、仮面ライダーであると同

時に14歳の少年でもある出久はごくりと唾を呑むほかない。  
そして、

「きみに、私の後継者になってもらうためさっ！」

「…………へ？」

いきなりの眩しい笑顔ともども襲いくる変転は、かつて戦ったどんな敵よりも出久を翻弄するのだった。

つづく

## 継承！ワン・フォー・オール

「きみに、私の後継者になってもらうためさっ！」

自身の個性である”ワン・フォー・オール”——その次なる後継者になってほしいというオールマイトのことは、14歳にして歴戦の戦士となってしまうた出久をして一瞬呆けさせてしまうものだった。

「それで、継承方法なんだけどね——」

「ちよちよちよツ、ちよつ、ま、待ってください！」

ぼうつとしてしていると勝手に話を進められてしまいそうだったので、出久は慌てて引き止めた。

「いきなり何言ってますか!?僕はそんな、あなたの後継者だなんて……」

「何言ってたって……きみ、約束してくれたじゃないか。」私のようなヒーローになる”つて」

「確かに、お約束しましたけど……」

それはそのままオールマイトの個性や立場を引き継ぐことと同義ではない。そもそも個性の継承なんて想定外だったし、何より——

「オールマイト……あなたは僕を”創世王”にしたいんですか……?」

「……どういう意味だい？」

出久はオールマイト、そして塚内に語った。以前の共闘の中では伝えきれなかったゴルゴム、そしてその支配者たる創世王の真実。

「なんと……」

「まさか、そんな事態になるところだったとはな……」

目の前の大人ふたりが啞然としている。自分たちが関知できていなかったところで、薄氷はまさしく粉々に割れようとしていたのだ。あるいは目の前の少年が、次なる創世王になることによって。

「これは前にもお話しましたけど……僕は人間の姿をしていますが、中身はもうゴルゴムの怪人バツタ男で、世紀王ブラックサンなんです。百年や二百年じゃ死ねない……おそらくは五万年、生き続けることになります」

「五万、年……」

予めオールマイトから聞いていたのだろう、塚内も驚愕は表さなかったが、あまりに現実離れした単位の大きさを受け止めきれない様子だ。

「そして僕の力の源であるキングストーンは、僕が危機に陥ったときほぼ必ず奇跡を起こします。BLACKからRXに進化したのもそれが理由ですし……今後も何かあれば、同じことが起きるかもしれない」

五万年の間、危機に陥る度に進化していく。現実になつたとしても、到達点は結局、宇宙すら支配する”創世王”かもしれない。

そしてそれは、一歩間違えれば誰にも止めることのできないプロビデンスたる存在となることと同義なのだ。優しい世界をつくり守っていくのだという志を一生持ち続けられるのならいい、だがそんな保証はどこにもない。

「……僕の中には、闇があります。夢と表裏一体の、呪いのような闇が——」

「だから、力を僕ひとりに集中させるべきじゃない。”超・世紀王”と”平和の象徴”——そのふたつが車の両輪となって、世界を守り変えていく……そのほうがいいと思う。そのほうが、僕も気が楽ですしね」

「緑谷少年……」

どこか寂しげなその微笑は、「独りぼっちはいやだ」という想いを精一杯表したものののだろう。オールマイトにだってその気持ちは痛いほどによくわかる。

それに——何かの拍子に自分の力が脅威となるかもしれない、その不安。それもまた、オールマイトが彼を同志と認めながら秘密を秘密のままとしていた最大の理由だった。彼が仮面ライダーだからこそ、ワン・フォー・オールのことを託すわけにはいかない。

でも、

「……きみの話はわかる。——それでも私は、きみにこの力を継いでほしいんだ」

「！、なんで、ですか……？」

「覚えているかな、きみが昨日、あのヘドロのヴィランに向かって言ったこと」

『——僕の友達を傷つけたこと、後悔させてやる』

「……それが、なんなんですか？ 正直”平和の象徴”としてはらしくないことばだったと思うんですけど……」

平和の象徴が表すべき怒りは、無辜の民が苦しめられ、傷つけられることに対する義憤であるべきだ。友人だから、親しい人だから……そういう個人的な感情が入るのはあまりふさわしくない。

そもそも出久の戦いは、その”個人的な感情”から始まった。信彦を取り戻す、それこそが折れそうな心の支えになっていた時期もあったのだ。

しかしオールマイトは、「そんなことはない」と出久の考えを穏やかに否定した。

「どんな悪が相手に、誰が助けを求めているようが揺らがない、差をつけない。それは確かに理想的で完全無欠のヒーロー像のように思えるかもしれない。実際、力ある者にはそういう姿勢が求められることもある……」

「……」

「だが、それだけではいけないと思うんだ。完璧であることに囚われれば、やがて完全でないものが理解できなくなる。人の気持ちにも寄り添えなくなる。……特別に守るものなどない、それは数字や確率を揃えているだけと同じ、冷たい背中になるとは思わないかい？」

「友のために傷つき怒り、慰めあい、その果てに手を取り合える……そういう人間にこそ、次代の平和の象徴の座はふさわしいと私は思う。そのうえで失う怖さも、裏切られる悲哀も……幼くして全部味わって、それでも闇に引きずり込まれなかつたきみにだからこそ、私のあとを継いでほしいんだ。——緑谷少年」

呼ぶ声は、海の彼方にいる父を一瞬想起させた。それに浸りたい、言われるままに従いたいと思う子供の心が呼び覚まされそうになる。

それを懸命に押さえつけながら、出久は慎重に応える。



「……ありがとうございます、オールマイト。嬉しいです、僕をそこま  
で買ってくれて」

「それじゃあ……」

「でも……やっぱ僕は、あなたの後継者にはなれません」

「なっ……!?!」

「どう考えても継いでくれる流れだったじゃないか!?!」——思わず  
素に戻ってそう叫んでしまうほど、目の前のNo.1ヒーローは狼狽  
している。

申し訳なく思いつつも、出久は自分の意志を曲げるつもりはなかつ  
た。

「そういう人間はまさか僕ひとりじゃないでしょう、探せばいくらで  
も見つかるはずです。……僕みたいに手垢のついてる、人間ですらな  
い化け物より、これからヒーローとしてまっすぐに育っていける人に  
託すべきです」

「……ッ、化け物だなどと……!?!どうしてキミはそう、自分を卑下す  
るんだ!?!」

「卑下なんてしてません、客観的に評価してるだけです!あなたこそ、  
どうしてそう僕にこだわるんですか!?!あなたが昨日僕に言ったこと、  
忘れてしまったんですか!?!」

——光がその輝きを増せば、影もまた濃くなる。

——そして影は、やがて光をも呑みこんでしまうかもしれない。

「忘れるわけないだろうッ、身体はこんだが頭は鈍っちゃいない!」  
色をなして反論する。「キミの輝きはそんな粹に収まるもんじゃない  
と私は思ったんだ!そうとまで思わせてくれる人間、そうそう見つ  
かるものか!」

「見わかりますよ絶対に!」

「いくや見つかからないね!キミしかいないもんね!」

「絶対いる!」

「いない!!」

「いる!!」

「いないもん!!」

「いる」「いない」という、水掛け論でしかない論争。一方は憧れのヒーローに対する態度とは思えないし、もう一方は単純にいい歳の大人とは思えない。

不毛なぶつかりあい終止符を打ったのは、オールマイトの付き添いとして隣に座っていた警察官で。

「あーもうっ、やめやめ！——そんなことここで言い争ったってなんにもならんだろ。緑谷くんも、俊典も」

「……………」

無然と黙り込むふたりの英雄。とりわけ少年のほうに気を遣いつつも、塚内は友人の肩を持った。

「緑谷くん、きみの言いたいことはわからないでもない。でも俊典が焦る気持ちもわかってやってくれないか。…………時間が無いんだよ、この男には」

「…………お身体の、ことですか?」

「そう。ただでさえボロボロなのに相も変わらず無茶するから、彼はどんどん磨り減ってる。あと何年ヒーローとして活動できるかわからないし…………何年、命がもつかもわからない。ワン・フォー・オールを継ぐにふさわしい後継者を見つけて、育てあげてなんて時間は、もう残されていないかもしれないんだ」

「……………」

今日はきつちり着込んだスーツの下、その痩身には痛々しい傷痕が刻み込まれているのだと、出久は改めて思い出した。表面上だけでなく、その傷が臓器にまで及んでいることも。

「…………もし誰かに譲る前に私に何かあったら、この力は永遠に失われしてしまう。つまりこの世界から、平和の象徴は消え去ってしまうんだ」

「…………ツ！」

平和の象徴が…………消える。それは出久を動揺させるに十分すぎることばだった。脅しなどではなく、それは現実に…………今日にだって、ありうることなのだ。

まだ丸みの残る頬から血の気が引いていく。そんな様子を認めて、

塚内が助け舟を出した。

「こういうのはどうだろう、緑谷くん」

「ワン・フォー・オールは、宿主が望んだ相手にのみ継承させることができる。——もしもきみがこの場で宿主になれば、次の平和の象徴を選ぶ権利はきみのものだ」

「！」

「方が一にもワン・フォー・オールが失われないう、力を預かる。その代わりきみの好きな時期に、好きな相手を後継者に選ぶ……その権利を得られるとしても、嫌かい？」

「それは……——オールマイトはいいんですか？そんな、僕が勝手に……」

躊躇うことなく、うなずく。

「私だってこの力を託された身だ、それでもきみに決めたのはほかでもない、私自身の意志だ。私の師もそうだったのだと思う。だから当然、その権利はきみにもある」

「だから頼む、——仮面ライダー」

「私に……私にきみを、選ばせてくれ……！」

立ち上がり、痩身を折って懇願するオールマイト。ずっと憧れ、そして手を差し伸べてくれた恩人が、弱った身体でそこまでしている。……それでも揺らがずにいられるほど、出久の心は凝り固まっていなかった。

「……ずるいなあ、オールマイトは。あなたにそこまでされて、僕が断れるわけないじゃないか……」

「！、少年……」

頭を上げるよう促してから、少年はどこか寂しそうに微笑んだ。

「——わかりました。その話、お受けします」

「本当かい!？」

「はい。……でも、あくまで僕は中継ぎだと思ってください。可能な限り早く、よりふさわしい後継者を見つけます。できれば……雄英に  
いる三年間のうちに。ただ——」

「ただ？」

「僕の独断で選ぶつもりはありません。オールマイト、あなたと一緒に決めたい。だから……」

「……それまで絶対、あなたのことは死なせません。——生きて、ください。オールマイト」

「！、……………」

自分の身体がとつくに限界を超えていることをわかっていながら、それでも”救ける”ことをやめられない。そんなオールマイト……八木俊典の性質を理解していればこそ、出久はそう言うのだ。恩人であり、<sup>オリジン</sup>原点でもある最高のヒーロー。それでもこの手で守りたい命であることは、他の誰とも変わりほしくない。

「……大丈夫さ」

応える英雄は、にかりと笑った。

「なんと言つても、きみという心強い同志がそばにいてくれるんだからな！」

そう——ワン・フォー・オールを出久に譲ろうと決心したのは、彼にそばで自分を支えてほしいと思つたためでもあつた。どんな苛酷な目に遭つても英雄であり続け、暗黒結社ゴルゴムにクライシス帝国——ふたつの巨悪を壊滅させたこの少年と、残り少ない人生をともに歩んでいきたい。そんなふう想着てしまった。

（駄目だな、私は……。相手は息子でもおかしくない歳の少年だというのに）

自嘲し、また自戒しながら……それでもオールマイトは出久を恃むことを選んだ。無論ただ寄りかかるつもりはない。彼の秘める”強さ”が、さらに確固たるものとなるよう導いていく——そんな決意をともにして。

「そういえば、継承ってどんな方法で行われるんですか？」

「！、ああ、そうそう、それを伝えたかつたんだよ。まあ、と言っても、実にシンプルな方法だから説明するまでもないと思うけどね！」

言うが早いか、自身の頭髪を一本、ぷちりと引き抜くオールマイト。同年代の人間の一部は「勿体ない」と叫ぶかもしれないが、彼の頭部だけは衰える気配はないのだった。

「さて、緑谷少年——」抜いた毛を出久の前に突き出し、「——喰え」  
「……………」

「…………へあ？」

この男は何度、自分を硬直フリリーズさせれば気が済むのだろう。  
わずかに残った頭の冷静な部分で、出久は強く強くそう思うのだった。

\*

「…………悪いことしちゃったかなあ？」

帰りの車中、助手席にて。オールマイトこと八木俊典はぽつりとつぶやいた。

「まあ、しょうがないだろう」運転しながら、塚内。「現時点できみの代わりを務めて余りあるのは彼くらいしかない。学生だから制約があるにしてもだ」

「いやそれもあるけど、そうじゃなくて……。おじさんの髪の毛食べさせられて、さぞかし気分が悪かろうと」

「あ、そつち？…………それこそしょうがないんじゃないか？」

「そうなんだけども」

「大丈夫だよきつと。彼、驚いてはいたけどそこまで抵抗はなさそうだったし。そんなことより——」

——果たして緑谷出久は、ワン・フォー・オールを使いこなせるか。  
「彼、ああ見えて常人より遥かに頑丈だからね。変身していなくとも」  
「そりやそうだろうけど…………。何かイヤな予感がするんだよ、とんでもないことが起きそうな」

「やめてよ塚内くん…………刑事のきみが言うマジっぽいよ…………」  
「まあ、杞憂に終わればいいんだけどね」

青ざめる友人を横目で見て、塚内は小さく笑った。外見の相違以前に、あの平和の象徴とは思えない。実は結構小心者なのだ。

それはまあ、いいとしても。

「ところで、俊典」

「ん？」

「——いい歳したおっさんが”いないもん!!”はないと思うぞ」

何を置いてもそれだけは言わなければ。折寺中学を辞したときからそう心に決めていた塚内直正なのだった。

ヤベーイ!? ハザードボーイ!

オールマイトとの再会から爆豪勝己が人質となったヘドロ事件での変身、そしてオールマイトの個性“ワン・フォー・オール”の継承という、怒濤の急展開を経た一週間が終わり、ようやく訪れた休日。緑谷出久はとある山中にいた。山中と言っても、森や茂みに囲まれた鬱蒼とした場所ではない。砂利や石に覆われた、開けた土地——いわゆる、採石場と言われる場所。そこに愛馬であるアクロバッター、そしてもうひとり、青年を侍らせて立っていたのだった。

「わざわざ来てもらってごめんね——ジョーさん」

ジョーと呼ばれた青年は、そんな出久のことばに対しフツと笑みを浮かべて応えた。

「気にすんな、アニキの呼び出しなら何を置いても駆けつけるってモンよー。」

「あはは……やっぱり頼もしいなあ」

この青年との付き合いは決して長くはないのだが、戦友という関係性は長短など超越したところにある。まして本来の彼が、自分……RXを殺すために造られた怪魔ロボット“デスガロン”であることを考えれば。

「しかし驚いたぜ、あのオールマイトにそんな秘密があったなんてな」

「僕もだよ……しかも力を受け継いでほしいなんてさ」

「俺に話しちまってよかったのか? そんなこと」

「それなら平気だよ、オールマイトにもちゃんど許可はとったから」

これまでもこれからも、肩を並べてあらゆる悪と戦うことになるだろうジョー。彼とくらは秘密を共有し、何かあったとき頼りにしたい——そんな少年の願いに、乞うて継承してもらった立場のオールマイトが否と言えるはずがなかった。そもそも彼とて塚内はじめ、少数ながら支援者をもつ身である。出久にもそういう、秘密を抱える必要のない同志が必要なのは間違いないのだ。

「平和の象徴”か……重いな、中継ぎだとしても”

「……うん。正直、僕なんかひとり背負えるものじゃないよ」

「かもな」あつさり首肯しつつ、「でも、だから俺に話してくれたんだろ？いいじゃねえか、アニキはもう独りじゃないんだからよ」

ただでさえその小さな背中に重責を背負ってきた出久である。鉛のようになつた足を引きずるようにしてそれでも歩き続けなければならぬ、にもかかわらず助けを求める手に必ず応えようとする。

自分は、彼の差し伸べてくれた手に救われた。少し運命が変わっていれば、クライシスのいち怪人として葬られていただろうに。

——だから自分は、全力でこの少年を支える。際限なく増えていくであろう重荷、救いを求める手、すべて分かち合うために。

鋼のジョーこと元クライシス、怪魔ロボット・デスガロンがそんな決意を新たにしてしていると、一台の車が採石場内に進入してきた。それは出久たちのすぐそばまでやってきてから停車し、

「緑谷しようねくん！」

助手席からかの貧相な男性が降りてきた。風貌とは裏腹に声はよく通るし、身ぶりも大きくはつきりとしている。——彼の正体はN.O.1ヒーロー、”平和の象徴”オールマイトであるという事実を知ってさえいれば、それは驚くようなことでもなかった。

「おはよう少年、遅くなって申し訳ない。来る途中、塚内くんが道を間違えてしまつてね！」

「俊典、きみな……」運転席からあとを追ってきて、塚内。「きみがここは左に曲がれば近道とか自信満々に言うから、言うとおりにしたんじゃないか」

「そ、そうだったっけ？H A H A H A H A……ごめん」

トウルーフフォームなオールマイトがしゅんとしな垂れている。ただでさえ萎んでいるのに……と内心凄まじく失礼なことを考えつつ、出久はふたりの中年のもとに歩み寄っていった。

「こちらこそ申し訳ありません、オールマイト、塚内さん。わかりづらいところにお呼び立てしてしまつて」

「なあに、すごくいい穴場じゃないか採石場なんて。しかし、ここときみには一体どういう縁があるんだい？」

「えつとですね……妙な話、ゴルゴムやクライシスの怪人と戦ってる



とき、気づくといつもここに移動してたんです。街中にいたとしても、いつの間にか」

「??」

ふたりの頭にクエスチョンマークが乱舞しているのが出久にもわかる。正直、自分自身だってそうなのだ。BLACKとして戦いはじめた頃は戸惑いに戸惑った。なぜか帰路をきちんと記憶していたバトルホツパー（当時）のおかげで事なきを得たが。

「ま、まあ、その辺りの事情はあとで詳しく聞かせてもらおうとして……」咳払いしつつ、「ワン・フォー・オールを継承してもらって数日が経過したわけだが、その後どうだい？何か変わったことがあったかな？」

「え〜と……う〜ん……」

「……特別変わったことはないです、すみません」

「そ、そうか……そうだよね、きみ元々すごい力持つてるもんね……」

既に三年近く、体内に“キングストーン”なる巨大な力の源を宿している以上、ワン・フォー・オールが新たに宿ったというだけではさしたる変化も感じられないのは無理もないのかもしれない。それは理解できるのだが……やはりちよっぴり残念な気持ちになるオールマイトだった。

「ま、まあそれはいいや。それより、あの場で継承させておきながら今日まで使用を禁じてすまなかったね」

「いえ……気にしないでください。RXにも並ぶパワーですし、安易に試し撃ちなんかしたら大変なことになるのは想像が付きまじりましたら」

「ご理解感謝するよ。まあここなら余程のことがない限り問題ないだろうし、心おきなく試し撃ちしてみてくださいー」

「わかりましたー！」

彼らが到着する前に、おあつらえ向きに出久の背丈の二倍は直径のある巨岩をジョーと一緒に運んできておいた。RXの拳なら一撃で碎けるが——そこにワン・フォー・オールを加えることで、それこそ跡形も残さず消滅させる。それくらいが及第点だろうか。

ともあれうなずいた出久は、まず慣れ親しんだ構えをとる。右手を天目かけて突き出し、手刀の形にして徐に下ろしていく。腹のあたりで、それを左から右へ切り、左手に代わり――

「――変、身ッ!!」

勇ましい叫びとともに拳を握り込むことにより、腹部にベルト――”サンライザー”が出現、そこに内蔵された奇跡の石・キングストーンが出久の全身を内側から変化させていくのだ。

身長160センチに体重50キロ程度、中学三年生としてはやや小柄な出久の身体が、身長198センチ、体重98キロ――大きく逞しいバツタに似た異形の英雄へと”変身”する。

――その名も、仮面ライダー。仮面ライダーBLACK RX。

変身を完了した出久……もとい仮面ライダーは、その場で仁王立ちの姿勢をとつてすう、と深く息を吸っている。真価が発揮される……その前兆。オールマイトも塚内もジョーも、固唾を呑んでその姿を見守っていた。

とりわけ塚内は、刑事の勘ゆえか妙な胸騒ぎを覚えていた。何かとんでもないことが起こるのではないか。オールマイトは「余程のことがない限り」と言っていたが……。

そうこうしているうちに、RXの拳が固く握りしめられていく。

(ワン・フォー・オール……発動……!)

頭の中でそう念じるだけで、全身に漲っていく力。彼自身の視界には映っていないが、その身体には血管を想起させる赤い光流が奔っている。――ワン・フォー・オールの発動が、成った証。

「おお、継承はちゃんと成功したようだね!」

「みたいです。――いいですか、やっちゃっても?」

「うん。……ああ、ひとつだけアドバイス」

「?、はい」

すう、と息を吸い込み――オールマイトは、あらん限りの声で叫んだ。

「ケツの穴グツと締めてこう叫べ――”SMAAAAASH!!”とな!!」

「！、——はいッ!!」

ライダーパンチ、ライダーキック——技名を叫んで一撃ぶつ放すのは、BLACK時代から幾度となく繰り返してきたこと。実はそれはオールマイトの影響が強くて……だから”SMASH”はオリジンと言つてもいいことばなのだ。自然、身体が熱をもつ。

「ハアアアアアアア……——!」

溜めるような唸りとともに、拳が引かれる。その動作だけで周囲の空気がズン、と重くなり、居合わせた者たちに凄まじい威圧感を与える。……それは何も人間だけを対象とはしていない。足下の小石の群れがわずかに浮かび上がり……プレッシャーに耐えられず、粉々に割れて消失する。

——あれ？

塚内だけでなく、割と楽観的に構えていたオールマイトとジョーも、ここにきてようやく胸がざわつくのを自覚した。世紀王を超えるパワーと、ワン・フォー・オールのパワー……その化学反応。これはひよつとして、とんでもないことになるのではないか？

「しよ、少年、やっぱりちよつと待っ——」

ともかくいったん中止させよう。そう思つて声をかけようとしたオールマイト。しかしもう、専心の極みに達しているRXを止めることはできず。

「S……MAAAAAAAAAASHHHHHH!!!」

オールマイトの期待を超えた咆哮とともに——拳が、突き出される。

「——ッ!!」

凄まじい旋風が巻き起こり、オールマイトもジョーも塚内も、その場に踏みとどまるのが精一杯。凄まじい砂塵が襲い来るから、目すら開けていられない——

(こ、これは、私と同じ……いや……!)

——それすら、超えるのではないか。

ようやくその事実には思い至るのと、怒濤たる疾風が収まるのが同時

だった。

「……………」

恐る恐る、目を開ける。防護の腕越しに見える、RXの背中。それに変化はみられない。強いて言うならその呼吸が少しばかり大がかりになっていることか。それ以外に変わった点は、何も——

(何、も?)

何か、違和感があった。RXの姿にはない。その周囲の空間、この採石場。何かが足りない……本能がそう訴えかけてくる。だがそもそも、ここは元からほとんど何も無い空間だったのだ。いまの一撃が何かを破壊したとか、そういうことはまずありえない——

——ん?

「あの、さ……塚内くん、ジョーくん?」

「……………」

「なんだ?」

「ここ、って……………」

「——こんなに、広がったっけ…………?」

自分たちの真正面だけ、記憶より明らかに空間が広がっている。もつと言えば周囲をぐるりと囲んだ岩肌が、そこだけ不自然に削れてしまっているような……。

「あ、あわわ……………」

なぜかRXがテンパっている。

「…………やっちゃいました、僕」

「え、え?」

「山…………消し飛ばしちゃいました……………」

「……………」

「へえええええええええッ!」

情けない叫び声をあげたのはオールマイトただひとりだった。塚内はそれすらできずに硬直(フリーズ)している。ジョーは対照的に、「おお…………」と声を漏らす程度で冷静さを保っている。

だが一番慌てているのは他でもない、仮面ライダーBLACK R X本人で。

「ゴッ、こここれって流石にマズいですよね!？」

「う、うん……マズいかマズくないかでいえば……非常にマズい」

一部分とはいえ地形を変えてしまつて、マズくないわけがない。少なくともめちやくちや怒られること間違いなしである、地権者とか行政とかに。

「ッ、……………」

呆然と自分の手を見遣るRX。闘志に併せて身体も萎み、もとの緑谷出久のそれに戻る。丸まった小さな背中が、流石に年相応の少年そのものに見えた。オールマイトの心に罪悪感がにじむ。

「ごめん少年……私が迂闊だった。まさか初っぱなからここまでのパワーが出るとは……………」

「い、いえ……ある程度は予想できてたというか……。だからここをチョイスしたわけで……………」

「あ……そうなの」

そう——あれだけ危機感を抱き、ワン・フォー・オール of オールの継承を躊躇していたのだ、こういう結果を予測できていなかったわけがない。

それでも思いきり力を振るつたのは、一度はオールマイトに——自らの師となる人にはつきり見せておかねばならないと思つたからだ。超・世紀王と平和の象徴——重なつたふたつの力の凄まじさを。……もつとも、視覚効果はそれを企図した出久自身ですら冷静でいられないほど強烈だったわけだが。

「オールマイト……。こんなことを言うのは慢心してるみたいで嫌なんですけど……。いまの僕の力は、正直、あなたを超えていると思いません」

「……………」

何も知らない者が聞けば、慢心どころかふぎけた冗談を口にしていくか、さもなくば中二病の類としか思われまいだろう。

しかしそのどちらでもない、それがまぎれもない真実であることをオールマイトは知っていて……。だから、沈黙とともにうなずかざるを

えない。

「——改めてお訊きします。それでも、あなたの気持ちは揺らぎませんか？」

出久に——仮面ライダーに、このままワン・フォー・オールを預け続けること。たとえ期限付きであっても……その間に万が一出久がヴィランに墮ちるようなことがあれば、あつという間にオールマイトの“宿敵”に並ぶ……いやそれ以上の脅威となる。世界を手に入れ、思うままにすることなど容易いのだ。それだけの力を間近で見せつけられてなお、その気持ちに揺らぎはないか。もし欠片でもあるとうなら、やはり——

「は、——」

「H A H A H A H A H A H A、ゴフツ！」

「!!?」

いきなり哄笑しはじめたかと思えば、吐血する。さすがの出久も、初めてトゥルー・フォームを目の当たりにしたとき並みに目を剥いた。

「ど、どうしたんですか!？」

「ハアハア……す、すまないね。——そんなの、いまとなつては愚問だと思つてさ——」

「!」  
口角に血を残したまま、オールマイトはビシツと親指を立ててみせた。

「私だって散々迷つた末にこういう結論を下したんだぜ？きみの力に圧倒はされても、それで今更迷うなんてことあるわけないさ——」

「オール、マイト……」

「ただ……」

「ただ？」

いっさい迷いなどないということばと表情には似つかわしくない注釈に、当人以外の三名は揃つて口を傾げた。

「私のように“ぶん殴る”のに使うのはやめたほうがいいのかもしれな

いな！これじゃあヴィランもろとも街ひとつ吹き飛ばしちゃう！」  
「……あー」

確かに。街は言うまでもないが、ヴィランを消滅させてしまうのも言語道断——今更ながら直接殴った巨岩は欠片も残さず消滅していることを付け加えておく——。ヴィランにだって人権はある、きちんと裁判を受け法に則った罰を受ける必要があるのは個性が現れる以前の社会と変わらない。

「それは……そうですね」うなずきつつ、「でも、じゃあどうすればいいでしょうか？」

打撃力強化に使えないとなると……しかしオールマイトの口ぶりからして、「使うな、ただ保管庫であれ」ということでもないだろうが。「H A H A H A、ワン・フォー・オールはただのパワー強化じゃない、”パワーをストックする個性”なのさ！そのパワーをどこに振り向けるか……元々多彩な能力をもつきみなら、私より遥かに多彩な活用方法を見つけられると思うけどね！」

「多彩な、活用……」

確かに、ワン・フォー・オールの規格外のパワーを除けば（一応）ふつうの人間ではあるオールマイトに対し、自分はRX……さらにロボライダー・バイオライダーという異なる能力をもつ形態にも変身することができる。得た個性をどう作用させられるか——形態によって、それも異なってくるということか。

「無論そうなってくると、私から教えられることには限界がある……。きみ自身で見出してもらわなければならないこともあるだろうし、私の知人に教えを請うてもらうこともあるだろう。なんにせよ、できうる限りの支援はする」

「——はい、ありがとうございます。でも、あの……このことなんですけど」

話を強引に進めてしまっても、現実は——この地形を変えてしまったという事実は変わらない。この後始末をどうするか……：ゴルゴムやクライシスと戦っていた頃はそれどころでなかったが。

（そういう責任も、これからはちゃんと負わなきゃならないんだ）

正規のヒーローに、なる以上は。

しかし現状、14歳の少年であることもまた、事実なわけで。

「ここはひとまず私と塚内くんでなんとかするよ。」私の秘密の特訓で……」って言えば、なんとかなるだろう。まあ、いくらか包むことにはなるだろうけどね、haha……」

「……すみません、将来きちんとお返しします」

「そうだな……こりゃ、また寿命を伸ばされちまったな！」

その出世払いが済むまでは死ねない——無論冗談だろうが、その日までオールマイトを守ることを、出久は改めて心に誓うのだった。

そして、

(さよなら……僕のメモリープレイス)

こうなってしまった以上、もう二度とここには来られないだろう。つらく苦しい戦いに、何度もケリをつけた場所。その想い出を噛みしめながら、出久は仲間たちとともに去るのだった。

\*

それからは特訓の日々が始まった。といっても原作のように”地獄の”という冠詞はつかない。新たに始めた特訓ではどちらかといえば工夫、工夫、工夫——頭を使うことのほうが多かった。海浜公園の掃除——それはクライシス壊滅直後からオールマイトに勧められて実行済みだが、これは改造人間である出久にはさほど苦ではなかった。むしろ一緒についてきた茂や一水の体力づくりにひと役買った部分が大きい。

それに、かつてともに戦ったヒーローたちのもとでの修行。さすがに大っぴらに戦場には立てず様々な形での支援が中心となったが、それもまたワン・フォー・オールの新たな活用にひと役買った。

とはいえどうしても戦わざるをえないときもあって……よりによって折寺中学の修学旅行の際にそういうことが起こったりもしたのだが、いずれ機会があれば語ることとしたい。

ともあれ、非常に楽しく充実した日々はあっという間に過ぎ——



十ヶ月。

——雄英高校入学試験、当日を迎えたのだった。

## サードライン（前）

—— 雄英高校 入学試験当日

詰め襟にセーラー服、ブレザー——様々な制服を纏った少年少女らが、揃ってこの名門校の門をくぐっていく。

ひとり、またひとり。そして——

（……いよいよ、か）

平均より少し小柄な背丈に、もさりとした緑がかった頭髪。ごくごく一般的な詰め襟と相俟って明らかに埋没している少年——緑谷出久。

情報統制によって”ヘドロ事件”での彼の行動が”なかったこと”になった以上……彼こそが二度も巨悪の手から世界を救った英雄”仮面ライダーBLACK RX”であることを知る者は、この場にはいない。

「どけッ、邪魔だデク!!」

「うわっ!」

—— 撤回。

いきなり背後から肩パンをかました紅い瞳の少年は、数少ない例外なのだった。

「ハハ……おはよう、かつちゃん」

「チツ、……はよ」

なんだかんだ、挨拶だけはちゃんと返ってくる——ここ十ヶ月は。出久が仮面ライダーとなったこと……それがゆえに、苛酷な運命に立ち向かい続けてきたことを知って以来、心なしか……本当に心なしか、態度が軟化したような気がする。少なくとも罵倒されることは圧倒的に減った。他愛のない話をしたり、まして合格に向けて励まし合うなどは夢のまた夢だが。

（結局、改善とまではいかなかったなあ……。僕もそこまで積極的に動いてないんだけど）

まあ、勝己はよほどのアクシデントに見舞われない限り合格できるだろうし……自分もそうだ。互いに本格的にプロヒーローへの道を

歩み出したとなれば、関係の変化も見込めるだろう。良くも悪くも——とはいえ、勝己との関係と、出久を取り巻く人間関係についてはイコールではないわけで。

「カツキ、——”アニキ”〜!!」

「!」

独特の緊張感漂う試験会場前によく響く、場違いな声。

振り向けばそこには、出久のよく知っている三人組の姿があつて。

「!、ジヨーさん、と……」

鋼のジヨー——出久の仲間のひとりである彼が、応援にやってきた。それだけならさほど驚くようなことではない。

問題は、ジヨーとともにこちらに手を振る、着崩した詰め襟姿のふたりの少年。それぞれロン毛とサイドを刈り上げた髪型が特徴である。

勝己の、取り巻きくんたちだ。

苦笑とともに歩み寄っていく出久。自身の取り巻きに手招きされたことで渋々勝己もついてくる。やや距離をとってはいるが。

「ようアニキ!試験がんばれよな!!」

「う、うん、ありがとうジヨーさん。……ところで、ふたりはなぜここに?学校は?」

「サボった!」

即答である。

「悪いなアニキ、こいつらどうしてもついてくるって聞かなくてよ。アニキとかつちゃんにエール送ったかつだ」と

「かつちゃん言うなコラア!!」

敬愛するアニキを真似てか、なぜかジヨーまで勝己のことを”かつちゃん”と呼ぶようになってしまった。当然勝己は掌から爆破を起こして威嚇するわけだが、最強クラスの怪魔ロボットである彼に効き目があるわけもなく、いいように遊ばれてしまっているのだった。

(ハハ……それにしても、だなあ)

勝己との関係が改善されたわけでもないのに、取り巻きである彼らと親しくなれるとは思わなかった。すっかりジヨーに絆され出久を

”アニキ”と呼ぶようになってしまった以上、友人と呼べるかは微妙なところだが。

出久が仮面ライダーだと判明してすぐはこうではなかった。いままでの復讐を恐れてかむしろ異様にビクビクしていたくらいだ。――転機となったのは、初夏に執り行われた修学旅行だった。事件に巻き込まれあわや殺されるころだった彼らを出久が救い出したことで、こんなことになってしまった……。

出久がそのときの経緯を思い返している間にも、ふたりが肩をバシバシ叩いてくる。

「アニキもカツキもがんばれよ、マジで！」

「合格は間違いねえとして、どっちが一位とるか楽しみにしてっからな」

「テメエら……コイツと一緒にすんなゴラア!!」な応援ねえほうがマシだわカス!!」

喰ってかかる勝己。自分の取り巻きが嫌っている幼なじみの舎弟に成り下がって?しまったことは、やはり面白くはないのだろう。そこは彼らもわかっていて、それなりに気も遣っているようだが。

(なんでもいいけど、とりあえず”アニキ”呼びはやめてほしいなあ……)

ジョーにそう呼ばれるだけでも、未だにこそばゆくて仕方がないというのに。

そんなことを考えていると、不意打ちかつ二度目の肩パンをかまされた。色々と限界を迎えた勝己が出久を突き飛ばし、立ち去りにかかったのだ。

「わわっ」

「あ、アニキ――」

二度目は予想していなかった――油断していたために、あつさりつんのめる出久。

(うーん……情けない)

仮面ライダーとは思えないポカ。二度、計二年にわたる死闘から解放されて久しいせいか、ぬくぬくとしすぎてしまったのかもしれない

い。

他人事のように冷静に分析しながら地面に倒れかかっていた出久だったが、

(あれ?)

ふわりと、全身を包む浮遊感。それ以上は迫ってこない地面。

それもそのはず——出久の身体は、倒れかかった姿勢のまま宙に浮いていたのだ。

「大丈夫?」

横から少女の声がかかり、出久の身体はやおら直立姿勢に引き戻される。視線を向ければそこには、出久よりやや背の低い丸顔の少女の姿があつて。

「私の個性!ごめんね勝手に。でも、転んじやつたら縁起悪いもんね?」

「あ、ああうん……ありがとう」

心優しい少女だ——出久に限らず、傍らで見ているジョーたちだってそう感じた。

その性情を露わにしたかのような麗らかな微笑を浮かべる少女に対し、出久も仮面ライダーとして戦うなかで培った穏やかな、それでいて芯の強い笑みを浮かべて応じてみせた。

「いい個性だね。おかげで助かったよ」

「!、う、うん」

「お互いベストを尽くせるといいね。——がんばろう!」

出久がそう励ましのことを贈ると——なぜか少女の顔が急速に赤くなっていく。「う、うんがんばろう!」と裏返った声で応じたかと思ふと、そそくさと会場へ走って行ってしまった。まだ集合時間まで余裕はあるのだが。

(……子供扱いしすぎたかな?)

少女が同い年としては幼めな風貌だったことも手伝い——出久も他人のことは言えないのだが——、ゴルゴムやクライシスと戦うなかで触れあつた子供たちに対するように接してしまつたかもしれない。外見が幼かろうが同い年なのだし、救けてもらつた身で失礼だつただ

ろうか？

「だとしたら、悪いことしたな……」

「いや違う違う違う」

「へあっ!？」

思考のつもりがひとりだけで漏れていたらしい。取り巻き、sがにやにや笑いながら否定してくる。

「違うって、何さ?」

「……アニキおまえ、まさか本気でわかんねーの?」

「……スミマセン。ご教授くださったらうれしいです」

ふたりは顔を見合わせたあと、

「やだ、教えねえ」

「ええっ」

「このタラシめ!」

「ええっ!?!ど、どういうこと?——ジョーさんわかる?」

「知ってるけど教えにくい。つーか怪魔ロボットである俺よりニブイって相当ヤバイぞ」

「??？」

キングストーン効果で世紀王にふさわしい知力を得ているにもかかわらず、出久には結局舎弟たちのことばの意味が理解できないままだった。

無理もない。——かつて、たった一度だけ触れた柔らかなぬくもり。その主を閉じ込めた深窓を、彼は心の奥深くに沈めたままなのだった。

\*

「プレゼントマイク!」

試験説明会会場で待っていたヒーローの名を、緑谷出久は素っ頓狂な声で呼んでしまった。

一線級の人気プロヒーローでありながら話術とテンションの高さを活かしてラジオのパーソナリティも務めている——それが”ボイ

スヒーロー”プレゼントマイクである。

彼は出久にとって思い出深いヒーローだった。出久が仮面ライダーBLACKとしてゴルゴムと戦っていた頃、彼は毎回——コーナーまでつくつて——仮面ライダーの戦いぶりを紹介し、リスナーからの応援のメールをたくさん読んでくれていた、自分自身のことばも添えて。

それだけ聞くと大したことには思えないかもしれない。だがゴルゴムが政財界とつながっていた以上、露骨にライダー支持を公言し広めようとする者が睨まれないはずがない。番組、ひいてはマイク自身にも圧力がかかり、身の危険が迫ったこともあった。にもかかわらず、彼は萎縮するそぶりも見せずライダーを……出久を応援し続けてくれたのだ。当時12歳でたった独り、明確に仲間と呼べる者もなくゴルゴムに立ち向かっていた出久の心に、どれほどの救いを与えてくれたことか。

直接ゴルゴムやクライシスと戦ったわけでもなくとも、様々な形で出久を助けてくれたヒーローは大勢いる——”ヒーロー”そのものには手放しの理想を抱けなくなつたとて、そんな彼らへの憧憬までは失っていない。ゆえに鼻息荒く独り言をまくしたてていたら、隣に座っていた勝己に「ウルセエ」と一喝されてしまったが。

そうこうしているうちに、受験生<sup>リスナー</sup>らの反応の悪さに少しテンションの下がったプレゼントマイクから実技試験についての説明がなされる。試験時間は一〇分間、会場は複数。——受験票に書いてある会場のアルファベットは、出久と勝己それぞれ異なっていた。

「僕ら、別々みたいだね」

「見んな張り倒すぞ。……ダチ同士で協力させねえつつー腹だろ」

「うん、まあ当然だよね」

「チツ…… teme エツブせねえじゃねえかクソが」

「ブレないね……」

まあ、自分に限らず誰かと協力して……なんて勝己が考えるはずがないか。出久は密かにフツと笑った。見咎められると厄介なので一瞬にとどめたが。

彼が狙うのは恐らく成績一位——首席の座だろう。だが、その座は自分が獲る。それにしたって自分の力は過分すぎるのだが。だから

思索の間にも、プレゼントマイクによる説明は続いていく。

「演習場には仮想ヴィランを三種、多数配置してあり、それぞれの攻略難易度に応じてポイントを設けてある！各々なりの個性でそいつらを攻略し、ポイントを稼ぐのがリスナーの目的だ！もちろん、他人への攻撃などアンチヒーローな行為は御法度だぜ！」

(……だつてよ、かつちゃん)

心のうちでそう唱えつつちらりと隣を見ると、何か察したのか勝己が凄まじい形相でこちらを睨んでいた。これはまずいと慌てて目を逸らす。

と、いかにも優等生っぽい眼鏡の体格の良い少年が挙手をし、質問の許可を求めた。何やらしおりに記された仮想ヴィランと、説明の数が合致していないことを指摘している。それはいい、出久も気になっていたことだ。だが、言葉遣いにせよ内容にせよやたら四角四面なのがやたら気になる。

(生真面目くんだなあ……。ん？あの子つてもしかして……。?)

その少年の背中に見覚えのあった出久。——彼が唐突にこちらを振り返ったために、その既視感は確定的なものとなった。

「それからそのきみっ、さっきからブツブツうるさ」やっぱり天哉くんだ！——!?!」

恐らく出久の独り言を咎めようとしたのだろう少年だったが、見ず知らずの出久に名前を呼ばれたことに驚き、氣勢を削がれてしまったようだった。

「……どこかで顔を合わせたことがあったか？」

「！、あ、いや、きみとは初対面なんだけど……インゲンウム——お兄さんにお世話になったことがあって。きみの写ってる写真、見せてもらったことがあったから」

「な、なるほど、兄の知人だったのか……」

「お兄さん、素晴らしいヒーローだね」——そう称賛して微笑む



と、振る舞い同様硬かった少年の表情がみるみる弛緩していくのがわかる。「あいつ俺のこと大好きなんだよ」という嬉しそうなインゲンウムの言はまったく事実だったらしい。

「……そこのおふたりさん、そろそろいいかい？」

ちよつぴり遠慮がちなマイクのことばで、ようやくふたりだけの世界から我に返った。言うまでもなくここは受験会場である。

そして天哉少年の疑問は無事解決された。説明になかった四種類目はOPの妨害敵……避けて通るべきステージギミックとのことだった。納得した少年は「失礼いたしました！」と一礼して着席した。「——俺からは以上だ。最後にリスナーへ、我が校校訓をプレゼントしよう！」

それはかの英雄、ナポレオン・ボナパルトが述べたことば。

「さらに向こうへ——」プルス・ウルトラ!!」

プルス・ウルトラ——あらゆる苦難を乗り越え進む、不屈の闘志。英雄の、英雄たるべき絶対条件。

(僕はもう、それを知っている)

出久は幾度となく傷つきながら、それでも乗り越えてきた。その経験と自負だけは、ここに居る誰にも決して負けはしない——隣に座る幼なじみにも。

今日この日が、自分の三つ目のスタートライン——”サードライン”になるのだという確信とともに、出久はいの一番に席を立ったのだった。

## サードライン（後）

演習会場は市街地を横したものだっただ。

いや……正しくは、街ひとつ一からビルドしてしまっただでも言うべきか。道路の幅も広く、取り囲むビル群も立派にそびえ立っている。

（さすがは雄英……設備も一流だなあ）

感心しつつ、他の受験生たちの姿を見渡す出久。見る限りではガチガチに緊張している者はあまりおらず、早く己の力を見せつけたいとばかりに逸っている様子だ。最高峰に挑むだけあってか、皆よほど自信があるのだろう。——その自信、多少なりとも打ち砕くことになるのだが。

と、群衆の中に見覚えのある少女の姿があった。勝己に突き飛ばされて転けそうになった出久を、個性で助けてくれた女の子だ。

（彼女も同じ試験会場だったのか……。彼女には合格してほしいけど僕が下駄履かせてあげるのも失礼だし……。うん、頑張っしてほしいな）  
それにしても、彼女はなぜあんなに顔を真っ赤にしていたのか。結局、ジョーたちは教えてくれないままだった。——長く苦しい戦いと人でなくなってしまった肉体のために、自分には得たものと同時に欠けてしまったものがあることは出久も自覚している。それを取り戻さねばならないことも。

そんなことを考えていた出久は、刹那、背後に迫る気配を感じとって素早く振り向いた。そこに立っていたのは、

「!?」

「！、……あ、天哉くん？」

やたら身体のラインの出たユニフォームに身を包んだ、天哉少年だった。肩を叩こうとでもしていたのか、手が伸びかけた状態で固まっている。

「きみも同じ試験場だったんだね……。どうかした？」

「いや……。先ほどは失礼した。妙にはしゃいでいるようだったから、ひと言注意しなければと思っただ」

「ああ……気にしなくていいよ、うるさくしちやったのは事実だし。……でも、僕にとっては恩人のひとりなんだ、プレゼントマイクもきみのお兄さんと同じで」

「恩人……何か大きな事件に巻き込まれたことでもあるのかい？」

「うーん……まあ、そんなところかな」

一応、嘘はついていない。”巻き込まれた”と言えるかは微妙なところだが。

「ところできみ……見れば見るほどお兄さんにそっくりだね」

「！、……そう、だな。たまに言われることもあるが」

兄に似ているというのは、彼にとってはやはり褒め言葉なのだろう。心なしか頬が赤くなっている。

それを認めたくえで、出久はさらに駄目押しに及んだ。

「きみもきつと、お兄さんに負けないヒーローになるんだらうね。――

――<sup>こご</sup>雄英で切磋琢磨できるのが楽しみだよ」

「！」

目を見開く天哉。”兄に負けないヒーロー”――そのフレーズに、身体が歓喜を抑えきれなくなる。それと同時に、この地味で小柄な少年に、自分も含めたどの受験生にもない”何か”を感じとってしまった。得体の知れない巨大なそれに、いまにも呑み込まれてしまいそうな錯覚に囚われて、その大きな身体をぶるりと震わせる。

(なんなんだ……この男は……?)

自分と同じ年であるはずなのに、まるで、いくつもの戦場で無数の生と死を見つめてきた歴戦の勇者のような。兄と同じ……いや、それ以上かもしれない。気づけば天哉は、一歩後ずさってしまっていた。

「天哉くん？」

出久が怪訝そうに首を傾げた瞬間、

『はいスタートオ!!』

「!!?」

カウントダウンもなしの宣言に虚を突かれた受験生たち。無論、天哉もそのひとり――しかし彼の味わった驚愕は、それだけに留まるも

のではなかった。

——消えたのだ、目の前から。緑谷出久が。

「え……？」

刹那、彼方から響く轟音。受験生たちがざわめいている。

「お、おいウソだろ……？」

「あいつ……マジかよ……!?!」

彼らが呆然と見つめる先に……かの少年の姿があつた。大破しスクラップ同然となったロボット(仮想ヴィラン)を、地面とサンドイッチにしながら。

「……実戦ではカウントダウンなんかしてもらえない、ですよ。プレゼントマイク」

既に幾多もの実戦を勝ち抜いてきた出久に、それがわからないはずがない。そのために彼はこうして、自分が既に抜きん出た存在であることを存分に喧伝しているのだ。本来なら、ライバルと呼ぶべき者たちに向けて。

「さて、まずはこれで1P。——ボサつとしてると、みんな僕が狩っちゃうぜ……な、なんてね！」

あえて気取った調子で言い放つ出久。内心ちよつと恥ずかしかったのでもってしまったが、そんな些細なミスには皆気づきすらしない——それどころではないから。

刹那、慌ただしく動き出す受験生たち。出久のことばが冗談では済まないものになると感じとつたのだろう。

天哉もまたそのひとりだった。

(い、一体何が起きたんだ……!?!あの一瞬で、彼はどうやってあの仮想敵を……?)

駆け抜けつつ。——まず思い浮かんだのは、“ワープ”の個性。だがそれでは、一瞬で仮想敵を破壊できたことの説明がつかない。武器を隠し持っているようにも見えなかったし、純粹な格闘術のみで仕留められる相手とは思えない。ましてあんな、小柄で細身の少年に。

まさかそれが、人体改造によってヒトの形をとどめながらヒトでな

くなってしまうた肉体にオールマイトの個性が掛け合わさったゆえだなどと、誰が気づけるであろうか。それらを最大限に操り、出久はほとんど瞬間移動に近いスピードで仮想敵のもとまで移動し、細身から繰り出す馬鹿力で叩き潰した——ただ、それだけ。

なににせよ——ヤバイ。そう判断した受験生たちは死に物狂いで仮想敵を見つけ出し、我先にと争いながら倒していく。出久は微笑すら浮かべてその光景を眺めていたのだが、

「あつ……僕まだ1Pしかとってないや」

のほほんとしている場合ではないことに気づいた。このまま見守っていたら当たり前のように不合格になってしまう。

ふう、と息をついた出久は——ワン・フォー・オールを、発動させた。全身にエネルギーが漲っていくのがわかる。”フルカウル”——一部ではなく全身に個性を纏うことによつて、パワーやスピードを必要なだけ強化することができる。これなら山ひとつ消し飛ばしてしまうこともない。

もうひとつ深呼吸をして——跳んだ。そのスピードは確かに、常人の視力からすれば”ワープ”に見えてしまうかもしれない。鷹野警部補の”ホークアイ”の個性なら影くらいは捉えられるか? 「鷹野警部補って誰?」って方は『僕のヒーローアカデミア・アナザー 空我』もご覧くださいお願いします!!

……ともあれ、一瞬にして次なる仮想敵の頭上へ到達した出久は、降下しながらデコピンを放った。威力を抑制するためだ。

その衝撃だけで仮想敵はバラバラに砕け散り、見るも無残なスクラップと化する。

「こいつは……3P敵か」

確認するようにつぶやいていると、

「あ……あ……」

「?」

すぐそばで怯えている金髪の少年の姿。確か、腹部からレーザービームを放っていた。振る舞いがやや珍妙なことは置いておいて、なかなか強力な個性の持ち主ではあるようだが。

「横取りしてごめんね。——まだまだ敵は残ってるよ、がんばって！」  
「……！」

励ましのことばを残して、出久は再び跳ぶ。その笑顔は少年の記憶に色濃く刻みつけられることになるのだが、このときはそんなこと、考えもしなかった。

\*

試験開始、一〇分経過。

もはや何体目かもわからない仮想敵”だった”スクラップの上立ちながら、出久はふう、とひと息ついていた。

(そろそろ……いいかな)

累積ポイントはかなりのものだろう。合格はもちろん、一位になるにも必要なだけは稼げたと思う。

ちら、と周囲に目を向ける。皆疲労を色濃くしつつ、死に物狂いでポイントを稼ぎに奔走している。たったひとりのために、敵の数はずいぶん減ってしまっている——残る少ないパイの奪い合いだ。

出久が最後まで本気で挑めば、残る仮想敵を全滅させることだってわけではない。しかしそうなると他の会場との不公平は決定的なものになる。他の会場の不適格者が合格して、この会場の適格者が落ちる——それは自分にとっても損失以外の何ものでもない。まして恩人の弟に、試験前に助けてくれた”いい人”がいることを鑑みれば。

(手は抜きたくないけど……しようがないよな)

あとは大人しく有力者の観察でもしていよう。まず上述のふたりは余裕はないながらも確実にポイントを稼いでいるようだ、じき合格圏には達するはず。複数の腕を操る体格の良い異形型の少年に、先ほど獲物を横取りしてしまった、腹からレーザービームを放つんだか演劇がかった所作の少年——そのあたりも合格候補か。

(あっちの異形型の子は落ち着いてるな、見た目に変わらず肝が据わってるのかも。逆に、おフランスっぽいレーザービームの子はちよつと精神的に脆そうかな。さっきのリアクション見る限り)

もしかすると約一ヶ月後には同級生となるかもしれない相手を分析していた出久は、次の瞬間耳を劈くような轟音と受験者たちの悲鳴にも似た阿鼻叫喚を聞くこととなった。

「…、出てきたか」

そのひととき巨大な鋼鉄の機械人は……間違いない、”OP敵”だ。まともにやりあったところでなんの意味もない、ただ受験生を妨害するためだけのオブジェクト。

その存在理由に忠実に、猛獣のような獰猛さで受験生に襲いかかるOP敵。ほとんどポイント提供マシンと化していた他の有価値の敵とは次元が異なるらしい。

「こ、こつちに来る!?!うわああああ!!」

「まだ全然ポイント稼げてないのに!!」

目をつけられた受験生たちの悲鳴のような声。それを聞きつつ……出久は、悩んでいた。

(稼げてないのは僕のせいでもあるんだよなあ……うーん……)  
競争なんだから当然といえばそれまでだが、自分ひとりでポイントを荒稼ぎしてしまったのも事実。OP敵の存在も込みで試験ではあるが――

(あいついなくて他の試験場とどっこいな気もするしな……)

それに、何より。

「誰かのピンチを見てるだけなんて、仮面ライダーらしくないだろ!」  
答は、決まった。出久はニヤリと笑い、拳骨を軽く唸らせる。その翠の瞳は猛禽類のような輝きを放っていて。

「――彼、やる気だね」

椅子に座った幼児くらいの体長のネズミが、人間と遜色ないことばをつぶやく。――彼がこのヒーロー養成の最高峰を仕切る”校長”という肩書きをもつことなど、部外者からすればおよそ信じがたいことだろう。

「でしようね」試験官のひとりが応じる。「OP敵から逃げ回るような性質たちじゃないでしょう、彼は」

緑谷出久が仮面ライダーであるという事実。この場にいる者たちが、知らないはずがなかった。試験官でありヒーロー科の教師でもある彼らは、皆現役のプロヒーローだ。ゴルゴムやクライシスの脅威に對して、なんらかの對抗措置をとった者たち。直接怪人と戦った者もそうでない者もいるが……自分の持ちうる力を最大限発揮し、仮面ライダーを支えてきたのだ。

——だからこそ、少年の活躍をこのまま黙って見ているわけにはいかなかった。

「本来なら、試験は公平公正に……なんだが。……きみにも試練を課させてもらうよ、仮面ライダー」

意味深なことばとともに、鼠校長が手許の赤いボタンを押し——

——OP 敵目がけて跳ぼうとしていた出久は刹那、およそ一年強も感じたことのない強烈な邪悪の気配を間近に感じていた。

「ッー」

咄嗟に上空に跳び上がる出久。直後飛来した複数のミサイルが仮想敵の残骸を爆発させ、跡形もなく弾き飛ばす。

爆風に煽られながらもビルの屋上に着地した出久は、その劫火をもたらした存在を視認した結果、しばし呆然とする羽目に陥っていた。

「あれ、は………」

ヒトの形をとどめた四肢をもちながら、全身を鋼鉄に覆われ、大量の兵器を内蔵した破壊の化身。緑谷出久にとって、それは記憶にある存在——忘れたくとも忘れられない、”第二の”悪夢のはじまりを、象徴する存在だった。

「キューブリカン……!?!」

キューブリカン——クライシス帝国が擁する怪魔ロボット軍団、もつと言うならばすべての怪魔怪人の中で、最初の刺客。RXとなつて間もない出久を大いに苦戦させた、まぎれもない強敵だ。

「なんで……なんで、あいつが………」

既に滅びた……自分が滅ぼしたクライシス帝国の怪魔ロボットが、



なぜ雄英高校の試験会場に？可能性だけなら頭の中で無数に枝分かれしてゆくが、そのどれもがありえないこととしか思えなかった。

とどまることを知らない思考の渦を弾き飛ばすように、再生キューブリカンはさらにミサイル攻撃を仕掛けてきた。

「ッ!!」

ワン・フォー・オール”フルカウル”を再び発動させ、回避する。かと思えば右腕が持ち上がり、そこから空気を焦がすようなレーザービームが発射され、標的たる出久をどこまでも追いかけてくる。

(ッ、殺す気かよ……!?)

その猛攻ぶりは、記憶にあるオリジナルのキューブリカんにまったく遜色ない。冷酷な殺人マシン。そんなものを試験に投入してくるなんて。

ただ、幸か不幸か、再生キューブリカンは出久以外の受験生のことにはまったく眼中にないようだった。

「わざわざ怪魔ロボットなんて出してきたってことは……なるほどね、そう簡単に三タテは許さないってことか!」

合格、首席、そのうえOP敵まであっさり始末されては、ということなのだろうか。あるいはまだ、別の何かがあるのかもしれないが。

(キューブリカンの相手に生身は厳しいか……でも……!)

仮面ライダーの力には極力頼らず、緑谷出久としてこの試験を乗り越えたい。それは出久の意地だった。もちろん変身せずとも改造人間の恩恵には与ってしまうが、だとしても――

「――はッ!!」

ならば授けられた個性を最大限に活用し、この強敵を倒すほかない。そう決心した出久は勢いよくその場を蹴った。逃げ回っているのは性に合わない――教師陣の言は見事に的中している。

だが再生キューブリカンのもさるもの、見かけによらない素早い動作で出久と距離をとろうとする。さらにミサイル、レーザービームの雨あられ。広範囲に拡散するものだから、出久は早速、他の受験生たちからできるだけ引き離すよう方針転換を強いられてしまった。

(悪質……ッ!)

自分を殺しにかかるのはいつこうに構わないが、他の受験生にまで被害が及んだらどうするつもりなのか。自分がうまく対処しなければ誰かしら三途の川をプルス・ウルトラしてしまうかもしれない。冗談ではなく。まったくつくづくヒーローというのはどこかネジが外れていると思った。

再生キューブリカンのことがなくとも、OP敵にしたってそうだ。あんな暴れっぷり……合格できるだけの實力がある者ならまだしも、そうでない人間にはさすがに酷だ。おまえが言うなど言われればそれまでだが。

「とにかくッ、早くこいつ倒してOPの奴も——！」

そのとき、OP敵のいる方向からひときわ凄まじい轟音が響いてきた。

反射的にそちらを見遣れば、敵の猛攻の余波を受けたのだろう、倒壊していくビルが目に入った。受験生たちが蜘蛛の子を散らすように逃げていく。そんな中でも執拗な攻撃を加えようとしているのは流石としか言いようがないが、それにしても、

「ッ、ここまで来たら倒しにかかったほうが楽だろうに……！」

あれほどやりたい放題に暴れ回る敵を放置して、他の小粒な敵を倒していくなど、実戦においては悪手もいいところ。だが皆、「倒したところでポイントにならない」「避けて通るべきステージギミック」というプレゼントマイクのことばに忠実すぎるのだ。直接ポイントにならないだろうが、ポイント獲得の邪魔になるなら倒したほうがいいに決まっている。たとえばライバルと協力してでも。——でなければ、生き残れない。

そう心のうちで断じていた出久の瞳が……まるでそれを具現化したかのように、瓦礫の下敷きになった人影を捉えた。

「！、あの娘は……！」

試験開始前、出久を助けてくれた少女だった。幸いにして身体を潰されたりはしていないようで、なんとか抜け出そうともがいている。しかし情けなど欠片も持ち合わせていないOP敵は、獲物を仕留めんと迫ってくる。

——そんな絶望的な状況下で唯一飛び出したのは、出久の尊敬するプロヒーロー……その弟だった。

「きみ、大丈夫かッ?!いま瓦礫をどかし……く……ッ!」

瓦礫に手をかけ、力いっぱい除けようとする天哉。しかし彼の個性は“エンジン”——脚力を強化するものであつて、鍛えていようと腕力は常人の域を出ない。巨大な瓦礫もあるなかで、ひとりではどうにもならない。

「誰か、誰か手を貸してくれ!このままでは、彼女が——」

他の受験生たちに救援を求める天哉。それに応える者が、果たしているかどうか——キューブリカンをいなしつつ、出久はやや冷めた面持ちでいた。

たとえヒーローであつても、損得勘定なしに動けるのはほんの一握りだけ。——でなければ、自分はゴルゴムとの戦いのさなか、あれほどまでに涙を呑み、爪を立て、うなだれる日々を送ることはなかった。(それだけの人間が、この中に何人いる?)

仄暗い考えがよぎり……振り払う。ならば自分がやらねばならない。ヒーローとしてどうあるべきか、自分の見出してきたものを、背中で示す——

そんな出久の想いを裏切るかのように、遠巻きにしていた面々の中から大柄な影が飛び出してきた。

(あれは、複腕の……?)

彼だけではない。脆そうだと評していたフランスかぶれの金髪の少年はレーザービームでOP敵を牽制している。他にも数人、それぞれ個性でできることをやろうとしている。

(それなりに、いるんだな……やっぱり)

嬉しかった。

なら僕も。僕にできることを、全力で。——もう意地など、どうでもいい。

「変、身」

出久の身体が光に包まれ、

「――SMASH」

次の瞬間には、再生キューブリカンもまたピクリとも動かぬスクラップと化していた。その無残な姿に背を向ける、バツタに似た黒と緑の英雄。唯一複眼のみが、鮮烈な赤い輝きを放っている。

その光が次に向けられるのは、言うまでもなく――

立ち向かう受験生たちを無慈悲に薙ぎ払おうとするOP敵。しかし振りかぶられた腕は、一瞬のうちに根元から千切れ飛んだ。飛来した光弾によつて。

「え………？」

「は………？」

何が起きたかわからず、呆ける少年少女たち。やおら振り向いた彼らは、そこに立つ鋼の英雄の姿に目を剥くことになった。

金色こんじきと黒の、鋼の鎧を纏った狙撃手スナイパー。その名も、

「悲しみの王子――ロボライダー!!」

それが仮面ライダーの数ある形態のひとつであると、知らぬ者はこの場にはいない。

また、”悲しみの王子”を自称しながら、その胸のうちに宿るのはむしろ歓喜だった。昂ぶった感情を、ボルテックシューターに込めてぶつけていく。メタリックなボディが次々爆ぜ、なすすべなく後退していくOP敵。もう潮時だろう、奮戦した受験生かかれらが少しでも合格に近づけるよう、早く決着をつけなければ。

ボルテックシューターをホルスターに納めたロボライダーは、一瞬にしてその姿をもとのRXに変えた。そして、

「リボルケインッ!!」

サンライザーに手をかざすことで、これまで数多のクライシス怪魔を葬ってきた光の杖が顕現する。その光輝を右手に携え、RXは跳んだ。OP敵の頭上をとり――ワン・フォー・オールを、発動させる。

ワン・フォー・オールはRXのあらゆる能力に作用し、向上させる。それはRXの体内より出でたりボルケインについても例外ではない。

杖の輝きがいつそう烈しくなり……その刀身が、何倍にも伸びていくのだ。

「喰らえ——ッ!!」

さらに鋭く尖った先端を——

「!?!?!?!」——脳天から、突き入れた。

!!痛覚などもたないはずのOP敵から、まるで絶叫のような激しい電子音が漏れ出す。リボルケインの伸びに伸びた刀身は頭から脚の付け根まで、完全に貫いている。それだけではない。このRXの必殺技——”リボルクラッシュ”は、貫通した相手の体内にその身が爆散するまで太陽エネルギーを注ぎ込む。クライシス皇帝すらもやりすぎなほどに吹き飛ばした、恐るべき一撃なのだ。

正直OP敵相手には、過剰にすぎると言ってもよかった。全身あちこちがひび割れ、例外なく眩い閃光が漏れ出していく。

「——ふッ、」

やがて杖を引き抜き、着地するRX。既に勝利を確信した彼は、敵に背中を向けていた。掲げたリボルケインを、ゆつくりと横に下ろす。幾度となく繰り返し返してきた、勝利の構え。

超・世紀王によって確たるものとされた運命に抗うことなどできるはずもなく。OP敵の身体が、彼の背後でゆつくりと崩れ落ちていく。全身から漏れ出す光が、ひとときわ烈しいものとなり——

——遂に、爆発が起こった。

熱風に皮膚を刺され、受験生たちはたまらず顔を背ける。RXが間に入っておらず、もつと距離が近ければ、それは火傷にも繋がっていただろう。

爆発そのものが落ち着いて、RXはちらと背後を振り返った。OP敵が跡形もなく燃え尽きていることだけ確認したあと、瓦礫の山のもとに歩み寄っていった。

「みんな、大丈夫?あとは僕がやるよ」

「え、あ、ああ……………」

突然の仮面ライダーの登場に、少年少女らは未だ理解が追いついていないようだ。それも致し方なからう、彼らがRXの存在を認識してから、まだ数十秒しか経過していない。

そのおかげでかえって皆言うことを素直に聞いてくれたため、RXは容易に次の行動に移ることができた。瓦礫に手をかけ、軽く力を込める。

途端に、触れていた瓦礫が消し飛んだ。粉々になったとかではない、まるでマジックのようにぱつとその場から消えうせたのだ。

「え……………え……………う？」

想定外にもほどがある現象に、周囲の受験生たちばかりか助けられた張本人まで呆然としている。

「大丈夫？立てる？」

「！、は……………はい……………」

差し伸べられた大きな手を取り、立ち上がる少女。半ば夢でも見ているかのような心持ちであったせいもあるだろうが、不思議と躊躇いはなかった。あれだけ絶対的な力をもつ、鎧を着たバツタ怪人——生で見たら正直怖いだらうな、なんて思っていたのだが。

「残り少ないとはいえまだ時間はある。無理はしなくてもいいけど……………きみたちが頑張ってくれたら、僕は嬉しい」

「！」

また呆気にとられる少女にはつきりうなずいてみせ、RXは——その場から消えた。

正確には跳躍し、一瞬のうちにビルの向こう側に消えたのだが、彼女らに知るよしもない。

「……………よ、よーし!!」

「!？」

仮面ライダーに助けられた少女が、不意に拳を振り上げる。

「試験時間終了まで正々堂々、がんばろうみんな！」

「！、……………そうだな！がんばろう!!」

真つ先に応える天哉少年。ライダーの登場と彼らにあてられてか、

「おおお!!」と関の声が上がる。それから試験終了までの数分間、彼らは正々堂々獲物を奪いあつたのだつた。

\*

すべての試験が終わつて会場を出たときには、空はすっかり夕暮れの橙に染まっていた。

悲喜こもごも様々な表情を浮かべる受験生たち。元の学ランに着替えた緑谷出久の姿もそこにあつた。主観的にも客観的にも相当な戦果を挙げた割に、その表情は複雑そうだった。

(最後まで変身はしないつもりだったんだけどなあ……………)

変身したことで迅速にあの心優しい少女を助けられた。変身せず通してもなんとかなつたかもしれないが、その確証はない。

だから後悔はない、ないのだが――

「……………ままならないなあ」

怪魔ロボットの登場という予想外の事態。原因に心当たりがないではないが、計画を乱されたのは確かだ。これだけ強大な力をもつてしても、こうも思いどおりにならないものか。ならば数万年の寿命も、理想を完遂するには案外短いのもかもしれない。そんなふうにするら思えて、出久は嘆息した。

と、そのとき、

「おおおお〜いッ、待ちたまえ——ッ!!」

「!」

呼び止める声とともに、地響きをたてて駆け寄ってくる音。反射光に迫る出久が目の当たりにしたのは、かのインゲニウムの弟が超スピードで駆け寄ってくる姿だった。困惑した様子で道を空ける他の受験生たちひとりひとりに「失敬!」と詫びている。やはり生真面目くんだと出久は思った。

「ハア……………ハア……………ようやく見つけたぞ」

「天哉くん……………どうしたの?」

「少し、話したいことが——」

「——あ、いたいた！おふたりさーん！」

今度は助け救けられたかの丸顔の少女だ。顔の絆創膏が少しだけ痛々しいが、それ以外に目立った外傷はないようだ。ほっと胸をなで下ろしつつ、出久は彼女を迎えた。

「よかったあ、見つけられて……どうしても確かめたいことがあったんだ」

「僕に？……何、かな？」

なんとなく、予感めいたものがあつた。ふたりがなんのために自分を捜していたのか——その目的は、まったく一致するのではないかと。

そして、

「きみは、」

「もしかして、」

「仮面ライダー……なの（か）？」

「……………」

（……まいったな）

予感は、的中した。

つづく



合格！新たな未来へレディ・ゴー！（前）

RXに変身するという不本意を呑みながらも、やりたい放題のうちに入学試験を終えた出久。

しかしそれが祟って、試験開始前に話をしていたふたりの受験生に正体を悟られてしまったのだった――

「きみは、」

「もしかして、」

「『仮面ライダー……なの（か）？』」

（……まいったなあ）

出久は思わず頭を掻いた。ふたりはほとんど確信のこもった目でこちらを見つめている。しらを切るのは難しいかもしれない。この場だけの関係なら無理矢理にでも押し通せばいい話だが、彼らはこの試験に合格し、こゝろ雄英とともに学ぶ仲間になる――そんな確信が、自分にもあった。とすればここで嘘をつくことは、今後関係を築くうえで阻害要因にしかならない。

しばし押し黙ったあとで、出久は小さく溜息をついた。

「……………こじやあれだから、ついてきて」

「……………」

その答えは、事実上肯定したに等しいもの。

ふたりは顔を見合わせつつ、伝説の英雄の肩書きには似つかわしくない大きな黄色いリュックのあとを歩いていくのだった。

少しして。

三人が訪れたのは、ビルとビルの谷間に挟まれてひっそりと息づく小さな喫茶店だった。といっても、営業している気配はまったくない。掃除こそ行き届いてはいるが、長らく時間が止まってしまったかの

ような、ひんやりとした空気に占められた空間だった。

「ここは……？」

「なんか、寂しい雰囲気のところやね……」

少女の感想は正直すぎると思ったが、同時に鋭い指摘であるとも出久には感じられた。ここは三年前、自分が小学生と中学生の狭間にながらにしてヒトならざる英雄として独りぼっちで戦っていた頃、失った親友の家族とともにその寂しさを共有してきた場所でもある。彼女たちは元気にしているだろうか——そんな当たり前の心配をしながら、出久は自分を嘲った。心配などする資格はない。自分は結局、彼女らの大切な息子（弟）を救け出すという約束を守れず、この手で殺めたのだから。二度も。

仄暗い思いを押し殺して、出久は笑顔でふたりに着席を勧めた。一応用意だけはしてあるインスタントのコーヒーを淹れつつ、笑顔をつくる。

「まずは自己紹介からしたほうがいいかな。——緑谷出久です、よろしく」

「！、あ、う、麗日……お茶子です」

「もうご存知だろうが、飯田天哉です……よろしく、緑谷くん」

ふたりの名前を心中で復唱しつつ——飯田天哉の名前はする必要もなかったが——、同年代の相手とこうして自己紹介しあうのはなんだか新鮮だと出久は思った。

「コーヒーどうぞ。インスタントでごめんね、こここんな状態だから」

「いや、それは構わないが……あの」

「わかってる。——僕が仮面ライダーかどうか、だよな」

ここまで勿体ぶっておいて、「違う」なんて答えが許されるはずがない。彼らの期待もこれから実際に口にする答えも、間違いなく一致していた。

「——きみたちの考えてるとおりだよ」

「……！」

思わず椅子を蹴るようにして、飯田天哉が立ち上がる。暫しことばもなく、口をぱくぱくと動かしている。

「きみが……きみのような子供が、仮面ライダー……」

呆然とつぶやく姿は、立派な風貌をしていてもやはり兄よりはずいぶん幼く感じられた。兄であるインゲニウムは、あらかじめ情報を得ていたということもあつたろうが、仮面ライダーがこんな子供であることを既に受け容れていたようだったから。

「やつぱりイメージとは違いすぎるよね。普段はこんなんだけど、変身すると見るからにヤバそうな感じになっちゃうし」

「いや、それもあるが……それよりもだな……」

やや躊躇があつたあと、飯田は覚悟を決めたかのように口を開いた。

「なぜ、きみが戦わねばならなかつたんだ？」

「……」

やはり、そうくるか——出久にとり、予想はできていた問いだつた。仮面ライダーが誕生した当時弱冠12歳、小学六年生の子供だつたことは、同い年の彼らになら容易く思い至れるだろう。

既に己の秘密を知る者は大多数いる。オールマイトやジョー始め仲間たちはもちろん、幼なじみではあれあの戦いには無関係だつた爆豪勝己にもすべてを話した。彼が傲慢ではあれ秘密を吹聴するような愚者ではないこと、「騙された」とあれほどまでに取り乱していたこと——理由はいくらでもつけようがあるが、それだけでは片付けられない”何か”があのとときは湧きたってきたのだ。それがなんなのか……この十ヶ月折にふれて考えてはきたが、未だ答えは出ていない。いずれにせよ、現時点ではこのふたりにまで語れることではないと思つた。可能性は高いとはいえ彼らが合格している確証はない、現時点では友人・仲間になりうる他人というだけだ。この世紀王の真実は、あまりに重すぎる。

だから静かに、かぶりを振つた。

「……ごめん。いまのきみたちにはまだ、詳しくは話せない」

「……」

ふたりが忸怩たる表情で俯くのも、想像どおり。ただ文句のひとつ

も出ないのは、彼らの賢明さの証左というべきか。

「ひとつ言えるのは……僕がゴルゴムやクライシスと戦うことになったのは成り行きなんかじゃない、そういう運命だった——って、ことかな」

そう、運命だった。自分と信彦が同じ日食の日に生まれたことも、個性がなんら宿らなかつたことも。——すべては彼らふたりが、世紀王として生まれながらに選ばれていたがため。

「僕はいつらと戦わなきゃならなかつた。僕が、僕である以上は……」

「緑谷くん……」

ことばを失う少年少女を前に、出久はへらりと笑った。その笑みは幼さを色濃く残している、仮面ライダーとしての死闘が彼のものだったなどといまからでも疑いたくなるくらいに。

「ほんとごめんね、それだけなんだ。こんなところまで連れてきていてナンだけど……」

「……いや、こちらこそすまない。色々複雑な事情がある様子なのは理解した。そこは兄にも話してないんだらう?」

「うん」

「ならむしろ当然だな」と、飯田はしきりに頷いている。クライシスとの決戦時、同志としてともに戦場に立ったインゲニウムにすら明かしていないことなら、自分にだけ話すのはむしろ筋が通らない。

「麗日くん……だったな。きみもそれで納得してくれるか?」

「!、あ、う、うん!……ってか私はその、確かめたかっただけで……あと……」

「!——救ってくれて、ありがとう」

大きな瞳を丸くする出久の前で、お茶子もまた大きな瞳を細めてはにかんだ。

「それだけはどうしても、言っておきたかったんだ。……また会えるか、わかんないし」

「……会えるよ、きつと」

僕もきみたちもきつと、あの場所でまた会える——確信のこもった出久のことには、どんな理論よりも説得力があると、ふたりは思った。

\*

「さて、と……」

飯田と麗日お茶子を帰したのち、出久もかの喫茶店をあとにした。それほど長い時間居座っていたわけではないのだが、すっかり空も暗くなってしまう。途中で電話で一報を入れなければ母に心配をかけてしまっていたかもしれない。仮面ライダーでありいまではオールマイトの個性を受け継いでもいる自分が夜道を歩いたところで危険など何ひとつないのだが——外見のせいで絡まれることがあったとして、危険なのはむしろ相手のほうである——、そうした理屈で割り切れるものではないらしい。息子がヒトならざるものとなれども抱きしめ支えてくれた母の想いは、何より尊重したかった。ともあれ。

「ただいま……」

かつて秋月一家、次いで佐原一家が暮らした屋敷に帰り着いた出久は、玄関先で“家族”たちの熱烈な歓迎を受けることとなった。

「おかえり出久くん！」

「試験、どうだった!？」

「受かった、受かったよね!？」

相も変わらず遊びに来ていた白鳥玲子に、いまでは名実ともに出久の義弟妹である佐原茂と一水。クライシスとの戦いにおいて苦楽をともにした仲間でもある三者が興奮ぎみに迫ってくる。出久は苦笑しながら後ずさるほかなかった。

「アハハ……せめて靴くらいは脱がせてくれると嬉しいんだけどな?」

「あ、ごめんごめん!でも、実際どうなのよ?」

玲子につんつんと肩のあたりをつつかれる。こそばゆい。

「合格は……したんじゃないかな？ トップを目指したつもりだから、あとはそこがどうなったか……かな」

「おー、流石の発言……」

「ま、出久兄ちゃんなら余裕だよー！」

茂が瞳をきらきらさせている。それ自体悪い気はしなかったが……試験全体としては“余裕”とまでは言い難いものだった。予想だにせず現れた、怪魔ロボットののために。

——そう。その怪魔ロボットの件で、どうしても確かめなければならぬことがあった。

「ところでなんだけど、今日ってジョーさんは来てる？」

「うん。たぶん出久兄ちゃんの部屋でパソコンいじってるよ」

「……なぜ彼はいつも勝手に」

一応は思春期の少年の根城を荒らすのは勘弁してほしい。これで人の機微をまったくわかっていないなら仕方ないと割り切れるのだが、仲間入りして久しいジョーは怪魔ロボットながらそれなりに学習していて、下世話なことでもからかってきたりもするのである——麗日お茶子とのあれこれに関して「知ってるけど教えにくい」などのたまったことから容易に想像できるだろう——。

「ジョーがどうかしたの？ 確か今日、入試の前に会ってるはずでしょう？」

「うん。ただちよっと、確認したいことができちゃってさ」

微笑とともにそう濁すと、出久はさっさか玄関を上がって自室に向かった。途中、キッチンに立っているであろう母と響子の「おかえり」という声および夕食の香ばしい匂いが飛んできたが、前者にのみ応えて後者はひとまず無視した。唾液という名の生理現象は止まらないのだが——たとえ世紀王の肉体であっても。

ともあれノックもしないで自室の戸を開けると、そこには聞いていたとおりジョー……というかデスクガロンの姿があった。まったく取り繕うことのない怪魔ロボットの姿で、人のベッドにうつぶせに寝そべり、ノートパソコンを開いている。

そんな状態で首だけギギギと動かしてこちらを見たかと思えば、

「帰ったかアニキ。おかえり」と悪びれることなくのたまうのだからたちが悪い。

「ただいま……僕の部屋で僕のベッドを占拠して僕のノーパソ無断使用とは、さすが最強の怪魔ロボット」

「……それはもしや皮肉というヤツか？」

わかっているなら勘弁してほしい、と改めて思いつつ、出久は椅子に座った。一応は身を起こしてベッドの縁に腰掛ける姿勢になった。デスガロンと向かい合う形になる。

「……」

「あれ、訊かないの？試験どうだった、とか」

「あ、ああ。……どうだった？」

「うまく行ったよ、概ね。ひとつ想定外があつて、変身する羽目にはなっちやっただけ」

「想定、外」

「うん。ふつうのロボット敵に紛れて出てきたんだよね……怪魔ロボットが」

わざとねつとりとした口調で紡ぐと、デスガロンの逞しい肩があからさまに跳ねた。もとより濃厚だった疑念がいよいよ確信へと変わる。

「その怪魔ロボットつて言うのがさ、なんとキューブリカンなんだ。僕を暗殺するために最初に派遣されてきた奴。街で暴れたりもしていないから認知もされてない。それに怪魔ロボットのパーツは怪魔界の物質から精製されてるはずだから、いくら技術力のある雄英といえども簡単に造れるとは思えないし」

「……な、何が言いたい？」

その台詞は、負けを認めたも同然だった。

「アレを雄英に提供したの——きみだよな？」

「……」

刹那、現実逃避とばかりにデスガロンはベッドに潜り込み、布団をかぶろうとする。しかし出久がそれを許すはずがなかった。

「きみだよな？」

「……………」

沈黙は金、と世の人々は言うらしいが、この少年の前でだけはそうもいかないらしい。暫しののち、デスガロンは白旗を挙げることを選んだ。

「…………頼まれたんだ、オールマイトに」

「オールマイトに？今春から雄英に教師として赴任するって話は聞いてたけど……………なんで？」

「ゴルゴム怪人やクライシスの怪魔怪人との戦闘をほぼ単独でこなしてきたアニキにとって、正直高校の入学試験などヌルい……………ましてオールマイトの個性を継承してさらに強くなっているわけだからな。早い話が試験で無双……………やりたい放題、やろうと思えばできるだろう？」

「まあ、それは否定できないけど……………」

実際、誰よりもポイントを取ったと自負できるところにまでたどり着くのは容易だった。余裕があったればこそOP敵にまで手をつけようとしたのだ。キューブリカンの出現さえなければ、それも数秒のうちで成し遂げられていたはずだ。これをやりたい放題と言わずなんとするのか。

それをあらかじめ見越され、見事に阻まれてしまった。ポイント獲得の邪魔はなかったあたり、自分に対しても公正・公平であつてはくれようだが。

悔しくないといえ嘘になるが、それは仕方ない。相手は雄英高校だ。ヒーローを志す者にとって最高の登竜門である以上、むしろそうでなくては困る。

だからまあ、それはいい。ただそのために怪魔ロボットが提供されたとなると、気がかりもある。

「残骸を分析されて製造技術を盗まれたりとか……………そういう心配はしなくていいの？」

低めた声で尋ねる出久。不慣れな者が聞けば竦みあがってしまうような迫力だ。

「…………アニキならそう言うと思って、解析されないようシステムに



ロックをかけた状態で渡したし、試験終わってすぐスクラップは回収してきた。バラせば俺の予備パーツに再利用もできるしな」

「そう……」

「しかしアニキは用心深いな。学校挙げてアニキを支援してくれていたというのに。それに、子供の頃から憧れだったんじゃないのか？」  
「……もちろん支援には感謝してるし、いまでも憧れではある。でもそれとこれとは別だよ。あれだけ大きな学校だ、末端まで見渡したとき、獅子身中の虫がいなくて保証はどこにもない」

苦虫を噛み潰したような表情で、出久はそう断言した。そうせねばならないほどの裏切りを彼は見てきたし、自らが遭ってもきた。ただそれは彼がまだ”仮面ライダーBLACK”を名乗っていた頃の話であり、デスガロンはその様を直接見聞きしたわけではない。——ただ幾度となく憧れに裏切られた当時12歳の少年の心がいかに傷ついたか、想像を絶するものであろうことはわかる。

だからそれ以上は追及もできず、「なるほどな」とうなずくほかなかった。

「ゴルゴムもクライシスも滅びたとはいえ、各地でできる臭い動きはあるからな。確かに警戒するに越したことはない、か」

「うん。僕は学生って身分上そうあちこちは嗅ぎ回れないし……外のことは頼むよ、ジョーさん」

「ああ、任せておけ」

この舎弟と話がついたところで、キッチンのほうから「ごはんよー!!」と元気な母親の声が響いてきた。

「あ……僕まだ学ランのままだ」

「そのまま食べばいいじゃないか」

「ごぼしたらやだし。着替えるから、先行っててよ」

「了解した」

首肯し立ち上がったデスガロンの身体が光に包まれ、次の瞬間には鋼のジョーを名乗る人間のそれへと変身していた。どこかうきうきした動作で部屋を出て行こうとする。というか実際にうきうきしているのだろう、いつも食卓で「やっぱり引子ママのメシは最高だぜー」

なんてのたまっているくらいだから。

そこでふと、出久の中に疑問が湧いた。

「そういえばさジョーさん」

「ん、どしたアニキ？」

「ジョーさんって人間に擬態してても中身はロボットなわけだよね？」

「ご飯食べる必要があるの？……ってか、そもそも消化できるの？」

「……それは聞かないお約束だぜ、アニキ」

合格！新たな未来へレデイ・ゴー！（後）

合格発表日はあつという間にやってきた。

「出久、雄英から何か届いてるわよ」

母がそう言っただけで持ってきたのは、雄英高校の校章が印字された小包。各種書類が入っているにしては妙な形だ。雄英というところは予測不可能なことをしてくる——試験本番で嫌というほど学習させられた以上、出久は特に首をかしげることもなくそれを受け取った。当人以上にそわそわしている佐原兄妹をなだめ、自室にこもる。

「さて、と……」

封筒を開けると、中に入っていたのは丸い装置のようなオブジェクトだった。なんだろう、これは。

少なくとも危ないものではないなそうだったので、勉強机の上に置き、試しにこれ見よがしなボタンを押してみた。すると、

『——私があゝ……投影されたア!!』

「うおッ!？」

いきなり装置から飛び降りてきたのは手のひらサイズのオールマイイト——一瞬出久は仰け反ってしまったが、よくよく考えるまでもなくバーチャル映像だ。事実、「投影された」と言っているわけであるし。

「流石雄英……こんな凝り方してくるか」

この受験生が苦笑している間に、オールマイイトはあれやこれやと忙しくしゃべっている。このお喋り好きはキャラクターを演じている部分もあるだろうが、多くは天性のものなのだろう。個性やヒーローの存在しない世界だったらラジオのパーソナリティーか何かに向いていたかもしれない。

それはそれで見てみたい、などと余計以外の何ものでもないことを考えていると、いよいよ試験結果の発表と相成った。出久はぐくりと唾を呑んだ。流石に緊張はするのだ、世紀王だろうと仮面ライダー

だろうと、根が小心者であることは変わらないのだから。

『まず筆記はなんと、満点!!流石は緑谷少年、勉強もちゃんと欠かしていなかったようだな!』

「ハハ……」

そりや多少は受験勉強もしたが……ほとんどはキングストンの恩恵だ。改良されたのは身体面ばかりではない——精神までは完全に追いつかないから、そのギャップに悩んだ時期もあったが。

『そして気になる実技は……敵ポイント、89点!当然、合格だ!!』

それを聞いて、出久の肩から力が抜けた。予想できていた点数、結果。そしてこれだけの高得点ならば——

『文句なしのトップ!!……と言いたいところなんだが……実は、同率一位がいてね』

「へっ?」

目が点になった。自分に負けないくらいやりたい放題した者がいるというのか?

『ま、まあ個人情報とかの都合上、名前は伏せるんだけどね?キミとまったく無関係な人ではないというか、近い?人というか……』

「……あつ」

オールマイトのことばで、察するには十分だった。脳裏にあの鋭い血のいろの双眸が浮かび、出久は思わず苦笑する。

(……しようがないか、手え抜いたのが悪い)

他の受験者との点数調整を意識するという余裕ぶった行動の結果、文句なし、首席合格の野望は潰えた——”敵ポイントにおいては”確かにそうだった。しかし、

『ただし!見ていたのは敵ポイントだけにあらず!もうひとつの基礎能力、それ即ちレスキュー!人助けした人間を排斥しちまうヒーロー科なんてあってたまるかって話だからね!そちらのポイントは……90点!!』

「……!」

『合計179点、ぶっちぎりの首席合格だ。おめでとう、緑谷少年!!』

「……ははっ」

思わず、笑みがこぼれた。胸がじわりと温かくなる。——敵を打ち倒す強大なパワー……それ以上に困っている人を救きたいという想いを評価してもらえたという事実が、うれしくて。

「——聞いてのとおりだよ、みんな？」

独りごちるようにそうつぶやくと、背後にあつた複数の気配が明らかに波立った。ほどなくして、扉がゆっくりと開く。顔を覗かせたのは茂に一水、響子——そして母。家に来ていれば玲子やジョーも当然のように混ざっていただろう。

「ご、ごめん出久兄ちゃん……気になっちゃって、待ちきれなくて」「さっきのつてオールマイトの声よね？廊下まで響いてくるものだから、つい……」

「だからって盗み聞きは感心しないなあ……しかも母さんまで」「ごめんね出久……フフ、」

謝罪のことばを口にしつつも、不意に笑みをこぼす引子。首を傾げる出久に対し、彼女は——

「——おめでとう、出久！」

「……！」

母のそれを皮切りに、茂が、一水が、響子が——口々に祝いのことばを投げかけてくる。誕生日という否が応にも訪れるイベント以外に、およそ聞くことはなかったそのことば。ゆえに久しく素直に受け止められていなかった祝福だったけれど。

「ありがとう……みんな」

およそ三年半ぶりに、出久は心の底からそう応えられたのであった。

なおその後、ジョーと白鳥玲子、そして取り巻きコンビも混ぜた面々によって胴上げまでされてしまったこと、アクロバッターらマシン組もそこに混ざりたがっていたこと、やはり無事合格していた飯田天哉・麗日お茶子と親睦会の名目で遊びに行った際にその件を話した

らワンモアやられてしまったことをここに記しておく。

\*

——そして日々はあつという間に過ぎ、満開の桜が咲き誇る四月。

「出久、ティッシュ持った？」

「持ったよ」

「ハンカチは？」

雄英高校の制服に身を包んだ息子に、母は慌ただしく問いかけていく。「大丈夫だって、母さん」と応え、出久は笑った。「相変わらず心配性だなあ引子ママは」なんて、隣でジョーもけらけら笑っている。彼だけでなく、仲間たちは皆見送りに出てきていた。学ラン二年目の茂とランドセル四年目の一水も一応は見送られる側のはずなのだが。「出久くん、ネクタイなんか変だよ？直したげる！」

「あー……じゃあお願い」

玲子に「不器用は治らないのよね〜」なんてからかわれながら、結び直してもらおう。以前彼女から預かったサボテンを枯らしてしまつた話まで持ち出されると、流石に反論のしようもないのだった。

「よーし、これでどうかな？」

「うん、大丈夫。ありがとう玲子さん」

「どーいたしましたっ！」

玲子によつてネクタイを整えられた出久。学ランとブレザーの違いもあるのだろうが、少し大人びて見える。ただそれも成長途上の少年の姿でしかない。

「——超カッコイイよ、出久！」

だからこそ、引子はそう告げた。憧れに裏切られ、親友と殺しあい、恩人を喪いながら世界を救わねばならなかった幼き英雄——あの頃には決して言つてあげられなかったことばを、ようやく。

「これぞ」馬子にも衣装」ってヤツだな！」

「ジョー……それ違う」

「空気読めよジョー！」

「えっ、間違ったか？すまん……」

ともあれ。整った恰好になったところで、出久はアクロバッターに跨がり、ヘルメットを被る。これまで緑谷出久の姿ではマウンテンバイクに擬態させていたが、免許もとり、バイク通学許可をとったいまではその必要もない。これからは大手を振ってこの相棒とともに駆け回ることができる。

「よろしくね、アクロバッター」

『安全運転で行クゾ』

「ハハ、そうだね」

感情そのままに噴かされるエンジン。その凜猛な音に被せるように、仲間たちの「いってらっしやい！」の声が響く。

「うん、——いってきます!!」

そして彼は、今度こそ“緑谷出久”として。ヒーローとしての道を、走り出したのだった——

つづく

クラスメイトは仮面ライダー!?! 見せつける体力測定  
(前)

午前八時前、雄英高校付近の国道。

通勤ラッシュのために渋滞する車両の群れを、巧みにすり抜けていく一騎のマシンの姿があった。それだけならさして変哲のある光景とはいえないが、行き交うドライバーや通行人たちは揃って目を奪われてしまっていた。

その理由はふたつ。第一に、マシンを操るライダーが雄英高校の制服に身を包んでいること。自由な校風が売りのかの高校は、事前に申請を出してさえいればバイク通学だろうが自家用ジェットだろうがなんでもありだが、といっても高校生の身でそれを実践する者は多くはない。

そして第二に、マシンの特徴的な様相だ。メタリックブルーを基調とした車体に、鮮やかなイエローのラインが走っている。何よりフロントカウルでは、本来あるはずのない一对の真つ赤な複眼と触覚がその存在を主張していた。そんな外見の珍妙さもさることながら、それは仮面ライダーの駆っていたマシン”アクロバッター”に酷似しているのだった。

ただ注目する人々のほとんどは、それを単なる模造品であると判断した。仮面ライダーに憧れる英雄生が、親の金で買い付けたのだろうと。

『みんな我々ヲ見テイル……ヤハリ気分ノ良イモノジヤナイナ』

「まあ、しょうがないよ。それにプロヒーローになればこれまでの比じゃなく注目を集めることになる、いまのうちから慣れておこう」

『……ワカッタ』

騎手のことばに明確に答えるそのマシン——それはまぎれもない本物のアクロバッターだった。つまりは騎手である少年こそ、本物の



仮面ライダーであるということ。

世界を二度も救った伝説の英雄はいま、その雄英高校への初登校の真っ最中なのだった。

\*

仮面ライダーこと緑谷出久が雄英高校にたどり着いたのは、それからおよそ十分後。

アクロバッターを駐輪場に置き——ついてきたがったのは言うまでもあるまい——、校舎内に入る。入試のときにも思ったのだが、

「広い……」

入学案内の校内図がなければ、ほぼ間違いなく迷子になっていた。そうなれば遅刻確定である。いつそ本当にアクロバッターで校内疾走しても——いつの時代の不良だと言われそうだが。

「えーと、A組A組……あ、あつた」

教室の扉を見上げる。これも、やたら大きい。

さて、このまま入室してもいいものだろうか。いつそここで変身して入って行って同級生となる面々を驚かせても面白い——芽生えた悪戯心でそんなしようもない思案をしていると、

「あつ、やっぱ緑谷くんだ。おーい、緑谷くん！」

「！」

振り返った出久が見たのは、こちらに駆け寄ってくる見知った少女の姿。自分と同じく雄英の制服に身を包んでいる。

「麗日さん！おはよう」

「うん、おはよー！制服カッコいいね!!」

「はは、ありがとう。麗日さんもよく似合ってるよ」

「へ!?そ、そそそそれほどでも……」

褒められたから褒め返した——もちろん本心から出たことばである——だけなのだが、目の前の少女は顔を真っ赤にしている。そこまで齒の浮くような台詞を言ったつもりはないのだが。

「そ、それよりっ！ここにいてるってことは、緑谷くんもA組？」

「うん。これからよろしくね」

「よろしくっ！にしてもアレやね、どんな人たちがクラスメイトになるんだろーねえ……」

期待に胸を膨らませつつ、ドアを引く――

「机に足をかけるな!! 雄英の先輩方や机の製作者方に申し訳ないと思わないのか!?!」

「思わねえよ！テメエどこ中だ？端役が!!」

「俺は私立聡明中学出身、飯田天哉だ！」

「聡明イ？クソエリートじゃねえか、ぶっ殺し甲斐ありそうだな！」

「ぶっ殺……!?!きみ酷いな、本当にヒーロー志望か!?!」

(で、出た……)

開幕のこれにはさすがに呆気にとられる出久なのだった。幼なじみと新たな友人、かち合ったら水と油だとは思っていたがまさか入学生前からとは。

「な、なんか怖い人おる……」

「……幼なじみです、彼」

「へー、そうなん……へえええっ!?!」

彼女の驚き方はあまりに大げさだった。まあ彼女自身にとってはナチュラルなのだろうが、いずれにせよヤンキーと優等生の相剋に固唾を呑んでいたクラスメイトたちの視線の一部がこちらに集ってくる。

騒動の中心にいた優等生こと飯田天哉も、その例外ではなかったようだ。

「ん？——おお、緑谷くんに麗日くんじゃないか、おはよう！きみたちもA組だったんだな！」

「おはよー！」

「おはよう天哉くん、これからもよろしくね」

「うむ、よろしく！」

固い握手をかわす。まだ互いに顔と名前も一致していないような面々の中で、このふたりが既に築きつつある絆は貴重なものだった。出久の正体を知っているだけあって、飯田の表情はどこか誇らしげですらある。

ふと視線をずらすと、先ほどまで狂暴な表情でこの眼鏡の少年を煽っていた幼なじみは、打って変わって懽然とした表情で机に頬杖をついている。視線は窓の外をさまよっていて、こちらを見てすらいない。

(かつちゃん……)

実は入試以来、この幼なじみとはまともに話をしていない。入試で次席だったことがわかった時点で、首席が誰なのかも察しただろうに、絡んでくることすらなかったのは予想外だった。

ただ、

「かつちゃん、おはよう」

「……はよ」

挨拶だけは、きちんと返ってくる。彼らしくない、押し殺したような声でだが。

(僕にビビってる……なわけないよな。そういう感じじゃないし、何よりかつちゃんだし)

やはりこの幼なじみの考えていることは読めない。まあ焦ることはない、これから時間はたっぷりある。

そんなことを考えていたら、不意に背後に鋭い気配を感じた。悪意の類でないこともまた瞬時に察したが、反射的に身構えてしまうのもう癖のようなもので。

ただ振り向いた先にあったものには、流石に度肝を抜かれたが。

(ね、寝袋?)

まるで芋虫のようなそれには、よく見るときちんと(?)人がくるまっていた。妙に気だるげな目つき、しかし出久ははつきりその顔を覚えていた。

(イレイザーヘッド……)

出久がブラックサン——仮面ライダーBLACKとしてゴルゴムと戦っていた頃、味方してくれていた数少ないヒーローのひとり。彼らの顔と名はすべて覚えていて、この男も例外ではなかった。

ここに現れたということは、この男がクラス担任なのだろうか。教師までプロヒーローとはさすが英雄——出久がそんなことを思うのと、男の瞳が出久を捉えるのがほぼ同時。教師であるならば、出久が仮面ライダーであることも当然知っているはず——

しかし特に言及はなく、彼は機械的ながら威圧感のある口調で生徒らに着席を促したのだった。

「ハイ、静かになるまで8秒かかりました。時間は有限、きみたちは合理性に欠くね」

「……………」

いきなりの容赦ない皮肉に、生徒の多くは鼻白むほかなかった。一般的な教師なら最初は生徒に気に入られようと気取ってみるものだが、ことこの男にそんな意志は微塵もないらしい。ぼさぼさに伸びた長髪に無精髭、黒一色の衣装——出久のように事前に面識がなければ、彼がプロヒーローだなどと誰も思うまい。

「俺は担任の相澤消太だ、よろしくね」

挨拶もそこそこに、この担任ヒーローから体操着に着替えてグラウンドに集合するよう指示される。これから入学式があるだろうに、何をするつもりなのか？皆疑問に思ったし、世紀王ではあれ神ならぬ身の出久もまた例外ではなかった。

\*

「——個性把握テストお!?!」

ひとまず諾々と体操着に着替えて出てきたA組の面々は、担任のこゝとばに揃って驚愕を露にしていた。

「いやいやいやー!」

「入学式は? ガイダンスは!?!」

「ヒーローになるならそんな悠長な行事出る時間ないよ。英雄は自由

な校風が売り文句、そしてそれは先生側もまた然り」

威圧的な雰囲気のままたくない、落ち着いた台詞。だからこそ、生徒たちは反論を封じられてしまう。ヒーローを目指すなら一分一秒でも惜しむべき——そうまとめてしまえばまったくの正論だからだ。他の生徒たちとは一線を画した経験をもつ緑谷出久もまた、頭ではそれが理解できた。

しかし意外にも言うべきか、諸手を挙げて全面支持とはいかない心情もあつて。

(今回くらいは出たかった……入学式……)

小学校の入学式こそふつうに出席できた。しかし中学校の入学式はちやうどゴルフの攻勢が激化してきた時期だったために、欠席せざるをえなかった。いや、母の要望もあつて出席するつもりではあつたのだ。真新しい学生服を身につけ自宅を出、いよいよ校舎が見えてきた——というところで事件が起き、出久は新中学一年生から仮面の英雄に変身せざるをえなくなってしまった。

高校を卒業すればそのままプロヒーロー生活に突入するのだ、入学式という行事は長い人生の中で最後になるかもしれない——しっかりと噛み締めようと思っていたのに。

肩を落とす出久。見る人が見れば落胆していると一発でわかる。相澤もそれを察したのだろう、「緑谷……」と指名をかけようとしたのを改め、別人に目を向けた。

「次席の爆豪」

「……！」

指名された勝己は一瞬かつと目を見開いたが、意外にも食つてかかることなく諾々と従った。出久がはつと顔を上げたときにはもう勝己は前に出ていて、その表情を窺い知ることができなかった。

「中学の時、ソフトボール投げ何メートルだった？」

「……67メートル」

「じゃあ個性を使ってやってみろ。円から出なけりや何してもいい」

指示を受けた勝己の行動は素早く、また躊躇がなかった。円の中に入り、ボールを投げる。そこまでは従来の体力テストとなんら変わり

なかった。——そこに彼の個性である”爆破”が加わる。「死ねえ!!」という罵声のおまけつきで。

ただそれだけのことで、ボールは天高く、遙か彼方まで消え去った。相澤の手に握られた測定器には、四桁へ及ぶ数値が表示されている。

「1キロ越えてんじゃん! スゲー!!」

「なんだこれスゲー面白そう!」

「個性思いつきり使えるとかさすがヒーロー科!!」

その気持ちはわからないでもない出久だったが、先生の表情がにわかにな鋭くなったことに気づいてこれはまずいと思った。嫌な予感がある、直接自分の災難になるかは別としても。

「面白そう……か。ヒーローになるための三年間、そんな腹積もりで過ごす気でのいるのか?」

「よし、こうしよう」

いたずらを思いついた幼児おきなこのような表情で、彼は言い放った。

「トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し——除籍処分としよう」

一瞬、一同がフリーズし——

「——はあああああ!?!」

驚愕と抗議の入り交じった声が響き渡る。流石に出久はそこまでの反応は示さなかったものの、苦笑は禁じえなかった。雄英ヒーロー科、初日から容赦がない。その点だけはゴルゴムやクライシス顔負けだ。

「雄英の売りは自由な校風、それは教師も例に漏れず。生徒の如何は先生の自由だ」

「だからって、最下位除籍って……!」

「入学初日ですよ!?!いや初日じゃなくても理不尽すぎる!!」

「自然災害、大事故、身勝手な敵達……いっどこから来るか分からない厄災、日本は理不尽にまみれている。そういう理不尽を覆していくのがヒーローだ。放課後マックで談笑したかったならお生憎、これから三年間、雄英は全力で君たちに苦難を与え続ける」

”Plus Ultra”——全力で乗り越えて来い」

唾然とする生徒たち。ただひとり、彼らめがけて堂々と声を張り上げた少年がいた。

「やってやろうよ、みんな！」

「！」

皆の視線が、一様に注がれる。声の主——緑谷出久へ。

「僕らはみんな、あの試験を乗り越えて選ばれた20人なんだ。全力投球、いま僕らにできることをする。それでいいんだ」

この、面々の中では比較的小柄で、冴えない風貌の少年。しかしそのことばひとつひとつには、どうしてか計り知れない説得力があった。首席合格者だから？いやそれだけならむしろ、安全圏にいるから余裕ぶっていると、反発する者も現れたかもしれない。

だから、それだけではないのだ。ほとんどの人間が知るよしもないが、彼には「初日でいきなり除籍」などお話にならない苛酷な運命を乗り越えてきた経験がある。——仮面ライダーとして。

「……お、おう。そうだよな！」真つ赤な髪を尖らせた少年が真つ先にくなずく。「やるっきやねえよな！」

「うむ！頑張ろうじゃないか、みんな！」

飯田が乗り、次いで麗日が。——やがてほとんど全員に、波及していく。

「……………」

ただ出久の過去を一番よく知っているはずの——当人から包み隠さずすべてを打ち明けられた——爆豪勝己だけは、日常の憤懣とも異なる、どこか苦々しげな表情で出久を見つめていたのだけけれど。

クラスメイトは仮面ライダー!? 見せつける体力測定  
(後)

体力測定がはじまった。

まずは50m走。オーソドックスすぎると言っても差し支えないが、一応はこの体力測定、文部科学省の定めたとおりの種目を網羅しているのだ——ただ、個性の使用が許可されたというだけで。

一同、己の個性を活用することで文字どおり常人離れしたタイムを叩き出していく……と、思いきや。

「……やっぱり、個人差はあるなあ」

独りぽつんとつぶやく出久。ここにいる面々は皆、程度の差はあれ強力な個性をもっている。しかし”走る”という限定されたアクションに対して役に立つかはまた別の話。たとえば爆豪勝己が爆破の勢いでスピードを上げることができると、先ほど真っ先に同調してくれた赤髪の少年——切島と言いたい——などは、”硬化”とは相性が悪い”と言って忸怩たる表情でふつうに走っていた。

さて、自分はどうすべきか。ただ首位を確保するだけなら、もともとの身体能力にワン・フォー・オール”フルカウル”だけでも事足りるだろうが。

(いや……入試のときとはわけが違うんだ。ここはちゃんと示しておくべきだよな、”僕が来た”ってことを)

それは自分自身にとっても、クラスメイトたちにも必要なことであると思つた。彼らと竹馬の友たることを望むのならば。

「緑谷くん」

「!」

決意を固めている出久に声をかけてきたのは、同じグループで走ることになった飯田だった。

「きみの規格外っぷりは存じているつもりだ。……悔しいが、全体の順位できみの上に立とうとは、現時点では思わない」

「だが!」と、わずかに声のトーンが上がる。



「俺の個性は”エンジン”、走力なら誰にも負けない自信がある！この勝負、勝ってみせるぞ!!」

「天哉くん……」

なるほど飯田は、本気で自分と渡り合うつもりのようなのだ。それはいい。正体を知ってなお、気後れせず対等に競争を申し込む。そういう友人が初日以前からできたことは、これ以上ない幸運だと思った。

「次」——担任の指示で、いよいよ出久を含んだグループがスタートラインに並び立つ。皆の視線が、いつの間にか自分に集中していくのがわかる。首席というだけで十分注目には値するのだろう。逆の立場なら、自分だってそうしている。

(僕はこの中でNo. 1でいればいいわけじゃない。仮面ライダーとして、世界を変える)

(そのためにいま、僕のすべきことを)

すう、とひと呼吸した出久は——変身の構えをとった。右腕をまっすぐ天めがけて伸ばし、太陽を掴むように手に力を込め……おもむろに、振り下ろしていく。

「変……」

ざわめきが、耳を撫ぜる。

「……身ッ!!」

出久の翠の瞳が赤く染まり、同時に、宿ったキングストーンが体表にベルト状の”サンライザー”を顕現させる。煌めきと火花とが激しく飛び散りながら、出久の身体を世紀王……それすらも超越した、”超・世紀王”へと変身させていく。

そうして変身前の少年の面影など微塵ももたない、緑と黒に彩られた異形の英雄がヒーロー養成校のグラウンドに顕現した。ボディの暗い色合いに反して、バッタを模した複眼だけは爛々と赤い輝きを放っている。

声を置き去りにした空間を切り裂くように、彼は勇ましく名乗りをあげた。

「僕は太陽の子——仮面ライダーBLACK……RXツ!!」

「は……」

「はあああああツ!」

呆気にとられていた生徒たちが、ようやく人生最大級の驚愕の声をあげたのだった。

「かつ、仮面ライダーアアアア!!」

「な、なんで仮面ライダーがここに……」

「そういえば入試のときにもいたよね!」

「いや本物じゃないんじゃない? ……? 姿をコピーするとかそういう個性だろ常識的に考えて」

「あ、そっか!」

「いやでもあの子、マジモンの首席だし……」

本物かただの模倣なのか——生徒たちの不毛な議論に終止符を打ったのは、ひとりの少年だった。

「ウダウダうるせえんだよ。……あいつは、本物だ」

その確信のこもったことばに、一同は波を打ったように静まり返った。開幕から飯田と言いつ争っていた——口汚く罵っていた——ヒーロー志望とは思えない態度の少年の何かを押し殺したような声音に、彼らは何もいえない。この少年が何を思っているのかなんて、まだ一時間にもならない付き合いの同級生たちにわかるはずがなかった。

ただひとり、例外となった少女がいた。

「えっと……爆豪くん、だったよね?」

「……んだ丸顔」

「初会話でそんなあだ名?! キミマジで性格ヤバいな……」

「ア、ア!!? テメエ喧嘩売つとんのか!? 上等だわ、テメエもあのクソメガネもろともブツ潰したらあ」

「う、うわー……」

ヴィラン顔負けの態度に引きつつも、お茶子はこの少年とのコミュニケーションをあきらめざるつもりはなかった。出久が仮面ライダーだと予め知っていた、幼なじみの少年。

「キミ、緑谷くんの幼なじみやって聞いたけど……あの子が仮面ライ

ダーなんも、やっぱり昔から知ってたん？」

幼なじみだというなら、彼が繰り広げてきた死闘の一部始終も見届けているのだろうか？そう思っただが、勝己は一瞬瞳を歪めたあと、静かにかぶりを振った。

「知ったんは……俺も、最近だ」

「あ……そうなんや」

「……………」

それきり勝己は口をつぐんだ。何か他人には、およそ語りえぬ思いを抱いている——それだけはわかったけれど、流石に口に出して問い詰めることはできなかつた。自分たちはまだ成り行きでなつたクラスメイトというだけで、仲間とも友人とも言いがたい。思いやることすら、許されまい。

そうこうしているうちに、いよいよ仮面ライダーを含む一団にスタートの時が迫っていた。

「はい、じゃあ位置について」

おもむろに姿勢を低くしていく面々。仮面ライダーもまた例外ではない。異形型もいるとはいえ皆が体操服姿である中で、その姿は否が応にも目立つ。目立つに決まっている——

「用意——」

ピ、と笛が吹かれる。さあいよいよスタートだと彼らが駆け出そうとしたとき、

RXはもう、ゴール地点にいた。

「……………は？」

「え？」

皆、呆気にとられていた。だってそうだろう、目を離してもいない隙に、気づけば彼の姿がそっくりスライドしていたのだ。ただその間のルートに、大量の砂塵が舞い上がっている。

「……………小数点第三位まで表示されるやつにしといて正解だったな」

「ほそつとつぶやく相澤。」0秒001——それが仮面ライダーこと緑谷出久の記録だった。

「おい」と相澤が声をかけると、他の走者たちも慌てて走り出す。彼らのタイムは総じて遅いものとなってしまったが、この担任教師はまったく温情をかけてくれなかった。2メートル近い巨漢のRXはというと、申し訳なさそうに身を縮こまらせていたのだが。

\*

その後。

RXこと緑谷出久は、すべての種目で信じられないような記録を叩き出した。握力測定では測定器をぶっ壊し、長座体前屈ではバイオライダーに変身して腰だけ液体化させ、無限に伸びていくという離れ業を見せつけ、挙げ句の果てにソフトボール投げでは大気圏でボールを燃え尽きさせた。これらの記録は——”∞”。ソフトボール投げで唯一”無重力”の個性をもつ麗日お茶子が同率に並んだ以外、ぶつちぎりの一位に決まっている。他は回数を競うものが主だったため明確な記録が出たが、それも二位以下を大きく引き離すものであった。「す、すげえ……」

「俺たち、あんなバケモノと一緒にやってくのかよ……?」

もはや「仮面ライダーがなぜ英雄に?」という疑問すら吹っ飛んでしまうほど、新入生一同はこの同級生を畏怖し、戦慄していた。ライダーがもとの少年の姿に戻っても反応は変わらない。出久は苦笑した。ただ彼らの瞳には世界を二度救った仮面ライダーへの憧憬も少なからず含まれていて、今後彼らと良好な関係を築ける余地はあるのだとも思えた。

——そして、測定終了。

「終わった……オイラの青春は終わった……」

最下位になってしまった葡萄頭の少年——峰田実というらしい——が崩れ落ちている。彼単体でみればさほど悪くない記録を出して

いたのだが、この面々の中ではどうにも凡庸なのだった。  
そんな彼に一瞥もくれず、担任ヒーローは冷たく引導を渡す――

「ちなみに除籍は嘘だ」

「!!?」

峰田を筆頭に、ほとんどの面々が目を剥く。

「う、嘘って……」

「きみらの最大限を引き出すための合理的虚偽」

いけしやあしやあと言つてのけるものだと思つた。合理的虚偽ということばこそ虚偽なのだ、彼は知っていた。なにせこの教師は昨年、ひとつのクラス全員を除籍にしている。それを知らないらしい女子生徒――八百万百などは、「あんなのウソに決まっていますわ」と断言しているが。

終了宣言を出して、相澤はそそくさと帰っていった。時間的に、あとはもうホームルームだけだろう。入学式はもう終わってしまったんだろうな……ふとそのことを思い返して、ちよっぴり切なくなる出久であつた。

と、

「な、なあ……仮面ライダー?」

「!」

おずおずと話しかけてきたのは、かの赤髪の少年。彼だけではない、他のクラスメイトの大多数も、出久のもとに集まりつつある。

「お、俺……ずっとあんたの戦い見ててっ、すげえ、漢らしいって思ってたんだ!入試るときも!」

「え、あ、ありがとう……」

”カッコいい”や”すごい”は少し言われ慣れてきたが――照れないとは言っていない――、”漢らしい”は初めてだった。なんとか笑顔をつくるが、ひとりでに頬に熱が集まってしまう。

「昔の戦いのこと、色々聞かせてくれよ!」

「ってか、なんで雄英通うことにしたの!?!」

「やべえよやべえよ……」

「ア、ハハ……みんながよかつたら放課後に話すからさ、いったん教室に戻らない？ ホームルーム遅れたら、また除籍なんて話が出てくるかもよ？」

ふつうなら大袈裟にも程があることばだが、クラスメイトたちには実感をもつて響いたようだった。「彼の言うとおりだ、速やかに着替えを済ませて教室へ戻ろう！」という飯田の適切極まりない指示もあつて、皆がばらばらと帰りだす。ひとまずほっとしつつ、出久は考えた。

（さすがに信彦くんのこととか、世紀王がどうかは話せないよな……まだ）

彼らにそれを話せる日が来るかは、まだわからない。これから重ねていく日々が決めることだろう。——ただ、すべてを打ち明けて、それでも仲間だと言ってもらえる自分でありたいと思った。

「——おい」

「！」

皆に続いて教室へ戻ろうとした出久の前に立ち塞がったのは、この中では唯一、既にすべてを知る少年だった。

「……かつちゃん」

「ツラ貸せや」——瞳に烈しい感情をにじませて、勝己はそう言った。もはや彼に対し、幼少期のような恐怖は感じない。ただそれでも、どうしてか拒否はできないと思ってしまった。

\*

人気がない校舎の陰へ、ずんずんと独りよがりに歩き続ける勝己。色々思うところはあつたけれど、出久は黙ってそのあとをついていく。

ただ、限界はあるわけで。

「あの……かつちゃん、」

「……………」

「早く戻らないと、先生が……」

返答はない。心中でため息をつきたい気持ちになっていると、不意に勝己が立ち止まった。

そして——いきなり、胸ぐらを掴んできたのだ。

「ツ、ちよつ……いきなりどうしたんだよ、かつちゃん……?」

漠然と予期はしていた出久だったが、あえてかわすことはしなかった。それが余計に、勝己の眉間の皺を色濃くしているらしかったが。

「……テメエ、どういうことだ」

唸るような声。シンプルすぎるがゆえに複雑で、さすがの出久も瞬時には理解できなかった。

「どういうことって、何が……?」

「トボけんじゃねえツ、さっきのアレは一体なんなんだよ!?アレが本気だつーなら、入試で俺と敵Pが同点だったのはどういうことなんだ、ア、ア!」

「!」

そういうことか。——勝己は出久が規格外の力を見せつけたことに怒っているのではない。強大すぎる力が、入試での成績に伴っていない——つまり出久が手加減をしたのだと、既に看破しているのだ。

敵Pが同点、しかしながら救助Pで大きく水を開けられる。そんな結果に何も言わなかった勝己が、手加減の事実を知った途端に久しく見たことのない強烈な憤懣を露にしている。正直出久は困惑したが、捨て置くこともできなかった。

「……確かに、入試ではある程度手心を加えたのは事実だよ。けど、試験の形態がポイントの奪い合いであった以上、ああするしかなかったんだ」

「何、言ってるやがる……!」

「聞いて。もしも僕がああの会場の仮想敵を全滅させたとするよね。同じ会場で受験していた麗日さんや天哉くんたちはポイントをとれず、当然脱落する……本来なら、雄英で学ぶだけの素養がある人たちなのに」

彼女らが不合格になり雄英で学ぶ道を閉ざされる代わりに、本来不

合格になるべき者たちが試験をパスしてしまう。その者たちにヒーローたる資格がないなどは思わないが——そもそも英雄は最高峰であつて、他にもヒーロー科のある学校はたくさんある——、果たして相澤先生のお眼鏡にかなつたかどうか。

「一番嫌なのは、さっきのテストで除籍になる人が出る事だつた。……僕は、ひとりでも多く仲間が欲しいんだ。僕の、夢のために」

出久の夢——ヒーローの、必要ない世界。果てしなく遠いその夢のために、まずはともに歩める仲間たちを求め。孤独ほど重くのしかかる荷物はないと、この少年はよく知っているから。

「だから、かつちゃん——」

出久が何か言いかけた瞬間、胸ぐらを掴む手が唐突に離れた。そのため、続くことばは呑み込まれてしまった。

「かつちゃん……？」

「……………」

踵を返し、

「……………もういいわ」

「え……………」

そのまますたすたと歩き去っていく勝己。ずっと見つめ続けてきたはずの背中。それがまるで、知らないもののように出久には思われた。

——もう一度ちゃんと話をしたい。ホームルームの際もそう思つて彼の背中に視線をぶつけていたが、結局声をかけることすらかなわなかつた。放課の途端に出久はクラスメイトたちに囲まれてしまったのだ。出久のことばどおりに。

向けられる剥き出しの憧憬は、ひどくこそばゆくもあり、同時に胸を熱くさせた。自分の戦いは間違いなく未来につながるものだったと、そう思えた。

だから考えもしなかつた。独り去る勝己の真っ赤な瞳が、淀んだ深



淵のように沈んでいたことを。——この傲慢で横暴な天才少年も、こんな表情が浮かべるのだということ。

つづく

## 超・世紀王 V S かつちゃん（前）

夜の緑谷家は、わいわいと実に賑やかである。緑谷引子・出久の母子に的場響子、佐原茂・一水の兄妹。そして常住しているわけではないが、半ば一家の一員と化している白鳥玲子に、鋼のジョーことデスクガロン。一緒に食卓を囲んでいるわけではないが、ガレージではアクロバッター、ライドロン、ロードセクターの乗り物トリオが楽しく過ごしている。彼らも含めればそれはもう大所帯である。秋月家、佐原家と受け継がれてきたこの邸宅は、彼らとの哀しい別れを経てもなお賑々しく使用されているのだった。

——閑話休題。

さて、家長というべき引子の息子でありながら、仮面ライダーであるがゆえに実質ライダーである出久はというと、夕食のあとは早々にガレージに逃げ込んでいた。

「ハア……学校でも家でも質問攻め……しんどい……」

ライドロンに寄りかかり、深々とため息をつく。主の精神的な疲労を車体越しに感じて、宿ったクジラ怪人の魂が心配そうな声をあげた。

『雄英高校とやらは、しんどい所だったのか？ライダー……』

「あ、いや、そんなことはないよ。すごく楽しかったけど、緑谷出久として注目されるのはね……やっぱり、慣れないというか」

そう、慣れないだけで、嫌なわけでは決してない。崇め奉られるのを望んでいるわけではないが、敬遠されるよりはずっといい——そういうクラスメイトもいるようではあるが——。

ただ、

「かつちゃんのことは、気になるんだよな……」

『かつちゃん？……ああ、あの傍若無人な幼なじみか』

「傍若無人って……否定はできませんけども」

伝聞でしか彼のの人となりを知らないために、「ことあるごとに出久をいじめていた」というどうしようもない事実が印象として強いのだろう、心なしか忌々しげな声を発するライドロン。なんでそんな奴の

ことをいちいち気にするんだという、出久への非難めいた感情もにじんでいて。

出久が苦笑していると、アクロバッターが口を挟んだ。

『浅イナ、ライドロン。アノ子供ハ確カニ鼻ニツクガ、ソレダケジャナイゾ』

『何?』

目配せするアクロバッター。それを受けた出久もふふ、と微笑む。後追いで仲間になったライドロンたちは知らない、彼らふたりだけが共有する思い出。その中身については、いずれ語る日も来よう。

ともかく、

「いい人とか、イヤな人とか……それだけで他人を括れたなら、きつととても簡単なんだろうね。この世界は」

そうつぶやいて、出久は寂しそうに微笑む。それは童顔からは想像もつかないほど、大人びた表情だった。

\*

雄英高校ヒーロー科は、二日目にして早くも通常授業に移行していた。

ヒーロー科といえどあくまで学校、数学や英語といったごく一般的な教科についてもカリキュラムに組み込まれている。特殊な点を挙げるとすれば、担当教員もことごとくプロヒーローであること——英語担当はプレゼントマイクだった——、そして学力においてもトップクラスであるだけに、初回から高度な内容の授業が展開されることか。

一部の生徒はへろへろになっているようだったが、少なくとも緑谷出久にとつては難儀するようなものではなかった。地頭の良さもあるが、何よりキングストーンの影響が大きい。

(ずるいよなあ)

我ながら、そんなことを思う。さまざまな知識を極めて効率的に吸収できるのだからこれほどいいことはないのだろうか……それも創

世王として世界、果ては全宇宙を支配するために与えられた能力なのだと思うと、忌むべきものでしかなくなってしまう。

ともあれ、座学に追われる午前中はあつという間に終了し、昼休み。超超人モス校である英雄の食堂は、それこそショッピングモールのワンフロアぶんほどの広さを誇る。

いや、真に誇るべきは広さなどではない。安価な値段に不釣り合いにもほどがある、食事の美味なこと。それらを提供するのがクックヒーロー・ランチャラッシュだと知って、出久は合点が行った。食堂にまでヒーローとはさすが英雄高校、とことん徹底している。

「いやしかし、きみは頭脳も明晰なのだな！」

習慣のごとく同席することになった飯田天哉が声をあげる。がやがやと騒がしい食堂内とはいえ彼の淀みない声はよく響く。出久は身を縮こまらせた。

「天哉くん……声が大きい」

「ムッ、これはすまない！だがきみへの敬意と、わずかばかり羨望の感情がどうしても湧きたってしまつて……」

「——わずかどころじゃないよう！」

飯田に負けず劣らず大きな声をあげたのは、やはりすっかり良い友人関係を確立している麗日お茶子だった。

「こちとら初回から内容難しすぎて四苦八苦しとつたのに……。きみ指名されてもすらすら答えてて、超余裕って感じだったんだもん！どうしたらそんな頭よくなれるん……？」

「い、いやあ……アハハ」

出久は曖昧に笑って誤魔化すほかなかつた。まさか「キングストーン埋め込まれて改造されるといいよ」とは口が裂けても言えまい。

「その”個性”といい……驕らない性格といい、完全無欠だなきみは。まさしくヒーローになるために生まれてきたと言つても過言ではないな！」

「いや……そんなことは——」

「ふざけたことぬかすな!!」

にわかには、怒声が響き渡った。先ほどまでの飯田の角張った声など比較にならない、爆弾が爆ぜたかのような大声。ざわめきは今度こそ容易く打ち破られ、水を打ったような静けさが広がっていく。

その同心円を中心に立ち尽くす男は……真っ赤な瞳に殺意すら滲ませて、出久たちを睨みつけていた。

「かつ、ちゃん……」

出久の困ったような表情を目の当たりにして、爆豪勝己の苛立ちはさらにまざまざと露になっていく。

彼らが少し複雑な関係の幼なじみだと察しているお茶子はまだしも、面識があることすら知らない飯田はなおさら当惑したのだが、勝己の次なる暴言によってそれは容易く怒りへと塗り変わった。

「そいつはなア！グズでノロマで、ひとりじゃなんもできねー木偶の坊なんだ!!それがヒーローになるために生まれてきた?ぎげんな、こんな奴は天地がひっくり返ってもヒーローになっちゃいけないんだよ!!何も知らねえくせに、わかったような口きくんじゃねえツ!!」

「ツー」

まなじりを吊り上げた飯田が、椅子を蹴るようにして立ち上がった。

「貴様……今すぐ床に手をつけて、彼に謝れ!!」

「ちよっ……飯田くん!」

まだ戸惑いのほうが強いお茶子の声は、飯田には届かない。拳を血がにじむほどに握りしめ、勝己を射殺さんばかりに睨みつけている。そのような、戦場にも等しい一触即発の状況の中で、当事者も当事者たる緑谷出久はというと――

（こ、これはままずいぞ……）

切実にそう思った。自分がどうこうではなく、目の前で睨みあっているふたりの少年を慮って。

このまま言い争いを続けているだけでもままずいが、万が一実力行使ともなれば大変だ。あの担任ヒーローの逆鱗に触れ、揃って除籍にさ

れかねない。

一計を案じた出久は、お茶子以上に張り上げた声で、飯田の名を呼んだ。

「待って！——僕に、話をさせてほしい」

「緑谷くん……！いや、しかし……」

「お願いだ、天哉くん」

「……ッ、」

出久の冷静な振る舞いを前に、飯田の頭も急速に冷えた。いかに義憤といえど、公衆の面前で感情のままに激昂するのは正しい行為ではない。

己を恥じて引き下がった飯田と入れ替わるように、出久は幼なじみの面前に進み出た。自分よりわずかに高い位置にある顔を、まっすぐに見上げる。

「……かつちゃん、きみに対して嘘や誤魔化しはもうやめるって決めたんだ。だから正直に言うけど……」

「——ごめん。いまのきみが何を考えているのか……僕には、わからない」

「……ッ、」

勝己の眉間の皺がますます色濃くなり、表情そのものがぐしやりと歪む。それは怒りというより、むしろ——

「だからかつちゃん、僕は……僕は、きみと——」

きみの気持ちを理解できるまで、ちゃんと話したい——そんな思いを率直にぶつけようとしたのだけれど、まるでそれを拒絶するかのごとく勝己は背を向けた。

「あ……かつちゃん、待って！」

「うるせえッ、ついて来んな!!」

振り向くこともしないまま怒鳴り散らして、唾然と立ち尽くす生徒たちを突き飛ばすようにして去っていく。出久はそれ以上……あとを、追えなかった。

「ッ、なんなんだあの男は!!」飯田がたまらず吐き捨てる。「まさかあ



昼休みが終われば、午後に待っているのはいよいよと言わなければならない。ヒーロー基礎学。ヒーローのなんたるかについて実践を交え、徹底的に学ぶ——そんな授業らしいが、今日具体的に何をやるかについては未だ知らされていない。

教室に揃った20名のうち、ほとんどは緊張と高揚を露にしている。その中であつて緑谷出久は、静かな面持ちで授業開始を待っていた。

経験を積むために授業を受ける——それが本来の趣旨なのだが——クラスメイトたちとは異なり、既に培ってきた並みのプロヒーローを凌ぐ経験をどれだけ活かせるか、そしていち生徒の立場であつて、学友となつた彼らに何をどこまで伝えられるか……圧倒的な力を手にしているだけ、自分には多くのものが求められている。

拳を握りつつ……ふと、前方の背姿が目に入った。自分がいま、彼に対してどう接することが正しいのか……そこまで思考が追いつかない。彼にこれまでにないほど拒絶されている以上は、尚更。

(いまはただ、未来のためにできることをするしかない)

——と、なんの前触れもなく、教室前方のドアが勢いよく開かれた。「わーたーしーがー!!」

「普通にドアから来たア!!」

オールマイトの登場に、教室中から感嘆の声が漏れる。唯一彼と共闘経験のある出久も、そのコスチューム姿には内心の高揚を抑えられないくらいだ。

(やっぱり、かっこいいなあ……)

個性を受け継いだにせよ、自分にはもう目指せない姿。しかしそれでも、その志は継いでみせる——

頭脳が強化されている弊害か、出久はどうしても先走つて物事を考えてしまう悪癖があつた。唯一対等な同志と言つてもいい生徒が、唯一まともに話を聞いてくれない……内心しょんぼりしながら、



オールマイトはヒーロー基礎学について、ならびに今回は戦闘訓練を行うこと、各自が予め申請したヒーローコスチュームの着用を許可することなどを説明した。その辺りは流石に出久も耳に入れていたが。「着替えたら順次グラウンドβに集まるんだ！」

「それではな！」と、入室と変わらぬ威勢の良さで堂々退室していくNo.1ヒーロー。彼の視線が一瞬出久を捉える。それを受け止め、力強くうなづく。オールマイトと自分の理想——その第一歩をとものに築いてみせる、必ず。

そして、

(僕の、コスチューム……)

——以前は、必要ないと思っていた。どんな恰好をしていようが、変身してしまえばバッタ男の肉体の上からネオ・リプラスフォームを纏った異形の姿になるのだ。最低限の動きやすさが担保された服装ならなんでもいい、ただひとつ、あれさえあれば……そう思っていたけれど。

だが仲間たちが、口を揃えて言うのだ。コスチュームは必要だ。緑谷出久がヒーローとして歩み出す——そのために。

(けれど今さら、どんなコスチュームを着れば”緑谷出久”がヒーローになれるのか……僕にはわからなかった)

幼い頃からあれこれと考案してきたのは、どれもオールマイトを意識したものばかり。かつての自分はオールマイトそのものを志向していたけれど、”平和の象徴”と”仮面ライダー”——目指すものが違う以上は……。

そんな思いから出久が四六時中懊悩に懊悩を重ねていた折、母がどこからか買ってきたのは——

\*

10分後。A組の面々は、オールマイトの指示どおりそれぞれの申請したコスチュームを纏い、グラウンドβに集っていた。平服に近い

ものから、鎧のように全身を覆い尽くしたもので、デザインは千差万別。

——緑谷出久もまた、その輪に一步を踏み出した。

「さあ始めようか、有精卵どもー」

オールマイトの挑戦的な声が高らかに響く。応えて出久は、童顔に似合わぬ不敵な笑みを浮かべていた。

纏う戦闘服は——漆黒のライダースーツ。仮面ライダーとしての戦いを間近で支えてくれた母が、選んでくれたもの。

そして指先の露になったレザーグローブは平時から愛用しているものであり……何より、親友の形見だった。

(見ている、信彦くん)

(僕は負けない。この戦闘訓練にも……そして、どんな未来にも)

だから、全力で勝ちに行く。

——たとえ相対する敵が、紅い瞳を伏せたままの幼なじみであるとしても。

## 超・世紀王 V S かつちゃん（後）

いよいよ始まる戦闘訓練。入試の時と同じ市街演習を行うという大方の予想を裏切つて、オールマイトが告げたのは屋内での対人戦闘訓練だった。

「ヴィラン退治は屋外で見られる事が多いが……統計で言えば、屋内のほうが凶悪ヴィラン出現率は高いんだ！」

「真に賢しいやつは室内：闇に潜む！」そこでオールマイトは声を低め、「きみたちも知っているだろう……あの暗黒結社ゴルゴムも、まさしくそんな存在だった」

「!!」

皆がはつとする。中には非常に苦々しい表情を浮かべる者も。ゴルゴムが表裏の権力者たちを支配下に置き、多くのヒーローたちまでもが見て見ぬふりをしていたことは既に世間の知るところとなっている。極めつけは出久——仮面ライダーBLACKが一度死に追いやられたあとの日本侵略。自分が助かるためにゴルゴムに取り入り、平気で他人を踏みにする人々。それらの光景は、子供たちの心に大きな楔を打ち込んだのだ。

その裏切りに最も傷つけられた少年が、口を開く。

「だからこそ僕らは戦わなくちゃならないんだ。ゴルゴムのような奴らを、もう二度と生み出さないために。そしてそんな奴らに、いままなお苦しめられている人々を救けるために」

「!」

「……ですよね、オールマイト?」

傷つきながらも英雄として戦い抜いた少年の問いかけに、オールマイトは力強くうなずいた。

「緑谷少年の言うとおりだ。だがその途は果てしなく遠く、険しい」低めた声をここで元に戻し、「千里の道も一歩から、だ!というわけできみたちにはこれからヒーロー組とヴィラン組に分かれ、2 v s 2の屋内戦を行ってもらおう!」

2 v s 2——デスガロンと組んで、怪魔怪人・幹部のペアと戦うこ

となどはしばしばあったなあ。……などと、出久はまた昔のことを回想してしまった。あの頃は若かったなどの台詞も付け加えればもう、歴戦を通り越してただの老人だなどと言ってはいけない。心は正真正銘の15歳である。

——閑話休題。

その頃オールマイトは生徒たちからの質問攻めに聖徳太子の苦労を思っていたのだが、どうにか軌道修正を図っているところだった。「で、では状況設定の説明だ！——ヴィランがアジトに核兵器を保有し、ヒーローはそれを処理しようとしている！」

ヒーロー側の勝利条件は、制限時間以内にヴィランを捕獲するか核兵器を確保すること。ヴィラン側はその逆で、核兵器を守りきるかヒーローを捕らえて無力化すること。実にシンプルでわかりやすい——初回であることを鑑みれば、そんなものなのだろうか。

そして、コンビ及び対戦相手の選定方法はというと——

「くじだツ!!」

「適当なのですか!?!」

オールマイトがくじの入った箱を取り出す。入学早々でまだ人間関係も出来上がっていない以上、順当ではあるのだが……よくも悪くも四角四面な飯田には受け入れがたいものがあるらしかった。

そこで、クラス一地味な風貌ながらクラス一の存在感を誇る出久が口出しする。

「実際の現場では状況によって、人間関係・個性の相性にかかわらず即席でチームアップしなきゃならないことも多々ある。そういう意味では、一見適当っぽいくじ引きも訓練としては合理的じゃないかな？」

「ー、なるほどそういうことか……。実戦経験のあるきみが言うと言われ力があんな！」

飯田を代表として、クラスメイトの過半数がきらきらした視線を向けてくる。出久はたまらず口をムズムズさせた。実戦経験が嫌というほどあるのは事実だが、ヒーローと組んで戦ったことはさほど多くはない。いまの発言はどちらかというと、幼なじみの言うところの”

クソナード”の部分によるものである。

またしても出久にしてやられてしまったオールマイトのテンションはこのとき下降の一途を辿っていたのだが、ともあれ一同を納得させるには至った。

皆が順々にクジを引いていく。出久はあえて最後を選んだ。”残りものには福がある”という諺を信じたわけではなく……そうすべきではないかという気がしたのだ。あるいは、キングストーンのお告げかもしれない――

――そして、チームメイトとなったのは。

「一緒だね、よろしく！」

「こちらこそ、――麗日さん」

本当はがっちり握手でもかわしたいところだったが、相手はまだ親しくなりはじめたばかりの異性である。周囲に離したてられでもしたら申し訳ないと思つて、力強い笑みを浮かべてみせるだけにとどめた。それでも顔を真っ赤にしたお茶子にぱつと顔を逸らされてしまったのは流石に解せなかったが――弟分たちが見ていたらまた離したてられそうである――。

(そういえば……かっちゃんとは誰と組んだんだろう?)

ふとそんなことが気になって、幼なじみの姿を探す。自分含めて20名しかいないクラス、しかも制服や体操服でなくひとりひとりが別々のコスチュームを纏っているから、その姿はすぐ発見できた。

黒を基調とした袖のない衣装に、手榴弾をモチーフとしたのだらう巨大な籠手。目を覆う覆面から飛び出したトサカのようなパーツが彼の自己顕示欲を象徴しているかのようだ。――ただその瞳は、相変わらず伏せられたままで。

それを目の当たりにしてしまった出久の気持ちはほんの少しだけ沈みかけたのだが、そんな勝己にずんずん歩み寄っていく大柄な少年の姿を認めて、思わず「へあ、」と素っ頓狂な声を漏らしてしまった。

(ま、まさか、かっちゃんと組んだのって……)

と、そのときだった。

「では第一回戦のカードを発表しよう！——ヒーローチーム緑谷少年  
&麗日少女！」

「！」

「……vsヴィランチーム、飯田少年&爆豪少年だア!!」

「!？」

ぎよつとする出久。周囲もぎわつき出すけれど、それはファースト  
バトルでよりによって”仮面ライダー”が選出されたこと及び自分  
たちが当たらずに済んだことに対する安堵から来るものだろう、出久  
とはまったく異なる所感である。

(ま、マジでかオールマイト……)

対話の前に、よもや拳を交えることになろうとは。

自分たちの関係の歪みがより深刻なものになりつつあることを、あ  
るいはこの昼休みの間にも聞きつけたのだろうか。だとしたらと  
んだ地獄耳だと、憧れのNo.1ヒーローに対しやや失敬な思いを抱  
く出久だった。

\*

飯田天哉の心は昂りの極みにあった。雄英高校二日目にしていき  
なりの実践訓練——組まされた相手はよりにもよってヴィラン並み  
に敵視している男で、そんな彼とともに対決することになった相手  
が、入学して初めてできた友人ふたり……それはまあ結構であるにし  
ても、片割れはかの仮面ライダーである。いまの自分の実力で良い勝  
負ができるだなどと、驕った考えをもてるはずもない。

だとしてもだ。ヒーローを志す者として、それが敗北をよしとする  
理由とはならない。自分自身を納得させられるだけの戦いをする、そ  
のためには——

「爆豪……くん」

嫌悪をこらえて、彼は勝己にずい、と歩み寄った。

「先ほどはぼ、俺も言い過ぎた。すまなかった」

「……………」

「きみにも色々と思うところがあるのは理解する。しかし現実、彼は強敵だ。少しでも肉薄するためには俺たちがバラバラではいけない。まずは作戦を練って、協力して——」

「……黙れやクソメガネ」

「な……!?!」

吐き捨てるようなそのひと言は、飯田の歩み寄りを完全に拒絶するものだった。

「小手先の作戦なんざくだらねえ、俺があのかくソデクをブツ潰す……!」

「ッ、この期に及んでそんなことを……!その意地のほうがよほどくだらないぞ!!」

「アア、!?!黙れつつつてんのがわかんねえのかくソメガネが!!」

信頼関係のしの字もない、険悪にもほどがある状態のふたり。——もはや彼らは、”敵”にすら心配されるようなありさまだった。

「大丈夫なんかなあ、あのふたり……」

思わずそんなつぶやきを漏らしてしまうお茶子。二日目にして息の合った連携をというのもなかなか難しい話ではあるが、ここまで険悪になるのはもっと珍しい。敵同士になったとはいえ……これではまともに戦いなんてできやしないのではないかと、余計な心配をしてしまう。

つられて一瞬、出久も気遣わしげな表情を浮かべたのだが、

「でも、だからこそかえって厄介な面もあるかもしれない」

「?、どういうこと?」

「そもそも連携をとろうなんて考えなければ、それはそれでやりようはある。一方が核の護衛に徹して、もう一方がヒーローチームに仕掛ける……とかね」

無論それだって、話し合って作戦を練るに越したことはないのだが。

「……予想だけど、突っ込んでくるのは十中八九かっちゃんのほうになると思う。彼は意地でも僕を倒したいだろうし、天哉くんもそこは譲るだろうから」

「そうだね、私も同感だけど……緑谷くんなら、軽くあしらって強行突破できちやいそうじゃない？」

軽い冗談のつもりで言ったお茶子だったが、対する出久は深刻な表情で遠慮がちにうなずいた。経験に裏打ちされた自信があるからこそその反応だが、そこに慢心は微塵もない。

「できないとは言わないよ。伊達にゴルゴムやクライシスと戦ってきたわけじゃないんだ」

「お、おお……」

「ただ、それと今回の勝利条件がイコールとはならない。ヴィラン側が自棄になって核兵器を爆発でもさせたなら、大変なことになる。僕ひとりですらでもなるわけじゃないよ」

そうなる前に鎮圧する方法もないではなかったが、あえてそこまでは口にしなかった。なににせよ、確実ではないのだ。

「だから僕がかっちゃんを抑えてる間に、麗日さんには核兵器を確保してほしい。こっちも分担になるけど……大丈夫？」

「あ……」

一瞬ことばに詰まりそうになったお茶子だったが、  
「が、頑張る……ううん、絶対やり遂げてみせる！」

自分自身を鼓舞するように、そう言い切った。出久を一方的に恃むような気持ちに、危うく支配されるところだった。

それではいけないのだ。人々の自由と平和を守れるようなヒーローに……まさしくそれを体現した”仮面ライダー”に、憧れたればこそ。彼に並ぶことは容易いことでないけれども、せめてその背中を追うくらいの気概がなければ嘘だろう。

それを聞いた出久は、嬉しそうに頬を弛めてうなずいてくれた。

「ありがとう、そう言ってくれて。——じゃあ、行こうか」

「——うん！」

ガツンと拳をぶつけ合うのと、オールマイトの「スタート！」の聲が朗々と響き渡るのが同時。ふたりは即座にビル内へと突入した。当たり前のことだが、爆豪・飯田の両名が既にヴィランとしてどこかに潜伏している。ここはもう完全に敵のフィールドだ……ゴルゴム



やクライシスの本拠地で戦った経験のある出久にとって、その事實はさしたる重圧ではないが。

(そろそろ、来るかな)

出久がかすかに息を詰めたのと、

——BOOOOM!!

爆炎とともに、鮮烈なシルエットが飛び出してくるのが同時だった。

「クソデクウウウウツ!!」

「ッ、やっぱり来たか……!」

「かつちゃん……!」

”かつちゃん”なんてかわいらしいあだ名とはかけ離れた悪鬼羅刹がやってきたと、出久に庇われたお茶子は思った。

一方、軽やかに着地を遂げたかつちゃんこと爆豪勝己は、憤懣に塗れた瞳を出久のみに向けている。両手から絶えず放たれる爆破も、彼の感情を発散するまで至らないようだった。

そして、

「爆ぜろクソがああああッ!!」

威嚇とは比にならない威力の爆破とともに跳躍、出久に襲いかかる。これも予想どおりだ。相手が純然たる敵でしかないのなら、あるいはほくそ笑む気にもなれたかもしれないが。

いずれにせよ出久は、その猛攻を全身で受け止めた。一見ふつうのライダースーツに見える衣装は、頑丈な素材で作られていることはもちろん耐火性・耐寒性においても非常に優れている。

それになんといつても、彼自身の肉体だ。ゴルゴムの……大神官ダロムの施術によって体内隅々までヒトならざるものと変わり果てたことよって、勝己の最大火力で灼かれたとてその影響は微々たるものだ。少なくとも改造手術のときに味わった痛みには比べれば、蚊に刺されたようなものだと思つた。

その余裕が表に漏れてしまうのが、目敏くプライドの高い勝己の神経をこれ以上なく逆撫でするのだが。

「麗日さん、行って!」

「！」

「勝利はきみが掴むんだ。大丈夫、きみならできるよ！」

心からの期待がこもったことばに、お茶子は奮起した。勝己が出久に対して二度目の爆破を放ったのと同時に、傍らを一気呵成に駆け抜ける。

緑谷・麗日チームの狙いどおりに事が運んでしまったわけだが、勝己にとってそれはどうでもいいことだった。いや、目の前の幼なじみの目論みどおりというのはこのうえなく腹立たしいに違いないが。

コンビを組むことになった飯田天哉に対して、信頼なんてものはまったくくない。ただ曲がりなりにもインゲニウムの弟だというなら、それに見合った働きはしてほしいものだ。でなければ——

「……………」

姿勢を低くし、猛獣のように構える勝己。対して、

「……………こうなる前に、ちゃんと話をしておきたかったんだけどね」

いかに役割のうえではヒーローとヴィランに分かたれているとはいえど、ここまで敵意を剥き出しにするというのは尋常ではない。昼休みの折、この少年が言い放ったことばから察するならば……やはり、何もできないムコセーのデク”が強大な力を得て先駆者として振る舞っていることが認めがたいのだろうか。——ならば、すべてを告白したあの日、彼が見せた涙は？その後ぶつきらぼうながらも、挨拶を返してくれるようになったのは？

考えてもわからない、すべては推測にすぎない。

だからいまは、拳を構えるほか、ない。

「どこからでも、かかってこい!!」

「ッ、舐めんなアっ!!」

挑発が効いて、勝己は怒声とともに飛びかかってきた。右腕が、大きく振りかぶられる。

やはりそう来るかと出久は思った。右の大振りはその彼の十八番だ。さて、もう一発喰らってやってもいいが……あまり舐めプめいたことを続けるのは、ヒーローたるものふさわしくはない。

(ワン・フォー・オール——フルカウル!!)

オールマイトより受け継いだ個性によって、元から高い身体能力をさらに向上させる。まずは、これで。

「オラアアアアアッ!!」

ほとんど殴打するような勢いで、爆炎が発せられる。しかしその劫火が喰らいついた先に、出久の姿は既になかった。

「ッ!?!」

「こつちだよ、かっちゃん」

「!!」

呼びかけに振り向いたときにはもう、その姿が目の前に迫っていない。

「ふ——ッ、」

「ぐぶっ!!!」

出久は、その頬を力いっぱい殴り飛ばしていた。

無論、本気のパンチではない。そんなことをしようものなら、勝己は今頃原型をとどめない肉塊と化していただろう。ただそれでも、生半可な鍛え方しかしていない相手なら昏倒させられるだけの威力はあったつもりだ。

それが、

「くっッ、クッ、があ……ッ!」

気絶するどころか怯むことすらなく、勝己はその場に踏ん張った。爛々とした双眸が、出久を睨みつける。

「……………」

出久は一瞬目を伏せたが、無論それは畏怖からくるものではない。ただこの戦いが実戦を想定したものである以上、いかなる理由があれ感傷に囚われてはいられないのだと心する。

「オラアッ!」

再び迫る、勝己。その爆破を引き付けたうえでかわしつつ、

「きみが何を思っているように構わない、けどいまは私情を捨てるんだ。でなきや、為せるものも為せない!」

「アッ!?!」

そのことばは、かえって勝己を煽っただけだった。

「偉そうにツ、上から目線で説教してんじやねえクソデクがああああ!!」

こちらが余裕をもってかわしていることがわからないではないだろうに、執拗かつ直線的に攻撃を仕掛けてくる。その瞳はもはや、憤怒に我を忘れているようだった。

「……ッ、」

常人離れた敏捷さで身を躍らせながらも、出久は思わず唇を噛んでいた。——失望。言いたくはないが、そんな気持ち芽生えつつあるのを自覚せざるをえない。

だって、彼はわかってくれたと思っていたのだ。自分の苦しみを……それでもなお捨てられない希望を。だからこそ、彼なりに理解を示そうとしてくれていたのだと信じていたのに、入学してからはまるで過去に逆戻りしてしまったかのようなようだった。対話と呼びかけても取りつくしまもない。

「なら、僕は……」

「——僕は、きみを討つ……!」

相手は幼なじみではなく、ヴィラン。有言実行とばかりに出久は私情を捨て、着地と同時に変身の構えをとった。右手を、高らかに脳天へ掲げる。

「変、——身ッ!!」

構えた手を振り下ろし、流麗に横に薙ぐ。その動作がトリガーとなり、腹部から”サンライザー”が出現——火花がスパークし、出久の肉体に対し電気信号を発する。

その信号に応える形で、改造を施された身体が”変身”を遂げる。一瞬バツタ男の姿が現れたかと思えば、皮膚の上を黒と緑の鎧”ネオ・リプラスフォーム”が覆い——

「僕は、太陽の子——」

「——仮面ライダーBLACK……RXツ!!」

「うおおっ、ついに来た仮面ライダー!!」

モニタールームに移動して戦況を見守る生徒たち。彼らを代表して切島鋭児郎が鼻息荒く声をあげる。昨日の体力測定でも生で見たとはいえ、実際に戦う姿をこうしてつぶさに見ることができているのだ。表に出すか出さないかに差異はあれ、生徒のほとんどが目を輝かせている。

「……フン」

ただひとり——左半身を氷のような意匠で覆った少年、轟焦凍だけはモニターに冷たい視線を送っているのだが、それに気づく者はない。

「あの爆豪って奴の個性もなかなかだけど、仮面ライダー相手じゃ分が悪いつてレベルじゃないな……」

「変身前でも翻弄しまくってたもんな……」

生徒たちの認識は正しい。爆豪勝己はそれを認めていないのか、ライダーを倒そうとがんばっているようだが。

その姿勢は評価しつつ……オールマイトの関心は、弟子であり同志である緑谷出久⇨仮面ライダーBLACK RXの挙動に移った。

(さて、どこまでやるつもりだ? 緑谷少年……)

圧倒的なパワーを誇るクライシスの怪魔怪人たちを、次々に撃破してきた仮面ライダー。その——緑谷出久の面影のない——巨躯と対峙して、流石の勝己もこれまでの勢いがわずかに衰えたようだった。その白い頬を、冷たい汗がつう、と流れる。

それを知ってか知らずか……RXは、人差し指で招くようなしぐさを見せつけた。

「もう僕は、きみの知ってる木偶の坊のデクじゃない。——断言するよ、いまのきみでは僕には勝てない」

「ッ、——!!」

明らかかな挑発とわかっていながら、勝己は堪えることができなかった。憤懣に塗れた絶叫とともに、RXめがけて飛びかかる。

しかし感覚の研ぎ澄まされたRXの動体視力を前に、その“常人と



「……………」

「あ……………」

つるりとした緑と黒のボディを保ったまま、悠然とその場に佇むRXを目の当たりにして、勝己は呆然としてしまった。その隙を、歴戦の戦士は逃さない。

音ひとつ立てずに距離を詰め、

「か——ッ」

少年の腹部に、情け容赦なく拳を叩き込む。

それはこれまでのように弾き飛ばすことを意図した殴打ではなく、衝撃を相手の体内にとどめるものだった。内臓が波立つような衝撃。都合が悪いことに、今は昼食のあとだった。

「うッ、え、うえ、ええええ……ッ！」

思わずその場にうずくまり、吐瀉物を撒き散らす勝己。それは見るに堪えないような光景だった——少なくとも、彼のまぶしい姿を間近で目の当たりにし続けてきた出久にとっては。

「……………」

しかしRXは……出久は、その姿を焼きつけるように、真っ赤な複眼で直視していた。わずかに上げられた勝己の、生理的な涙の浮かんだ双眸と、視線がかち合う。

それらは一瞬怯懦のいろを浮かべながら、負けてたまるかとはかりに敵を睨みつけた。そして身体を引きずるようにして立ち上がる。

——執念。もはや彼は、その感情にのみ突き動かされる幽鬼だった。

そんな姿に成り果てた幼なじみを相手に、仮面ライダーは容赦しない。腰を落とし、握り拳を固め……引く。

一瞬の静寂を経て——爆音が、響いた。

「ウオアアアアアアッ!!」

「……………」

翔ぶ勝己、BLACK RX。その激突がいかなる結果をもたらすのか、誰もが固唾を呑んで見守っていた。

そして、

勝己がRXのバツタに似た頭部に爆炎を浴びせる。ほぼ同時にR

Xが拳を勝己に――

――ぶつけなかった。その拳が向けられたのは、頭上――天井だったのだ。

「……!?」

何が起きたのかわからず、勝己は魚のように口をはくはく動かすほかなかった。ただその掌だけは、しっかりと爆破をRXの顔面に浴びせていた。

けれども、やはり。

「悪いけど、僕の目的はきみとの真剣勝負じゃない」

凧いだ声。――劫火に包まれていたはずのRXの顔には、またしても傷ひとつついていなかった。

「核兵器を確保して、みんなを守ることだ」

引導の声は、もはや勝己の耳には届いていなかった。気力のときれた彼は意識を失い、その場に倒れ込んでいたのだ。

「……」

RXがふ、と息を吐くと同時に……朗々としたオールマイトの音が響き渡る。それはまぎれもなく、出久とお茶子の勝利を告げるもの。

そう――最後に天井を破壊したパンチは……上階で核兵器の確保に臨んでいた、お茶子への援護として放ったもの。飯田天哉の個性と腕力、そして知力を考えると、お茶子ひとりではかなり厳しい戦いになるだろう。しかし同時に、彼女とならばこの”顔の見えない連携”もうまくいくと確信していた。

(ありがとう、麗日さん)

望まぬ形で遙か先へたどり着いてしまった自分だけれど、そう遠くない未来、友人たちもまた追いついてきてくれる。そう信じさせてくれたお茶子に、出久は心中で感謝の辞を述べた。

そして、

(かっちゃん……きみも)

倒れ伏す幼なじみもまた、そうであってほしいと願う。



——出久はまさか、想像もしていなかった。  
”勝つ”ことを誰よりもあきらめないはずの幼なじみの心は、案外  
誰よりも脆いものなのだ。

つづく

## 爆豪勝己：ロストオリジン（前）

恵まれた容姿。すぐれた頭脳に身体能力。そして、強力な個性。

爆豪勝己の人生は、順風満帆と言ってもいいものだった。——たつたひとつ、幼なじみのことがなければ。

そいつは何をやらせてもどんくさくて不器用で、勝己とはおよそ対照的な子供だった。挙げ句の果てに、“無個性”。自尊心の高い勝己の中で”いっちゃんすごくないヤツ”として認識されるのは残念ながら当然の帰結であったし、そこから”デク”の渾名を考え出すのも必然だった。

ただ最初は、見下してはいてもあくまで一般的な幼児のそれから逸脱したものではなかった。侮蔑、まして憎悪などという尋常ならざる感情が生まれたのは、そんな最底辺の木偶の坊が自分と競うようなことを言い続けたからだ。

——ぼくも、ヒーローになりたい。

なんで……なんでよりによってテメエが、

デク、

俺は……俺が、テメエを——

\*

気を失った爆豪勝己は、状況終了と同時に保健室へ搬送された。それでも授業は滞りなく進んでいく。

今回の授業では、一戦ごとに講評も行われる。オールマイトが解説するだけではなく、生徒にも積極的に参加を求める形式だ。他人の戦いぶりを客観的に見て批評することは、自分自身が戦うのと同年以上の糧となる。

ただ初戦に関しては、生徒のほとんどがRXの圧倒的すぎる戦いぶりに目を奪われていたようだった。迫力がヤバいだとか、爆豪が可哀想だとか、そんな意見ばかりが漏れ聞こえる。

(やっぱりこうなるよなあ……)

オールマイトは内心嘆息したが、表には出さなかった。いくらヒーロー志望といえども、つい先日まで中学生だった子供たちだ。そういう感想が先立ってしまうのも無理はない。

——ただ、RXの強さに惑わされず、冷静に戦況を分析していた者もいて。

「麗日さんと飯田さんのことも評価してさしあげるべきだと、私は思っていますわ」

「！」

臆することなく堂々と発言したのは、比較的露出の多いコスチュームを身につけたポニーテールの少女。彼女は続いて「失礼いたしました、八百万百と申します」と名乗った。機敏な動作とは裏腹の丁寧な口調が、育ちのよさをうかがわせる。

「おふたりは仮面ライダー……緑谷さんの存在に気後れすることなく、ご自分の役割を果たしていらつしやいました。特に、麗日さん——」

先ほどの戦いを思い返す。仮面ライダーと爆豪勝己の相剋、その裏側という印象になってしまった核兵器をめぐる攻防。

生真面目ゆえかすっかりヴィランになりきっていた飯田天哉に対して、麗日は個性を活かして攪乱を仕掛けた。しかしながら、総合的な身体能力・知力ともに圧倒的に飯田に分がある状況。時間切れを狙われれば打開策はないし、仮面ライダーの襲撃を恐れて自暴自棄の起爆をされたら——演習なのでありえないのだが、実戦だったと仮定して——一巻の終わりだ。

だから無理には攻めず、刺激もせず、粘り強く”そのとき”を待った。足下でもうひとり、ヴィランと戦っている仮面ライダーこと緑谷出久、彼の援護が入るのを。

八百万はじめここにいる面々にはわからないことだが、あの度肝を抜くような拳の一撃自体は事前に打ち合わせがなされたもの。だからそれ自体にお茶子が面食らうことはなかったが、放つタイミングは出久次第ということになっていた。敵に疑念をもたれぬようある程

度積極性を見せつつ、”そのとき”を待つ。それは戦友に対する絶対的な信頼がなければできないこと。

お茶子は為したのだ。出会って間もない出久への揺るぎない信頼を行動に表し、勝負へと結びつけた。——無論それは、出久の側も同じこと。

「ただ仮面ライダー……緑谷さんの力が圧倒的だから、勝利したというわけではない。仲間への信頼が勝敗を分けたのだと……私は考えますわ」

八百万のそれは、オールマイトにとって満点以上の回答だった。

\*

出久とお茶子、そして慚愧を露にした飯田が帰ってきてのち、流れるように模擬戦闘が進められていった。彼らのぶんを除けば、計4試合。皆の期待に反して、あえて出久は己を抑制して多くは語らなかつた。八百万の影響を受けてか、誰もが自分たちなりに考え、積極的に意見を述べるようになっていく。それを聴くのもまた、面白い。

——無論、それぞれの戦闘を観察するのはもっと面白いのだが。

とりわけ凄まじかったのは最終試合、そこでヒーローチームの片割れを引き当てた”アイスマン”——轟焦凍だった。

彼は自身の個性でビル全体を凍結させ、ヴィランチームの動きをほとんど封じてあっさり勝利を収めた。あまりに華麗な手際。そこだけ切り取れば、仮面ライダーである自分以上に見事なものだと出久は思った。

ただ、

「あの子、炎も使えるのか……」

ヴィラン役として核を守っていた尾白猿夫の足ごと凍結させるといふかなり無茶なことをやった轟だったが、戦闘終了後即座に灼熱を発生させて氷を融かしていた。どうも右手で氷、左手で炎を扱う個性のようだ。

と、すると。出久はわずかばかり釈然としない思いに駆られた。――

―戦闘中に炎を使わなかったのはどうしてなのだろう。

無論、状況を鑑みて使う必要がないと判断したとも考えられる。あるいは氷に比べて、武器とできるほど強力でないのかもしれない。

それでも引つ掛かったのは、彼のコスチュームデザインのせいか。左半身を氷で覆い尽くしたような姿――炎を、隠している？

「轟、焦凍くん……か」

いますぐどうこうできることでもないので、今後注視していくことにしようと思ふは決めた。――彼が戦闘において炎を使わない理由、そこに壮絶な過去が秘められていることを知る日は、そう遠くはない。

\*

爆豪勝己が目を覚ましたとき、最初に感じたのは鉛が重くのしかかるような倦怠感だった。

身体は真白いベッドに横たえられ、あちこちに包帯が巻かれている。――記憶が、甦る。

「……ッ、」

思わず拳を握りしめっていると、傍らから声がかかった。

「目が覚めたかい」

「！」

目をやればそこには、小柄な老婆の姿。白衣に身を包んでいることを鑑みれば、この高校の学校医であろうことは容易に想像がつく。日本有数のヒーロー科を抱える雄英にしては随分と心許ない体制だと思っただが、そんな悪態をつくことすらいまは億劫だった。

勝己の心中に構うことなく、老婆は己を“リカバリーガール”と名乗った。無論、本名ではないだろうが。

「ずいぶん手酷くやられたもんだね。おかげで治療にも骨が折れたよ。あんたも文字どおり精根尽き果てるだろ」

「……………」

口ぶりからして、全力疾走のあとのように身体が重いのはこの老婆

の”治療”とやらの副作用なのだろう。便利な個性にはそれ相應のデメリットがある場合も多い。勝己の個性も考えようによつてはそうなのだ——性格上、まったくもつてそう捉えていないだけで。

疲れきった勝己は、暫しぼうつと天井を見上げていたのだが、

「……なあ、」

「なんだい？」

「紙とペン、貸してくれ」

\*

「くうううう……ッ、緑谷くん、悔しいがやはりきみは何枚も上手だった！完敗だ……ッ！」

授業終了後、着替えも済ませて廊下を歩きながらのとある少年の発言。……伏せるまでもない、犯人は飯田天哉である。

「まだ言うてるし……まあ気持ちはわかるけど」ぼやくお茶子。

「ハハ……そんなこともないと思うんだけど……」

今回の模擬戦闘での自身の行動を省みれば、敵の片割れを痛めつけたことと直感的なタイミングで天井を殴ったことくらいしか出てこない。計画通りではあるのだが、”何枚も上手”と言われるとやや釈然としないものがあつた。

苦笑していると、不意にお茶子がこちらを向いた。

「そういえば緑谷くん。爆豪くん”クソデク”なんて呼ばれとつたけど……あれってあだ名？」

「えっ？」それ訊く？と内心では思いつつ、「まあ……うん。僕の名前、”出る”に”久しい”って書くから”デク”って読めるでしょ？小さい頃からそう呼ばれて……」

「……こんなことを訊くのは忍びないんだが、それはもしかして”木偶の坊”と引っ掛けているのか？」

「う、うん」

うなずくと、案の定飯田は頭から湯気を噴いた。

「まったくなんという男だ……！幼児の頃からそのような！ねじ曲

がっているにも程がある!!」

「……どうかな」

彼がそう捉えるのも無理はないけれど。ブランクがあるとはいえ一応は長く爆豪勝己という男を見てきている——ゆえにまた、出久はそのように断言したくはなかった。

「——でも、」考え込んでいたお茶子がぽつりとつぶやく。「……悪くないかも」

「へっ?」

「何!?!」

完全に心の声のつもりだったのだろう、「えっ!?!」と自分まで素っ頓狂な声をあげるお茶子。このままでは誤解を受けかねないと危惧してか、慌てた様子で弁解を始めた。

「いつ、いやあ、響きだけならそんな悪くないんじゃないかな」デク” って!なんていうかこう……” 頑張れ” って感じで、好きだ私!」

「!、デクで結構!」

「結構なのか!!?」

「落ち着いて考えたまえ!」と飯田に窘められる。しかしお茶子の物言いはとても純粹で、前向きなのだ。それは出久がああ戦いの中で失ってしまった考え方でもある。

「……まあその是非は置いておくとして、そんな一瞬のことをよく覚えていたな麗日くん。気づけたとして、彼の悪鬼羅刹ぶりに消されてしまいうようなものだが」

「あー……うん、完全に初見やったらそうかもしれないけど」前置きしつつ、「昨日の体力測定でちよつとだけ話したんよ、爆豪くんと。そのときの様子が、なんとなく頭に残っててね……」

出久が仮面ライダーであることを以前から知っていたのか——その問いに対して、最近まで知らなかったのだと答えたその表情。その裏で渦を巻く感情が、どれほど烈しいものであったか。まだ出会って1日だけでも、その断片だけはお茶子にも感じ取ることができたのだ。

「だいぶアレな人なのは間違いないと思うけど……それだけなんか

な、って思うんよ」

「……………」

「あ、ご、ごめんね勝手なこと言っつて！あくまで第一印象としてそう思ったっただけであって……………幼なじみだもんね、きみたち！」

そう、確かに幼なじみだ。しかし世間一般のそれとは隔絶していることは既に彼女らの知るところでもあるし……………何より、ふたりの間には大いなる空白が横たわっている。いまこの瞬間に限れば、お茶子のほうが余程彼の核心に迫っているのではなからうか。

それを認めてしまえば、かえって己のとるべき針路が見えてくる。

「……………そうだね。幼なじみとして、負けてられないよね」

「え？」

「ありがとう麗日さん、僕ちよつと行つてくるよ！」

言うが早いのか、出久は踵を返した。唐突な行動に、友人ふたりは面食らう。

「お、おい緑谷くん!?いきなりどうしたんだ……………というかホームルームがあるんだぞ!？」

「ごめん、先生にはうまく言っつておいて！」

「うまくとは!!?」

走る出久。「廊下を走るのはやめたまえ!!」という飯田の叫びもむなしく、彼はひらりと身を翻して階段を駆け下りていった。

「……………僕には彼がまだよく理解できない」

「ま、まあ……………まだまだこれからだよ！」

出久のことも——勝己のことも。

彼らについて知るといふことは一生ものの覚悟が必要なのだけれども、現時点ではそんなこと、知る由もないのだった。

\*

思えば自分は、彼について何も知ろうとしなすぎた……………長きに渡つて。

そのくせ、自身についてはすべて吐露してしまった。勝己もまた、



大いなる秘密を独り抱え込むことになったのだ。

である以上は、このまま捨て置くなんて無責任なこととはできない。ただ義務感しかないかといえ、そういうわけでもない。……嫌いなれないのだ、彼のことは。

そうしていいよいよ保健室が見えてきたとき——不意に開いた扉から、見慣れた浅黄色が覗いた。

「！、かつちゃん……」

「！、……」

一瞬見たこともないような表情を浮かべた勝己は、しかし即座に目を伏せた。そのまま出久に背を向け、立ち去ろうとする。

「待って……話があるんだ」

「……話？」

足を止めた勝己は——次の瞬間、くつくつと嘲るような声を発した。その酷薄さに、心臓がどくりと嫌な音をたてる。

「……今さら、何を話すつてんだよ。テメエとはもう、なんの関係もなくなるつーのに」

「何……言ってるんだよ……？」

ふと、勝己の手元に目がいく。握りしめられ、ぐしゃぐしゃになった白い紙。

まさかと思う間もなく、勝己は捨て鉢に言い放った。

「——もう……いいわ」

”退学届”——書きなぐられた三文字が、掌の中でゆがんでいた。

## 爆豪勝己：ロストオリジン（後）

昨日から渦を巻いていた嫌な予感が、現実のものとなってしまった。

そう確信せざるをえない姿を晒した幼なじみが、いま目の前にいる。

「もういいって、なんだよ……？」

「……………」

「まさか……：雄英、辞める気なの？」

無言。それは肯定と捉えるほかないもので。

「ッ、なんでだよ!？」堪えきれず、詰め寄る。「僕に敗れたからか？そんなことで折れるような奴じゃないだろッ、きみは!!」

「…………ッ」

勝己は密かに歯を噛み締めた。やはりこいつは、何もわかっていない。

「…………：テメエ、一年前に言ってたな。」いつかヒーローの必要ない世界を創りたい”ってよ」

「!」

確かにそう言った。過去を吐露したあと、立ち去ろうとする彼に対して——死闘の果てに得た、結論として。

「そのためにテメエは雄英ごへいに来た……：そうだよな？」

「…………：そうだよ。それがなんだって言うんだ？」

は、と勝己は笑った。ため息を吐き出すように。

「テメエの目指す世界に、俺はいるんか？必要なんか？——なあ、仮面ライダー」

「…………!」

「要らねえクセに……：安っぽい正義感で引き留めようとしてんじゃねえッ!!」

勝己の怒声が、廊下に反響する。それでも向けられたままの背中。

——まっすぐ睨みつけてくれたなら、まだ、受け入れられた。

「せめて——」

「こつち見ろよツ、この——臆病者!!」

「ツ！」

思わぬ罵倒に、勝己が反射的に首を傾けた——その瞬間、

出久の拳が、その頬にめり込んでいた。

「ぐ……い！」

予想だにしない一撃に、勝己はその場に尻餅をついた。

立ち上がるか、俯いたままにいるか——その選択の猶予すら与えられないうちに、胸ぐらを掴まれる。瞳に映る、昔から変わらない童顔は……凄まじい激情に染まっていて。

「僕が……僕がどんな気持ちで、きみにすべてを話したと思ってるんだ!! どうでもいい奴にツ、あんなこと話すと本気で思ってるのか!？」

「ツ、テメエの気持ちなんざ……知るわけねえだろ……い！」

どうして自分にあんなことを告白したのか、ただ「言いふらしたりはしない」という程度の信用があるというだけではないのは当然だろう。では一体、”それ以上”がなんなのか……この一年間ずっと考えてきたけれど、考えるほどにわからなくなった。

昔からそうだ、デクが何を考えているのかわからない。——気持ち悪い。

「だったら……ツ、だったらはつきり言うよ……」

「きみがツ、僕の憧れだからに決まってるだろ!!」

「……!？」

「僕の憧れを、否定するなツ!!」

爆発する咆哮は、それを向けられた勝己に殴打以上の衝撃を与えた。”憧れ?”——俺が?

——すごいなあ……かつちゃんは!

——だいじょうぶ? たてる?

——これいじょうはっ、ぼくがゆるさなへぞ……い!

——ごめんかつちゃん、僕、用事があるから……。

「——ぎげんな!!」

激昂した勝己は、負けじと出久の胸ぐらを掴み返した。

「俺がテメエの憧れだったのなんて、ガキンときだけだろうが!! 信彦がいる間、ずっと寄りつきもしなかったクセに……ムシのいいこと言ってるじゃねえ!!」

今度は一瞬、出久もことばに詰まった。すごいけれど、乱暴者で見下してくる勝己。すぐくて、優しくて明るい信彦。後者に靡いていたのは、まぎれもない事実だった。

けれど、

「……ただひとつ、信彦くんとは違うきみだけの強さがあるじゃないか! あのとときのきみが、それを僕に思い出させてくれた。仮面ライダーになったばかりだった僕を、励ましてくれたんだ……!」

「は……?」

憤懣が薄れるのと入れ替わりに、勝己の心中には困惑が広がった。出久が仮面ライダーになったばかりの頃、自分との間に何かがあったかのような口ぶり——だが、そんな記憶はない。その頃の出久は学校にも登校しなくなり、顔を合わせる機会もまったくなかったというのに。

ワケわかんねえこと言うなどがなりたてると、不意に出久は唇を歪めた。

「……やっぱり、思い出せないんだ」

「ッ、だから、何を——」

勝己から手を放し、やおら立ち上がる。寂しげな笑みをそのままに。

「記憶にないことを」 あったんだ” って言い張ったって、信じられないだろう。自分で思い出さなきゃ、意味ないよ」

「……デク、」

「僕は言いたいことを言った、これ以上は引き留めない。——じゃあ……できれば、また明日」

踵を返して独り去っていく出久。その背中を呆然と見送る勝己の

脳裏に、彼のことばが反響していた。

(思い出せない……？俺が、何を？)

出久が仮面ライダーになったばかりの頃——つまり、4年前の夏。ただでさえもはや風化しかかっている記憶を手繰り寄せようとしたそのとき、

「ッ、ぐ……!？」

突き刺すような頭痛に襲われ、勝己はたまらずその場にうずくまった。朧気な日々の中に、ほんの僅かに存在している空白。勝己は確かに、それを知覚してしまった。

「ンだ、これ……」

(俺は一体、何を忘れてんだ……？)

わからない。

ただ、

——BOOOM!

掌中で小さな爆発が起き、退学届が黒焦げになる。追い打ちのようにそれを握りつぶしながら……勝己は、立ち上がった。

忘却という名の呪縛が解けるまで、自分には折れることすら許されない。ならば意味などなくとも、戦い続ける以外に道はないのだ。

\*

「いきなり呼び出してごめんね、ふたりとも。来てくれてありがとう」  
放課後。ファミリーストランの片隅にて、そう言っただけで微笑む出久。童顔で地味な風貌の彼に対し、向かい合うふたりは対照的にやや愚連の雰囲気醸し出している。何も知らない者が見れば、前者の身を案じるところかもしれないが。

「いーっていーって。どうせオレら、放課後はヒマしてっし」

「ヒマだとロクなことしねーしな」

「アハハ……自分でそれ言うんだ」

確かに、相変わらず煙草の臭いが漂ってくる。勝己の“ツレ”だっ

た頃から吸っているというから、15歳にして既に習慣として定着してしまっているのだろう。

そう——彼らは折寺中学の同級生だった不良少年たちであり、いまでは出久を“アニキ”と呼ぶ舎弟……もといよき友人なのだ。

「で、オレらに訊きたいことって何よ？」

「ああ……うん」

訊きたいこと——当然それは定まっているのだが、どう切り出したものか。

出久が逡巡していると、

「カツキのこと？」

「！」

刈り上げの少年が、訳知り顔で煙草に火をつけようとす。しかしここが全席禁煙と思い出しか、すぐポケットにケースを戻した。

「……流石だね、どうしてわかったの？」

「アニキがそんなカオすんの、カツキと……あと信彦ってダチの話してるときくらいだし」

「そっか……」

わかっているならと、出久は口を開いた。

「普段のかつちゃんがどんなだったか、教えてほしいんだ」

「普段の……カツキ？」

「僕が学校へ行けてなかった間……ううん、そのあとも。何を話してたかとか、何して遊んでたかとか……どういふとき笑って、どういふとき怒ってたかとか。要するに、色々」

「マジで色々だなア……」

「別に教えるのはいいけど……」

相変わらずロン毛の少年が、頬杖をつきながら出久を見据え——訊く。

「アニキはさあ、なんでそんなカツキに拘んの？」

「え……」

「だってカツキ、アニキに対してはずっと当たりキツいし、ワンチャンダイブしろとまで言うし……いや、オレらも一緒になって嘲ってたけ

どき」

「けど、オレらから見ても言い過ぎじゃねーかって思うこともあったよ、正直」刈り上げも同調する。

「……………」

出久はそつと拳を握りしめた。自分を見るときの、嫌悪と苛立ちを滲ませた勝己の瞳。信彦と出会ってから遠ざけてきたそれに、再び向き合おうと思ったのは――

「――そうだね。きみたちにもまだ、話してなかったね……………」

質問に答えてもらう前に、少し昔話をしよう。

そう告げて、出久は語りはじめた。

――彼が仮面ライダー……………いや、世紀王ブラックサンとなって間もない、あの夏の日のできごとを。

つづく

——四年前 夏

人間社会の裏側から、長きに渡って世界を操ってきた暗黒結社、ゴルゴム。

その大幹部たる三神官の苛立ちは、いよいよ深まりつつあった。

ゴルゴムの中核をなす改造人間——怪人たちが、たつたひとりの異形の英雄によって次々に敗れ去っている事実。しかもその英雄の正体は、本来であればゴルゴムの支配者たる”創世王”の後継者候補とすべく改造を施した、わずか12歳の少年なのだ。

”世紀王ブラックスン”——緑谷出久。彼を倒すためには、その急所を突く必要がある。三神官の意志のもと、ゴルゴムのメンバーのひとり・黒松教授が動いた。

ひとりの少年としての、緑谷出久の弱点を探る——そのための実験。

既に、被験体は定まっていた。

\*

当時の爆豪勝己もまた、やり場のない苛立ちを抱えていた。

巷でまことしやかに囁かれるようになった、蠢動する怪物たちと漆黒の英雄の噂。一方で数多いヒーローたちは、そんなこと知りもしないとはかりに日常どおりのヴィラン掃討に明け暮れている。何かがおかしい——聡い勝己は、早くも情勢に違和感を覚えつつあった。のちにあれほどまで事態が深刻化するとは、流石に予見できてはいなかったが……。

(俺が、)

(俺がヒーローだったら、んな奴ら全員ぶっ殺してやるのに)

そんな気概のもと、肉体や個性のトレーニングを繰り返す。

だがいくら鍛えようと、あふれる苛立ちが解消されることはなかつ



た。当然だ、何をどうしようが自分はまだ小学生、実際に何かを為すにはあまりに幼い。——情けない。

『すごいなあ、かつちゃんは！』

ふと脳裏に甦る、幼なじみの声。そういえばあんな憧憬に満ちた声、久しく聞いていないことを勝己は思い出した。幼少期に決定的な仲違いをしてから疎遠となり、最近では学校でもほとんど口をきいていない。ただ無個性のくせに、ヒーローを夢見ているのは相変わらずのようだった。

「……クソツ」

腹の底に黒い滞留を溜め込みながら、過ぎる小学校最後の夏。

そんなある日だった、あの男が現れたのは。

「きみ、ちよつといいかな？」

「……あ？」

高級外車の後部座席から降りてきた男は間違いなく他人だったけれど、既視感があった。それもそのはず——かの男はノーベル医学賞候補として、頻繁にマスコミに取り上げられている著名な大学教授だったのだ。

そんな人間が自分になんの用なのか。腑に落ちない勝己に対し、彼が告げたのは協力の依頼だった。——恐怖心を取り去り、身体能力をさらに向上させる。そんな実験への。

ふつうなら、こんな話を真に受ける勝己ではない。しかし相手は身分のはつきりしている高名な科学者であり……何より、彼には焦りがあった。

だから勝己は、独断でその話に乗ってしまったのだ。高名な科学者が裏でゴルゴムと繋がっているなどとは思ってもよらない。漆黒の英雄の正体がかの幼なじみであると知っていたらば、無論彼の選択も異なっていただろうが。

\*

緑谷出久、12歳。

数週間前の誕生日、親友である秋月信彦ともどもゴルゴムの手で“世紀王”へと改造されて間もない彼は、かの暗黒結社に迫るために日々を費やしていた。

そのための第一歩として試みていたのは、ゴルゴムとつながりがあると思しき人々への接触。——あの誕生日パーティーに出席していた者たち。うち最初に訪ねた人気女優・月影小夜子は、既に口を封じられてしまっている。

(……今度こそ、)

握り拳を固めながら彼が見上げるは、古めかしくも立派なキャンパス。

ここ聖和大学の医学部に、かの黒松教授が所属しているのだ。

マウンテンバイクに擬態したバトルホッパーと別れ、正門から足を踏み入れようとした瞬間、

「おいクソデクっ!!」

「!?!」

声変わり前であることを考慮しても口汚い怒声に、出久は思わず肩を引きつらせた。

この声、まさか——猛暑を原因としない汗を流しながら、やおら振り向く。

そこには、予想どおりの人物の姿があつて。

「か、かっちゃん……」

「テメエ……なんでこんなところなんだよ?」

挨拶もなしに、眦を吊り上げて問い詰めてくる少年——爆豪勝己。思わぬ邂逅に、出久は頬を引きつらせていた。よりにもよって、自分が“ブラックサン”として行動しようとしているときに。しかもいきなり喧嘩腰とは、今日はとりわけ機嫌が悪いようである。

そんな彼に対し、以前のような本能的な恐怖はもう感じない。しかし“以前の自分”を演じるかのように、出久はやや腰を引きながら応じることにした。

「えつと……た、たまたま! たまたま通りかかったんだ!」

「あゝ あ？」

「それより……かつちゃんこそ、どうしてここに？」

勝己とて小学生、大学の前にいる理由は何かあるはずだった。

彼は相変わらず眉をひそめたままだったが……一応は口を開いてくれた。

「……知り合いの教授に会いに来た」

「えっ……かつちゃん、大学の先生に知り合いがいるの？」

「おー」

ぞんざいにうなづく勝己に対し、出久は心から「すごいね！」と称賛のことばを投げかけた。何年ぶりだろう、最近はまともに会話すらしていなかった。

勝己はどう感じたのか、笑うでも怒るでもなくフンと鼻を鳴らすのみだった。表情は変わらず、その胸中は計り知れない。

「……んなことより、」

「え、な、何……かな？」

トーンを落とした声に、出久はどきりとした。目の前の少年はおそらく、何かを問おうとしている。秘密を抱えている以上、それは難儀なことだった。

しかし、

「……なんでもねえわ。つーかへらへらしてんじやねえよ、キメエな」  
「ええ……」

それでもまだ何か言いたげにしながら、学生たちに混じってキャンパスへ消えていく勝己。釈然としないものを感じながらも、出久はいったん彼を見送るほかなかった。呼び止めるようなことは、色々な意味でできない。

気を遣って四半刻ほど時間を潰してから構内に入った出久だったが……黒松教授は出張中だと助手らに追い返されてしまい、すぐごとと退散する羽目になってしまった。よもや幼なじみが教授、そしてゴルゴムのノミ怪人による人体実験の真っ只中にいるなどとは思ってもよらずに。

違和感を抱きはじめてのは、数日後。

——街で暴れていたヴィランを、勝己がたったひとりで捕えたというニュースが飛び込んだのだ。

(確かにかつちゃんはすごい。個性も、身体能力も)

「……だけど何かが変わだ。——どう思う、バトルホッパー?」

傍らに佇む、飛蝗を象ったマシンに話しかける。カウルに輝く真つ赤な複眼がぴかぴかかと点滅し、その意志を示す。ゴルゴムから奪った世紀王のマシンだが、彼が裏切ることは決してないと思えた。

出久が一抹の不安を覚えている間にも、勝己はさらに誘惑の泥沼へと引きずり込まれようとしていた。

「センサー、俺、ヴィランの野郎ブツ倒したんだぜ! すごいだろ!!」

手術台のような簡素なベッドに身体を横たえ、瞳ばかりを爛々と輝かせている勝己。子供ゆえ無邪気に興奮していることを差し引いても、それは尋常でない様相だった。

「そうかそうか、それはよかった」

対して、満足げにうなづく黒松教授。普段は遮蔽されている機械の右目が露になっている。その時点で異常であるのだが、勝己はそもそも異様さに気づいてすらいなかのようだった。投薬を受けた結果、彼は正常な判断力を失ってしまった——

「きみは確か、オールライトをも超えるトップヒーローになるのが夢だったね」

「おー」

「ならば私がその手助けをしてあげよう。私が長年研究した人体強化ホルモン、これを体内に取り込めば、きみに敵うものなどこの世にはいなくなる」

「!!」

勝己の目のいろが変わった。最強のヒーロー——そうなれば、きっと。

興奮冷めやらぬ勝己だったが、密かに点滴されていた麻酔により程なくして目が虚ろになっていく。微笑を嘲笑へと変えた黒松は、ちら

りと背後に目配せした。薄暗い実験室の、さらに闇に包まれた暗がりから、異形の怪物が姿を現す。

「ノミ怪人さま。どうぞこの少年に、貴方さまの体液をお与えください」

「~~~~~！」

獣じみた咆哮を響かせるノミ怪人に対し、恭しく頭を垂れる黒松。倒錯した光景だが、己の行動に対する疑問は微塵もない。この異形の怪物となるために、彼らはゴルゴムに従っているのだから。

眠る勝己の腕に、ノミ怪人の触手が突き刺さる。それは弱冠12歳の少年に対し、あまりに残酷な仕打ちであったのだ。

\*

息子たちに反して、緑谷引子と勝己の母・爆豪光己の仲は決して悪くはなかった。息子たちの運動会で共同で陣取りをしたり、一方が旅行に行けば土産を持っていくなど一定の交流が続いている。

親同士のこととはいえ、出久にとっては複雑な気持ちでもないではなかったが……少なくとも”このとき”に限っては、それは不幸中の幸いというべきだった。

でなければ勝己の身に起きた異変について、引子に相談の連絡がくることはなかっただろうから。

——ヴィランを単独で制圧するほどの飛躍的な身体能力向上、そして精神の高揚を見せていた勝己が……突然、何かに怯えるように部屋に引きこもるようになってしまった。

(思えば大学の前で会った日からだ、かっちゃんが変わったのは)

そもそも自分は、なんのために聖和大学を訪れたか。あの誕生日パーティーで見た、黒松教授の胡散臭い笑顔が脳裏をよぎる。

勝己と黒松教授が会っていたのだとすれば、今後もしずれかから接触があるかもしれない。そう推測した出久は、勝己の自宅前を張り込むことにした。

何分、何時間と時は過ぎ、夜も深まった頃。

「出久くん」

「！」

半ばぼうつとしていた出久は、背後からかかった呼び声で我に返った。振り返れば、幾分か年長の少女の姿。

「杏子ちゃん……どうしてここに？」

「……ちよつと気になっちゃって。勝己くんだけ、幼なじみなんですよ？」

「まあ……ね」

曖昧にうなづく。”幼なじみ”——そうと形容できるのは、彼女の弟である信彦とて変わらない。ただ、その内実はあまりに異なっている。

「僕……かつちゃんには嫌われてるんだ」独白めいたことばがこぼれる。「僕からしても、かつちゃんは嫌な奴だ。信彦くんとは……全然違う」

信彦のもつ優しさや謹み深さは、勝己にはありえない。恵まれた能力に裏打ちされた頑迷な自尊心は、出久のような持たざるものを平気で傷つけるものだ。

けれど——

「それでも、あなたはひとりの人間として、勝己くんのことを心配しているように見えるわ」  
「……………」

杏子の鋭いひと言に、出久はなんとも応えることができなかった。黒松教授の毒牙にかかっているのが、もしも見もしらぬ他人であったとしても、己のとする行動は何ひとつ変わらなかつたろう。

その場合と、情動の部分で何かが異なっているというのだろうか。自覚はない、ないけれど——

会話が途切れた、その瞬間だった。

寝静まった住宅街に、ガラスが砕ける音が響き渡る。はっと顔を上げた出久の目に飛び込んできたのは——爆豪宅の二階の窓から、落下してくる黒い塊の姿。それは人のかたちをしていた。

「かつちゃん……!?!」

いや——それは爆豪勝己であって、爆豪勝己でなかった。鋭く伸びた爪、裂けた口唇……その奥からは、尖った犬歯が覗いている。

「勝己くんって……異形型……?」恐る恐る杏子が訊く。

「ツ、違うよ……。かつちゃん、その姿は一体……!？」

「ヴウ……ツ、デ、クウ……?」

血のいろをした瞳が、ぼんやりとこちらを見上げる。しかし視線がかち合った瞬間、半獣と化したその表情が恐怖と困惑に染まっっていく。

「み、るな……ツ、近寄るな……う、ウウウウ——ツ！」

「かつちゃ——!」

それでもなお出久が一步を踏み出そうとしたときだった。野獣の咆哮がごときうめき声をあげた勝己が、にわかに逃走を凶った。

その脚はもはや、人間の少年のものではなかった。両手の爆破によりその疾走はさらに加速していく。たちまちのうちに、彼は夜の闇へ消えていった。

「ツ！」

歯を噛み鳴らした出久は、マウンテンバイクに擬態したバトルホッパ―に飛び乗った。

「杏子ちゃん、先に帰ってて！」

「出久くん……!」

「信彦くんの、二の舞にはさせない……!」

それは、血反吐を吐くような決意だった。

## flashback―悪魔の実験室―（後）

「身体能力向上、その代償の獣化……恐怖感……」

ベッドに縛りつけられ、獣化がさらに進んでいく少年を見下ろす黒松。手元にある薬品の効果のほどを淡々と唱える唇が、醜くゆがむ。

「実験は成功……これをブラックサンに注入すれば、彼の心身は膨れあがった力に耐えきれず自壊する……！」

「爆豪勝己くん、きみの実験動物としての役割はこれでおしまいだ。心から感謝しよう……ノミ怪人さま！」

黒松の呼びかけに応じ、再びノミ怪人が姿を現す。今度はかろうじて意識を保っている勝己は、その姿を認めて「ヒッ」と短い悲鳴を漏らした。

「この少年の貢献に報いてやるために、どうぞ貴方さまの糧になさってくださいませ」

糧に――つまり、勝己の肉体を骨の一片まで喰らい尽くせと、黒松はそう言っている。

そして、ノミ怪人は彼の提言を了承したらしかった。グロテスクな口腔を覗かせながら、やおらベッドに迫ってくる。逃げ出そうにも、勝己の身体は鋼鉄のベルトで拘束されていた。

「う、ヴウウウ……ッ、ウウウウ――ッ!!」

しかし……本能的な恐怖と向上した身体能力の相乗効果は、黒松の想定を上回っていた。

「ガアアアアアア――ッ!!」

両手から爆破が起き、その反動で跳ねた身体が遂に拘束ベルトを弾き飛ばした。ベッドから転がり落ちるようにしてノミ怪人の魔手をかわす。

「グ、ヴウ――ッ！」

そしてそのまま、扉を蹴破るようにして逃走する。彼を既に餌と見定めているノミ怪人は、踵を返してそのあとを追った。

\*



空は既に白みはじめていた。

人気のない夜明けの街を、一匹の獣が駆け抜ける。

「ウグ……ッ、ウウウウ……！」

狂暴そのものの外見に反して、彼の精神は恐怖に支配されていた。追いかける本当の怪物……否、具体的なかたちをなしえない何かに。

それはノミ怪人の体液から精製された薬品の副作用によるものであるが、かといってゼロからつくり出されたものではなかった。もとより彼の心に巢食っていたもの、それが破裂寸前にまで膨らみきっていたのだ。

——振り返れば、ノミ怪人がすぐそこまで迫っている。勝己の心はもう限界だった。

そのとき、

「かっちゃんッ！」

「!?」

聞くだけで古い記憶を呼び起こされるような声とともに、マウンテンバイクで迫ってきた少年。薄暗い世界に、翠の瞳が爛々と煌めいている。

——なんで、こんなところにまで。

かあつとはらわたが熱くなる感覚。だが、そんなものはとめどない恐怖感に容易く呑み込まれてしまう。現実の勝己にはもう、逃げ続けることさえ限界だった。

そこに——ノミ怪人が現れる。

「~~~~！」

「……………」

迫る異形に、同じく異形と化した獣は怯え足がすくんでいる。——このまま、見ていられるはずがない。

「うおおおおおッ!!」

バトルホッパーから飛び降り、ノミ怪人へ向かっていく出久。横を素通りされた勝己は、その背中を呆然と見送るほかない。

小さな身体を精一杯躍動させ、拳を振るい、ノミ怪人を幼なじみか

らでできるだけ遠ざけようとする。勝己にとっては不可解なことに、無力な子供であるはずの出久の攻撃は怪人に対して若干ながらもダメージを与えているようだった。

——なんで、あいつが？

——なんであいつに……デクに、俺が守られている？

恐怖に囚われた心のうちに、ふと湧いた疑問。

それが別の感情へと変わるより前に、勝己は見た。必死に立ち塞がる出久めがけて、ノミ怪人の触手が密かに伸びようとしているのを。

「デク——」

発した声はかすれていた。警告さえも満足に届けることができぬまま、出久の首筋に触手が突き刺さった。

「うッ!?!」

鋭い痛みが奔る。咄嗟に触手を引き抜いた出久だが、既にノミ怪人の目的は果たされていた。

「!?、あ……う?」

途端、意識とは無関係に身体が震え出す。思わずその場に膝をつく出久。困惑が、精神を支配する。

しかし、迫りくるノミ怪人の姿が再び視界に入った途端、激しい恐怖が雪崩のように襲いかかってきた。

「ひ、い……っ!?!」

——なんだ、これは？

かろうじて残された理性の部分が、さらなる困惑の悲鳴を発する。身体のほうはといえば、情けなく尻餅をつき、後ずさりすら始めている。

それを目の当たりにしたノミ怪人は、獣じみた唸り声にほくそ笑むようないろを混ぜた。臆病ホルモンを含んだ体液は、世紀王たる少年の精神にも作用している。いち怪人にすぎない彼にとって、それは凄まじい快樂だった。そして自らの手で堕ちた世紀王を葬り去ったとき、それは頂点に達する——

「~~~~!」

夢想のままに、鋭い爪を振り下ろさんとするノミ怪人。立ち向かう

力と意志を得たはずの出久は、迫りくる死から目を背けることしかできな

ないのか。黒松の……否、ゴルゴムの企みが成就することは、もはや避けられないのか。

刹那、

——BOOOOM!!

聞き慣れた爆発音が間近で炸裂し、出久は反射的に目を開けた。

獣が……獣と化した勝己がノミ怪人に飛びかかり、爆発を浴びせていた。

「デクに……その汚エ手で、そいつに触んな……!」

「かつ……ちゃん……?」

着地した勝己の呼吸は荒く、身体には震えが残ったまま。しかしその眼光は、鋭くノミ怪人を睨みつけている。

「俺は……強くなきゃなんねえんだ……!俺が……守らなきゃなんねえんだ……ッ!」

「……………」

かつて憧れ、追いかけて続けた背中だった。——何も、変わってなどいない。

「うあああああッ!!」

雄叫びとともに、再び立ち向かっていく勝己。しかし二度目はなかった。ノミ怪人の触手が、跳躍する勝己の腹を鋭く打ちのめす。

「ぐあ……ッ!」

少年の身体はいとも容易く吹き飛び、傍らの街路樹に叩きつけられた。地上に落下した四肢から、くたりと力が抜ける。

「かつちゃんッ!!」

悲鳴のような声をあげて、出久は彼のもとへ走った。その脳裏に、目の前でクモ怪人に殺された信彦の父・総一郎の事切れる瞬間がフラッシュバックする。

倒れた勝己の身体を、這いつくばるようにして見下ろす。——胸が、上下している。息はある、気を失っているだけだ。

(かつちゃん……)

一瞬、胸を撫で下ろす。しかしそれは、すぐに別の感情へと変わった。

——俺が、デクを。

あれほど自分を嫌って……否、憎んでいたはずの少年。それが「守る」と言つて、恐怖を振り払つてノミ怪人に立ち向かった。

信彦の存在で糊塗していた過去の憧憬……そしてこの強さを越えたいという想いが、ふつふつと沸きあがってくる。それは、無理矢理に生み出された恐怖などとは格の違うものだった。

「……ッ、」

拳を握りしめ、ゆつくりと立ち上がる出久。勝利を確信していたノミ怪人がようやく異変に気づいたのは、少年が首を傾けたときだった。

睨いた瞳に、もはや怯えはなかった。あるのはただ、滾るような戦意のみ。

そして、

「——うおおおおおおおッ!!」

雄叫び。それは少年が、世紀王の正体を露にするための銃火だった。

ノミ怪人に向き直り……握った両の拳を、顔の傍らで構える。ギチギチと常人ではありえない音が響き、顛顛の周囲に放射状の皺が広がっていく。

そして見開かれたエメラルドグリーンの双眸が、ピジョンブラッドのごとく染まった——刹那、

「変、……身ッ!!」

腕を振り上げ、変身の構えをとる。キングストーンがにわかには活性化し、出久の肉体を構成する細胞の一部をベルト状に顕現させた。

光の中で変わりゆく肉体。少年のかたちを残した表皮が弾け飛び、ゴルゴムによってつくり出されたバツタ男の姿が露になる。それも一瞬のことで、生々しい緑色の裸身の大部分を漆黒の装甲——”リップラスフォーム”が覆っていく。

「……!」

ノミ怪人が息を呑むのがわかる。そこに立つ存在はもはや、緑谷出久であつて緑谷出久でない。

世紀王ブラックサン——のちに市井の人々により、”仮面ライダー”と呼ばれることになる漆黒の戦士。

剥き出しになった関節部から激しい蒸気が噴出する。周囲に陽炎をばらまきながら、黒の英雄は跳躍した。拳を構え、ノミ怪人に殴りかかろうとする。

しかしノミ怪人は、その容貌とは裏腹に極めてすばしこかった。負けじと跳躍したかと思えば、次の瞬間には背後に回っている。背中に触手を叩きつけられ、ブラックは弾き飛ばされた。

「ッー」

そのまま勝己と同様に木の幹に叩きつけられる……とはならなかった。彼は空中で態勢を立て直して一旦着地、バツタの遺伝子がとりわけ色濃く反映された脚を活用して高く飛び上がったのだ。

驚愕のあまり呆然とこちらを見上げるノミ怪人。一瞬豆粒ほどにまで縮小したその姿が、一挙に視界の中心を占めていく——迫ってくる。

激情に駆られた出久……ブラックサンに、もはや恐怖などという感情は存在しえない。

本能のままに、彼は拳を振り下ろした。”ライダーパンチ”——のちに仮面ライダーと呼ばれるようになったあとで、そう名付けられた一撃。

拳が突き刺さった箇所の肉が弾け、ノミ怪人が苦痛に声をあげる。血に濡れた拳を解くブラックだったが、攻撃の手を緩めるつもりは微塵もなかった。

「ふ——ッー」

ノミ怪人の肩を蹴って再び高く飛び上がる。空中で一回転しつつ——キングストーンの発するエネルギーを、足先へ集中させていく。そして、

「うおおおおオオオオオ——ッ!!」

咆哮とともに放つ……ライダーキック。これもそのように名付け

られるのは、いま少し先のこと。

いずれにせよその一撃は、ノミ怪人の肉体に膨大なエネルギーを流し込んだ。不忠を働く臣民に対する、王の鉄槌。この場合の裏切者は後者なのだが、キングストーンにとっては宿主の意志こそがすべてだった。

断末魔の絶叫とともに、ノミ怪人の身体が紙のように吹き飛んでいく。やがて注ぎ込まれたエネルギーに身体が耐えきれず、原子崩壊を引き起こす。傍目には嘖き出した赤い霧の中に消えるようにして、ノミ怪人はその命を散らした。

「……………」

烈しい咆哮と打って変わって、着地したブラックは静謐そのものだった。真つ赤な複眼が、怪人の残骸である白煙をじっと見つめている。

数秒ののちには、彼の心は倒れ伏す獣人のような姿をした少年に向けられていた。ほどなくその姿が、もとの爆豪勝己のものへと戻っていく。表情は眠っているように安らかだ。発生源の消滅によって、獣化ホルモンが効力を失ったということだろう。

「かつちゃん……………やっぱり、すごいや……………」

世紀王の精悍な姿に似合わぬボーイソプラノが、憧憬の響きを奏でる。

少年は思うのだ。母と信彦の家族を除いてこの世界にただひとり、爆豪勝己ならこの孤独を分かちあってくれるかもしれない。そうしてまた、長きに渡って止まったままだった時計の針を動かすことができたら。

そう、願っていたのに。

\*

「結局、かつちゃんには何も話せなかった。…………黒松に会ってからの

できごと全部、忘れてしまっていたから」

現在——15歳の出久は、勝己の取り巻きと自身の弟分という相反する立場を掛け持つ少年たちにそう告げて話を締めくくった。

沈黙のまま、その余韻を引きずっていたふたり。ややあつて、後ろ髪を短く刈り上げた少年がぼつりとつぶやいた。

「……なんで忘れちゃったんだろうな、カツキ」

「なんでって……」長髪の少年が応じる。「そのホルモンの副作用とかじゃねーの？」

彼はあまりものを考えない性質であったが、的外れな推測ではなかった。ノミ怪人のホルモンは勝己のまだ幼かった肉体に短時間で急激な影響を及ぼしたのだ、後遺症があつてもおかしくはない。ホルモン摂取前後の記憶喪失で済んだのは不幸中の幸いとさえいえる。

それに、今さら思い出したとて、勝己の人生においてどれほどの意味があるというのか。思い出してほしいと願うのは、自分のエゴにすぎないのではないか。勝己と上手に付き合ってきた少年たちと相對している今、自問自答せざるをえない。

二度世界を救った英雄の懊悩を見透かしたかのように、刈り上げの少年が口を開いた。

「……きつと、カツキは思い出すよ」

「え……」

「根拠はねーけどさ、多分、アニキが心の底から思い出してほしくなったときに。アイツ、そーいうヤツなんだよ。色んな意味でとつつきにくいヤツなだけどさ……だから、嫌いになれねーんだよな」

そうして、視線をかわすふたり。自ずと表情に浮かんだ苦笑は、勝己の怒り肩を追っていた中学生の頃と変わらないものだった。

つづく

## ダメだやめとけライドロン（前）

アクロバッター、ロードセクター……それに、ライドロン。

仮面ライダーBLACK RXこと、緑谷出久の擁する三大マシンの朝は遅い。

いや遅いというほどではないのだが、彼らの主には後れての起床となることには変わりない。

まあ、それも致し方のないことなのである。彼らの生活スペースであるガレージには窓がなく、シャッターが閉まっていれば昼も夜もない。

だから、朝のルーティーンをすべて終えた主がシャッターを開けてくれた瞬間こそが、彼らの起床のときとなる……はずなのだが。

（今日こそ……今日こそは！）

真つ暗なガレージの中で、独り神にも祈る気持ちでいるマシンがある。真つ赤な四駆、その名もライドロン。”気持ち”というからには彼はただの車ではない。そのボディには、かつてゴルゴムを裏切り仮面ライダーを助けた、クジラ怪人の魂が内蔵されている。

ゴルゴムとの最終決戦において壮絶な戦死を遂げたクジラ怪人だったが、ライドロンに宿ってからはともにクライシス帝国との戦いを生き抜き、今では同居までしている。当初より出久に対して深い親愛の情を抱いていた彼にとつて、願ってもない理想の生活のほずなのだが……ここ暫くは、懊悩の日々が続いていた。こうして、暗闇の中で目覚めてしまう程度には。

程なくして、ガラガラと音をたててシャッターが開かれる。差し込んでくる陽光を眩く思いつつ、来た、とライドロンは身構えた。

「おはよう、みんな！」

『おつ、おはようイズク！今日も絶好の運転日和のようだな！』

同輩たちに先立って、そう応じる。声の上擦ってしまったという自覚はあった。



「ふふ、そうだね」

『イズク、今日モ学校力?』アクロバッターが訊く。

「うん。今日は誰と一緒にいこうかな?」

『!』

ライドロンの心は色めき立った。出久の脳内には今、恋愛ゲームよろしく三つの選択肢が浮かんでいるのだろう。だがこれは現実だから、ゲームであれば攻略対象NPCであるマシンたちにも主張する権利はあるのだ。

だが、ライドロンはそれをしない。彼の心中を察してか、最近アクロバッターもロードセクターも沈黙しているのだが。

「じゃあ——」

出久の視線が滑り……一瞬、ライドロンを捉える。ライドロンの心臓……もといエンジンは高鳴った。このまま急発進してしまいそうな勢いである。

しかし——

「出久くん、ちよつといい?」

「!」

背後からの呼び声に、出久の選択肢選びは中断されてしまった。

「どうしたの、響子さん?」

呼びかけの主は、的場響子。クライシス帝国に両親を殺されたことをきっかけに、仮面ライダーの仲間として行動をともにした少女である。出久よりひとつ年長であること、物静かで落ち着いた振る舞い、何よりその名前は、出久にかつての想い人を思い起こさせるのだった。

閑話休題。

「電話よ、学校から」

「えっ、雄英から?」

出久は首を傾げた。台風やらインフルエンザの流行でもあるまいに、よもや休校の連絡ということもなからう。

いずれにせよ考えていても仕方ないので、彼はいったんガレージから離れていった。

数分ほどして戻ってきた出久は、童顔にばつの悪い表情を貼り付けていて。

『何ダツタンダ?』

「あー……ごめん、みんな。今日は電車で行くことになつちやつた」  
『!?!』

一同、驚きの声をあげた。発声器官をもたないロードセクターにしても、『ガガー、ピー』と作動音で感情表現をしている。

『な、何故!?!』

「事情はよくわからないんだけど、駅に迎えの車をよこすからって。依怙最良はされたくないけど、そういうわけでもなさそうだし、今回は従うことにしたよ」

『……………』

それが主の判断ならば、もはやライドロンたちには何も言えない。電車の時間が差し迫っていると踵を返して家を出ていく出久を、表向きは温かく見送るほかなかつた。

ただし彼が去れば、本音を抑えきれないのも事実で。

『ようやく、と思つたのに……イズク……』

『……残念ダツタナ、ライドロン』慰めつつ、『シカシイズクハ、オマエヲ蔑ロニスルヨウナヤツジヤナイゾ』

それは無論わかつている。朝と帰宅時だけでなく、就寝前の遅い時間にも出久は必ずひと声はかけてくれる。整備だつてこまめにやってくれるのだ、蔑ろにされているだなどとは思っていない。バイクであるアクロバッターとロードセクターに比べると、高校生には使い勝手がよくないことも理解しているつもりだ。

——ただ、寂しいのだ。

(もつと、イズクの……ライダーの役に立ちたい!)

純粋な想いは着実に膨らみ、最早いつ破裂してもおかしくないというところまで来ている。しかしそれが今日この日だなどとは、ライドロン自身も含め誰も予想だにしていなかった。

\*

朝のホームルームを目前に控えた雄英高校1年A組の教室は、元気のいいヒーロー志望の高校生が集まっていることを差し引いても騒然としていた。

おしゃべり好きな性質の者も含め、とりとめもない雑談で騒いでいるわけでは決してない。ゆえに昨日は「もうすぐチャイムが鳴るから席に着きたまえ!!」と皆を注意していた飯田天哉も何も言わなかった。

いや……彼自身、未だ唯一姿を見せないクラスメイトのことが、気がかりで仕方がないのだった。

「遅いな……緑谷くん」

仮面ライダーこと緑谷出久が、まだ登校していない。飯田のすぐ後ろに座る麗日お茶子もまた、彼のことを心配していた。

「まさか、あの人たちに捕まっちゃったんじゃ……」

「……そうだな、ぼ、俺たちですらあそこを突破するのは至難だったんだ。直接の標的ともなろう彼の場合は……」

安否を気遣うような言葉だが、命の心配までしているわけではない。ただ――

「……デクくん、」

一日ですっかり定着させてしまった呼び名をつぶやいた直後、前方のドアががらりと開かれた。

「はあッ、ま、間に合った……」

「デクくん!」

滑り込んできた少年の姿を認めて、思わず立ち上がるお茶子。彼や飯田に限らず、大勢の視線が彼に集中していた。

「遅かったね、かめ……緑谷。外のあれ、大丈夫だった?」

出久に声をかけるには距離のある飯田とお茶子に代わって……というわけではないのだろうが、最前列に座る太い尻尾を生やした少年がぎこちなく声をかける。彼の名前を思い起こしつつ、出久は応じる。

「うん。その件で電話があつて、今日は急遽電車で来ることになったんだ。ギリギリになつちやつたのはそのせいというか……」

わざわざ職員の車が迎えに来てくれたことは、念のため伏せて話した。ある意味特別扱いされているのは覆しようのない事実なのだが、要らぬ火種は持ち込みたくなかつたのだ。

「そつか、確かにあのバイクだと目立つもんな」

「まあね。心配してくれてありがとう、——尾白くん」

下の名前までは流石に失念していたのだが、名字だけでも十分功を奏したらしい。尾白少年の薄い顔立ちが目に見えて綻んだので、出久も嬉しくなつた。

同時に、迎いの車中で聞かされた話を思い返す。

——マスコミが、校門前に詰めかけている。

一昨日も昨日も、その兆候はあつた。ただオールマイトの赴任と仮面ライダーの入学という要素が重なっている以上予想しえたことであつて、対策も十二分になされていたのだ。鞭だけでなく、飴も与える形で。

ゆえに昨日、一昨日と至つて静かなものだったのが、突如として状況が変わつた。不自然だ。雄英側はそう考えているようであつたし、出久もまた同意見だった。ただここにいる生徒たちは与り知らない話である。警告めいたことを言うにしても、それは自分ではなく雄英の役割だ。ノリの良いグループが初めて受けたであろうインタビューにはしゃいでいるのを横目で見つつ、出久は席に着いた。

「かつちゃん、おはよう」

「……………」

返事がないのは、およそ一年ぶりのことだった。視線すら合わせてくれないから、昨日のことをどう思っているのかもわからない。ただきちんと登校しているのなら、あの退学届は自分の中で握りつぶしたのだろうと思う。今はそれだけでも僥倖と思うほかなかつた。

それから一分もしないうちに本鈴が鳴り、担任であるイレイザーヘッドこと相澤消太が入室してきた。流石に三日目ともなると皆、私

語を慎み彼を迎える準備を整えている。

さて、一昨日、昨日と連続でここがヒーローアカデミアの頂点であることを新入生たちの胸に刻みつけてくれたわけだが。果たして、今日はどんなイベントが待っているのだろうか――

「今日は学級委員を決めてもらう」

「学校っぽいキター!!」

厳粛になりかけた教室内の空気ががらりと変わった。相澤が来る前……否、それ以上の熱気に覆われる。入学式さえも出られなかったので、普通ならだらけそうなイベントで盛り上がるのもうなずけた。同時に彼らはただの高校生ではない、ヒーローの有精卵<sup>たまご</sup>である。

「先生！俺やりたいっすー！」

「俺も！」

「ウチもやりたいです」

「オイラも！そしてゆくゆくはハーレムを……」

普通なら雑務のなすりつけ合いになるところが、皆が一斉に挙手をしていく。皆をまとめ、導いていくリーダーシップ――トツプヒーローには重要な資質だ。

緑谷出久の場合、ヒーロー像と同時に理想とする世界像までも持っている。なので次元が違うのだが、ひとつ前に座る少年以外はまだ与り知らないことである。

その少年はというと、頬杖をついたままぼうつと窓の外に目を遣っている。関心のあるなし以前に、そもそもいま教室で起こっている出来事を認識すらしていないかのような態度。きみはそんな奴じやないだろう、と内心想う出久だったが……ことここに至って、昨日ぶつけた言葉に勝るものはもう持っていない。これ以上、彼に対しては何もできない。己が万能でないことなど、強大な超・世紀王の力を得てからも嫌というほど身に染みているのだ。

堂々巡りの思考をいったん頭の中のゴミ箱に捨てて、出久も皆に倣って挙手する。收拾がつかなくなりつつある教室内、担任よりも先んじて、その鎮静化に挑む者があった。

「皆ッ、静粛にしたまえ!!」

突然響いた大声に、教室は波を打ったように静かになった。声の主は言うまでもあるまい、飯田天哉その人である。

一同の視線が集まったところで、彼はよく通る声で高説を述べはじめた。

「他を牽引する責任重大な仕事だぞ、やりたい者がやれるものではないだろう! 周囲からの信頼あつてこそ務まる政務! 民主主義に則り真のリーダーを皆で決めるといふのなら、これは投票で決めるべき議案……!!」

確かに、内容的にはうなずける部分もある意見だ。当の本人が、身体がふるふる震えるほど目いっぱい挙手をしていなければの話だが。

「いや説得力……」

「言いたいことはわからなくもないけれど、出会って間もないのに信頼もクソもないと思うわ。例外はあるでしょうけど」

蛙顔の少女——蛙吹梅雨が尤もなことを言うが、一同の耳に残ったのは最後部だけだった。”例外”——

「……………」

皆の視線が、ひとりの少年に集中する。容姿のうえではクラスで一、二を争うくらい地味な彼だが、知名度と実績では生徒どころかN.O. 1ヒーロー・オールマイトに匹敵する。信頼という意味では、彼に敵うものなどいるはずもなかった。

——と、いうわけで。

「じゃ、あとよろしくね。委員長」

寝袋にくるまった相澤に仔細を文字通り”委ね”られて、出久は口をムズムズさせた。

大方の予想通りというべきか、彼は二位以下に圧倒的大差をつけて当選を遂げた。これが国政選挙であれば支持者に囲まれて万歳三唱でもするところだが、自身に投票した者も含めて全員が潜在的なライバルであり、納得半分、あきらめ半分というムードが漂っている。た

だあれほど意欲を滲ませていた飯田天哉だけは、握った拳を震わせているが。

そして二位につけ、副委員長に選出された八百万百などはむしろ嬉しそうだ。自分自身以外に票を入れてくれた者がいるのだから、気持ちにはわからなくもない。

望んだ通りの結果。ただその内実は、出久にとって必ずしも手放しで喜べるものではなかった。入学三日目にしてクラスの信頼を得ているといえば聞こえはいいが、それは遙か遠い存在であろう仮面ライダーへの憧憬にすぎない。対等なクラスメイトである緑谷出久への友情や親愛を込めた一票が欲しかった、などとも思うのは強欲にすぎるとはだろうか。しかし求める理想は、そんなささやかな我儘の遙か先にある。

## ダメだやめとけライドロン（後）

学級委員長に選ばれたからといって、日常生活が大きく変容するわけではない。

既に恒例となっている麗日お茶子・飯田天哉との昼食時、出久はふたりに対して気になっていたことを尋ねた。

「そういえば、ふたりは誰に投票したの？」

お茶子は立候補していなかったし、飯田はなんと0票だった——つまり、彼自身も別の人物に投票したということ。

「そりやもちろんキミだよ、デクくん！」

「あはは……ありがとう」

取るに足らないことだが、昨日「デクで結構」と言ってしまったせいか彼女の自分に対する呼称は上記に固まったようだ。蔑称がもとになっていられるにもかかわらず、彼女の口から紡がれる響きはいつそのことかわいらしくすらある。

既に親しい彼女の選択には納得できた。では、彼は？

「天哉くんも、もしかして……」

「……うむ、きみの考えている通りだ」

領く飯田。やはり彼の一票もまた、出久に託されていたのだ。

「ありがとう……でも、どうして？」

やはり、僕が仮面ライダーだからか。——「それもある」と飯田は応じた。

「ゴルゴムやクライシス帝国から我々を守ってくれた……その実績からすれば、きみが学級委員長を務めるべきなのは自明の理だろう」

「……」

「だが、それだけではない」

「きみの穏やかな人柄、一方でいざというときに発揮される胆力や判断力……短い間ではあるが友人という立場で見えてきた緑谷出久という男に、一票を投じたんだ」

「天哉くん……」



まさしく自分の求めていた答が返ってきて、出久は胸が詰まるのを感じた。”無個性”と”仮面ライダー”——両極端なレッテルを背負って生きてきた出久にとつて、人格そのものを認めてくれる友人の存在は希少だった。信彦のまぶしい笑顔が脳裏をよぎり、思わず涙がこぼれそうになる。

そんなこととはつゆ知らず、お茶子が無邪気に口を開く。

「私だって！元々仮面ライダーには憧れてたけど、デクくんとは会ってもっと好きになっ……あ、いや語弊があるわ好きってそういう好きじゃなくてなんというかその、」慌てて取り繕いつつ、「そそそそれより飯田くんさっ、自分はよかったん？やりたそうにしてたし、メガネだし！」

メガネ。

(意外とぎつくりいくよなあ、麗日さん……)

今まで親しく付き合ってきた女性の顔を思い浮かべる——白鳥玲子、的場響子……そして、秋月杏子。この中だとやはり、玲子が性格的には近い。

出久が苦笑いを浮かべる一方で、飯田は渋い表情で瞑目している。

「……意欲があるのと、実際に適任かは別の話だからな。僕は僕の正しいと思う判断をしたまでだ」

「……ん？」

——僕？

「そういえば飯田くん、昨日も”僕”って言ってたよね。”俺”とどっちが素なん？」

「！、……………」

恥ずかしげに頬を赤らめているのを見るに、完全に無意識だったらしい。

「前から思ってたんだけど……飯田くんって、坊っちゃん！」

(だからぎつくりすぎだって麗日さん！) 心中で突っ込みつつ、「ま、まあ……インゲニウムの弟さんだもんね？」

「……そうだ。兄のことは尊敬しているしかくありたいと思っているが……無菌室育ちだと周囲に思われるのは遺憾なのでな」

「なるほど……なんとなくわかるよ。新喜劇なんかだとあほぼんつて言われちゃうポジションだもん」

「麗日さん!」

悪意はないよね!?と確認したくなる失言である。とはいえ、言われた当人はさほど気にしていないようであるが。

「その新喜劇のあほぼんというのがどんなものかはわからないが……いずれにせよ僕には、人を導く立場は時期尚早なのだと思う。まずは実力と人柄を兼ね備えた緑谷くんを支えることで、勉強させてもらいたいんだ……どうだろうか?」

「天哉くん……」

かつての自分が——いや今でも尊敬しているが——オールマイトを範としていたように、飯田もまた兄という理想を追って走り続けてきたのだろう。しかし常に目一杯で走ればいいものではないのだと、彼は既に理解っている。

(きみは、そう言うけれど)

決して時期尚早などではない、今のきみにだって十分にその資格はある。むしろ本当は、自分こそ柄ではないのだ。ずっと勝己の背中を遠巻きに見つめ、信彦の背中に守られていた自分などには。

仮面ライダーとなる以前の緑谷出久。その表出を妨げるかのように、突如けたたましいアラームが鳴った。

「な、何?」

「これは……警報、か?」

『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外へ避難してください』

「……!」

セキュリティ3——つまり、校舎内への侵入者ありということ。

プロヒーローもヒーローの卵も擁する雄英高校は、当然その辺の学校とは比較にならないほど厳重な警備がなされている。たとえ野良猫の一匹であれ、侵入者など許さなはずなのだ。それを——

「……ッ、」

少年たちの瞳に、焦燥が浮かんだ。

\*

「――」

同時刻。緑谷邸のガレージで暇をもて余していたライドロンの脳裏に、突如として稲妻が奔った。

『こ、これは……！』

『オマエモ感じタカ、ライドロン』

『ああ……！』

ライドロン、アクロバッターともに感じとることのできる、出久の体内にあるキンググストーンの信号。――出久が、危ない。

唯一完全機械製のロードセクターだけは頭上にクエスチョンマークを発しているが、火急の事態であることに変わりはない。しかし皆、閉じたガレージにいる身。誰かが開けてくれない限り――

と、狙い澄ましたかのようにシャッターが開いていく。

『!!』

「よう、マシン諸君！こんな天気の良い日に引きこもってちや健康に悪いぜ」

覗いた姿は、出久の舎弟第一号である鋼のジョーだった。またの名をクライシスの怪魔ロボット・デスガロンでもあり、そういう意味ではライドロンとも共通点の多い男であった。

「つーわけでどうだ？一緒にいつもの採石場にでも――」

『恩に着るぞジョー！』

「え？」

ジョーがぼかんとしている間に、ライドロンは動いていた。自力でエンジンをかけたかと思うと、いきなりフルスロットルで飛び出していく。通行人がいたらどうすると言いたいところだが、仮にそう詰めれば、周囲の熱源をサーチし確認したうえで発進したのだという言い訳が返ってきたことだろう。

「な、何？何事お!!？」

突然のことに対応できず、ジョーはシャウトするほかなかつた。

\*

雄英高校の校舎内は、パニック状態に陥っていた。

廊下には避難しようとする生徒たちがごった返し、まともに進むことができない。

それを見越してか、出久は単身食堂にとどまっていた。侵入者の正体は判然としないが、朝から校門前を張っているマスコミと無関係ではないだろう。だがそれにしては、嫌な気配がする。

(もしも、僕が標的なんだとしたら)

あの人混みに卷かれて身動きできなくなるよりは、独りでも迎え撃つべきだ。——自分には、それだけの力があるのだから。

そう思つて拳を握りしめていると、不意に背後から気配が迫るのを感じた。ほとんど反射的に振り向いた瞬間、視界の端に細やかな茶髪がちらついた。

「……!？」

「麗日……さん?」

他の生徒たちとともに逃がしたはずの、麗日お茶子の姿がそこにはあった。戻ってきたのか。しかし、なぜ?

「デクくん独り置いてくなんて……あ、いや、デクくんいるならかえつてここのほうが安全かな……」

「……そう。天哉くんは?」

「あ、うん……うまくやってくれてるよ!」

「?」

うまくとは?頭上に疑問符が浮かぶが、詳しい話を聞くには状況が切迫していた。

思考を切り替え、再び周囲を窺いはじめる出久。その背中を見つめつつ……お茶子は、密かに身を震わせた。

振り向いた瞬間の出久の表情は……優しい顔立ちからは想像もつかないほど、鋭く烈しいものだった。昨日の戦闘訓練でだって、あんな顔はしていなかった。

——あんな顔をしなければならぬような戦いを、この同い年の少年は強いられてきたのだ。

(でも、どうして……)

なぜ強力な個性が目覚めたというだけの少年が、そんなふうになってまでゴルゴムやクライシスと戦うことになったのか。「そういう運命だった」「僕が僕である以上は」——詳しく話せないという出久はそう語っていたけれど、やはり気にかかる。

「デクく——」

「来る……!」

声をかけようとした途端、出久がそう声をあげた。身構える彼の背後で、お茶子は守られているほかない。

そして、数秒後。

「いたあッ、仮面ライダーだ!!」

感極まるあまり、正気を失ったかのような叫び。それと同時に、食堂に雪崩れ込んでくるマイクや大型カメラを持った人々。侵入者はやはり、マスコミだったのか。

出久のもとに殺到するマスコミ。お茶子を守りながらも、彼の心のうちに宿っていた警戒は辟易へと塗り替えられつつあった。然るべき場所でインタビューを受ける代わりに、学校へは来ないでくれ——せつかくそういう取り決めを結んだというのに、これでは意味がないではないか。

しかしいずれにせよ、彼らを相手に暴力は振るえない。いつそのこと彼らの希望を全面的に叶えてやることで場を収めるしかないか。

目の前のマスコミ対策に思考を——ブツブツと半ば漏れだす形で——集中させていたために、出久はマスコミに紛れる”異質なるもの”に対する感覚が鈍ってしまった。相手が戦闘員ですらないただの人であるということで、わずかながら油断もあったのだ。

「仮面ライダー……!」

唸るような声でつぶやく男。彼の手にはマイクもカメラもなく、

「——死ね……!」

一本のナイフが、握られていた。

\*

その頃――Aの担任である相澤消太は、同僚であるプレゼント・マイクとともにマスコミ対応にあたっていた。

押し寄せるマスコミを校舎内に入れまいと表向き事務的に、内心では苛立ちを抱えながら留めていた彼らだが、既に別方向から侵入した者がいると知ってそれはもう深いため息をついていた。

「なんてザマだ……まったく。天下の雄英が聞いて呆れる」

敷地がクソデカいのが仇になってんなア、こりやシヴィーだぜ……」  
そうなると気にかかるのが、生徒――とりわけ緑谷出久の身の安全だ。”敵”のもうひとりのターゲットであるオールマイトは今日も非番で押し通せる――事実そうなのだ――が、出久は生徒だからそれも難しい。彼がうまく対処してくれれば……などと思ってしまうのは、明らかに教師失格だろう。

「マイク、俺は食堂に行く。緑谷のことだ、避難せず囿として自ら残っているかもしれない」

「そうだな……よくしッ、ここは任せろ！」

「ああ……」

相澤が校舎内へ向け踵を返したときだった。

『うおおおおおッ!!』

咆哮と、エンジンの唸り。そのふたつを同時に響かせながら、相澤らの頭上を通りすぎた深紅の影があった。

「……は？」

(車……?)

海洋生物を模したようなデザイン――相澤とマイクにはすぐに、それが”ライドロン”であるとわかった。

そのライドロンが――内と外を隔てる壁に、躊躇なく突っ込んでいくではないか。

「お、おい――」

我に返って制止しようとしたときには、もう遅かった。強固な外壁を粉々に粉碎し、ライドロンもまた校内へと侵入したのだ。

(イズク、イズク……い！)

今日こそは彼の役に立つ。彼の助けになってみせる――

――そんな願いも虚しく、

『……………い！』

食堂に突入したライドロンが目当たりにしたのは、マスコミの群れから飛び出したひとりの男が、出久の腹部に刃物を突き刺している姿だった。

刹那、ライドロンの脳裏に閃光のごとく浮かんだ光景があった。横たわる仮面ライダーBLACK、その腹部を剣で刺し貫く……シヤドームーン。

直接目撃したわけではない、しかし現実を起こった出来事。それを想起させるような今この瞬間に、ライドロンの心はどす黒く染まった。

『貴様あああああッ、よくも!!!』

「!?」

突如現れた真っ赤な車が発する叫びに、一同はぎよつとした。――無論、出久も。

(ライドロン……どうしてここに!?)

結論から言えば、彼は無事だった。強いて言うなら制服は裂けたが、たとえ人間の皮を被つていようとその中身は超・世紀王と呼ぶべき存在。ナイフ一本で傷をつけられるはずもない。

だが、瞋恚に染まったライドロンの頭脳――クジラ怪人の魂からはその事実が抜け落ちていた。愛する仮面ライダーを害した男。

『許さん……絶対に許さん!!』

凄まじい気迫は、そのままエンジンを空ぶかしする音へと変わる。ライドロンが一体何をするつもりなのか……本能的に悟った男は「ひい」と情けない声をあげて身をすくませている。

出久もまた、「まさか」と思った。ライドロンがそんなことをするは

ずがない。そう信じたいけれど、ライドロンの放つ怒気はまるで、ゴルゴム怪人の――

「駄目だつ、ライドロン！」

――声は、届かない。

慄く男の視界を、真つ赤な車体が覆っていく。仮面ライダーの命を奪ったつもりが、己の命が風前の灯と化している――その現実を拒絶するかのように、瞼を閉じきった。

しかし、避けられないと思っていた”死”の瞬間は、いつまで経ってもやってこない。

恐る恐る目を開けた男が見たのは――ライドロンを両手で押さえ込む、無骨な背中だった。

黒と黄に彩られた鋼の身体、やや垂れた真紅の瞳から、血の涙を流しているかのようにあしらわれた流線が物悲しい。

『ライ、ダー……？』

「やめるんだ……ライドロン……！」

呆気にとられた様子の子のライドロンに対し、絞り出したかのような声でそう命じる、RX――”ロボライダー”。別名、悲しみの王子。

「僕は……大丈夫だから」

『……………！』

その瞬間、ライドロンは我に返った。同時に己が取り返しのでないことをしようとしたことを自覚し、恐怖した。車体がぶるりと震え、エンジンが落ちる。

『……………』

そんなライドロンのボンネットをそつと撫でつつ、沈黙するロボライダー。英雄の名に見合った華々しさは微塵もなく、ただ寂寥感ばかりを際立たせるその姿。お茶子も、あれほど勢いのあったマスコミたちまでも、しんと静まり返っている。

相澤が駆けつけるまで、その静寂はやむことがないのだった。



\*

ほどなくして警察が到着し、敷地に侵入したマスコミと出久を害した男は共々連行されていった。

被害者である出久はというと、相澤に伴われて保健室へ直行となった。当然救急車を呼ぼうとしたのだが、出久自身がそれを断つたのだ。本音を言えば、保健室へ行く必要もなかったのだが。

——そもそも、怪我などしていないのだから。

「本当に傷ひとつないようだね」

腹部を診察していた校医・リカバリーガールが、事実に見合わぬ淡々とした口調で告げる。背後に立つ相澤がは、と詰めた息を吐き出すのがわかった。

「ええ。仮面ライダーは——頑丈なのが取り柄ですから」

半ば冗談のつもりでそう言ったのだが、ふたり揃ってくすりともしない。流石に空気が読めていなかったかと出久は反省した。

ややあつて、

「……ともかく、無事で何よりだ。だがわからないことがふたつある」「なんででしょう?」

「おまえほどの男が、いくら不意打ちといってもあんな暴漢に遅れをとると思えない」

避けられなかったのではなく、あえて避けなかったのではないか——相澤は半ば確信をもって、そう言っている。であれば、認めざるをえない。

「……あの場には麗日さんがいましたから。下手にかわして、彼女に害が及ぶリスクは万が一にも避けたかった。僕なら受け止められると思っただし、万が一もつと危険な代物でも防ぐ方法はありませんでしたね」

たとえば、瞬時にバイオライダーに変身して液状化するとか——全身はもちろんのこと、心臓のみ一瞬変化させてクライシスを欺くという芸当もこなした経験が彼にはあった。

「……………」

合理主義者の担任に付け入る隙を与えない、極めて合理的な判断。それでも相澤が賛意を示さず沈黙を選んだのは、たった15歳の少年が自分の身を盾にすることになんの躊躇もないという事実が、そろそろしかったから。

(こいつのブレーキは、壊れてしまったのか)

あの激しい戦いで。その強さと引き換えに――

しかし前述の事実から、それを戒める方策を相澤はもたない。それに、雄英高校の職員としてはもうひとつ、訊かなければならないことがある。

「では……あのライドロンという車の行動は、おまえの差し金か？」

「！、……………」

暫し沈黙を続けたあと……出久は、小さくかぶりを振った。

「多分……僕の危機を察知して、駆けつけてくれたんだと思います」

「そうか。それだけなら、頼もしいと言えるんだがな」

施設の一部を破壊したこと――何より、人を殺そうとしたこと。正直、常軌を逸している。その魂がゴルゴム怪人だったことを、相澤は思い返した。

「彼はきつと、僕を守ろうと必死だったんだ。……だから、責任は僕にある」

「……責任というからには、処分を受ける覚悟はできているんだろうな？」

瞳を揺らしつつも、出久ははつきりと頷いた。無論、公的な処分となれば校長以下教師陣に諮る必要がある。何より、そのライドロンを身を挺して止めたのも出久自身だ。

ならば、

「じゃあ……辞めてもらおうかな」

「……………」

宣告が、冷たく響き渡った――

\*

騒ぎの大きさを鑑み、午後の授業——ヒーロー基礎学は中止となつてしまった。

やや白けたムードが漂うホームルーム。その始まりに、出久が躊躇いがちに拳手をした。

「どうぞ、委員長」

名前でなく、称号で呼ぶのはわざとか。相澤には、これで呼び納めとわかっているから。

教卓の傍らに立った出久は、皆をぐるりと見回してから、口を開いた。

「さっきのことで、皆さんに謝らせてください」

「へ？」

誰かが間抜けな声を発するのがわかる。皆、マスコミの目的の半分がこの少年であることは理解している。しかし命まで狙われた出久が謝罪するというのは、クラスの過半数が得心行かないようであった。

「それだけじゃないんだ。……僕の仲間が暴走して、取り返しライドロンのつかないことをしようとした」

「取り返しの、つかないこと……？」

「……………」

唯一その一部始終を目撃していたお茶子が、悲しそうに目を伏せる。それに気づく者は誰もいなかったが。

「僕を守ろうとしてやったこととはいえ、許されることじゃない。け

ど僕は、彼を仲間から外すことなんてできない。——だから、」

「学級委員長を辞めるという形で、責任を取りたいと考えています」

「……………」

教室内のざわめきが、にわかに大きくなる。流石に核心はぼかしているのです、そのほとんどは当惑の声ばかりだが。

「三日天下あ……………」

「つてかこの場合どうなんの？再選挙？」

「副委員長の昇格とか？」

しかし、本来誰よりもリーダーの器たるべき男が降りたあとの舞台だ。後任が、十全な求心力を保てるか。

出久にだってそんなことはわかっている。自分に投票してくれたクラスメイトの期待、一方的に投げ棄てては終われない。

「あ、あのっ……もし皆に許してもらえるなら、できれば、僕に指名させてほしい」

指名——そう、出久には意中の後継者がいた。彼ならばきっと、自分以上に、委員長長の職にふさわしい——

「飯田、天哉くん。お願いしてもいいかな？」

「!!」

最も驚いたのは、他ならぬ飯田本人だった。

「ぼ、俺か?!いや確かに、光栄な話ではあるが……どうして……?」

確かに自分は意欲を強調していたし、出久にとっては最も親しい人間ではあるが……それだけで選ぶほど、彼が甘いとは思えない。

「わたくしも是非、理由が知りたいですわ」

副委員長である八百万も声をあげる。彼女からすれば、自分を素通りしての指名なのだ。納得のいく理由があつてほしいと思うのも当然か。

無論、出久はその理由を持ち合わせていた。

「さっきの騒動の裏で、天哉くんがしてくれたことだよ」

——出久が食堂に独り残っていた頃、彼はパニックを起こした生徒たちを鎮めることに成功していたのだ。お茶子の個性と己の個性の連携で、非常口の案内の上に登りあがり。

「皆さん……大丈夫々夫!!」

「僕は正直、自分ひとりでこの騒動を収めることしか考えていなかった。でも天哉くんは、あんなにかっこよく皆をまとめることができる人なんだ。だから、きみがやるのが正しいと僕は思うー!」

「緑谷、くん……」

飯田が呆気にとられていると、

「俺あいいと思うぜ!飯田、超活躍してたもんな」

「飯田、非常口の標識みたいになつてたよなあ」

賛意を示すクラスメイトの声。さらに、

「……納得が行きましたわ。わたくしも、飯田さんが委員長を務めることに賛成いたします」

「八百万さん……」

「——時間が勿体ない」

唐突に、室内の気温を何度も押し下げるような担任の声が響く——  
当の本人は寝袋に入っているが。

「何でもいい、早く決めろ」

「あ、ああはい……。——天哉くん、」

「……わかった」やおら立ち上がる。「委員長の指名ならば仕方がない。以後はこの飯田天哉、全力をもって委員長の責務を果たすことをここに誓います！」

「任せたぜ非常口！」「非常口飯田！」「しっかりやれよ！」——仲間たちのエールが次々に響く。同時に“非常口”のあだ名は今後しばらく、彼の代名詞として定着することとなる。

一方で、非常口を後継指名した前・委員長。彼は微笑みながら惜しめない拍手を行っていたのだが。

(ライドロン……)

駆けつけてくれた鋼のジョーが先に乗って帰った——代わりにロードセクターを置いていった——、かの真紅の車。彼とも、きちんと話をしなくては。いま心のうちにあるのは、それだけだった。

つづく

flashback—光の車ライダー—（前）

ぎざん、ぎざんと波の寄せては返す、遙かに続く大海原。未だ美しい姿を保つていながら、人々の営みによって着実に汚されつつある。——久しく訪れていなかった生まれ故郷の姿を、ライダーはぼうつと見つめ続けていた。

「ライダー、」

ここまで運転手を務めた鋼のジョーが、気遣わしげに彼の名を呼ぶ。

「アニキ……心配するぜ？」

『……………』

心配——確かに、心配はするだろう。ゴルゴム怪人の邪悪な心が再び頭をもたげ、この海を汚した人々を裁こうとするのではないかと。そう疑われても文句は言えないようなことを、自分はしでかしてしまつた……。

『……俺は結局、骨の髄までゴルゴムの化け物だつたんだ』

「ライダー……」

（俺に、イズクの仲間にいる資格はない……）

ライダーの深海のごとき孤独に、ジョーはただ傍に寄り添ってやることしかできなかつた。ライダーを守って一度は斃れた気高き怪人の魂に、かねてより抱いていた密かな敬意を打ち明けるように。

\*

「ライダーが……家出？」

仮面ライダーこと緑谷出久は帰宅早々、母の口からその事実を告げられていた。

「ええ。お母さん、詳しいことはわからないけど……学校でやってしまつたことを気に病んでいたみたい。ジョークくんが一緒だから、大丈夫だとは思うけど」

「……………」

拳に力がこもる。幼なじみのときと同じ——話がしたいと思ったときには、いつもこれだ。

「出久、」

「！」

白い手が不意に両頬を包んできて、出久は思わず目を見開いた。

「顔、強張ってる」

「あ……………」

母の愛情をこんなにも直接的に感じたのは、久しぶりのことだった。ゴルゴムを滅ぼすのと引き換えに一度すべてを失ったときも、このひとだけはずっと支えてくれた。彼女が泣いて謝っていた”無個性”などより余程想像を絶する苦難に、それでも。

「僕、迎えに行ってくるよ。…………あのときお母さんが、そうしてくれたみたい」

「！、…………そうね。そうしてあげたほうがいいわ、きつと」

「お母さん、晩ごはん作って待ってるから」——その言葉だけで、出久には十分だった。

『——シカシ、宛ハアルノカ？』

グリップを握る手に力を込めようとした瞬間、アクロバッターがそう尋ねてくる。口調は落ち着いているが、彼もまたライドロンのことを心配しているのだろう。目的地をはっきりさせておかなければ気が済まないという調子だ。

無論、出久は答を持ち合わせていた。

「うん。…………多分、そんなに遠くへは行っていないと思う」

本当は、ジョーに連絡すれば一発なのだが。誰にも頼らず見つけることができなければ、ライドロンを連れて帰る資格はないように感じた。

大丈夫、自分の勘はきつと、正しい。

『アイツハ本当ニ、手ガカカル』

「どうしたの、急に？」

『イヤ。アイツガ帰ッテキタトキモ、ソウダツタト思ッテナ』

「……………」

(帰ってきた……………か)

”ライドロン”を迎え入れたときには、まさかそんなことになるとは思っても寄らなかつたけれど。

アクロバッターとともに走り出す。——と同時に、出久の脳裏に降り積もる白銀の記憶が甦る。あれはクライシス帝国の侵攻が始まって間もない、寒い冬の日の記憶だった。

\*

”ライドロン”との出逢いの発端は、”風の騎士”の異名をもつ怪魔獣人ガイナギスカンによって、怪魔界——風の砂漠に連れ去られたことだった。

そこで邂逅した、クライシスを追放された老人——ワールド博士。彼の信頼を得、託された一枚の紙。それこそがライドロンの設計図だったのだ。

ガイナギスカンを打倒し、無事怪魔界から帰還した13歳の出久。当時はまだアクロバッターの他に仲間と呼べる存在のいなかった彼は、独力でライドロンの材料を集め、製作を開始した。キングストンの影響で飛躍的に向上した知力をもってしても骨の折れる作業だったが、つらいとは思わなかつた。何せ、新たな仲間を迎えるための苦勞なのだ——失うばかりだった、ゴルゴムとの戦いに比べれば。自宅近くの倉庫街の一角に存在する秘密のガレージにて、組み立てに没頭すること一ヶ月。

「やった……………！ 完成だ！」

まろい頬を紅潮させながら、出久は幼子のごとき歓喜の声をあげた。彼の視線の先には、完成形となった真紅のライドロンが鎮座している。

「よーし、じゃあ早速……………っ」と



運転席に乗り込み、エンジンを起動せんとする。いよいよライドロ  
ンが産声をあげるとき——と、思いきや。

「……あ、あれ?」

……つかない。訝しげな表情を浮かべつつ、出久はああだこうだと  
試行錯誤してみるのだが。

「ダメだあ……」

結局、ライドロンはうんともすんとも言わないままだった。

「おかしいな……設計図通りのはずなんだけど。やっぱり地球産の材  
料なのがよくないのかそれとも手順に何か問題が……」

暫しブツブツと独り言を続けていた出久だったが、自分ひとりでは  
答が出ないと知って”彼”を頼ることにした。

「……アクロバッテリー。思い当たることってない?」

『アル』

「えっ、本当!」

『……ケド、教エナ〜イ』

「ええっ!」

バトルホッパー時代にはありえなかった意地悪を吹っ掛けられ、思  
わず出久は目を剥いた。そもそも当時の彼が言葉を発したのはたっ  
た一度きりだったのだが。

「バッテリーさん……もしかしてやきもちですか?」

『ソウイウワケデハナイ……本当ハ私ニモワカラナイノダ』

「そっか……」

やはり自分で考えるしかないのか。しかしキングストーンで知力  
も強化されているとはいえ、出久はまだ中学生相当の少年でしか  
ない。こういうとき、分野に長けた仲間がいればと切に思う。戦う以外  
のことは、自分限りでは限界があるのだ。

少年でしかない、といえば。一応はまだ保護されるべき存在でもあ  
るわけで。

「出久!」

「!」

聞き親しんだ女性の呼び声に、出久は反射的に立ち上がった。どう

してかアクロバターまで居住まいを正している。秘密のガレージに臆することなく入り込んでくる、出久と瓜二つの——体型は対照的だが——女性の姿。

「あ……お、お母さん。そっか……もうそんな時間か」

「そうよ、今日はもうおしまい！ 帰ってご飯食べて、お風呂入って、ゆっくり寝るの。学校行けないのはしょうがないけど、生活習慣は崩しちゃだめよ」

母——緑谷引子。夢中になると帰宅どころか寝食も忘れる息子を案じて、夕刻となると毎日迎えに来るのである。決して気丈なひとではなく、出久の無個性が判明したときには泣いて謝られたこともあったが……ゴルゴムの世紀王となってしまった息子を恐れることなく、こうして愛情深い母であり続けてくれる。ゴルゴムとの戦いですべてを失った自分を迎えに来てくれたのもまた、彼女だった。

「わかったよ。じゃあね、アクロバター」

『ウン。引子ママ、オヤスミ』

「おやすみ、バターちゃん」

それぞれが世紀王に連なるものであったとは思えない牧歌的な会話ののち、ガレージを出て母とともに歩く。外は雪が積もっていた。

「うわあ……今日って雪だったんだね」

「お昼過ぎから降ってきたの。今日はあつたかくして寝ないとだめよ？」

「晩ごはんはお鍋にしたから」と、引子。そういう母の気遣いに心から感謝できる出久は、世界一幸福で不幸な思春期の少年だ。

何より彼はもうただの子供ではなく、仮面ライダーと呼ばれる唯一無二の英雄だった。ゆえにささやかな平穏は、相對する悪の蠢動により容易く破られる。

——クライシス帝国の尖兵たる怪魔ロボット“ガンガティン”が、街に侵攻を開始したのだ。

\*

「俺は怪魔ロボット・ガンガデイン！ 緑谷出久、俺に課せられた任務は貴様と貴様の造り出したライドロンを破壊することだ……！」

母を逃がし自らと対峙する出久に、ガンガデインはそう告げた。

当然、自らがやられるわけにも、ライドロンを破壊させるわけにもいれない。出久は果敢に立ち向かったが、その圧倒的な火力の前になすすべなく吹き飛ばされてしまう。

「ッ、変……身——!!」

人間の姿では太刀打ちできない——ゆえに出久は、”変身”を遂げる。世紀王ブラックサンが太陽光を受けて進化した姿——仮面ライダーBLACK RX。

今では無敵の代名詞のように世間から扱われている彼だが、強力な怪魔怪人相手には常勝というわけにはいかなかった。

とりわけガンガデインは強力な怪魔ロボットだった。タンク型に設計された下半身の機動力、両腕に装備されたミサイルとビーム砲が発揮する火力。それらをくぐり抜けて組み付いてきた敵を容易く投げ飛ばす腕力。彼の主であるガテゾーンが”最強”と称するにふさわしい脅威だったのだ。

そう——雄英の同級生となった面々は信じられないかもしれないが、RXはこのガンガデインに一度敗北を喫したのだ。その火力と機動力に翻弄され、最後は腕力でもって冷たい川に投げ込まれた。

傷も負わされた出久だったが、一度折れながら立ち直った精神はそう簡単には堪えない。兵士チャップによる搜索をどうにかいかいくぐり、川から上がった彼は雪の中をガレージへ走った。ガンガデインの標的は自分だけではない、未だ生命をもたぬライドロンもまた狙われているのだ。

(大丈夫、対策はしている。けど……)

先にガレージを発見されてしまったては終わりだ。何より、それは万が一のための防衛策でしかない。——ライドロンが動かなければ……奴には、勝てない。

「!?、痛……！」

焦る心を嘲るかのように、雪に埋もれた段差に足を取られて出久は

派手に転んでしまった。柔らかい雪のおかげで痛みはほとんどなかったが、代わりに身を切るような冷たさが服越しにも襲ってくる。宵闇に広がる白銀は、少年の心に孤独を味わわせた。

(ツ、この程度でへこたれてなんかいられない……！ 考えろ、考えろんだ緑谷出久、ライドロンを動かす……生命を吹き込む方法を……！)

——そのとき、出久の脳裏に稲光が奔った。

「生命を……そうか！ それなら、もしかしたら……！」

着想を得た出久は、素早く立ち上がって再び走り出した。ガレージに滑り込む。積もる雪に足跡が残ってしまっているから、自ずからここも捕捉されてしまう。急がなければ——

「アクロバッター！」

『……！』

果たしてそこには、今にも出撃しようとして逸っていたアクロバッターの姿があった。元々世紀王のためのマシンである彼は、キングストーンを通じて出久の危機を察知することができる。召喚がなかったとはいえ、よく耐えたほうだろう。

『ライダー……！ ナゼ私ヲ呼バナカッター!？』

「ツ、ごめん……。でも、ここからはきみに頼ることになるから」

『何?』

アクロバッターに、文字通り孤軍奮闘をさせることになる。およそ半年前、まだバトルホッパーと呼ばれていた彼の最期を思い出すと今でも涙が出かかるが……今は、彼の力が必要だった。

出久から作戦を聞いたアクロバッターは、二つ返事で己の役割を了承した。

『分かつた、任セロ』

「ありがとう……。本当に、無理はしなくていいからね。一秒でも時間が稼げればいいんだから」

『ウン』

うなずいたアクロバッターの頭をひと撫でして、出久は奥へと消えていった。彼どころか、未だぴくりとも動かないライドロンまでも置

き去りにして。

\*

出久の読んだ通り、四半刻もしないうちにガレージはガンガデインに発見されてしまった。

その侵入を阻むべく、単身出撃したアクロバッター。騎手たるべき仮面ライダーがいない中、懸命にガンガデインに立ち向かっていく。絶対的な体格差とは裏腹に、彼は互角の戦いを繰り広げていたのだが。

「ガンガデイン、アクロバッターは俺に任せな！」

愛馬ストームダガーを駆り、戦場に乱入したのは機甲隊長ガテゾーンだった。横から攻撃を受け、撥ね飛ばされるアクロバッター。

主の進化に応じて、彼もまたバトルホッパーであった頃より遥かに頑丈になっている。ストームダガーの体当たりを喰らった程度では致命傷にはならない……が、多勢に無勢なのは間違いなかった。

(モウ、十分力)

役目は果たしたと判断したアクロバッターは、踵を返してその場から逃げ出した。ライドロンの破壊を目的とするクライシスの面々は、彼を深追いはしない。

「さあ、もう邪魔者はいない。——ガンガデイン、やっちまえ!!」  
「了解——」

ガンガデインによる一斉掃射が、ガレージめがけて襲いかかる。空き倉庫を改造しただけの建物はひと溜まりもなく崩壊する。その内部に置き去りにされたライドロンもまた、同じ運命を辿ることとなった——

\*

ライドロンは、ただの一度も地上を走ることなく破壊されてしまったのか。

——そうだとしたら、二年以上が経った現在、彼が出久の仲間として健在であるはずがない。

「アクロバッターは無事に撤退できたみたいだ。……うまくいってよかったよ——ライドロン」

ほのかな笑みを浮かべ、その真つ赤な車体を見下ろす出久。果たしてライドロンは、ここに健在だった。

ここ——シャドームーンによって命を落とした仮面ライダーをクジラ怪人が甦らせた、聖なる海の洞窟に。

flashback—光の車ライドロン—（後）

ガンガデインの破壊したライドロンは、同じ材料を使用することで外見を似せたレプリカでしかなかった。

アクロバッターとレプリカによる二重の時間稼ぎによって、出久は本物のライドロンとともにまんまと逃げおおせることができたのだ。クライシスの面々は当然、この聖なる海の洞窟のことは知らない。

——ライドロンに魂を吹き込むために、少年はここを選んだ。

「……久しぶりだね。あなたのおかげで、僕は今またここに来ることができた」

しみじみと声をかける先には、がらんどろの空間が広がっている。しかしその奥深くに眠っているモノの存在が、少年の大きな翠眼には映っていたのだった。

——それは、ゴルゴムの一員でありながら出久とともに戦い、散っていったクジラ怪人の魂だ。

肉体を失った精神は、そういう目に見えないものとなって永遠に滞留するほかない。触れあうことも、言葉をかわすこともできない。しかし今、ここにこうしてライドロンという容れ物が存在する。

「——聖なる海の洞窟よ！」目をかっと思開いて、出久が叫ぶ。「僕に命を与え、甦らせたその力でどうか！……魂なき肉体と、肉体なき魂を結びつけてくれ！」

わかつている。想像を絶する巨悪に打ち勝つためには、人智を越えた奇跡に安易に頼ってはいけないのだと。

だから、

「僕がここに来るのはこれが最後だ！だからもう一度……もう一度だけ、僕を救ってほしい……！」

その場に膝き、祈るように両手を組む。どれほどの時間、そうしていただろうか。

『英雄よ。おまえの願い、確かに聞き届けた』

そんな声が、聞こえた気がした——

\*

ライドロンを破壊したものと信じきっているガンガデインは、余勢を駆って人々に対する攻撃を再開した。

街は破壊され、逃げまどう人々。ゴルゴムのときのような柵はないプロヒーローや警察が連携しながら立ち向かうが、RXさえ苦戦させる怪魔怪人を相手にはとても太刀打ちできない。幾つもの防衛ラインを突破され、やがてその魔の手は住宅街にまで及ぶ——佐原一家の住む旧秋月邸や、母の待つ団地の付近にまで。

「——させるかあッ!!」

こんな奴に、帰る場所を奪わせてたまるか。そんな強い意志のもと、出久はひとり戦場へ戻ってきた。

ガンガデインの砲撃をかわしつつ、再び——変身。

「僕は太陽の子……! 仮面ライダーBLACK——RXツ!!」

飛蝗の王と、戦車怪人が街中で激突する。——隙のないガンガデインに対し、RXは逆転の術をもたない。決定的なダメージを受けないよう注意しつつ、その進軍をせき止めるよりほかにない。

それでも。

(大丈夫……。僕は、勝てる!)

今度のRXには、その確信があった。理由など、今さら説明するまでもなからう。

——聖なる海の洞窟に、残してきたライドロン。

『……ライ、ダー……』

「ライドロン……」

「ライドロン……クジラ怪人——僕を、助けて!!」

その叫びはついに、ライドロンを”光の車”たらしめた。

聖なる海の洞窟から、海中をも自らの力で走り抜け、戦場に姿を現したライドロン。彼はその体当たりでもってガンガデインを撥ね飛ばし、鮮烈なデビューを飾った。

「ライドロン……きみは、クジラ怪人なんだね……?」



『……ああ』それは確かにクジラ怪人の声だった。『ライダー、オレは正義の戦士として生まれ変わった。この地球の美しい海を守るため、あなたの矛となり盾となろう』

「……ありがとう！」

並び立つ勇姿。一方で騙されていたと知り動揺するガンガデイン。

RXの乗り込んだライドロンは、そんな怪魔ロボットの攻撃をもともせず大地を駆け抜ける。そしてその体当たりはガンガデインのキヤタピラ部分を破壊し、彼の身体を横転させることに成功した。

『ぐお……う、動けん……！』

脚部の形状ゆえに、一度倒れれば自力では起き上がれない——意外だが自明の理ともいえる、致命的な弱点。

その隙を、RXは逃さない。

「リボルケインっ!!」

サンライザーから引き抜いた唯一絶対の“それ”が、遂にガンガデインを貫く。

『!!!』

注ぎ込まれる太陽エネルギー。ガンガデインは断末魔の叫びをあげる間もなく爆散する。仮面ライダー、そして第二の相棒となったライドロンの勝利だ——

\*

「……あのときは、本当に嬉しかったなあ。もう一度、チャンスをもらったような気がして」

『チャンス?』

「もう一度、ちゃんと仲間としてやり直すチャンス。きみもそうだったけど……ゴルゴムと戦ってた頃は、なんにも気遣ってあげられなかったから」

あの頃はただ、目の前のことに必死だった。たった12歳の子供が、ほとんど誰の助けもなく独りぼっちで戦っていたのだから無理もない。しかしせつかくできた仲間を大切にできていなかったという

事実は、未だに大きな後悔として残っていた。

「……でも結局、そういうところはあまり成長してないんだ。いつまでこんな、子供みたいに未熟なんだろう……僕」

『仕方ナイダロウ、マダ子供ナンダカラ』

「いや、そりやそうなんだけど」

『……心配スルナ。不足ガアルナラ、我々ガ補ウ。ソレガ、仲間トイウモノダロウ』

「アクロバッター……」

そう——心だけでも人間であろうとする限り、決して完璧になどなれない。出久だってそれは身に沁みて理解っている。だからもっともっと、仲間が欲しいのだ。

——何より。一度できた仲間を失うつもりは、毛頭なかった。

\*

水平線に、夕日が沈みゆく。

すっかり綺麗に片付けられた多古場海浜公園に、ふたりはたどり着いた。

「……やっぱり、ここにいた」

アクロバッターを停止させた出久が、砂浜を見遣りながらつぶやいた。果たしてそこにはライドロンと、その傍らに座る鋼のジョーの姿があった。

『イズク、行ッテヤレ。私ハココデ待ッテイルカラ』

「うん。……ありがとう、アクロバッター」

相棒の気遣いに感謝しつつ、出久は道路からひらりと飛び降りた。砂浜を踏みしめる音が、ライドロンたちのもとにまで届く。

「お、」

『↓』

『イズ、ク……』

「……」

夕日を浴びながらゆっくりと歩み寄ってくる主の姿を目の当たり

にして、ライドロンのエンジンがぶるぶると音をたてて震える。それに気づきつつも、ジョーはそつと歩きだした。

『おい、ジョー……』

心細くなつて呼び止めるライドロン。一瞬立ち止まるジョーだったが、結局のところはひらひらと右手を振つて去っていく。アニキと呼び慕うだけあつて、彼は出久の心根をよく理解していた。

入れ替わりに、出久が隣にやってくる。そのまま砂上に座り込んだ彼の表情は、ライドロンの予想に反して静かなものだった。目の前の、夕風のように。

『……心配したよ、ライドロン』

『……！』

表情に違わぬやさしい声に、ライドロンはとまどう。だが自分にはもう、そんな言葉をかけてもらう資格などないのだ。

「帰ろう、一緒に」

『……駄目だ……！』

「どうして？」

『ッ、そんなこと……！』

『俺は……あなたの守ろうとしている人間を、殺そうとしたんだぞ……！』

たとえ自分に害をなす者であつたとしても、同じ人間を殺めるなどヒーローとしてあつてはならないこと。怒りに我を忘れて、ライドロンはそんな主の信念に逆らつてしまった。

『俺は結局ゴルゴム怪人なんだ、人間を愛してはいないんだ！……だから、平然とあんなことができる……！』

「ライドロン……」

『……わかるんだ。あれは、気が触れての一時の過ちなどではない』  
もしもまた同じことがあつたなら、自分はまた同じことを繰り返すだろう。ライドロンは断言する。優しい主の情けを、断ち切ろうとするかのよう。

沈黙が降り、波の打ち寄せる音ばかりが響く。今度こそ出久は自分に失望しただろうと、そう思った。やがて彼は立ち上がり、自分を置

ききりにして去っていくのだと。

ややあつて、出久が口を開く――

「もし、そんなことがあつたら……」

『……………』

「また僕が、きみを止めるよ」

『え……………』

ライドロンは思わず主を見遣った。子供の面影を色濃く残した童顔が、柔らかな笑みに染まつている。それは慈しみの中に、ほんの少しの寂しさを内包したかのようないろを孕んでいた。

「何度でも、何度でも。必ず、僕が止めるから」

『イズク……………』

出久の瞳は、それがハツタリでもなんでもないことを雄弁に語っていた。心が揺れ動く。でも、それでも……………。

『方が……………止められなかったら?』

事に及ぶのが、今回のように出久の眼前であるとは限らない。その可能性にまで言及せねばいられない――もう、あとには退けなかった。

しかしそれは、出久とて同じことだったのだ。

「そのときは……………一緒にどこか、誰もいないところへ逃げようか」

『な……………!?!』

これにはライドロンも面食らった。流石に予想だにしない返答だった。

「山奥……………いや、きみの故郷の海がいいかな。海の底でふたり、静かに生きていくんだ。呼吸の問題はあるけど、キングストーンがまたなんとかしてくれるだろうし」

『そんな……………そんなことありえない! だってあなたは、優しい世界を創るために戦うんじゃないのか!? それを、俺ひとりのために……………』

「……………そうだね」

「でも――仲間だから」

『あ……………』

……………。

——…ああ、そうだ。そうだった。

出久がこうまで自分を見放さないことに、理屈なんてない。彼の心の中には、ふたつの孤独が深い傷痕となつて残っている。これ以上何も失いたくないし、失わせたくない——ただ、それだけなのだ。

そして自分も、出久を傷つけたくなどない——それが、答だった。

『……すまない、』

「……………」

『すまなかつた……イズク。俺も、あなたの仲間でいたい……これからもずっと……………』

「ライドロン……………」

想いのこもった微笑を浮かべた出久が、す、と身を寄せてくる。その体温を感じて人工の身体ゆえの冷たさを申し訳なく思ったが、ライドロンはそんな己を戒めた。この身体は、他ならぬ出久がくれたものなのだ。

夕日が水平線の果てに沈みきるその瞬間まで、彼らは静かに身を寄せ合っていた——

つづく

## 甦る悪夢（前）

薄暗い室内に、少女の柔らかな声が反響していた。

「——ええ、あの異邦人たちは結果的にいい露払いになってくださいましたわ。確か……クライシス帝国とか言いましたか」

応える、男の声。

「だが、こちららも準備万端とはいかないよ。あの子はよく育っているが、まだまだ子供だ。仮面ライダーどころか、オールマイトも始末できるかどうか」

「始末できればそれでよし、できずとも構いませんわ。わたくしたちが健在であるという現実を、彼に見せつけるだけでも無意味ではありません」

「私たちが来た」か……ふふ、皮肉だね」

男の姿は暗がりにあつてよく見えない。ただ随分大柄な、壮年の男性であることはわかる。一方の少女は純白のドレスを纏い、さらにベールで顔を隠している。さながら花嫁のような姿。

「わたくしたちは過去の亡霊などではない……歴史はまた、ここから始まるのです。——ねえ、そうでしょう？」

少女が慈しむような視線を向ける先、そこには大人ひとりを収容できる大きなカプセルがあった。培養液に満たされたその内部に、全身を小さきまざまなチューブにつながれた少年の姿。瞼は固く閉ざされ、身じろぎひとつしようとはしない。——もしも緑谷出久がこれを目の当たりにしていたら、きっと我を忘れてカプセルにすがりついていただろう。

\*

その出久はというと、以前——やむをえない事情とはいえ——遅刻ぎりぎりだったのとは打って変わって、随分早い時間から登校していた。

「すまないね緑谷くん、朝早くから呼び出してしまつて」

「気にしないでください塚内さん。ヒーローは常在戦場ですから」

こともなげに言う出久に対し、塚内直正はくすりと笑った。根津校長もそれに追隨する——担任のイレイザーヘッドこと相澤消太は仏頂面のままだった。が。

「そういうえば、オールマイトは？」

「……あの人なら遅刻だ」

「ええっ」

肝心の平和の象徴が？ただし当然、それには訳があった。通勤途中に何件も事件に遭遇し、それらをことごとく処理していたがために遅れてしまっているのだという。流石というほかないが、身体のこともある。

「ま、彼にはあとで私から話しておくからご心配なく。——さて、時間も限られていることだし本題に移ろうか」

場の空気がぴりりと引き締まる。神妙な面持ちで、塚内は手元の資料に目を落とした。

「この前のマスコミ侵入事件の際、緑谷くんを襲った犯人についてだが……結論から言うと、なんらかの組織との繋がりは確認できていない」

「え……」

目を丸くする出久だったが、具体的に言葉にまではしなかった。塚内の言葉には続きがあったのだ。

「あの仮面ライダーを殺せば全世界に名を知らしめることができると思つたと、本人は供述している。早い話がチンピラだな……現状わかっている限りなら」

わざわざそう付け加えるあたり、塚内自身はその結論に納得していないことが伝わってくる。もつと言え、この場にいる全員がそうだった。

「交友関係はもう洗つてあるんだよね？」根津が訊く。

「もちろん。少なくとも高邁な思想をお持ちの連中との交際は認められませんでした。元ゴルゴム構成員とか、ね」

「……………」

出久はしずかに拳を握りしめた。脳裏をよぎる面々の顔は、いずれも一定以上の社会的地位をもつものばかり。クライシス帝国を崩壊させてから今までの約一年半の間で、あらかたその炙り出しは済ませたつもりだったが……あるいは彼らにも手足となる人間はいたのかもしれない。

「金で雇われたという可能性は考えられませんか」相澤の指摘。

「ええ、組織的関与があるとすれば。現在そのセンで捜査しているところですよ」

マスコミが雄英の警備を破って侵入できたことと、まったくの無関係であるはずがないのだ。大人たちはそう確信していたし、この場では唯一の少年である出久もまた、別の角度から大いなる悪意の存在を疑っていた。

(あ のとき感じた異様な気配は、絶対にあの男じゃなかった)

見えない悪意が、静かに爪を研ぎ続けている。そんな予感が、間もなく現実になろうとしていた――

\*

ヒーロー科の主戦場は午後であることは、既に言うまでもないことだろう。

今日も今日とて彼らは雄英カリキュラムの真骨頂、ヒーロー基礎学に臨もうとしていた。

彼らに与えられたオーダーは、

(レスキュー  
救助訓練……かあ)

災害や凶悪犯罪に巻き込まれ、自力では己の命を守れない人々を救助する――当然、ヒーローに求められる責務。むしろ、それを専門にしているプロヒーローすらいるくらいだ。

ただ”仮面ライダー”は基本的にゴルゴム怪人やクライシスの怪魔怪人との戦いが中心だったから、今回はクラスメイトたちとさほど変わらない立場。しっかりと勉強させてもらおうと心する。



訓練の性質上、今回はコスチュームの着用は自由だと言われたため、出久は身軽に動ける雄英指定の青い体操服に、信彦の形見であるグローブというスタイルで臨むことにした。彼の場合、そもそも本場の戦闘服は仮面ライダーの姿なのだが。

そして訓練場は少し離れたところにあるので、移動はバスで行うことになった。規格外の連続に感覚が麻痺しつつある生徒たちは、もういちいち驚くことはないのだった――

ピピイと、ホイッスルの音が鳴り響く。

「A組集合！バスの席順でスムーズにいくよう、番号順で二列に並ぼう!!」

ぱりつとした大声で指示を出すのは、かの気だるげな担任ではなく――”緑谷裁定”により学級委員長として選出された、飯田天哉である。

(天哉くん……フルスロットル)

出久は苦笑を浮かべたが、結局は彼も含めクラス全体がその言葉に従った。生真面目な硬骨漢であることは疑いようのない飯田だが、高圧的であったり嫌みな面はまったくなく、皆に親身になって接することが委員長の責務と考えているようだった。その結果として、彼は就任ひと月足らずで既にクラスメイトたちから信任を得ている。

無論、ごく一部の”例外”は存在するのだが……ここ最近、彼はずっと静かだった。個性に反して、心のうちは煮え切らないでいるかのように。

(……かつちゃん)

それぞれの思いを抱えて、バスは走り出す――彼らにとっての、ターニングポイントへ。

\*

学生20名を乗せたバスとなれば、いかに姦しいのを嫌う担任がいるとあっても静寂を保っていられるわけがない。

「くっ……！……こういうタイプのバスだったか……！」

出久の正面でがっくりと項垂れる飯田。その座り方からわかるように、いわゆる路線バスのような座席配置だったのだ。飯田の指示は結果的に無意味なものとなってしまったわけだが、こればかりは致し方ない。

微笑ましい思いでその姿を見つめていると、隣に座る蛙顔の少女が声をかけてきた。

「私思ったことはなんでも言っちゃうの、緑谷ちゃん」

「ん、何？蛙吹さん」

「“梅雨ちゃん”と呼んで」と、彼女——蛙吹梅雨は言った。杏子に始まり、家族同然の女性が複数いる出久にはさほど抵抗のない要望だった。

「あなたの”個性”、なんだか普通とは少し違う気がするの」

「へあ!？」流石にこれには焦る。「ふ、普通と違うというのは……？」

その吸い込まれそうな黒い瞳は、ブラックホールのようである。実深い思慮を懐いている……出久にはそう感じられた。キングストーンと生体改造によってもたらされた世紀王の力は、確かに個性とは似て非なるもの。無論自分にはオールマイトから預かったワン・フォー・オールもあるけれど、いずれにせよ秘密であることには違いない。

核心に触れないまま上手く説明できる自信がなく、出久はわざと曲解しているふりをすることを選んだ。

「たっ確かに傍から見ればチート個性だもんね!?僕なんかには勿体なかったとは自分でもそう、思うけど……」

「そりゃ謙遜が過ぎるぜ緑谷!」切島鋭児郎が口を挟む。「スゲー個性もってても、ガキのうちなんか振り回されるのがフツーだぜ?それがあれだけ戦えたのは、おめエだからできたことだと思っせ!」

「その点、俺の個性は地味だからなあ……」と、腕を硬化させながらぼやく。出久にはそれこそ謙遜だと思った。

「そんなことない、すぐくカツコイイ個性だと思うよ。プロにも十分通用するよ!例えば——」

己の所見を早口で述べる出久。これは仮面ライダーになる以前の彼の性癖——いわゆる”クソナード”の部分であった。

「なんか意外だよなあ。仮面ライダーが同じ年ってだけでもビックリだけど、こういうヤツだったなんてさ」

「あ……引いた、かな？」

抑えているつもりだが、ついつい昔の木偶の坊の部分が漏れ出てしまう。出久は己を戒めた。等身大の自分を知ってもらいたいとは思うが、元がそう褒められた性格でない以上計算して出していないと幻滅されることにもなりかねない。

幸いにして、”意外”と発言した上鳴電気は「んなことねえよ」と否定してくれた。

「これでホラ、爆豪とか轟みてーなヤツだったら毎日生きた心地がしねーもん」

「あ、アハハ……」

クールで他人の一举一動に関心のなさそうな轟焦凍はともかく、勝己のことまでイジるとは！昔の出久だったら、それこそ生きた心地がしなかっただろう。

別に今は恐れる理由もないのだが、長年の癖で恐る恐るふたりのほうを見遣った。ちようど彼らはバス後方のボックスシートの前後に座っている。轟は案の定聞いているのかもわからないような表情で腕組みをしているが、

「……………」

「……………」

一瞬、目が合った。にもかかわらず逸らされてしまった。その視線は茫洋と窓の外を泳いでいる。初めての対人訓練の日から、彼とはずっとぎくしゃくとした——以前はそうでなかったのかと聞かれればそれまでだが——関係が続いている。打開するきっかけは、未だに掴めないままだ。

焦っても仕方がないことはわかっている。彼とは十年にも渡る断絶があったのだ、雄英の三年間で関係の在り方を模索していくしかない。

出久が切島たちの話の輪に戻って程なく、担任からもう到着すると声がかかった。

——そこは、ドーム型の施設だった。

『待っていましたよ、皆さん』

出迎えに現れた、少年のような声を発する小柄な宇宙服の男。その姿を目の当たりにして、感嘆の声を発したのは出久ひとりではなかった。

”スペースヒーロー・13号”。名の知れたプロヒーローである彼もまた、雄英で教鞭を振るうひとり。出久の隣で、とりわけお茶子が黄色い悲鳴をあげている。そういえば以前、好きなヒーロー談義になったとき13号の名を挙げていたことを、出久は思い出した。

『では早速、中に入りましょう』

「よろしくお願いします！」

礼儀正しく一礼してから、彼のあとに続く。流石にそのためにかかった数秒についてまで、相澤はとやかく言わなかった。ヒーローにはそうした行儀作用も肝要なのだ。

さて、諸氏は“USJ”と言われて何を思い浮かべるだろうか。関西にある、某大型テーマパークの略称……少なくとも少年たちが連想したのはそれだった。出久などは去年修学旅行で行ったばかりなので、とりわけ鮮明な記憶をもっている。

——雄英高校においては、まったく異なる意味があった。

『水難事故、土砂災害、火災……などなど。あらゆる事故や災害を想定し、僕がつくった演習場です』

つまり、“ウソの災害や事故ルーム”——略して、USJ。

(いやUSJだけでも！)

無理矢理こじつけるならば、ヒーローにとって基本中の基本である人命救助について様々な方向から学べるという意味で、夢の楽園と言えなくもない……のだろうか？

ともあれ相変わらずビッグスケール極まりなさに舌を巻いている生徒諸君を尻目に、怪訝な表情を浮かべた相澤が13号に耳打ちす

る。

「13号、オールマイトはどうした？ここで待ち合わせるはずだが」

『それが……』

刹那、相澤は深々とため息をついていた。通勤途中にヴィラン退治に勤しみまくったオールマイトは、そのために体力を使い果たしてしまっただけというのだ。緑谷出久を除く生徒には、活動限界のことは知らされていない。

それにしてもヒーロー馬鹿だ、と思う。身体を動かすより先に思考するタイプの相澤としては、ああいう手合いの気持ちは時に理解しがたいものがある。

「……まあ、仕方がないか」

オールマイトの影響力は計り知れないが、教師としてのスキルでみれば自分と13号のほうが上だ。彼なしでも授業にはなる。生徒に目を向けると出久が気遣わしげな視線を送ってきていたので、「問題ない」とアイコンタクトで返しておくのも忘れない。彼の立場は難しいのだ。

というわけで、早々に13号が口火を切った——お小言という形で。

『皆さんご存知かもしれませんが、僕の個性は“ブラックホール”です。なんでも吸い込みます』

その力を利用して、災害や事故から大勢の人々を救出してきた。多大なる功績は、皆の知るところ。

しかし使い方次第では、容易く人を殺めることができる——重く響く言葉。

皆の視線が一瞬、出久に集中する。そう、彼は一年半前まで仮面ライダーとして、数えきれないほどの怪人を屠ってきた。人間より強力な怪人をだ。

そしてひとりを除くクラスメイトたちには知るよしもないことだが、間接的にはいえ彼はクライシスの民50億もの命を奪っている。命を奪うということに対して、いま最も真に迫る思いで聞いているのは間違いなく出久だった。

『危うさを知ると同時に、個性をいかに”救ける”ために活かせるか……それをこの訓練で学んでほしいと思います。僕からは以上です、ご清聴ありがとうございます!』

13号が一礼する——と、それまで借りてきた猫のようにおとなしくしていた生徒の大多数が一斉に歓声をあげた。とうに自覚している出久でさえその一員だったのだから、いかに彼の言葉が心に響いたか。

(そうだ。僕はこれから先、命を奪わない戦いをしなくちゃならない)(やつと、やつとそう言えるところまで来たんだ——)

ほのかな喜び。——しかしそれは、無情にも容易く破られるものではなかった。

凶兆を告げるキングストーンの鼓動が、腹の奥で重々しく響いた。「ッ!」

ぞくりと背中が粟立つ。感じるは、悪意……それもかつて、幾度となく味わったことのある……。

「……デクくん、どしたん?」

「……るんだ」

「?」

「皆つ、早くここから逃げるんだ!!」

唐突な鬼気迫る叫びを、まともに受け止められる者がいようはずもない。教師ふたりでさえ当惑している。

ゆえに、間に合わなかった。

バチ、と音をたてて照明が切れ、中央の噴水の前に突如としてブラックホールが出現する。——そこから覗く、血に塗れたような赤い瞳。

「全員、ひとかたまりになって動くな!」焦燥に塗れた声をあげる相澤。「13号、生徒を守れ!」

突然様子が変わった出久、珍しく焦りを露にしている相澤を目の当たりにして、「あれ、もう始まってんの?」などと呑気に構えていた生徒たちにようやく緊張が走った。

「そう、これは演習などではない。」

「ヴェイランの、襲撃——蠢いていた悪意が、遂に牙を剥いたのだ。」

## 甦る悪夢（後）

「あれは、ヴィランだ……！」

相澤消太の言葉に、生徒たちの緊張は最高潮に達していた。

一方で、

『13号にイレイザーヘッドですか……。先日いただいた教師側のカリキュラムでは、オールマイトもここにいるはずなのですが』

全身あちこちに手の意匠を身に纏った瘦身の青年……。ではなく。彼や彼に率いられたヴィランが現れた黒い霧から、声が響く。

それに応えるでもなく、青年は独りごちた。

「どこだよ……。せっかく大衆引き連れてきたつてのにさ。オールマイト……。平和の象徴、いないなんて……」

「——子供を殺せば、来るのかな？」

「……！」

この男だ！出久はそう確信した。少なくとも怪人の類いとは異なる、生身の人間であるように感じる。しかしこの、異様な気配。

「先生!!」

13号の庇護から半ば強引に抜け出して、独り矢面に立つ相澤のもとへ走る。

「な、緑谷……!?!」

「あの兵隊はお願いします。僕があの司令塔らしき男を無力化して、可能なら霧の向こうに……！」

あの霧はワープゲートか何かだと、出久は早くも当たりをつけていた。ならば、その向こうは敵の本拠である可能性が高い。こいつらの全貌をすぐにでも掴み、可能ならば壊滅させる。遭遇から数分でもないうちに彼がそこまで逸るのは、このヴィランがただの悪人集団ではないという直感によるものだった。

当然、まだ付き合いの浅い相澤にはそこまで察しがつかない。得体の知れないのは、出久の思考も同じだった。

「……おまえはまだ仮免も持っていないんだぞ。以前のことはお目こ



ぼしてもらっただけだということをおぼれるな！」

「ッ、……わかってます！でもあいつら、ただのヴィランじゃない気がするんだ！」

「何……？」

相澤は訊き返したが、出久の目はもう尋常なものではなかった。

「ここで奴らを止めなきや……また、大勢の命が……！」

「緑谷……」

しかし、相澤が是非を述べる機会は与えられなかった。

出久が”兵隊”と呼んだ無数のヴィランたちが、一斉に襲いかかってきたのだ。

「ッ！」

応戦しようとする相澤。しかし出久の行動はそれより速かった。周囲にバチバチと閃光を振り撒いたかと思えば、

一瞬にして、直線上のヴィランが吹き飛んでいた。

「!?」

そのときばかりは、ヒーローもヴィランも、生徒たちも思いはひとつ。ただただ、驚愕。

「変身、してねえよな……？」

「それでもあいつ、あんなスピードで……」

「……いや、彼は入試のときからそうだった」

「確かにNE☆」

あのときの不敵な——今にして思えばやや照れも含んだ——笑みを、同じ会場にいた面々は思い起こしていた。

——そして、常人には目視できない速さで飛ぶ出久。変身せずそれができるのは、強化された肉体にワン・フォー・オールが完璧に馴染んでいるおかげだった。

道を塞ぐヴィランを一瞬一瞬でぶちのめしながら、一心不乱に彼が目指すは漆黒のゲート。そして、その前に立つ死に神のような青年。

(まずはあいつを……確保する！)

司令塔を潰せば、残るは烏合の衆。レイザーヘッドと13号がいればどうにでもなると出久は判断したし、それは事実だった。

そしてかの青年、外見こそ不気味だがいち人間でしかないことに違  
いはない。

「そりゃオレを狙うよなあ……仮面ライダー?」

——だからこそ……なんの対策もないわけがなかった。

「ほら、さっさとやれよ」

刹那……青年の肩越し、ブラックホールから何かが突き出す。それ  
は——手だった。

「ッ!?!」

危機を察知した出久は停止——いや間に合わないと、変身しようと  
する。しかしその手に放たれた光に呑み込まれるほうが、寸分早かつ  
た。

「緑谷!?!」

相澤が声をあげる。勢いを完全に失い、光の中から墜落する出久の  
姿。

「……ッ、何、した……!?!」

「すぐにわかるよ」

くつくつと嘲う青年。対する出久は、身を焦がすような灼熱に襲わ  
れていた。細胞すべてが、ぐつぐつと煮えたぎるような錯覚。

「ッ、こんな……もの……!」

その苦痛を押しして、立ち上がる。刹那、背後から当惑の音が……  
ヴィランからは、歓声があがった。

「緑谷、おまえ……その姿……」

「え……?」

熱が引いていく。同時に、それに糊塗されていただろう違和感が  
襲ってきた。身体のラインがわずかに出るくらいにはフィットして  
いた体操服が、やけに弛くなっている。それに……視線が低い。

「どうなって……ッ!?!」

——声も、甲高い。元々男としては高めの声だと自認してはいる  
が、それにしたってこんな、変声期を迎える前のような……。

(まさか……!?!?)

そう——出久は“縮んで”いた。正確には、年齢を退行させられた

というべきか。

おそらくは、ヴィランの個性によって。

「へへッ、やったぜ！ぎまーみる仮面ライダー！」

ブラックホールから意気揚々と飛び出してきて、そう下卑た声を発するヴィラン。罨（トラップ）としての役割を彼は成し遂げた……と、思いきや。

「……なに頑張った気になってんの、おまえ？」

「ヒッ!？」

青年は相手を射殺さんばかりの眼で彼を睨みつけていた。

「赤ん坊にまで退行させろって言ったろ……使えないなあ、おまえ」

「い、いや、オレだってそのつもりで……」

「——仕方がありませんわ、死柄木弔」

刹那響く、少女の声。それは場に不釣り合いなほど優美で、柔らかなものだった。

同時に、ブラックホールの中から声の主であろう純白のドレスの少女が現れる——タキシード姿の、無機質な仮面を被った少年とともに。

「相手は”世紀王”ですもの、不完全であれ効き目があったというだけでもよしとしなくては」

「……ああ、そう」

気だるげにそっぽを向く青年——死柄木弔を一瞥すると、少女の視線は出久を見据えた。吸い込まれそうな漆黒の瞳。その容貌に見覚えはないが……死柄木のそれとも異なる、尋常でない気配を感じるのはなぜか。隣の、茫洋と立ち尽くしている仮面の少年からも。

「ふふ……その可愛いお姿。お久しぶりですね、——ブラックサン?」

「……!？」

ブラックサン——仮面ライダーの、本当の名前。ゴルゴムの絶対神たる創世王に至る過渡期の存在、世紀王としての。

それは出久がとうに捨てたはずの名前だった。ゆえに知るのは、ゴルゴムに連なる者だけのはず。

「おまえ……誰なんだ……?」

唸るような声で訊く。——本当は、予感があつた。ただ、それが的中することなどあつてはならないと思いたかつたのだ。

しかし現実には、どこまでもままならないものだった。

「誰とはあまりに情けないお言葉。ただひとり生き残つた世紀王様が、忠実なるしもべの顔をお忘れになるなんて」

「何……?」

「……いえ、ご無礼をいたしました。あなたがご存知の顔は……こうでしたわね」

す、と己の顔に手をかざす少女。そして、花嫁のようなベールがゆっくりと脱ぎ捨てられる——

そして出久は、息を呑んだ。出久ばかりではない、その顔を見た面々すべてが、本能的な畏怖を身に刻んでいた。

あやしく光る、純白の皮膚。左目の周囲を覆う痣のような紺碧は、彼女がヒトを超越する者である証に他ならない。

その変化はほとんど一瞬のことで、数秒のうちに彼女の顔はもとの少女のそれへと戻つていた。しかし出久の脳裏には、おぞましい記憶が走馬灯のようによみがえる。

「そんな、まさか……。どうしておまえが……!?!」

「……………」

「ビシユム……!」

——大神官ビシユム。暗黒結社ゴルゴムの大幹部たる三神官のひとりとして、幾度となく仮面ライダーを……緑谷出久を苦しめてきた存在。しかし最期は出久を道連れにしようとして果たせず、シャドームーンの名を叫びながら壮絶な死を遂げた……はずだった。その瞬間を、他ならぬ出久自身目撃している。

にもかかわらず、彼女がなぜ生きてここにいる?姿かたちが変わつているとはいえ——

「緑谷ツ!!」

「!」

相澤の呼び声で出久は我に返った。ビシユムを名乗る少女に気を取られているうちに、気づけば木っ端のヴィラン集団に囲まれつつある。彼らの目は一様に、あの仮面ライダーをいたぶることができるといふ嗜虐心に満ちあふれていた。

「チツ……13号、避難開始!学校に連絡を。センサーの対策も頭にあるヴィランだ、電波系の奴が妨害してる可能性もある……上鳴、おまえも個性で連絡試せ」一通り指示を飛ばしつつ、「緑谷は、俺が救出する——ッ!」

言うが早いのか、相澤は跳躍していた——ヴィランの集団めがけて。

当然、ヴィランの面々はご自慢の個性でもって攻撃を仕掛けようとする。しかし、

「な……!?!」

「個性が……出ねえ!?!」

相澤が”抹消”の個性を発動させたことで、彼らはことごとく無力化されてしまった。オールマイトや13号とは異なり、並みのヴィランは抹消ヒーロー・イレイザーヘッドを知らない者も多い。ゆえに、狼狽するのも無理からぬことで。

そうこうしているうちに、彼らはマフラー代わりにしている捕縛布により絡めとられていた。

個性が消される——それを知ったヴィランのうち、異形型の者が殴りかかる。発動させるまでもなくもとより肉体が変質している場合、そもそも”消す”ことができるか……答は否だ。

だが、相澤の戦い方は個性一辺倒ではなかった。巨大な拳をぎりぎりまでひきつけてからかわし、その顔面にカウンターを喰らわす。細身から繰り出されるとは思えない信じられない威力が、異形型ヴィランを吹っ飛ばした。

その戦いぶりに、数年ぶん幼い姿にされた出久は舌を巻いていた。

(流石イレイザーヘッド……多対一こそ得意分野だったのか)

「緑谷!」

「!」

再び名が呼ばれる。——そうだ、今のうちに逃げなければ。

ワン・フォー・オールは発動しないようなので、ずり落ちそうになる服を押さえながら彼は懸命に走った。そのようなハンデはあるが、不思議と身体は軽い。

13号や同級生たちのもとへ駆けつけつつ、背後を見遣る。——ビシユムを名乗る少女と、視線がかち合う。ただ、気にかかったのは彼女と行動をともししている仮面の少年だった。

(あいつがビシユムだとするなら……まさか、ダロムかバラオム?)

この手で滅ぼした、残るふたりの大神官を思い返す。ビシユムが生き返っているのだからそうであっても不思議はないが、それとは異なる気配を感じる。どこか、懐かしいような——

『緑谷くん、こちらです!』

「急ぐんだ緑谷くん!」

「ッ、うん……!」

随分大きくなってしまった友人に手を引かれ、さらに走る。これ仲間とは合流できた。相澤を殿に残していくことは気がかりだったが、こんな姿にされてしまった以上、いったんは皆と一緒に行動するほかない。孤独な戦いを経ているからこそ、出久にはそういう辨えがあった。

走る20人の生徒と、ひとりの教師。出入口はもうすぐそこだ。

——ほっと胸を撫で下ろしかけたのもつかの間……暗黒の”ワーブゲート”が、彼らを地獄へと陥れた。

\*

苦しい。

息を吐き出すたびに、無数のあぶくが浮き上がっていく。

(水の、中……!)

意識をはつきりさせた出久は、あのブラックホールのような暗黒によって水中に転移させられたのだと思いつつ。水中といっても外

部ではなく、USJ内の——おそらくは水難救助を想定した——エリアのひとつだろう。しかしかなりの水深があるようだ。

こんなところで襲われたらひとたまりもないと、出久はまっすぐ上を目指した。敵に囲まれるリスクを考えても、文字通り地に足がつくフィールドであつたほうがいい。

しかし、さながら人喰い鮫のごとく。鼻のきくヴィランのひとりが、既に出久を捕捉していた。水中活動に適応した異形型の肉体を武器に、一気呵成に迫りくる。

「……！」

ワン・フォー・オールも使えない身体である今、逃げるすべはない。危機感に支配されかかったとき、腹の奥でなにかがどくりと疼く。

これはと思つた瞬間、ヴィランは横つ面を叩かれるように吹き飛ばされていった。同時に出久の身体は絡めとられ、地上へと運ばれる。少なくとも敵でないことは理解し、身を任せることにした彼を最終的に迎えたのは水上に浮かぶ一艘の船だつた。

同時に水面から顔を出したのは——蛙吹梅雨と、峰田実。

「ふう……間一髪だつたわ」

「ああ、カエルのわりになかなかどうしていいおっぱい……！」

刹那、峰田は甲板に勢いよく叩きつけられていた。

「うわあ……」

「緑谷ちゃん、大丈夫？」

「！、う、うん、なんとか……。ありがとう、梅雨ちゃん」

「どういたしまして」

自らも船が上がってきつつ、はにかむ梅雨。出久もつられて笑い返した。一瞬の安息、しかしすぐに表情を引き締めた。

「大変なことになってしまったわね……」

「……うん。あの黒い影のヴィランが言つてたことからして、標的はオールマイト……でも……」

あの少女が本当にビシユムなら、襲撃者たちはゴルゴムの傘下なし同盟を結んだ勢力ということになる。狙いは本当にオールマイト

だけなのか？自分もそうなのではないか。

考えることはまだある。あの黒い影のヴィランは、「オールマイルトがいるはず」と言った——つまり、事前に雄英のカリキュラムを知っていたということ。

「この前のマスコミ、チンピラ……全部、周到に用意された計画だったってことか……！くそっ……」

「……そういえば緑谷ちゃん、あちらにいた女の子のこと、知っている様子だったわね」

「！」

梅雨の言葉に意識を引き戻される。——そうだ、話しておかねばなるまい。

「……あいつは、とうに死んだはずのゴルゴムの大幹部の名前を名乗ったんだ。それが本当かはわからないけど……」

「もし本当だとしたら、ゴルゴムの残党がこの襲撃に関与しているということだね」

「うん……ごめん、僕のせいで」

「どうして緑谷ちゃんが謝るの？あなたにはなんの罪もないわ」

「それは……」

自分がゴルゴムの世紀王だからです、と言えたら少しは心も軽くなるのだろうか。現実には、口をつぐむほかなかった——今は、まだ。

「でもよでもよ！」峰田が口を挟む。「こっちにはオールマイルトに仮面ライダーまでいるんだぜ？いくらゴルゴムが協力してるって、あんなチンピラヴィラン集めたところで……」

「峰田ちゃん、その仮面ライダーは子供にされてしまったのよ」

「!!」

口を開けたまま言葉を失う峰田。その表情がさっと青ざめていく。

「オールマイルトにしても、殺せる算段が整っていると考えるほうが自然だわ」

「……そうだね。それにあのヴィラン、僕ら生徒をなぶり殺しにするとも言った」

「あ……あ……」



ともあれ、今できることはそれほど多くはない。多くはないが、あ  
るいは――

その”可能性”を考えていると、梅雨が何かを察知した。――水中  
型ヴィランたちが、迫りつつある。

「かつ……困まれたア!!?」

悲鳴のような声をあげる峰田。対する梅雨は……どこまでも冷静  
だった。

「水中に下りるわ。峰田ちゃん、できれば援護してちょうだい」

「下りるって……ひとりで戦うつもりかよ!? 無茶だ、相手はひとりふ  
たりじゃないんだぞ?!」

「わかってるわ、でもこの状況じゃやるしかないもの」

戦って勝つ――助かるすべは、他にない。梅雨にはそれがわかって  
いた。

怖くないのかと、峰田は問う。そんなの、怖いに決まっているじゃ  
ないか。そう心のうちでは思ったが、決して口には出さない。形にし  
てしまえば、今にも身体が震え出しそうだったから。

そのとき、

「ひとりじゃないよ」

そう告げたのは他でもない、緑谷出久だった。

「僕も、一緒に戦うから」

「ハア!?!」

「何を言っているの緑谷ちゃん、あなたは今、子供の身体なのよ!?!」

あの絶対的な力は、今この瞬間発揮できない――梅雨も峰田も、そ  
う考えている。確かにそれは真実だったが……完全に無力化されて  
しまったことと同義ではなかった。

「知らないかな、ふたりとも」あえて挑戦的な笑みを浮かべ、「僕が初  
めて”変身”したのは、12歳のときだよ?」

「……!」

目を見開くふたりの前で、出久は己が拳に力を込めた。親友の形見  
のグローブが、ギリギリと軋んだ音をたてる。

「だから見ていて、僕の――変身!」

少年の翠眼が、赤い輝きを放とうとしていた――

つづく

ボーイ・ミーツ……（前）

「だから見ていて、僕の——変身！」

少年の拳に力がこもり、身に着けたグローブが軋んだ音をたてる。その光景を見守っていた蛙吹梅雨と峰田実は、ただただ息を呑むことしかできない。元々の翠から、様変わりした赤い瞳。その周囲に広がっていく、放射性の皺。

——そして腹部から、眩い光が放たれた。

「！、あ……」

「緑谷ちゃん……その姿は……」

12歳の緑谷出久の姿は、もうそこにはなかった。そこに立つのは漆黒の鎧に身を包んだ、バツタに似た姿の異形の王子。

唯一生身の露出した間接部から、灼熱の蒸気が発せられる。それでもなお真つ赤な複眼を滾らせながら、彼は叫んだ。

「仮面ライダー——BLACKツ!!」

\*

分断された生徒たちは、それぞれが命をかけた戦いを強いられていた。

——土砂ゾーン

「……子供ひとりに情けねえな」

首まで凍りついたヴィランを前に、立ち尽くす少年——轟焦凍。

「しつかりしろよ、大人だろ」

冷たく刺すような、声音と表情。氷漬けにされたヴィランは、彼がフレイルムヒーロー・エンデヴァアの息子であることを知らなかった。

単独で本物のヴィランを完封しているのは彼くらいにしても、各々たまたま付近に飛ばされた仲間と協力してこの難局に立ち向かって

いた。

その中でもとりわけ苛烈に、野獣のごとく戦う少年がいる。

「死イねええええッ!!」

咆哮に違わぬ爆炎が、襲ってくるヴィランを容赦なく吹き飛ばす。見るからに屈強な異形型ヴィランなだけあって、地面に叩きつけられようとすぐさま起き上がろうとするのだが。

「お、りゃあああッ!!」

肘から先を硬化させた切島鋭児郎が、力いっぱい拳を脳天に振り下ろす。流石にこの一撃に耐えられる者はなく、次の瞬間にはひとりの例外なく昏倒していた。

「ふいー……案外イケるぜ、俺たちー!」

爆豪勝己とふたり飛ばされてきたときはどうなるかと正直思ったが、存外彼とは息が合う——と、切島は思った。無論、彼自身の人の好きゆえでもあるのだが。

「クソ髪イ！次だ!!」

「ッ、おうよー!」

承りつつも、切島はどこか釈然としないものを感じていた。敵を一瞬も早く殲滅しようとして焦っている……それはわかる。だがこの危機的状况を脱しようというより、もっと別の——

(……まさか)

爆豪に限ってそんなこと、と思いつつ。背中合わせになったところで、思いきって切り出してみることにした。

「心配だよな……緑谷のこと。おめエ、幼なじみなんだろう?」

「ア、ア!!だからなんだッ、心配なんざ誰がするか!!」

思いつきり罵声を浴びせられ、切島は思わず首をすくめた。あまりの唸りように、未だ残っているヴィランも一瞬困惑を露にするありさまだった。

そうして完全否定しておきながら、勝己はぼそりとつぶやく。

「……アイツは、仮面ライダーなんぞになる前は何もできねーウスノ口の木偶の坊だったんだ」

「へ?あ、ああ……」

いくら何でも酷い言い様だと思ったが、状況が状況なので口には出さなかった。

「だから俺はアイツを……なのに——ッ!？」

不意に鋭い頭痛が襲ってきて、たまらず額のあたりを押さえる。同時に、フラッシュバックする光景。怯える子供の出久を庇い、異形の怪物と対峙する己の姿。

「バクゴー……!?!どうした!？」

「ッ、なんでもねえわ!——オラアッ、死ねえ!!」

襲いくるヴィランに爆破を浴びせることで、勝己は当惑を振り払った。己の中に、あつてはならない空白があることはわかっている。それがデクに纏わるものであることも。

「俺は……死んでもアイツになんざ頼らねえ……!」

勝己の表層しか知らない者が聞けばそれは、頑迷で傲慢な考えとは思われないだろうが。

(爆豪……漢らしいぜ!)

決して己を曲げないその姿勢に、切島はより深いところで感銘を受けていたのだった。

\*

仮面ライダーBLACK——世紀王ブラックサン。

「バッタ男の肉体を強化外骨格”リプラスフォーム”で包んだかの異形の戦士は、地上に生ける昆虫の遺伝子をもつ以上、水中での活動を得手とはしていない。バイオライダーのみ例外として無制限に活動できるが、身体を退行させられた今、その姿になれないのは言うまでもなからう。

(水中じゃ、長くは活動できない)

(動きもきつと、ヴィランたちのほうが素早いだろう)

「それでも——僕は、負けないッ!!」

ライダーは、躊躇なく水の中へと飛び込んだ。大量の水飛沫があが

り、その漆黒の身体を覆い隠す。

「……………」

呼吸ができない中で、拳を握りしめるその姿。その鋭い威圧感に一瞬怖じ気づくヴィランたちだが、持ち前の自惚れが彼らを駆り立てた。飛んで火に入る…………もとい、水に入るなんとやら。

「水中で、オレたちに勝てると思ってるのかあ!!」

そう、それがすべてだった。一斉に襲いかかるヴィランたち。元々の見立てどおり、彼らのスピードはかなりのものだ。しかもゴルゴム怪人と異なり、複数で同時に攻めかかってくる。

(ならまずは…………数を減らす!!)

体力に余裕があるうちに、攻めきる——！ある意味賭けに打って出た仮面ライダーBLACKは、最初から切り札を切ることを躊躇しなかった。

「キングストーン…………フラッシュ!!」

ベルトに収められたキングストーンが激しい閃光を放つ。

「グッ…………目眩ましかな!」

「こんなモノ、天下の仮面ライダー様が聞いて呆れるぜ!」

彼らがそれをただの牽制と捉えるのも無理はなかった。そもそもキングストーンの存在自体、ただのヴィランである彼らには知るよしもないのだから。

——無知蒙昧なる敵対者たちに、王の象徴は容赦なく牙を剥いた。

「…………熱ぢっ!」

急速に水温が上昇し、悶えるヴィランたち。そんなものは序章にすぎなかった。

「?、な、なんだア?」

揺れている。地震?——彼らには知るよしもなかったが、この水難ゾーンを除いては揺れなどいつさいなかった。

ある瞬間、揺れはぴたりと収まり。

「——ぬわ——つつ!!」

彼ら全員、熱湯もろとも空中に巻き上げられていた。水の竜巻とで

も言うべきその奔流に拘束され、彼らは身動きをとることができない。

そして気づけば、黒い太陽が彼らの目の前にいた。

「はああああ——ッ!!」

「う、ウワアアアアアアア!!」

恐怖心丸出しの表情で絶叫するヴィランたち。迫る真つ赤な複眼は、対峙する者の本能的な恐怖を呼び起こす。しかもその身体は、幾多のゴルゴム怪人を葬り去ってきた全身兵器なのだ。

ただ、彼らの浅慮に比すれば仮面ライダーには慈悲と正義の心があつた。

「ガハッ!」

「グフッ!」

「ゲヘエッ!!」

放たれるはライダーキックでもパンチでもなく……チョップ。首筋に鋭い一撃を叩き込まれたヴィランたちは、一瞬にして意識を刈り取られた。力の抜けた身体が竜巻から弾き出され、地上を転がる。

程なくして、水面がもとの風へと戻る。跳躍していたライダーが重力に従って水中に落下すると、なんとか難を逃れたヴィランの残党が逃げ出そうとしている様子が目に入った。

(……逃がさない!)

全員、ここで仕留める。ただ、水中でのスピードは相手に分があることは忘れていない。

水中での活動といえは——彼女。ただし、安全は確保しなければならぬ。首から上を水面に出したBLACKは、仲間に向け叫んだ。

「峰田くんっ!」

「!」

合図を受けた峰田は、半ば涙目で球状の髪——もぎもぎをもぎ取る。

「チックシヨオオオつ、こうなりやオレだつてエエエ——!!」

叫びながら、もぎもぎを次々に投げつけていく。必死に泳いで離脱を図るヴィランたちの行く手を、まるでブイのようにそれらが塞い

だ。

「!?、な、なんだこりやあ?」

「ッ、こんなもの——」

もぎもぎを意に介さず突破を敢行せんとするヴィランたち——そんな折、峰田が声をあげた。

「おつとやめたほうがいいぜ! そのもぎもぎにちよこつとでも触れてみる、お前ら全員ドカンと吹っ飛ぶぜ!!」

「な、何イ!?!」

なんと驚くべきことに、峰田実の個性“もぎもぎ”は爆発物でもあったのだ! 爆豪勝己にもひけをとらない、デンジヤラスかつ強力な個性である!

……残念ながら、そんなわけはないのだった。

(うまいぞ、峰田くん……!)

ライダー……出久は心の底から彼を称賛した。咄嗟に考えついたにしてはよくできたハツタリだった。

そう、峰田のもぎもぎにそんな大層な効果はない。ただ、独立した状態だと強い粘着力を發揮するというだけだ。しかし入学試験においては、その粘着力がロボットの身動きを封じ、無力化することに成功したのだ。

いずれにせよ、ヴィランたちはこれで身動きがとれなくなった。あとは、一気にカタをつけるのみ。

「梅雨ちゃん頼む!」

「任せてちょうだい」

飛び込んできた蛙吹梅雨が、勇敢にもヴィランに突撃していく。——そして、その舌が長く長く伸び、

ヴィランたちを、がんじがらめに拘束した。

「!?!」

「う、動けねええ……!」

もがくヴィラン、どう転んでも彼らはこうなっていたのだ。峰田のハツタリを意に介さず突破を試みたとしても、もぎもぎが全身に付着



して行動を大いに制限したであろうから。

——ゆえに、仮面ライダーBLACKがとる行動も決まっていた。

「うおおおおお——ッ!!」

一気呵成に距離を詰め、

「ライダー、パンチ!!!」

拳が、

「ライダー、キイイック!!!」

蹴撃が——炸裂した。

\*

「容赦ないわね、緑谷ちゃん」

ひとり残らずぐったりとしたヴィランたちを救助用のロープで拘束しつつ、梅雨がこぼしたひと言。出久——仮面ライダーBLACKは苦笑するほかなかった。バツタの仮面に表情はないのだが。

「水中だから勢いは削がれるし、ある程度は手加減もしたよ。命まで奪うわけにはいかないからね……」

「ふふ……わかってるわ。——守ってくれてありがとう」

微笑とともに差し出された感謝の言葉に、少なからず波立っていた少年の心は柔らかく解れた。同時に、ただ一方的に守ったわけではないとも思う。

「独りで戦ってたら、正直かなり苦戦したと思う。梅雨ちゃん、峰田くん。きみたちの援護があつたから、僕は無傷で勝てたんだ」

「緑谷ちゃん……」

「緑谷……」

「僕のほうこそ——ありがとう」

刹那、仲間の片割れが見せた予想だにしない反応に仮面ライダーは言葉を失っていた。

「え……峰田くん……?」

「峰田ちゃんアナタ、泣いて……?」

梅雨の言葉は誇張でもなんでもなく……呆気にとられたような表

情のまま、峰田はさめぎめと涙を流していた。

「……オイラずつと、バカにされてると思ってたんだ」

「えっ、な、なんで？」

「だってオイラ、入学してからずつといいトコなしで……ッ、最初の体力測定だって最下位だったし、口を開きやあエロいことばつか言ってるし……！」

「ケロ……自覚はあったのね」

「オイラ、おまえのこと知ったときからずつと……！おまえの助けになれるようなヒーローになりたかったんだ……！」

「……！」

外見どおり幼子のように泣きじやくる峰田を目の当たりにして、出久はたまらない気持ちになった。

そして気づけば、その小さな身体をぎゅつと抱きしめていた。

「峰田くん……ありがとう……！」

「うううううッ」

同性とのスキンシップを嫌がる峰田だが、このときばかりは漆黒の異形の抱擁を受け入れているようだった。

そして、梅雨も。

(よかったわね、峰田ちゃん)

このときばかりは、彼を素直に祝福しようと思えた。

——そして、漸く峰田が落ち着いたあと。

「峰田くん、梅雨ちゃん。僕らの使命はまだ終わってない」

「！」

「次は——皆を救けるんだ!!」

黒き英雄の言葉に、仲間たちは力強く頷いたのだった。

\*

「想定した以上に粘っているようですね、あの坊やたち」

USJの中心で高みの見物が続けながら、つぶやくビシユムと名

乗った少女。佇みながらにして、彼女にはこの戦場の全景が見えてくるかのようだった。

対する死柄木弔は、苛立たしげに爪を噛んでいた。砕けた先端が、がり、と音をたてる。

「オールマイトもまだ来てないってのに……仮面ライダーはちよつと弱体化しただけで健在だし……。もう詰んでんじゃん」  
「……………」

弔はこの戦いにゲーム感覚で臨んでいるようだった。ゴルゴムの壮大な思想とは対極にいる男だが、ビシユムの関心はもう一方に控える少年にのみ注がれていた。

「なアそいつ、いつ使うの？」

「……………そうですわね。そろそろカードを切る頃合いかしら」

目配せする——と、仮面の少年は小さく頷き、いよいよ動き出す。

その視線の先には、孤立無援ながら着実に敵を鎮圧し続けるイレイザーヘッドの姿。

表情のなかった少年の口許に、初めて笑みが浮かんだ。刈り取るべき魂を見定めた、死に神の笑みだった。

ボーイ・ミーツ……（後）

仮面ライダーと梅雨・峰田がヴィランを鎮圧したのと同じ頃、13号と行動をとにもにする数人の生徒たちが、懸命に仲間たちの捜索を行っていた。このときは障子目蔵の個性によってようやく、散り散りになったクラスメイトたちがUSJ内にいることを把握したところだった。

一団の中には、飯田天哉の姿もあった。

（……緑谷くん……ッ）

無論、今ここにいないすべての級友のことが心配だった。しかし一番の親友である緑谷出久は、個性によって12歳の少年の身体に戻されてしまった。そしてきつと、オールマイトと並ぶ救世の英雄であるという理由でヴィランの最大の標的とされている。飯田は出久が仮面ライダーBLACKになら変身できるとは知らなかったが、仮に知ったとて気持ちは変わらないだろう。

早く助けなければ——心ばかりが逸る飯田に、13号が『委員長』と呼び掛けた。

『キミに託します。学校まで走って、このことを伝えてください！』

「は……!?!」

驚く飯田に対し、13号は説明する。イレイザーヘッドがここまで個性を消し回っているにもかかわらず赤外線式の警報装置が作動しないのは、それらを妨害可能な個性の持ち主がどこかに身を隠しているから。それを探し回るより——飯田が“エンジン”の個性で走るほうが、速い。

得心はあったが、かといって飯田には二つ返事で了承することはできなかつた。

「ッ、委員長として、クラスの皆を置いていくわけには……!」

「——行けて非常口!」

そう言い放つたのは、巨漢の少年——砂藤力道だった。

「外に出りや警報がある。だからコイツらはこん中だけでコトを起こ

してんだろ！」

「外にさえ出れりや追っっちゃ来れねえよ」瀬呂範太も追隨する。「おまえの脚で、全力で振り切れ！」

「砂藤くん、瀬呂くん……」

『お願いします。キミの個性で、皆を救ってください！』

「……………」

13号のその言葉——そして飯田を行かせるために黒い靄のヴィランの目前に立ち塞がる仲間たちの背中を認めて、飯田天哉の肚は決まった。

「……………すぐに、戻ります!!」

エンジンを噴かし、姿勢を低くする飯田。丸聞こえの会話を受け、彼の行く手を阻もうとするヴィラン。さらにそれを止めようとする13号と生徒たち。

——そこに、

『うおおおおおおッ、イズクうううう!!』

「!!?」

彼らの傍らを、真紅の颯風が駆け抜けていった。

『……………なんですか、今のは?』

『いや、我々に訊かれても……………』

——賢明なる読者諸氏におかれてはデジャブを覚えておられるかもしれないが……………それは錯覚などではない。

(この前のリベンジだ……………!今度こそ俺は、誰も傷つけることなくイズクを救ってみせる!)

そう、ライドロンであった。

この前の騒動もあって、今日は彼が出久とともに登校していた。そして出久の身に何か起きたことを感じとり、ここUSJに急行してきたのだ。

それはいいが……………彼は英雄に救援を呼びかけるといふ肝心なプロセスを踏んでいなかったため、結局飯田天哉の役割は変わらない。主を救いたいという思いが暴走ぎみなのは、そう容易くは治らないの

だった。

\*

ライドロンが来たことなどつゆ知らぬ仮面ライダーBLACKと緑谷出久と蛙吹梅雨、峰田実の三人は、次なる戦場に向かってひた走っていた。

「……………」

沈黙のまま、跳ねるように駆ける漆黒の肢体。追う少年と少女もヒーロー志望ゆえ体力はあるほうだが、四歳も退行させられたはずの仮面の英雄は規格外だった。

「み、緑谷……………」

「！」

息も絶え絶えの峰田に背後から呼びかけられて、仮面ライダーはその場に立ち止まった。振り返れば峰田ばかりではない、梅雨も肩で息をしている。命がけの戦いのあとにろくに休憩も挟まず走り続ければ、まともな人間は疲れるのだ——出久はようやくその普遍的事実に思い至った。

「あ……………ごめん、ふたりとも」

「いえ……………こちらこそごめんなさい。私たち、まだまだ鍛え方が足りないわね」

「き、鍛え方の問題かコレ……………」

峰田がじとりとした視線を向けてくるものだから、出久は思わずぐすりと笑ってしまった。ぶつくさ言いつつも、以前のような敬遠は感じない。先ほどのやりとりは、間違いなく互いの心のうちに残っていた。

「体力使いきっちゃしょうがないもんね。少し休んでいく？」

「ケロ……………ごめんなさい」

「ううん。僕もひとりじゃ心細いから」

本音を言えば、一度変身を解きたかった。この異形の姿で長時間いることは、肉体的にというより精神的に疲弊するのだ。感情が顔に出

やすい性質であるにもかかわらず、表情を動かすこともできない。それがつらいだなどと、目の前の同級生たちにはまだ言えそうもないけれど。

(言える日は……来るのかな)

自嘲とともに、もとの緑谷出久の姿に戻ろうとした——そのときだった。

「——！」

背筋をぞわりと怖気が走る。反射的に振り向いたBLACKが目の当たりにしたのは……どさりと投げ落とされる、漆黒の塊だった。

「!?、あ……」

「そんな……!?」

「——」

「相澤……先生……!?」

——血みどろで倒れ伏していたのは、生徒を逃がすため孤軍奮闘していた担任だった。意識がないのか、その身はぴくりとも動かない。うめき声ひとつ、発しない。

すぐにでも駆け寄りたかったが、BLACKはその場にぐっと踏みとどまった。先ほどから感じる異様な気配。呆然としている梅雨と峰田を背後に庇い、大声をあげた。

「……ッ、出てこい!!」

答はない……言葉のうえでは。

実際には、”彼”は驚くほど素直に姿を現した。タキシードを纏った小柄な身体が、真っ赤な複眼の中心を占める。

「おまえは……」

「……」

少年は答えない。敵意すら窺わせない。しかしその小さな身体からあふれ出る威容は、チンピラのような他のヴィランたちの比ではなかった。

「相澤先生……まさか、あの子に……?」

「う、ウソだろ……!?だってあんな、オイラたちより小さい子供に

……」

——やろうと思えばそれができる”子供”がこちら側にもいることは、ふたりの頭から抜け落ちていた。

」  
わずかな声ひとつ発することなく、遂に少年が動いた。鋭く地面を蹴ったかと思えば、一瞬にして距離を詰めてくる。——拳が、振り下ろされる。

「——ッ！」

咄嗟のことに手加減もできず、自身も拳を繰り出す仮面ライダーBLACK。ぶつかり合ったふたつが、周囲に旋風を巻き起こす。

ゴルゴム怪人に致命傷を与えうるライダーパンチ——常人が喰らえば、全身の骨という骨が粉々に砕け散ることは想像に難くない。

にもかかわらず、少年は相変わらず表情ひとつ変えぬまま後方へ飛びのく。対する、BLACKは——

「ッ、ぐ……」

拳を襲う痛みに、たまらずうめいていた。少年の一撃が、ライダーパンチと互角……それ以上の威力を発揮している？

「な、なんなんだよアイツ……!?!」

「緑谷ちゃん……」

見るからに怪物然とした姿をしている相手なら、まだ納得はできた。しかし相手は、異形型ですらない人間の少年で。

ただ者ではない——見ればわかることだが、出久はそれ以上の”何か”を感じとっていた。他のヴィランや死柄木弔、ビシユムとも異なる気配。自身と相反するものでありながら、同質でもある……かつて、感じたことのあるもの。

再び、少年が仕掛けてくる。やはり武器は使用せず、拳や蹴撃といった己の肉体を駆使した攻撃。12歳の出久とそう変わらない小柄な体躯であることを差し引いても、BLACKを上回る素早さ。ワン・フォー・オールのような増強型の個性の持ち主なのかもしれないが、出久に相手の個性を分析している精神的余裕はなかった。

(ッ、誰だ……!)



「誰なんだ……おまえは……!?!」

——ただ、その一点のみ。

やはり、少年が反応を示すことはなかった。機械的に繰り返される攻撃に、BLACKはズリズリと後退させられた。

「ッ、は……はあ……ッ」

「……………」

「——おわかりにならないのかしら、ブラックサン？」

「……………」

沈黙を保つ少年に代わり、その背後にかの少女——ビシユムが姿を現した。その淑やかな口調といい、妖艶な表情といい……姿かたちは違えようとも、彼女があれほど自分を苦しめた悪魔のひとりなのだと出久は痛感せざるをえない。

「彼を、あなたはよくご存知のはず」

「何を……言つて……」

「でも……考えている暇もございせんか」

そう、少年は仮面ライダーを打倒することしか頭にないようだった。一気呵成に距離を詰めては、再び重戦車のごとき破壊的な打撃を繰り出してくる。

もう駄目だと、出久は思った。この少年が人間であろうとそうでなかろうと、生まれたてのブラックサンの身体で手加減できる相手ではない——

(殺すわけにはいかない……だけど——!)

刹那、少年の膝蹴りがBLACKの腹部を捉えた。ぐう、とうめき声をあげるにはとどまらず、空中に打ち上げられる漆黒のボディ。

しかしそれは、彼にとつて望むところでもあった。高度数メートルでぐるりと身体を回転させ、右足を地上めがけて突き出す——!

「ライダー……キイイク!!」

今度は水中ではないから、勢いそのままの一撃だった。流石に危機感を覚えたのか、視線の先で少年が両腕を構えている。腕の骨を折るくらいに留めなければと思いつつ、本能はもう抑えきれない。

——そして、渾身のライダーキックが炸裂した。

「……ッ！」

奔る痛みに、少年が初めてうめき声をあげた。その小さな身体は先ほどのBLACKよろしく吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。そのまま、ずるずると地面に倒れ伏す。——それきり、ぴくりとも動かない。

「お、おい緑谷……あいつ死んじまったんじや……」

「……………」

怯えた峰田の言葉に、BLACKは答えるすべをもたなかった。ヒトを殺めたとなれば、もはや自分はヒーローではいられない。わかっていたのに、本能には抗えなかった。

「…、待ってー！」梅雨が声をあげる。「あの子……生きているわ」

「……………」

そう、少年は死んでないなかった。直接キックを受けた腕の布地が破けて生身を晒しているけれども、傷痕は残っていない。

そしてもうひとつ。——仮面に、大きなヒビが入っている。

結局かたちを保つことができず、“それ”はぼろりと崩れ落ちた。露になる少年の顔。整ってはいるが、とりたてて特徴があるわけではない。

「あ——」

にもかかわらず、仮面ライダーBLACKは……緑谷出久は、言葉を失っていた。同時に、走馬灯のように甦る過去の記憶の数々。

——だいじようぶ、たてる？

——出久。俺たち、何があっても友だちだからな！

——ぐずぐずするな……行けッ！

「うそ、だ……」

なんで。

なんで、きみがまた。

「なんでだよ、」

ビシユムが、囁っている。

「信彦、くん……っ」

吸い込まれるような漆黒の瞳が、虚無をたたえて灼熱の複眼を見据えていた。

つづく

## 月に吼える（前）

——死んだはずの秋月信彦が、再び敵となって姿を現した。

緑谷出久は、これが己の心的外傷を凝縮した悪夢なのだと思った。しかし奔る痛みが、鮮烈な光景が、今この瞬間はまぎれもない現実なのだと思い知らせてくる。

ならばせめて、目の前の信彦が何者かの化けた偽物であったなら。その一縷の望みさえ、腹の中のキングストーンが明確に否定していた。

「遊びは終わりです」

やはり葬られたはずのビシユムが、冷たく宣言する。同時に、やおら立ち上がる信彦。

一体、何をするつもりなのか——本来警戒を厳にすべき仮面ライダーは今、まともな思考を失っていた。ただ呆然と、かつて親友だった少年の姿に釘付けになっていることしかできない。

信彦もまた、あの超速で攻めてくるでもなく立ち尽くしている。死闘の台風の目で、停止したかのように緩慢に過ぎる時間。

しかしそれも、刹那のことにすぎない。

「……変、身」

「——！」

ぽつりとつぶやかれた言葉に、出久は己の心臓が五月蠅く跳ねるのを自覚した。

次の瞬間には、目の前の少年が少年でなくなっていた。

柔らかな白皙が、瞬く間に光沢を放つ白銀の鎧へと変質する。子供の背丈が膨れあがり、BLACKと同等以上の逞しい骨格に。

そしてBLACKのそれと、対をなす緑の複眼。

「お、おい、あれって確か……」

BLACKの背後で、わなわなと震える峰田。彼、そして梅雨にも、少年の”変身”を遂げた姿を知っていた。

「シャドー、ムーン……?」

ゴルゴムの侵略がいよいよ本格化し、猛威を振るいはじめたのと同じくして現れた、強力な怪人——仮面ライダーを機械化したようなその姿から、世間では仮面ライダーに似せて造られたサイボーグかロボットなのではないかとも言われていた——。ふたりはそういう認識だった。それゆえに出久が発した「信彦」という名が引っかかる。

「さあ、シャドームーン。今度こそ決着をつけるのです」

柔らかい声で、無慈悲な命令を告げるビシユム。

そしてシャドームーンは、おもむろにその一步を踏み出した。がしやりと鳴り響く、金属めいた足音。あのつらく悲しい戦いの記憶が甦り、BLACKは茫然自失としたままだ。

「緑谷ちゃん!!」

切羽詰まった梅雨の呼びかけで、ようやく我に返る。そのときにはもう、シャドームーンが目前にまで迫っていた。

「ッー」

望まなくとも、キングストーンに影響を受けた本能が意志とは関係なく闘う構えをとらせる。振り下ろされる拳を受け止め、反撃に手刀を振り下ろす。命中をとったのはBLACKだったが、

「……!?」

——効いていない。リプラスフォームを超える硬質な鎧は、かつてのシャドームーンをも凌いでいた。

そのまま手首を掴まれ、呆然としていたBLACKは我に返った。もはや手遅れだったのだが。

そのまま力いっぱい引きずられ……投げ飛ばされる。漆黒の肢体が強かに打ちつけられた途端、そこを中心に地面が陥没を起こす。その規格外の光景は、梅雨と峰田をして友人の危機であることを一瞬忘れさせてしまうほどのもので。

粉塵が晴れたとき、仮面ライダーBLACKの全身は余すところなく出来上がっていたクレーターに沈んでいた。

全身を、痛みに支配されている。

指一本さえ動かすことができない、息が詰まるような苦痛。

しかし真に蝕まれているのは、肉体よりも。

(信彦くん……なんで、どうしてきみが……)

ゴルゴムの崩壊から密かに生き延びていたシャドームーン。しかし、二度目などありえないはずだった。死した信彦の骸は、出久自身が自らの手で葬ったのだから。もう二度と、邪悪なるものたちによって弄ばれることのないように。

それなのに、なぜ。ビシユムは……ゴルゴムの残党はどうやって、再び信彦を手に入れた？

「大したものでしょう、今度のシャドームーンは」

「……い」

出久の心を知ってか知らずか、恍惚とした声をあげるビシユム。丸みの残る頬が赤く色づくその様相は、彼女の正体を知らない者が見ればこのうえなく愛らしいもので。

「彼は以前とはまったく違うのです。ただ昔のブラックサンに戻ってしまったあなたでは……ふふふ、歯が立たないのも無理はありませんわ」

「緑谷あ!!」半ば悲鳴のような声をあげる峰田。「立てッ、立ってくれよお!!おまえがやられちゃったら、オイラたち……い」

そう叫ぶ峰田も、梅雨も、シャドームーン。信彦が出久の大切な親友であったことなど知るよしもない。ただ、同年にしてオールマイトに匹敵する無敵の英雄と捉えていたあの仮面ライダーが、弱体化させられているとはいえたったひとりの敵に完膚なきまでに叩きのめされている。その光景を前に、冷静でいられるはずがなかった。

(そうだ、動揺している場合じゃない……い)

梅雨と峰田だけではない、すぐそこには意識をなくすまで痛めつけられたのだろう相澤が伏せている。命に別状がないなどはとても断言できない。そんな状態で自分たちの戦いの巻き添えにしてしまったら……想像しただけで身震いがする。

戦わねば、救うために。それで己の心が傷ついたとしても——痛む身体を押して、立ち上がる仮面ライダーBLACK。常人ではありえ

ないような音が鳴り響くほど拳を力いっぱい握りしめれば、バツタ男の皮膚が露出した間接部から激しい白煙が噴出する。

(今度こそ……こいつの動きを止める!!)

迷いを強引に押し込めた決意とともに、勢いよく跳躍する。すると寸分遅れて、シャドームーンもまた同じ行動をとった。

「ライダー、キイイック!!」

「……シャドー、キック」

無骨な姿から放たれる少年の声に、出久の心は結局揺さぶられた。

——そして、キックとキックが激突した。

「……!」

中心部で発生する爆発。それに伴い、吹きすさぶ突風。巻き上げられそうになる峰田を、咄嗟に梅雨が受け止める。ちようどもぎもぎのあたりに胸が当たり、峰田はにやけてしまうのだが……次の瞬間には、その表情は絶望に染まっていた。

爆炎の中から、少年のシルエツトが墜落してくる。サイズの合わないぶかぶかの雄英の体操服に、毛量の多い緑色の頭髮。

「み、みどり、や……?」

「緑谷、ちゃん……」

「うぐ、あ……」

出久が、敗北を喫した。それを現実の光景として認識することは、かの少年少女にとってあまりに残酷なことだった。

「お見事です、シャドームーン。ふふ……それでは、本懐を」

「!!」

本懐——それがなんなのか、倒れ伏した出久におもむろに迫るシャドームーンを目の当たりにすれば、考えるまでもないことだった。

「緑谷ちゃん……!」

「ツ、下がってろ蛙吹!」

「!?!」

自ら梅雨の懐を抜け出した峰田。同時に響いた勇敢な声音は、先ほどまでの彼とは別人のようだった。

「クツソオオオつ、緑谷はやらせねええええツ!!」

平凡な動体視力では追えないほどの速さで頭からもぎもぎをもぎ取ると、シャドームーンめがけて投げつけていく。元々殺傷能力など無に等しい個性であるから、それで仮面ライダー以上の力をもつ化物を倒せるだなどとは微塵も思っていない。しかしシャドームーンの身体に付着したもぎもぎの数々は、その粘着力でもってその動作を阻害することには成功した。

しかし、

「こ、これでも……完全には止めらんねえのかよ……!」

ぜえぜえと荒ぶった呼吸を繰り返しながら、悔しげにつぶやく。その頭からは、攻撃を受けたわけでもないのにおびただしい量の血が流れ落ちていく。

もぎ過ぎると、彼は頭部から出血してしまうのだ。実質、これ以上の個性使用は困難――

「無駄なことを」ビシユムが冷笑を浮かべる。「あなた方ヒトの個性ごとき、シャドームーンに通用するとお思いかしら?」

「……ンなこと、言われなくなつて……!」

わかっている。わかっているけれど、出久を見殺しにできるわけではない。しかしこれでは、せいぜい十数秒時間稼ぎができればよいほうだった。

「そのまま黙って見ていなさい。あなた方の希望の象徴たる仮面ライダーが、凌辱される様を……!」

もぎもぎを引き剥がしつつ、いよいよシャドームーンが出久の足元へと迫ったその瞬間。

峰田が死にも狂いで行った十数秒の時間稼ぎが、無駄ではなかったことが示された。

『イズクに触れるなあッ!!』

「!？」

突如地上を滑走するように飛来した深紅の塊がシャドームーンに激突、その衝撃にはさしもの彼も紙のように撥ね飛ばされるしかなかった。

『イズク、大丈夫か!? しっかりしろ!!』



「う…………ぐ…………」

その呼びかけに、出久はかろうじて意識を取り戻した。ぼやけた視界に、“彼”の真つ赤な車体が飛び込んでくる。

「ライ、ド、ロン……………」

『イズクその姿…………ブラックサンに戻されてしまったのか？いや、それより…………』

とにかく出久を助けなければと思って躊躇なく轢いてしまったが、あれはライドロン…………クジラ怪人にとって主たる存在だったシャドームーンではないか。それに、彼の背後に控える少女からは、大神官のひとりビシユムの気配を感じる。

ライドロンは当惑したが、出久たちを守ることが最優先事項であることは揺るがなかった。

『ッ、イズク乗るんだ！後ろのふたりも！』

ここは一時なりとも撤退、態勢を立て直すしかない。ライドロンの言葉に、出久は痛む身体を押して運転席に飛び込んだ。それを見て、梅雨と峰田も動く。

「蛙吹、先生をー」

「ケロ、わかっているわー」

相澤の身体に己の舌を巻きつけ、軽々と引き寄せる梅雨。本物の蛙同様細く長いそれは、見かけに反して強靱さと力強さを兼ね備えている。

そうして離脱の準備を素早く整えていく少年たちだが、シャドームーンとビシユムが黙って見ているわけもなかった。

「ライドロン…………クジラ怪人。シャドームーン、あの裏切り者に制裁を」

ビシユムの号令に応じて、両手を構えるシャドームーン。その掌から緑色をした光線が放たれ、ライドロンに襲いかかる。

『…………ッ！』

「ッ、ライドロン、大丈夫…………!?!」

『問題ない…………だが急げ、イズクの友人たち！』

助手席に峰田が、後部座席に相澤とそれを介抱する梅雨が乗り込む。それと同時に、ホイールがフル回転。シャドームーンのビームをかわしつつ、ライドロンはもはや慣れてしまった急発進を敢行した。

「小癩な……逃げきれるとお思いかしら」

シャドームーンは棒立ちのまま、小さくなっていくライドロンの姿を見送っている。ビシユムはその背中を冷たく睨めつけた。

「追いなさい、シャドームーン」

そう命じると、シャドームーンはようやく動き出した。”あれ”は戦闘能力としてはかつてのシャドームーンを凌ぐが、こまめに命令をインプットしてやらないと木偶人形も同然になってしまう。ビシユムは思わず口許をゆがめた。かつては、彼が命令を下す側だったのだ。しかしもう、そんなことはありえない。今、彼女が推戴しようとしているのは――

「……ふふふふっ、ふふふ……」

暗黒結社ゴルゴムの再起は、ようやくはじまったばかり。しかしその結末を……死柄木弔の言うところの”ゲームオーバー”の瞬間を想像し、ビシユムはたおやかに嗤った。

## 月に吼える（後）

あちこちに設置されたオブジェクトを巧みにかわしながら、ライドロンは走行を続けていた。

「……はあ、はあ……ッ」

『イズク、大丈夫か……？』

「う、ん……なんとか……」

かぼそい声で、そう答えるのが精一杯だった。全身がずきずきと痛むのもあるが、出久の精神は張り詰めた糸がぷつりと切れたように彷徨っていた。記憶はきちんと保っているのに、まるで中身まで12歳に戻ってしまったかのようで。

それ以上何もできない出久に代わって、助手席の峰田が後部座席を気遣った。

「蛙吹、先生は……？」

「……」一瞬の沈黙のあと、「……血が全然止まらない……多分、骨もあちこち折れているわ」

「ッ、くそ……」ここから脱出できなきや応急処置もできないってのに……！」

峰田が悔しげに吐き捨てるが、それで状況が打開できるはずもない。頼みの出久もダメージを受けている以上、外部から救援があるのを待つほかない。彼らは飯田天哉の離脱を知らないから、それを現実的な展望としてもつことができなかった。

それゆえに、出久もまたこんなことを言い出した。

「ライドロン……僕をどこか、適当なところで降ろして……。相澤先生……梅雨ちゃんと峰田くんも、外に……」

『な……何を言っているんだ!? そんな身体のアナタを置いていけるわけないだろう!』

ライドロンがそう反論するのも当然だった。峰田や、梅雨にとっても。

「そうだぜ緑谷！オイラ、おまえの助けになるって腹くくったんだ！

血が出るくらいなんだ、まだまだやってやる！」

「この子に相澤先生を連れ出させるのは賛成よ。でも私たちは残って戦うわ、相手があのシャドームーンであっても……」

「……ッ、」

気持ちは嬉しかったが、素直に頷くことはできなかった。シャドームーン……信彦との因縁にだけは、他人を立ち入らせるわけにはいかないと思った。

「そういえば緑谷ちゃん、シャドームーンのことを”信彦くん”と呼んでいたわね」

「！、……」

口を引き結ぶ出久の様子を目の当たりにして、梅雨は疑念を確信へと変えた。

「……やっぱり、彼は人間なのね」

「な……!?!」

人間の——今の出久と、変わらない年齢の。信彦くんという呼び方からしても、出久と親しい関係にあった人物なのだろうことは容易に想像がつく。

しかしそんな少年がなぜ、ゴルゴムの首魁たるシャドームーンなどという存在になったのか？ふたりがその疑問を露にしようとしたとき、不意にライドロンが声をあげた。

『！、前方にヴィランがいる！』

「！」

その言葉に、彼らは会話を中断せざるをえなくなった。視線を向けた先には、とかく己を”ワル”だと主張した風貌のヴィランの姿。——しかしどうしてか、必死な形相でこちらへと逃げてくる。

「あいつら……どうしたんだ？」

峰田の……否、一同の疑念は、すぐに氷解した。

「逃げんなクソどもがああああアツ!!」

獣じみた咆哮と、爆音。飛翔する漆黒と白皙の影は、

「か、かっちゃん!?!」

「爆豪……!?!」

彼の赤い瞳がライドロンを、そこに乗る出久たちを一瞬、捉えた。しかし感情の揺らぎは微塵もなく、即座に眼下のヴィランたちに引導を渡しにかかる――

「死イねえええええ――ッ!!」

そして、ひとときわ烈しい劫火が爆ぜた。

\*

「――じゃあライドロン、相澤先生をよろしくね」

『……しかし、イズク……』

最後まで出久を護衛できないことに、ライドロンは口惜しさを隠しきれていない。その気持ちを敏く察した出久は、そつとその車体を撫でた。

「気持ちはいよ、ライドロン。でもきみには、僕以外の人のことも守ってほしいんだ」

『!、……そうだな。私は、あなたの仲間だからな』

仮面ライダーを戴くチームの一員である以上、守り救うべき対象はこの世に生きとし生けるものすべて。そしてその志を实践することが、出久の助けになることにも繋がるのだ。

相澤を乗せたライドロンは、その場から颯爽と去っていった。途中でヴィランに発見されて攻撃を受けたとしても、彼のスピードと耐久力なら問題なく振り切れるだろう。

ふう、と息をつきつつ……合流できたふたりに向き直る。幼なじみのほうは仏頂面のまま距離を置いているが、もうひとりはおめエらが無事でよかったぜ……!」

――切島鋭児郎。紅蓮を想起させる尖った頭髪と瞳が特徴的な彼は、この年代にしては珍しくストレートに感情表現する少年だった。現に今も、目に涙すら浮かべて出久たちの無事を喜んでいる。

「俺ら、どうにかヴィランを倒しながら移動してたんだ。まあ、主にバクゴの力なんだけどな」

「さっきの調子でトドメを刺していたわけね」

あの鬼の形相で追われたら、三下ヴィランがビビるのも無理はない——そんなことを考えていると、勝己にじろりと睨みつけられ、梅雨は肩をすくめた。粗野な振る舞いとは裏腹に、彼は他人の機微には敏感いようだった。

「ごつちも、普通のヴィランは協力して捕縛してきたわ。でも……」

「ッ、ちくしょう……！アイツだけは、緑谷でも勝てなかった……！相澤先生も、アイツに……」

「……そんなヤツがいたってのか？一体……」

口をつぐんでいる意味は、もうない——出久が、答を引き受けた。

「……シャドー、ムーン……」

「……は？」

梅雨や峰田が知る名を、切島が知らないはずがなかった。

「でもソイツって、おめエが倒したんじゃないや……いやでも、あのビシユムとかいうヤツが生きてたんだから、ありえるのか……？」

「……」

人の好い切島は、出久をむやみに質問攻めにしたりはせず自分で自分を納得させようとしているらしかった。出久が一番恐れているのは、信彦について追及されること。——そしてそれを唯一この場で知っている爆豪勝己は、

「このクソ役立たずが!!」

「!?」

いきなりそう罵声を浴びせかけると、出久の胸ぐらを力いっぱい掴み上げた。肉体の年齢差ゆえ、それは凄まじく悪辣な光景だった。

「お、おいバクゴ……」

「てめエは敵の一匹もまともに始末できねェんかよ、何が仮面ライダーだ聞いて呆れるわ!!」

「……」

出久は思わず目を見開いていた。彼にはかつてすべてを話した、ゆえに自分がどれだけ残酷なことを言っているかわかっているはずなのだ。——あのと涙さえ流していた彼が、こんな……。

出久の心に冷たいものがよぎったとき、勝己がさりげなく耳許に顔

を寄せてきた。

「そいつ、本物なんか？」

「！」

普段の彼からは想像もつかない、しずかな問い。ゆえに出久は、即座に彼の意図を理解した。表向きは彼の罵倒に絶句したふりをしたまま、耳打ちし返す。

「……わからない……。けど、キングストーンが強く反応してる。姿や能力をコピーしただけの偽物とかじゃ、ないと思う」

「……そうかよ」

答はそれだけだったし、いずれにせよ会話は続けられなかった。

「おまえ……いい加減にしろよ爆豪！幼なじみのくせによくそんなことが言えるな!？」

「……今の言葉は撤回すべきだわ、爆豪ちゃん」

峰田が激昂し、梅雨も静かにではあるが怒気を発している。確かに表向き勝己の態度は酷薄に過ぎた。あえてそうした以上、ここで出久が擁護するのは彼の意に反することになる。だが、彼を悪者にしたまままでいるのは――

「……いいんだふたりとも。僕が倒し損ねたのは、事実なんだから」

その言葉で、これ以上ふたりが激しないよう抑えるのが精一杯だった。「けどよ……」と峰田が言い募るが、切島が宥めてくれた。

「ま、まあそういうのは後にしようぜ！今は皆と合流して、ライドロンが助け呼びに行ったこと教えてやんねえと」

「そうね……」

ひとまずはこの五人で行動することに皆、異存はなかった。立ち上がり、移動を始める――刹那、

「どちらへ行かれるのかしら？」

「!!」

たおやかな声が響いたかと思えば、それとは対照的な凄まじい衝撃波が彼らを襲った。

「うわああああ!!」

周囲のオブジェクトはことごとく打ち砕かれ、五人はなすすべなく

弾き飛ばされる。ややあつて、彼らの潜んでいた場所は何もない、がらんだ空間と化してしまっていた。

「ツ、みんな、大丈夫……!?!」

勝己からは「うるせえ」と、勝己以外の三人からは肯定が返ってくる。ほっと胸を撫で下ろしかけた出久だったが、魔の手は容赦なく襲いくる。

「逃げられませんよ。シャドームーンは五感も強化されているのです」

得意げに言い放つビシユム。あの特徴的な足音をたてて、迫るシャドームーン。もうひとりの世紀王の掌に、少年たちの命は乗せられていた。

「く……ッー」

ならばせめて、自分が矢面に立つしかないのだ。同じ世紀王である、出久自身が。

しかし再び変身を遂げるべく拳を握れば、たったそれだけのことでずきりと痛みがはしり、脂汗がこぼれる。

「無茶だ緑谷！そんな身体で……!」

「そうよ緑谷ちゃん、ここは私たちに……」

「――」

「ダメだ!!」

自分でも信じられないくらい、大きな声が出た。

「シャドームーンに……彼にこれ以上、誰かを傷つけさせるわけにはいかないんだ……!」

最後には優しい心を取り戻して、子供たちを救って眠りについた、信彦に。

その気持ちは誰にもわからない。この少年の過去を物語としてしか知らない者たちに、その気持ちを知ることなどできようはずもない。

「――い、や、

「おい」

”彼”の呼びかけに振り向いたのは、ほとんど反射的なものだった。



た。

刹那、出久の世界はぐるりと回転していた。背中に衝撃がはしり、視界が明滅する。

「痛、うう……！」

「どいてろ、クソデク」

冷たい口調でそう言い放つと、ずんずん前に踏み出していく者がいる。それが誰かなんて、考えるまでもない。

「よオ、てめエの相手はこの俺だ。銀ぴか野郎」

「……爆豪勝己。——そう、」

少年の名をつぶやいたビシユムが、意味ありげに笑みを浮かべる。

「随分と勇敢な子ね。それとも、何も考えていないのかしら？」

「考えとるわ、てめエらぶちのめすコトだけなア」

滾るような赤い瞳が、緑の複眼と対峙する。その光景——彼は独りかの世紀王と戦うつもりなのだ、出久にはわかってしまった。

「ッ、かつちゃん……！駄目だ、いくらきみでも……！」

事の重大さを認識した切島鋭児郎もまた、声をあげた。

「バクゴ、戦るってんなら俺も——」

「出てくん、足手まといだ」

「な……なんでだよ!? さっきまでだって一緒に戦ってたじゃねえか！」

勝己から答は、ない。「うるせえ」と切つて捨てるほんのわずかなエネルギーでさえ、彼はこれからの死闘に注ぎ込むつもりでいた。

「信彦、」

「！」

彼までもがシャドームーンをそう呼んだことに、ビシユムが反応する。

そして、

「死人は——死んでろや!!」

そのしなやかな身体が、宙を舞った。両掌から爆破を起こすことにより、彼は常人では不可能な高みにまで跳躍したのだ。

「オラアアアアアッ!!」

反応を見せるシャドームーンに対し、遠距離から轟々とした一発。その上半身が爆炎に隠れて見えなくなったところで、彼は勢いをつけて急降下する。

炎に巻かれていてもなお反撃に出ようとするシャドームーンに対し、少年の動作は機敏だった。打って変わってごく小規模な爆破によって旋回し、背中側に回り込む。そして、攻撃。勝己はとにかく縦横無尽に動き回ることによって、シャドームーンに反攻の隙を与えない腹積もりだった。

——確かに、中途半端な援護はかえって邪魔になる。

「バクゴー……」

「あいつ、確かに口だけじゃねえな……」

「ええ……」

三者三様、複雑な表情で戦況を見守っている——出久もまた、表情は同じと思われたが。

(かっちゃん……)

一体、彼はいかなる心積もりでシャドームーンと単身戦っているのか。仮面ライダーとして様々なことを見聞きして、他人の機微にも敏くなつたつもりでいるけれど……彼の、とりわけ自分に対する想いは複雑に絡みあいすぎていて、それらからくる一挙一動を紐解くことはできない。何も、わからない。

——出久の方が、難しく考えすぎている面もあった。これがたとえばライドロンや、鋼のジョーことデスガロンの行動であれば、その意図は容易く理解できただろう。

あるいは、”あのとき”の勝己を思い出していれば。

(これ以上……デクに、コイツを……！)

目にも止まらぬスピードで飛び回りながら、息もつかせぬ猛攻を続ける勝己。当初は互角以上の立ち回りと思われていたが、決定的に火力が不足していた。何度爆破を繰り返しても、シャドームーンの堅固な装甲には傷ひとつつかない。勝己の表情に焦燥が滲む一方で、ビシムは相も変わらず余裕の笑みを浮かべて見守っている。

「あれでも効いてないなんて……！」

「ッ、やっぱり、見てらんねえ!!」

切島が身体を硬化させて臨戦態勢に入る——刹那、目の前の獲物以外すべてを忘れ去っているかのごとき勝己の瞳が、ぎろりと睨みをきかせた。

「出てくんなつつつたる何度も言わせんな!!」

「……!」

従わねば仲間といえども容赦はしないとばかりの気迫に、切島はたじろいだ。次の瞬間にはもう、彼らは意識の外に追いやられている。爆豪勝己をそこまで頑なにさせるものはなんなのか、彼らにも知るよしはない。

なおも独り奮戦する勝己だが、時間をかけて鍛えあげられた彼の体力にも限界はある。一瞬たりとも休息をとらずに飛び回っていた身体が次第に悲鳴をあげはじめ、呼吸が荒ぶる。対するシャドームーンは防御に徹しているのか、その場から一步も動いていない。

出久はいよいよ危機感を覚えた。このまま勝己が体力を使い果たせばどうなるか、そんなこと考えるまでもない。その瞬間の想像が、嫌でも脳裏に浮かんで、消える。

(もう嫌だ、そんなの……!)

気づけば出久の足は、一歩前に踏み出していた。勝己に失望されてもいい、憎悪されたって構わない。彼という存在を、喪うくらいなら。けれど現実には、いつだって早すぎた英雄に残酷だ。

——シャドームーンが、直撃をとった。

つづく

## 緑谷：ブレイジング（前）

USJを襲撃した、ヴィランの群れ。

その司令塔たる死柄木弔は、ただ今暇をもて余していた。

生徒20名の相手には連れてきたチンピラヴィランたちをぶつけている。2名のプロヒーロー教師のうち13号には黒霧が当たっているし、イレイザーヘッドこと相澤消太は自分の首を獲る気満々でいたようだ。シャドームーンが完膚なきまでに叩き潰している。そういうわけで、彼は実質突っ立っているだけになってしまっていた。

「ハア……司令官って、案外つまんないんだな」

「何を呑気なことを言っているんです、死柄木弔」

独り言のつもりが、咎めるような応答があった。同時に、目の前にぼうつと現れる黒い靄のかたまり。

「あなたは司令塔なのですから、全体の状況をみてこまめに指示を出していただかないと」

「……指示も何も、連中暴れるしか脳がないだろ。あのビシユムとかいう女は好きにやらせとけて、先生が」

ゴルゴムの高級幹部だったというあの女。弔からすれば得体の知れない存在だったが、己が大願を成就させるために必要な存在ではあった。

「彼女は仮面ライダーを追い詰めているようです」

「へー、そう。で、おまえは？」

「13号は倒しました。……生徒の邪魔があつて、殺害には至りませんでした」

「いやそこは生徒ごと殺しとけよ……余裕ぶっこいて何やってんだ」

唯一意の通ずる仲間の不甲斐なさを嘆きつつ、弔はこの暇から解放される名目を得たと思った。

「もういいよ、俺がやる」

「……そう言うと思っていました」

ため息をつく黒霧。

周囲を覆う靄がふわりと揺れる中で、死柄木弔は一步を踏み出した。

\*

それは、幾度となく繰り返された悪夢の再現だと思った。

シャドームーンの掌から放たれた緑の稲妻が、少年の腹部を貫く。飛び散る真紅の血潮が、宝石のようにきらきらと輝いている。緑谷出久には、その光景がスローモーションにさえ見えた。

仰け反り、ゆっくりと墜落していく身体。しかし元々血のいろをしていた瞳だけはかっと見開かれ、掌からはよりいっそう烈しい劫火が迸っていた。

その紅蓮にシャドームーンが呑み込まれると同時に、爆豪勝己は地面に叩きつけられる。

その瞬間、出久は走り出していた。

「かつちゃん——ッ!!」

悲鳴のような声が、耳の奥で響く。それが自分の発したものであることさえ、すぐには認識できなかった。

力なく投げ出された四肢を、縋りつくように抱きかかえる。背中に回した手に、どろりと広がる濡れた感触。寒くもないのに、身体の震えが止まらない。

完全に我を忘れてしまった出久ほどでなくとも、一部始終を目の当たりにした峰田たちも少なからずショックを受けていた。

「ばく、ごう……」

「……ッ、」

「……ちくしょう……ッー」

とりわけ切島鋭児郎は、血が滲み出るほどに強く拳を握りしめていた。漢らしいと、尊敬の念さえ抱いた同級生……否、友達が、目の前で。こんなことになるなら、彼の拒絶に耳を貸さず強引に助力をしていればよかった。後悔——ああ自分は、昔と何も変わっていない。出久と異なるのは、絆と呼べるものがない自分には、縋りつく資格さえ

ないと思ひ込んでいることだった。

「かつちゃん……かつちゃん……ッ！」

そして出久はもう、勝己の姿以外にも見えてはいなかった。——彼をこんな姿にした敵はまだ、すぐ目の前にいるというのに。

「ふふ……どれだけ英雄ぶつても、ひと皮剥けば所詮は子供。——貴方には何も救えないのよ、ブラックサン？」

如何に強大な力をもっていようと……それを発揮することもできぬまま、この少年は今度こそ葬られる。やはり所詮は、世紀王の器ではなかったということだ。

「シャドームーン。ふたり仲良く、死出の旅へ送り出してさしあげなさい」

ビシユムの命令に従い、シャドームーンが動き出す。出久にはもう、彼の姿は見えてはいない——

——刹那、

「うおおおおおッ!!」

鬼気迫る勢いで突撃してきたのは、切島鋭児郎だった。異形型とみまごうほどに全身を硬化させ、シャドームーンに飛びかかる。

「もうこれ以上、ダチはやらせねえ……！オレは……なるんだ、ヒーローに……！」

「！、……切島、くん……」

切島の言葉に、わずかながら我を取り戻す出久。いや、切島だけではなかった。

蛙吹梅雨の舌がシャドームーンの胴体に巻きつき、足下は峰田実のもぎもぎで接着される。

やれやれと、ビシユムは首を振った。

「……本当に、無駄なことばかり……」

刹那、シャドームーンの身体が光り輝き——

何が起きたのかもわからないまま、切島たちはひとり残らず吹き飛ばされていた。

「ぐ、うう……ッ」

「……ッ、」

指、一本たりとも動かせない。切島たちは思い知った——このシャドームーンは、化け物だ。自分たち普通の人間とは、まったく別次元にいる存在。

「言ったでしょう、無駄なことだと。貴方がたヒトは、我らゴルゴムの前に這いつくばることしかできない存在」

「——ブラックサン……貴方も、その先へは行けないということですよ」  
脳改造の前に逃げ出したことで、ブラックサンは緑谷出久の心を捨てることができなかった。いかにキングストーンの作用で肉体が進化しようとも、ヒトの、それも少年の弱い心を捨て去れない限り彼に世紀王を名乗る資格はない。他の連中と変わらない——所詮、ただのヒト。

であれば、今ここにいるシャドームーンに敵はいない。いるはずがない——ビシユムが確信を深めた、刹那。

「——もう大丈夫、」

一陣の疾風が吹きつけ、

「私が、来た!!」

平和の象徴と呼ばれる英雄が、戦場に姿を現した。

「オール……マイト……!」

生徒たちの表情にかすかな光明が差し、対照的にビシユムが初めて忌々しげに眉をひそめる。ただのヒトというには、彼だけは規格外の存在であると彼女も理解していた。

「皆、遅くなつてすまなかつた……!ここに来る途中で飯田少年と出会ったんだ、事情はもう彼から——」

「お、オールマイト!」切島が声をあげる。「バクゴーが……!」

「何?——!」

振り返つて、彼はようやく気がついた。——出久が抱きかかえた勝己の身体から、どくどくと血だまりが広がっていくことに。

「今さら出てきたところで……。貴方が子供を救えなかつたという事実は変わらないのですよ、オールマイト?」

「……貴様ら……!」

オールマイトの拳が怒りに震える。ただ、彼はあくまでもヒーローだった。生徒たちに対し、勝己を連れて逃げるよう促すことも忘れない。

「緑谷ちゃん、今のうちに爆豪ちゃんを……！」

「ッ、……うん！」

ライドロンは今頃相澤を連れて校舎に戻っているかどうか、というところだから、勝己を外に連れ出すことはできない。それでもこの戦場のど真ん中に置いておくわけにはいかないというのは、当然の判断だった——彼らにとっては。

出久と切島で肩を貸そうとした途端、もう意識もないと思われていた勝己が、かっと目を見開いたのだ。

「は、なせやッ」

「!?」

ふたりを突き飛ばし、反動で倒れ込みかかる。しかし驚くべきは、ぐつと足に力を込めてその場に踏みとどまったことだった。貫かれた腹からの出血は、とどまることを知らないというのに。

「デメエらで勝手に逃げるや……！俺は、まだ……戦えんだよ……！」

「な……何言ってるんだよ!？」

「爆豪ちゃん落ち着いて、あなた混乱しているのよ。オールマイトが私たちを救けに来てくれたの、わかる？今は彼に任せておけば——」意識が朦朧としていっていると思って梅雨が懇切丁寧に説明してくれたが、勝己にだってそんなことはわかっていた。

——奴らは仮面ライダーだけでなく、オールマイトも殺すつもりでここに来たのだ。そして現在確認できている最高戦力は、シャドームーン。

であれば、オールマイトを単独で戦わせておくわけにはいかない。それ自体は合理的とは言わないまでも、的外れではない思考である。切島たちにとって解せないのは、そこで一番重傷である自分だけが前に出ていこうとすること。既に多量の血液を失って、頬を青白くしてまで。

「ッ、かっちゃん!!」



たまらず出久は声をあげた。

「もうきみは戦っちゃダメだッ！あいつは……シャドームーンは僕がなんとかするから……もう……！」

「……………」

「そうやってテメエは、また自分独り辛けりやいいんだな」

「え……………」

それは普段の彼とも、今の息も絶え絶えの様相ともまったく似つかぬ、ひどく静かな声だった。誰が発したもののなか、一瞬認識できなくなるほどに。

だが憤懣でも侮蔑でもない、ただ凧いだ赤い瞳に射抜かれて、出久はすべてを悟った。かつちゃん、きみは――

刹那、強張っていた勝己の身体がぐらりと崩れ落ちた。

「ぼく……………」

慌てて駆け寄ろうとした切島だったが……それより寸分早く、出久の小さな身体が勝己を受け止めていた。

「……………かつちゃん」

「――ありがとう」

「……………」

見下ろす形になってしまうことをすまなく思いながら、少年は幼なじみに微笑みかけた。

「きみの気持ちは、ちゃんとわかったから……。今は……今だけは、僕に任せて。きみまで、失いたくないんだ……ッ」

「……………で、く……………」

何度も閉じかけては無理やり開こうとしていた瞼が、その言葉を聞いてゆつくりと降りていく。そしてそれきりもう、開かれることはなかった。

くたりと力の抜けた肢体をその場に寝かせると、出久は再び立ち上がった。

「切島くん、梅雨ちゃん、峰田くん。……かつちゃんを、お願い」

「緑谷……？」

彼の視線の先では、シャドームーンとオールマイトが死闘を繰り広げている。——木立のような深い翠の瞳には、紅蓮の戦意が漲っていた。

「変、——」

握りしめた拳。光り輝くエネルギーアクター。——否、輝きは光流となつて、全身へと広がっていく。

「——身……！」

少年が世紀王と呼ばれる姿へと”変身”を遂げてもなお、光流はよりいっそうその輝きを増すばかりだった。

\*

オールマイトとシャドームーンは、双方一步も引かぬ戦いを繰り広げていた。

しかし、傍目にはそう見えるというだけで——その実、焦燥を抱えているのは前者ばかり。

「いかなさったのかしら、”平和の象徴”さま？ No. 1ヒーローというには、少し動きが鈍いのではなくて？」

「H A H A……ッ、なんのことかな……！」

オールマイトは内心ぎくりとしたが、それを表に出すほど初心ではなかった。

ここに来るのが遅れたのも、元はといえば通勤途中に活動限界ぎりぎりまでヴィラン退治に勤しんでしまったことが原因なのだ。彼が満身創痍を誤魔化して戦っているような状態であるのに対して、シャドームーンは連戦に次ぐ連戦にもいっさい疲労を感じていない。彼らはもはや、人間とは呼べぬほどに改造され尽くしたゴルゴム怪人であり、その頂点に立つ世紀王の片割れなのだ。下等な人間たちの社会で”平和の象徴”などと言われていようが、それがなんだというのか——ビシユムは嗤った。

一刻も早く決着をつけねばと、オールマイトは全身にグツと力を込

めた。

「DETROIT——」

「シャドー……」

「——SMAAASH!!」

「……パンチ……!」

拳と拳が——激突。辺り一面に、颯風が巻き起こる。

「く……ッ!」

「……」

弾き飛ばされながらも、オールマイトは即座に態勢を立て直した。尤もそれはシャドームーンも同じことだったが。

そしてオールマイトは、自らの身体から蒸気がたち始めていることに気づいた。少しでも気を抜けば、このマッスルフォームを維持できなくなりかねない。

(ここで倒れるわけには……いかないんだぞ、オールマイト……!)

今は仮面ライダーである出久も含め、背後にいる全員が守るべき存在なのだ。なんとしても……たとえ命を削ってでも、目の前の敵を倒さなければ。そして皆を、救わねば。

「シャドームーン、今度こそ引導を渡してさしあげなさい」

かつて配下であった女から指図を受け——シャドームーンは、跳躍していた。踵のレッグトリガーが、足が光を放ち、激しく明滅する。「……ッ、」

おそらくこれは、相手の最大の一撃。どんな形であれ次の瞬間には趨勢が決すると悟り、覚悟を決めたオールマイトはその場で構えをとった。

——刹那、

弾丸のごとく飛来した漆黒の影が、シャドームーンの横つ面を張り飛ばした。

「……!」

予想だにしない事態に、思わず構えを解いてしまうオールマイト。唐突に脅威が去ったのだから無理もない。

そして地表に降り立ったのは、本来シャドームーンと並び立つ、もうひとりの世紀王——

「緑谷、少年……!?!」

仮面ライダーBLACKの姿。それ自体は、飯田天哉から事態の経緯を聞いてから驚きはなかった。12歳の……おそらく改造されたその日にまで身体が退行してしまっただけ。

——しかし、彼が纏っている光の束は……間違いなく。

(ワン・フォー・オール……!?!?)

「……下がっててください、オールライト」

「!」

紅蓮の複眼に射止められ、オールライトは自身の身体が燃えさかるような錯覚さえ覚えた。

「シャドームーンは、僕が倒す。ヒーローとして……仮面ライダーとして……!」

「……倒す?」片眉を上げて嘲うビシウム。「一度敗けた貴方に、何ができるというのかしら?」

「僕はもう、敗けない……!」

——どんなにピンチでも、最後には。

「絶対に、勝つんだ——!!」

そしてヒーローは、雄叫びをあげた。全身を覆う輝きが、よりいっそう眩さを増していく。ワン・フォー・オールの鼓動を、同じものを共有するオールライトは強く感じていた。

「……ッ、シャドームーン!」

掌から放たれた緑の閃光が、光り輝くBLACKへと襲いかかろうとして、

——弾かれた。

「……!」

ビシウムは……否、オールライトもまた、驚愕に目を見開いていた。BLACKの前に広がった光が、何かを形作っていく。2メートルはある屈強な四肢、バツタに似た頭部。

「な……!?!」

「どういうことだ、これは……?」

そんな、そんなことはありえない。仮面ライダーBLACKが、確かに今ここに存在しているというのに。

「僕は、太陽の子——」

「——仮面ライダーBLACK……RXツ!!」

失われたはずの”超・世紀王”の勇姿が、そこにはあった。

## 緑谷：ブレイジング（後）

上鳴電気と耳郎響香は、絶体絶命の危機を迎えていた。

「うえ、ウエイ……」

「……ッ、」

目の前には——かの、白髪の男。

「残念だったなア……せつかくここまで生き延びたつてのにさ」

ひび割れた唇を薄気味悪くゆがめ、嘲う死柄木弔。その五本の指が弄んだオブジェクトは、ことごとく跡形もなく崩れ落ちていく。——

”崩壊”。それが彼の個性だった。

当然、人間である自分たちに対してもその効力は発揮されるのだろう。こちらは上鳴が放電のしすぎで大幅に知力を低下させている——おそらく状況も把握できていない——し、耳郎も疲弊しきつていた。

（殺されるのか、このまま……？）

入学して未だ一ヶ月足らず、こんなことになるとは思ってもみなかった。同時に、もっと幼いときからこれ以上の脅威と悪意に独り直面してきた仮面ライダー・緑谷出久。彼がいかに正義であろうと、それは大いなる苦しみだったのだろうと彼女は思い至った。その彼に今さら片務的に救いを求めようなどとは思わない。彼もまた、シャドームーンという甦った仇敵に苦しめられている真つ最中なのだから。

「……これで、ゲームオーバーだ……!」

昂った弔が両腕を広げる——刹那、

エリアを覆う岩壁が粉碎され、金色と漆黒に彩られた影が姿を現した。

そして、

「ボルテック、シューター!!」

「がッ!」

眩い光線に右肩を貫かれ、たまらずよろめく甲。一体何が起こったのか、即座に理解できるはずがない。それは耳郎たちも同じことだった。

「ッ、痛、つてエ……。なんだよ……。誰だよ!？」

肩を抱えながら癩癩を起こす甲を、真紅の複眼が鋭く射抜く。血の涙を流しているかのような意匠。ぎらりと輝く、鋼鉄の身体。

「は……。う。なんだよ、おまえ……。有り得ないだろ……。」

こいつがこんなところにいるわけがない。まして、この姿で――

「僕は、悲しみの王子――」

「――RXッ、ロボライダー!!」

それはまぎれもなく、シャドームーンに打ちのめされているはずの仮面ライダーだった。

\*

その時、不思議なことが起こった。

そう述べるしかない”異常事態”は、別の場所でも発生していた。当初、強力な氷結の個性によって襲いくるヴィランを完封していた轟焦凍。しかし彼には致命的な弱点があった。個性を使用するたびに自身の肉体も凍りついていき、身動きがとれなくなるという弱点が。

「ッ、くそ……。」

たまらず毒づく右半身が冷えきった轟に対し、彼と対峙するヴィランの群れはようやく難敵を攻略できたとばかりに鬨の声をあげていた。他の生徒への対処を疎かにしてまで、彼らは人海戦術をとった。その結果、強力な轟の個性の弱点を明らかにするに至ったのだ。

「やあつと終わりだなア……。クソガキ」

「……ッ、」

歯噛みする轟は、思わず己の左手を見下ろした。

彼の個性は、右半身と左半身でまったく逆の事象を起こす。つまり”左”からは、灼熱を。

しかし命の危機が迫っているにもかかわらず、轟はその使用を躊躇った。美しいオツドアイ——しかしながら左目の周囲は痛々しい火傷痕に覆われている——に滲む憎悪。それは目の前のヴィランたちではなく、彼方へと向けられていて。

そんな彼の意識を引き戻したのは、自身がつくり出した氷結が、粉々に砕け散る音だった。

「！」

反射的に身構える轟。しかし舞い散る氷の粒をかき分けるように現れた”それ”は、彼に対する脅威ではなかった。

「な、なんだこれは……うわああ!!！」

ヴィランたちに襲いかかったのは——光り輝く、液体の塊。それは見かけによらず目にも止まらぬ速さで動き回り彼らを昏倒させていくので、轟には何が起きているのかさえ把握できなかった。

結局、呆然としていた彼が液体の塊の正体を認識したのは、あれほど大勢いたヴィランが瞬く間に鎮圧されたあとだった。

海原のような紺碧のボディ。無機質な白銀の仮面に鼻や口らしき意匠はなく、やや垂れた赤い複眼だけが煌めいている。

「おまえは……」

思わずつぶやくと、感情の表れない瞳がこちらへ向けられた。ぞくりと背筋が冷たくなつたのは、個性の過剰使用によるものだと思いたかった。

「——怒りの王子、バイオリライダー」

そんなことは知っている。轟がバイオリライダーの存在を受け入れがたいのは、

「緑谷……おまえ、もとに戻ったのか？」

ヴィランの個性で、12歳の身体に退化させられていたはずなのに——出久の身に起こった”不思議なこと”など、彼に知るよしもない。

バイオリライダーは口を開いた……が、その問いに答えはしなかった。

「どうして、”左”を使わなかったの？」



「……！」

「両方をバランスよく扱えばデメリットは無いに等しい、きみ自身が一番よくわかつてる筈だ」

それなのに彼は頑なに右の力だけで戦った。結果がああ、絶体絶命の危機だ。バイオライダーが現れなければ、彼は間もなく物量に押しつぶされていた――

「……黙れよ……！」

それでも轟は、殺意さえこもった目で眼前の英雄を睨みつけた。

「仮面ライダーだかなんだか知らねえが偉そうに。おまえに説教される謂れはねえ」

「……！」

対峙するふたりは、知らぬ者が見れば敵同士としか思われなほほどに緊迫していた。ふたりには大いなる共通点があるなどと、このときはまだ知るよしもない。彼らの世界への呪わしき思いと希望は、15歳の少年としては双方甚だ深いところにあつた。

\*

その戦いも、あまりに一方的と言うほかなかつた。

ワン・フォー・オール of 輝きを纏い、空間を飛び回るRX。相手取るシャドームーンもまた、本来の彼にはありえない挙動を見せていたが……RXのスピードは、彼を遥かに凌いでいた。

「ふ——ッ！」

「ッ!？」

空中高くでキックが炸裂し、大きく吹き飛ばされるシャドームーン。その身が岩場に直撃し、砕けた岩石の欠片が膨大な砂塵となつて舞い上がる。しかし煌めく白銀は即座に飛び上がつてきて、黒いボディのヒーローに襲いかかった。

そのとき、より濃密な漆黒の塊が、傍らからシャドームーンを弾き飛ばした。

「ッ、ぐ……！」

うめき声をあげて、墜落する漆黒。その彼を再び救けたのは、やはりRXだった。幾分も細いその身を抱きかかえ、着陸を遂げる。

「ッ、ありがとう……えっと……僕？」

「……………」

RXはなんとも答えなかった。——彼らは、単なる分身なのか。しかし出久にはそうは思えなかった。その行動には、自分からは分離した明確な意志を感じるのだ。

そして、その言葉も。

「無理にワン・フォー・オールを使わないほうがいい。改造されているとはいえ、おまえはまだ子供の身体なんだから」

「！、……………」

間違いなく、自分の声。しかし若干トーンが低い気がする。このRXは、一体——

無論、出久自身を除くすべての者たちは、何が起きたのかさえ理解できてはいなかった。それで劣勢に追い込まれたビシユムなどは、ある程度理由を察してはいたが。

「このようなことが……。これがキングストーンの奇蹟だともいうの？」

かつてゴルゴムの大神官と呼ばれていた頃、今は出久の体内にあるキングストーンを管理していたビシユムだったが、それがこの世界の唯一神たるべき力を与えるモノであるとは理解していたが、少々甘くみていたということか。

——と、彼女の背後にブラックホールが現れ、中からかの瘦身の白髪男がよろよろと這い出てきた。

「ッ、クソ……なんだよ……なんなんだよ……」

「……………死柄木弔」

仮面代わりの手から覗く真つ赤な瞳、見ると焦点が合っていない。余程の目に遭わされたのだろう。

「残念ですが、我々にとっての悪夢は未だ終わっていないのですよ」

「……………は……………？」

困惑する弔はしよせん未熟も未熟な青年だった。撤退に気持ち

傾いていたビシユムだが、”彼”からは弔のことも託されている。悪夢のクライマックスを見届けさせなければ。そこで潰れてしまうなら、それまでの男だったということだ。

——ふらつきながらも立ち上がったシャドームーンには、さらなる脅威が待ち受けていた。

「ボルテイツクシューター!!」

光弾を全身に撃ち込まれ、

「バイオブレード——スパーク、カッター!!」

液体化して目の前に飛び出したバイオリライダーの剣が、一閃する。

——そう。戦友たちを救い出したロボとバイオもまた、この戦場に現れたのだ。

つまりは、仮面ライダーの四大形態が揃ったということ。

「す、スゲエ……仮面ライダーがあんなに」

「……………」

壮観。状況も忘れて、見入ってしまう切島たち。それに、彼らも――

「……………やっぱり、全部揃ってたんだね」

「!」

振り向くと、そこには耳郎響香と、彼女に肩を貸してもらった上鳴電気の姿。数歩ぶん遅れて、轟焦凍もやって来る。

「お前ら……………!よかった、無事だったんだな!」

「危ないところだったけどね……………正直」

「ッ、思わずウエイがさめるくらいビビッたぜ……………」

「……………」

轟だけは四大ライダーの揃い踏み冷たく睨めつけていたのだが、このときの同級生たちは興奮でそれに気づくどころではなかった。

「……………ッ……………ッ、」

身体のあちこちを破損させたシャドームーンは、壊れたブリキ人形のようなぎこちない動きで立ち上がった。もはや満身創痍の身でありながら、その戦意は衰えていない。

否、そもそも「戦意」なるものを彼は持っていないのだ。ビシユムに命令をインプットされ、その通りにしか行動できないマリオネットではない、今の彼は。

(あれは……信彦くんじゃない)

そうだ——信彦はもう、死んだのだ。

「彼をこれ以上辱しめることは、許さない!!」

次の瞬間、RX、ロボライダー、バイオリライダーがその場から姿を消した。正確には、瞬間移動めいた素早い動きでシャドームーンを取り囲むような配置についたというべきか。

「緑谷少年!」

——そして、彼も。

「私にも協力させてくれ」

「オールマイト……でも、あなたは——」

「大丈夫、キミに手を貸す程度の余力は残っているさ! 平和の象徴、NO.1ヒーローとして、このまま傍観しているわけにはいかないからな……!」

それはもちろん偽らざる気持ちだったが、より深いところにある本音はこれ以上この少年の心に深傷を負わせたくないというものだった。ゴルゴムとの戦いのすべて、クライシス帝国との戦いにおいても終盤に至るまで自分は何もできなかった。今は同志として、少しでも辛苦を分かちあわせてもらわなければ。

オールマイトの本当の想いを知ってか否か、仮面ライダーは深々と頷いた。

「……ありがとうございます!」

オールマイトをその場に残し、BLACKもまた跳躍する。五人でシャドームーンを取り囲む——奇しくもその陣形は、五芒星を描いていた。

「ワン・フォー・オール……!」

「フル——」

「——カウル!」

「100パーセント……!」

B L A C Kが、R Xが、ロボがバイオが……そして、オールマイ  
が。同時にワン・フォー・オールを発動させる。この世にふたつとな  
い”平和の象徴”たる個性が今、五つも存在している。すべては呪わ  
れた世紀王に、今度こそ安らかな眠りの旅を捧げるため。そして——友  
を、救けるために。

「——はぁッ！」

彼らは、まったく同時に跳躍した。そのままキックの態勢をとり、

「！！！！」——P E N T A G O N      S M A A A A A A S S S S S S H ッ  
「！！！！」

世界は、光に包まれた。

つづく

涙（前）

「……」——PENTAGON S M A A A A A S S S S S H ッ  
!!!!  
「……」

——”平和の象徴”と”超・世紀王”がともに放った、会心の一撃。それは炸裂すると同時に世界を白く染め上げ、旋風を巻き起こした。

「……ッ！」

吹き飛ばされないよう、その場に蹲って耐える少年たち。自分たちと同じ年、クラスメイトが伝説の英雄であると、彼らは改めて身につきまされていた。

一方で、つい先ほどまでその英雄を追い詰めつつあったヴィランたち。彼らもまた、閃光の示す絶対的な力を前にはどうすることもできなかった。

「うゝうゝうゝうゝッ」

「……潮時ですわね。——黒霧！」

ビシユムの指示を受けるまでもなく、もとより黒霧もそのつもりだった。その肉体からつくり出されたブラックホールが、彼女らを呑み込んでいった。

\*

消えない、閃光。

真っ白になったままの世界に、緑谷出久はひとり立ち尽くしていた。

「これ、は……？」

（僕は……皆はどうなったんだ？ シャドームーンは……）

まさか彼岸の地というわけでもなからう。——あるいは、キングストーンが見せる幻か？

いつもの癖でブツブツと考えはじめた出久だったが、重量感のある

足音を聞いて我に返った。光の中から現れる——三つの影。

「あ……」

「……………」

BLACK RX・ロボライダー・バイオリライダー。どこからともなく現れ、助力してくれた——”僕”。

腑に落ちない部分はあるながらも、出久は彼らに頭を下げた。

「……ありがとう。きみたちのおかげで、皆を守ることができた」

その代わり、かつて親友だったものを粉々に打ち砕いて。

しかし、目の前のRXがようやく発した声は厳しいものだった。

「皆を？——本当に？」

「……………」

彼がなんのことを言っているのか、出久にはすぐにわかった。守るどころか、守られた。その結果が出久のこのひらを染めた、爆豪勝己の真っ赤な血潮だ。

「彼はまた……僕を……」

「僕を、守ろうとした」

「……………」

そうだ。そしてそれは、意外なことでもなんでもない。ヒトは大いなる矛盾の中に生きる存在であって、爆豪勝己も自分も決してそこから外れてなどいないというだけのこと。たったそれだけのことに気づくまでに、自分は十数年の歳月を費やしてしまった。

「緑谷出久、——今日のごことは、おまえがこれから積み重ねなければならない永い永い遍歴の序章にすぎない」

「え……」

予言者のような口ぶりで、目前の仮面ライダーが告げる。

「これから先、おまえには数えきれないほどの試練が待ち受けている。今日のごことが、遠い昔に思えるほどの」

「それに、遠くない将来——」

何かを言いかけて、口をつぐんだのはバイオリライダーだった。ゆっくりと首を振って、赤い瞳でじつと出久を見据える。変身後の姿の自分と、対峙することがあるなんて。不思議な感覚だった。

「だとしても、おまえは理想に向かって走り続けるのか？何万年もの時を……」

「……………」

暫し沈黙せざるをえない出久だった。仮面ライダーになつてからたつた三年で、もとより何も持っていない無個性のデクがあれだけのものを失つたのだ。これより先の艱難辛苦は、想像するに余りある。でも……それでも——出久の脳裏に、創世王を、クライシス皇帝を滅ぼしたときのことかよぎる。人間が変わらぬ限り……その心に悪がある限り、何度でも奴らは甦り、無辜の人々を傷つける。

だから、

「僕はもう、決めたんだ。どんなに遠くても……僕はもう、あきらめない」

必ず、世界を変えてみせる——

「……………なら、戦え」

「『夢に向かって、飛べ——』」

三人の仮面ライダーの姿が、空間に透けるようにして消えていく。その一部始終を見届けたあとで、出久の視界は再び光に包まれた——

\*

「……………りや、緑谷出久！」

ヒトとしての名を、しきりに呼ぶ声が聞こえる。

目を開けてみると、西部劇のガンマンのような男の姿があった。特異な恰好だが、彼が何者であるのか出久は知っている。

「……………スナイプ……………？」

「うむ。怪我は……ないようだな」

素早く半身を起こした出久を見て、ガンマンヒーロー”スナイプ”はほっと息をついたようだった。

一方で、記憶のうえではつい数秒前まで対峙していた光景が脳裏に



甦る。

(あれは、夢だったのか……?)

それにしても、彼らの姿かたち、声はつきりと五感に焼きついて  
いる。とりわけ、「夢に向かって飛べ」というあの言葉――

それより今は、間違はなく目の前にある現実のことだと思い直し  
た。USJ内は喧騒に覆われているが、戦闘の音はどこからもしな  
い。目に入るのもスナイプのほか、ヒーローの姿ばかりだ。

出久の疑問に先んじて答えるように、スナイプは口を開いた。

「襲撃犯たちの大部分は逮捕、拘束した。しかし肝心の主犯格とおぼ  
しき連中は、我々が駆けつけたときには既に逃げおおせたあどだった  
ようだ」

「そう、ですか。じゃあ……先生たちとかつちや……爆豪くんのほかに、怪我人は？」

「軽傷者は数名いるが、皆、無事だ。レーザーと13号にしても重傷  
ではあったが、命に別状はないそうだ。レーザーは治療が遅れてい  
たら危うかったらしいが、ライドロンが迅速に送り届けてくれたから  
な」

それは、心の底からよかったと思う。ひとりでも犠牲を出してし  
まったら、絶大なる仮面ライダーの力になどなんの意味もない。

――いや、まだわからない。勝己の安否はまだ、決していない。

スナイプに促されて、出久は立ち上がった。つらくとも今は、友人  
たちとともに英雄に戻るしかない。これからは英雄高校のいち生徒  
として正しい道筋を歩むのだと、自ら決めてここにいるのだから。

\*

命からがらの敗走劇、というほかあるまい。

黒霧の個性によって彼含めた三人の帰還。かつてゴルゴムの  
大神官と呼ばれたビシユムは、どこか他人事のようにそう考えてい  
た。

仮面ライダー……世紀王ブラックサンのもつキングストーンは、宿

主の意志に呼応して様々な奇蹟を起こす。仮面ライダーが増えるという今回の事態もそういうことだ。ただ、ビシユムの想像の範疇は超えていたが。

(流石は世紀王様。やはり、貴方こそ……)

一方で、現実を受け入れられない青年もここにはいる。

「なんだよアレ……なんなんだよ……！増えるとかありえないだろ気持ち悪い……気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い！」

痩せた身体をぶるぶると震わせながら、死柄木弔はしきりに首のあたりを掻きむしっている。ビシユムの冷たい視線にもまったく気づいていない。

「落ち着いてください、死柄木弔」見かねた黒霧が声をかける。「仮面ライダーは時に我々の予想だにしない能力を発揮するのだと、そちらにいるビシユム殿も仰っていたでしょう」

「ああ……？だからなんだよ……」

弔の赤い瞳が、初めてぎよろりとビシユムを睨みすえた。

「大体、コイツの造ったシャドームーンだって仮面ライダーと同等じゃなかったのかよ……！全ツ然使えない……役立たずのゴミじゃないか」

「――！」

刹那、ビシユムの瞳がかつと見開かれ――弔の身体は、紙のように吹き飛ばされていた。

「かは……ッ！」

「死柄木弔！ッ、ビシユム殿、何を……」

慌てて弔に駆け寄った黒霧が抗議の声をあげるが、そんなものはビシユムの耳には届いていなかった。

「口のきき方に気をつけなさい。卑しいヒトの分際で」

その整った顔立ちは、死柄木以前に”ヒト”という生物に対する侮蔑に満ちていた。

かつては仕える相手だったシャドームーンを終始道具扱いしたビシユムだったが、彼と死柄木弔を比べればもちろんどこか比較にならないほど前者に好意的である。それどころか、敵である仮面ライ

ダーでさえも。表向きは対等な協力関係にあっても、彼女たちゴルゴムの構成員にとって人間は家畜同然の存在でしかない。そんなものが敬愛すべき世紀王をゴミ呼ばわりしたのだ、本当なら何万回火刑にしても足りないくらいだ。

『そのくらいにしてもらえないかな、大神官様?』

ここにいるふたりのものでない男の声が響くと同時に、真つ暗だったモニターに光が灯る。

映し出される、壮年の男の姿。しかし彼の居所も暗がりであって、その全貌は見えない。

『彼は大切な私の教え子だが、まだ礼儀というものは襲っていないくてね。ご容赦願いたい』

「……………」

彼の言葉に縛られる謂れはなかったが、ここで破談とするメリットもない。ビシユムは文字通り矛を収めた。

「……………せん、せい」

『記念すべき初陣だったが、残念な結果だったね……………弔』

「……………ッ、」

『仮面ライダーは恐ろしかった?もう、やめにするかい?』

それでもし弔が領いたらば、十数年かけてきた計画がすべて白紙になるようなことを”彼”は平気で言う。

——”彼”はわかっていたのだ。弔の抱く心の闇は、生物としての本能さえ超越するものであるのだと。

「……………いやだ……………」

子供じみたかすれた声を、弔は絞り出した。

「殺す……………ヒーローは……………仮面ライダーとオールマイトは、絶対に……………」

その瞳が映し出す、英雄たちの姿。彼らをぐしゃりと握りつぶし、粉々に打ち砕くその日まで、彼の心身が渴きから解放されることはないのだった。

\*

その日、緑谷出久の望みが果たされることはなかった。

本音では、下校が許され次第爆豪勝己の搬送された病院に向かいたかった。しかし数時間前に襲撃を受けた生徒たちに道草を許さないという雄英の方針は当然であって、仮面ライダーであつても特別扱いはしないというものだった。

——いち生徒として三年間遍歴を積むのだとしつこく自分に言い聞かせてきた出久は、それを甘んじて受け入れるしかないのだった。

「……ただいま」

玄関の扉を開けるなり、クラブ活動に励んでいて帰りの遅い茂を除く家族・仲間の面々が迎えに飛び出してきた。やはりというか、玲子やジョーの姿もある。

「出久お兄ちゃんー！」

「出久くんっ、雄英高校が襲撃を受けたってニュースで見て……大丈夫だったのっ?」

「う、うん……僕はこの通り」

傷ひとつない両手をひらひらさせて、出久は応えた。実際は12歳の身体でシャドームーンに痛めつけられたのだが、そのとき負った傷は治療を受けるまでもなく綺麗さっぱりなくなっている。

やはりというか、一番過激に飛びついてきたのはジョーだった。

「アニキいいいー！」

鋼鉄でできた身体はずしりと重かったが、あらかじめ身構えていた出久はどうかかそれを受け止めることができた。ガレージにライドロンを戻した時、アクロバッターとロードセクターにも同じことをされていなければ、あるいは押し潰されていたかもしれないが。

「くそっ、アニキがそんなことに巻き込まれるとも知らないで俺は……ッ! いざつてときアニキを守れないんじゃ、俺は、なんのために……!」

「ジョーさん……」

縫りつく大きな身体の震えを感じ、出久は背中をぼんぼんと叩いて

やった。自分のために仲間にも辛い思いをさせるのは、本意ではない。「前と違って、四六時中一緒にいられるわけじゃないんだ。助けに来られないときだってあるよ……」

それはお互い様だと思う。何より今日は、目の前にいるのに助けられない無力感を味わった出久だった。

「背中合わせに戦えなくなっちゃって、僕らは仲間だ、心は通じあってる。それだけで……心強いよ」

そう、お互い様だ。だからわかる——それだけで、ジョーの無念が晴れるわけがないと。でも、今かけるべき言葉は他に見つからない。いかに知性も経験も人並み外れていても、出久はまだ15歳の子供なのだ。

「出久！」

と、いちばん最後に顔を見せたのはエプロン姿の引子だった。元来気が小さく心配性の母である、以前なら真っ先に駆けつけてきて抱きしめられていただろう。独りで仮面ライダーをやっていた頃などは毎日心配どころの騒ぎではなかっただろうし、現在では逆に家族も増えた。家長にふさわしい胆力を身につけたということなのだろう。出久が無個性を診断された日の夜、泣いて謝っていたあのときの母はいない。

それでも彼女は、出久のたったひとりの母親だった。

「茂くんが帰ってきたらお夕飯にするから、まずはお風呂に入ってきてちやいなさい」

「あ……うん、ありがとうお母さん」

ゴルゴムが息を吹き返そうとしているのだ。ここにいる仲間たちと、今後のことについて話し合わなければならぬ。それでも今だけは、30分でもいいから独りになる時間が欲しかった。

## 涙（中）

「ゴルゴムが、甦った……う？」

夕食の席でもたらされたその報告は、出久がBLACKだった頃を知らない仲間たちにとつても衝撃的なものだった。

「でも、どうして……ただの残党ならともかく、倒したはずの大神官が現れるの？」

「それに、シャドームーンだって……。間違いなくアニキが吊ったじゃないか、しかも遺体の埋葬場所は、アニキしか知らないはずだろう？」

「……うん」

それについては、学校に戻ったあと根津校長やオールマイトと話し合つて、真相はわからないながらも推測を立てている。

「シャドームーンはおそらく本物じゃない……いや、生物学的には本人だけ本物じゃないって言うべきなんだろうな」

「??？」

茂と一水の兄妹が首を傾げている。その手の科学知識に長けたジヨーが「まさか」と声をあげた。

「クローン……か？」

「うん。彼は改造されてからずっとゴルゴムにいたんだ、DNAを採られていてもまったく不思議じゃない」

いつかは不明だが、そのDNAから信彦のクローンを生み出し、12歳の身体まで促成栽培したのではないだろうか。そして再び、シャドームーンへの強化改造を施した――

「でも、シャドームーンのキングストーンは遺体に埋め込まれたままなんでしょう？ 姿だけ似せたつて、それがなければ出久くんと同等の力を発揮するなんて不可能じゃない」

それは、出久の中でも結論の出ない疑問だった。ありえないとは思いつつも、やはり連中は信彦の遺体を掘り返したのではないかという不安がちらつく。ただ、慌ててそれを確認に行けば、逆に敵に信

彦の居場所を教えることになるかもしれない。今は、下手に動けない。

「……シャドームーンやビシユムのことは、今後じっくり調べていくしかない。問題は息を吹き返したゴルゴムが、新たにヴィランの組織と手を組んだってことだ。主犯格は逃がしてしまったし、今後どんな手でまた攻撃してくるかわからない」

雄英に、だけではない。社会に対しても——

「ただ、今の僕は雄英のいち生徒だ。先生たちに働きかけることはできるけど、学校を通さずあまり勝手なこととはできない。だから——」

「——私たちに手を貸してほしい、でしよう?」

「言われるまでもないわよ」と玲子。それは、この場にいる皆の総意だった。

「……ありがとう。玲子さんには、目をつけられない程度に旅先で情報を集めてきてもらえると助かるよ」

「お仕事ついであってわけね、りよーかいっ!」

「じゃあ俺は、今度こそアニキの護衛を——」

言い募るジョーだが、これには出久はかぶりを振った。今回は危険もあつたが、出久自身は高い戦闘能力をもっているし、雄英にはプロヒーローが何人もいる。

「護衛は護衛でも、ジョーさんには茂くんを、響子さんに一水ちゃんをガードしてほしい。一緒に住んでるってことで、狙われないとも限らないから。茂くんたちは、なるべく人気がない場所に行かないこと、ひとりにならないこと……気をつけてほしいのはそれくらいかな?」

「……確かに、茂たちが通ってるのはフツの学校だもんな」

「わかったよ出久兄ちゃん、明日からは寄り道しないで帰ってくるから!」

こういう、茂と一水の素直さありがたい。彼らをこのように育てた佐原夫妻は、やはりすばらしい両親で、出久の恩人だと思う。

「でも……引子おばちゃんはどうするの?」心配そうに訊く一水。

「ふふ、ありがとう一水ちゃん。おばちゃんのこととは心配しないで

……って言っても、無理よね」くすりと笑いつつ、「どうしてもお買い物とか出かけなくちゃいけないし、せつかくだからバツターちゃんと一緒にいてもらおうかしら。前々から一回乗ってみたかったんだけど、出久ったら危ないからって乗せてくれなかったのよ。母親からすれば、息子がバイク乗り回してるのだって色々心配なのに」

「ア、ハハ……」

バイクどころではない危険なことを出久はしてきたわけだが、母としてはそういう問題ではないらしい。まあ、これもお互い様だ。中年に至って二輪免許を取得する本気度を思えば。

「じゃあ今日から、VSゴルゴム特別警戒体制、始動ってわけね！」

殊更明るく言う玲子。彼女自身の性格もあるだろうが、自分を氣遣ってくれていることは痛いほどわかる。出久は力強く頷いた。

「ようし！」ジョーも追隨する。「じゃあアニキ、チームRXリーダーとして音頭をとってくれ！」

「ち、チームRX？いつの間にかそんなことになってるの？」

しかも、まぎれもなく非戦闘員である茂や一水、母まできつちり含まれているらしい。それにしても改めて見ると、賑やかになったものである。ここに信彦はじめ秋月家の面々もいてくれたら……:という思いがよぎるが、すぐに振り払った。仄暗い思いに囚われていてはきりがない。

「オホンっ……:じゃ、じゃあ僭越ながら」烏龍茶入りのグラスを掲げ、

「チームRX、レディー……:！」

「ゴー！」と続けようとしたそのとき、

『わーたーしがー、来たー!!』

「!」

どこぞから響く、収録されたオールマイトの音声。皆、拳を掲げかけたままの状態でピシリと固まっている中、出鼻を挫かれた出久は音の出所であるハーフパンツのポケットをまさぐり、携帯を取り出した。

「!、オールマイト……:？」

それは繰り返し流れる名台詞に対する言葉ではなかった。――画



面に表示された発信者の名。それがわからない者は、この場にはいない。

食卓が静まり返ったところで、受話を押す。

「緑谷です」

『——もしもし、少年。今大丈夫かい？』

「……はい」

心臓が音をたてるのが、自分でもわかった。敵のことは色々と話し合ったし、いきなり進展はないだろう。ゆえに思い至る用件は、ひとつしかなかった。

『爆豪少年が、——』

「……！」

詰めた吐息が、こぼれた。

## 涙（後）

夜ふけのベランダは、間もなく初夏を迎えようという季節であつても未だ少しばかり肌寒かつた。

それでも出久は、独りそこに佇んでいた。昔から変わらないエメラルドグリーンの大らかな瞳が、ぼんやりと星のない夜空を眺めている。既に皆、寝静まつている。いかに改造人間の肉体といえども、今日のことでも出久も疲労しているはずだつた。だのに、ベッドにもぐつても眠れない。纏れて絡み合つた思考は、どう努めても解くことができなかった。

「…………ふう」

大きく息を、吐き出す。何をやっているんだ僕はと、出久は自嘲した。明日は……いやもうとうに日付が変わっているから今日か、ともかくあの襲撃事件の影響で、一日臨時休校になつたとはいえ。

踵を返して自室に戻ろうとしたとき——ドアが控えめにノックされる音を、出久は聞いた。

「…………出久、起きてる？」

母の声だ。出久がこうして眠れずにいるとき、彼女はどうやってかそれを悟るらしい。

「起きてるよ、どうぞ」

部屋に戻るのはやめて、ベランダからそう答える。数秒ほどして、扉が開いた。暗がりに浮かぶ翠の瞳は、ああ、僕とこのひとは間違いなく親子なんだと思わせるものがあつた。

「もう、そんな恰好で……。夜中はまだ冷えるんだから、風邪引いちやうよ」

「…………僕はもう風邪引かないよ、知ってるでしょ」

もうヒトでない身体なのだから。ただ母の顔が一瞬曇つたのを見て、出久は己の発言を悔いた。母を傷つけないわけではないのに。

それでも尻込みせず出久の隣にやってくる引子は、本当に強くなつたと思う。

「明日…………ううん、今日か。——行くんでしよう、病院」

「……うん。かっちゃんに、会ってくる」

「そう……」

暫しの、沈黙のあと。

「つらかったね。信彦くんとまた戦わなくちゃならなくなって、勝己くんも……あんなことになって」

「……僕は、大丈夫だよ」

本当につらいのは彼らのほうだ。そして、母や仲間にも心配をかけてしまう。すべて、自分が不甲斐ないせいで。

手すりを握る手に、力がこもる。ただ加減を間違えればこれを粉々に打ち砕いてしまうと、出久は自覚していたけれど。

「そういえば、」

「？」

不意に声の調子を変えた母を、思わず出久は見遣った。

「出久が生まれたときのこと、まだ話したことなかったよね」

「え……？」

いきなりなんの話だろう、確かに聞いたことはなかったが。

「私その頃華奢だったせいもあるんだけど、結構な難産だったの。陣痛が始まって、生まれてくるまでに丸一日かかったわ。痛くてつらくて苦しくて、何も食べてないのに戻しちやって。本当に大変だったなあ」

「えと、それは……その、」

出久はさらに戸惑いを深めた。流石に謝るようなことではないだろうし、なんと応じればいいのかわからなかったのだ。

「でも、本当につらかったのはそんなことじゃなかった。——何か、わかる？」

おずおずとかぶりを振ると、引子は微笑みを浮かべて彼方を見た。

「やつと生まれてきたあなたがね、息をしてなかったの」

「え……？」

今ここにいる自分まで、息が詰まったようだった。

「確かにあなたは生まれてきてくれたのに、いつまでもおぎやあつて泣き声が聞こえてこない。あのときは本当にこわくてつらかった、心

臓が止まるかと思ったわ」

「……………」

「もちろん、お医者様が色々やってくれて、ちゃんと泣きはじめてくれたんだけどね」

そうでなければ、出久はここにいない。ただ自分は、この世に生まれ出でたその瞬間から母に心配をかけてしまっていたのだ。……泣かなかったことでは？

「人間はね、泣かなきゃダメなの。——泣いて、自分は生きてるんだって周りに知らせるの」

「あ……………」

「いいのよ、出久」

「それを受け止めてくれる人の前では、泣いていいのよ」

出久にとつての”それを受け止めてくれる人”——その顔を思い浮かべながら、引子は告げた。自分でないことは最初からわかっている。母が息子のために泣くのは、過ちではない。けれど自分のそれは、息子の夢を否定するものだった。あの瞬間から自分は出久にとつて、大切なものではあれ頼るべき対象ではなくなってしまうのだらう。自分が与えられるのは帰る場所と、肉親としての愛のぬくもりだけだ。ゴルゴムとの戦いが終わったときもそうだった。傷つき疲れ果てた出久を休ませることはできたけれど、立ち直らせてくれたのは佐原家の人々だったのだから。

「ありがとう……………お母さん」

それでも精一杯の親愛を示してくれる我が子に、引子は抱擁をもつて応えた。

\*

トゥルーフオームのオールナイトが塚内警部とともに迎えに来たのは、ちようど朝食を食べ終えたときだった。

彼らの覆面パトに乗ってから、病院に到着するまでは四半刻ほどだった。勝己がここに搬送されたことは、雄英や警察内部においても

一部の者しか知らない。ゴルゴムの内通者はその大勢を摘発したが、昨日の襲撃者は英雄教師のスケジュールを把握している様子だった。――まだ、いるのだ。

「私たちはここで待っているから、行っておいで緑谷少年。積もる話もあるだろう」

勝己の入院している病棟へ着いたところで、オールマイトは立ち止まってそう言った。彼もまだ、直接相まみえてはいないのだが。

「……ありがとうございます」

彼の厚意に甘えることにして、出久は歩き出した。これから自分が行くのは、善悪の彼岸だ。変わらなければいけないのは、相手だけではない。

果たして廊下の突き当たりに、目的の病室はあった。ネームプレートに書かれた四文字、彼をこんなところに押し込めたのは自分なのだと胸に刻む。

(それなのに、僕は……)

自分が今からしようとしていることを、虫が良いにも程があると罵る自分が心のどこかにいる。けれど自分の拭い去れない頑迷さなどより、母の言葉のほうが指針とするに足るものだと思った。

控えめにノックをして――ゆっくりと、扉を開ける。諸事情を考慮してかそこは個室で、南東向きの窓から太陽の光が差し込んでいる。あかるく照らされたその中心に、果たして目的の人物の姿はあった。

赤い瞳が、ちらりとこちらを向く。忌々しげに顰められるかと思っ  
ていたけれど。

「……てめェか」

存外に落ち着いた、値踏みするかのような視線だった。勝己は時折このような表情をすることがある。クライシス帝国を滅ぼしたあと、学校へ通えるようになって初めて気づいたことだ。それより以前の彼は、常に勝ち誇った意地悪い笑みを浮かべていた記憶しかない。つまりそれは、無個性のデクという殻に閉じこもっていた当時の自分の印象でしかなかったということなのだろう。

「おはよう、かつちゃん」

一步を踏み出した出久を、勝己は拒絶しなかった。無論、積極的に歓迎しているわけではない。ベッドから起き上がらないまま、ぼんやりと天井を見上げている。

「体調、どう？」

「もう、他で聞いてんだろ」

つれない答。ただそれは凶星でもあった。ここに来るまで……否、昨夜の電話の時点で、オールナイトから詳しく聞き出していたことではある。シャドームーンの攻撃は確かに勝己の腹部を貫通したが、幸いにして臓器の隙間をすり抜けていたと。

それにしたってあれだけの出血だ。あとわずかでも処置が遅れていたら、次に見る彼は棺の中だったかもしれない。その可能性を思うと、寒くもないのに身震いがした。

それを振り払って、半ば無理矢理に作り笑いを浮かべる。

「えっと……差し入れにお菓子持ってきたけど、食べる？」

「アホか、腹に穴開いたんだぞ。まだ流動食も食べねーわ」

「そ、そうだよねごめんっ！持って帰るよ……」

「誰が持って帰れつつたそこ置いとけや」

（あ、食べてはくれるんだ……）

いちおう勝己の好みを家族に聞いてきたのが功を奏したか。ご機嫌取り……というわけでもないが、多少なりとも雰囲気や和らげる意味はあるはずだ。

「……で、仮面ライダー様は何しに来たんだよ。化け物相手にイキつて返り討ちに遭った死に損ないを嘲いにでも来たか？」

前言撤回。彼の言葉はあまりにとげとげしかった。

「……やめてよ、そんなこと言うの」

「ハッ、じゃあ何か。クラスメイトを心配してっつか？お優しいことだな」

「……………」

出久は静かに息を吐いた。突き放すような言葉は、その実ひどく虚ろに聞こえる。傷つき疲れ果てているのは、肉体ばかりではない――

ゴルゴムを滅ぼしたあとの自分の姿と、どこか重なるところがあった。

「……きみのこんな姿を、見たくなかった。きみはずっと、僕の憧れだから」

「……まアたそれか。たまたま最初から近くにいたンが俺だったってだけだろ。本当は、誰でも良かったくせに」

「わかってんだよ、最初から——そう言っつて、勝己は自嘲めいた笑みを浮かべた。

「俺がついてくるなって言や、おまえはすぐに俺の傍に寄りつかなくなった。おまえは友情も庇護も、何ひとつ俺に求めない。信彦つっ—代わりを見つけて俺のこたあ捨てたくせに、そのくせ憧れだなんだと理由を付けて値踏みするような視線を向けてくる。……なア出久、この十年、俺がどんなみじめな気持ちでいたかわかるか？」

「……わからない……いや、」

わかりたくなかった。自分自身ですら今まで自覚していなかった、それが真実だろう。勝己はなんでもできて、凄い人で、それゆえ恐れるものなど何もないのだと思っていた。凡人、まして自分のような無個性の劣等人種とは違うと。つまるところ、同じ人間扱いしていなかったのだ。自分の苦しみが彼に理解されることなどありえないし、彼の苦しみなど理解するどころか存在することさえ認めたくない。最初から歩み寄ることを放棄して、せつせと掘った溝の向かいから彼を呪っている。なんともゴルゴムの一員らしい生き方ではないか。

……ああ、いけない。思考がひどくシニシズムに引つ張られている。今日は自分の醜さを振り返りに来たわけではないのだ。そんなものは自室で、独りのときにいくらでもすればいい。

「それでもきみは、僕を救ってくれた」

「……その意味も、おまえは理解できないんだろう。俺とは違う、ヒトでないおまえには」

「……僕はあるとき、嘘をついたつもりはないよ」

「どうだか。おまえはこと人間関係に関しちや、杜撰極まりない。その場さえ取り繕えりやいいんだろう」

自分の言葉を、勝己は信じてくれない。悔しい一方で、それはやむをえない、当然のことであるとも思う。長い間すれ違つて、それでいて中途半端に繋がった何本もの糸は纏れきつて、綺麗に結び直せる日はいつくるのだろうか。いや、そんな日は永遠に來ないのかもしれない。それがわかつているから、勝己は……。

「……もう助けねエよ。俺はおまえの求める同志になんざ死んでもならねエし、これから先おまえに背中を追われることもない。ただおまえとは別の場所で、生きて、死んでいくだけだ」

「……かつちゃん……」

「だからもう終わりだ。おまえの足を引っ張るようなモンは全部捨てる、忘れっから。……今まで悪かったな、出久」

「……ッ、」

そのとき。真白い布団にひと粒の雫がこぼれたことに、勝己は気づいた。

(……?)

水?こんな今どきの病院で雨漏りなんてありえない、そもそも雨なんてここ数日降っていない。

怪訝な思いで視線を動かした勝己は、そこで初めてまともに出久の顔を見た。そして、一瞬間が真っ白になるくらいに驚愕した。

水滴を生み出していたのは、幾つになつても存在を激しく主張している彼の瞳だった。エメラルドグリーンに湿った膜が張って、陽光を反射してきらきらと光り揺らめいている。

「なッ……ンで、てめエが泣いてんだ!?!」

思わず身を起こして詰問する。腹の傷が引き攣つてじくりと痛むが、そんなもの驚愕の前には容易く塗り込められた。

「おい泣くな!!……ッ、その顔やめろヤクソナード!!」

「……やだよ……」

「あ!?!」

「いやだよ……そんなの……」

今の出久を見て、あの仮面ライダーの正体と認められる者がどれほどいるか。かわいそうなくらいに声が震えて、まるで打ち捨てられた



仔犬のようだと思った。

「……デク……う？」

「……それでいいよ……デクでいいから……。僕を見捨てないで……。独りぼっちにしないでよ……っ」

「何、言つて……ハッ、てめエが独りぼっち？ そんなモン昔のハナシだろ。今のてめエは誰より頼られ崇め奉られてんじやねえか。オールマイトでさえ、てめエのことはいっぱしの仲間として認めてる。てめエはガキの身で世界を救った最高の英雄サマなんだろう、そんなヤツが俺に何を求めんだよ」

「……ちがう……ちがうよかつちゃん、」

「だから、何が——」

——仮面ライダーになつてから、幾度も戦いを繰り返してきた。その過程で勝己の言う通り、僕を信頼して支えてくれる仲間もできた。こんな、僕を。

でもね、かつちゃん。彼らは誰も、無個性で泣き虫で、ただただヒーローに憧れる、独りぼっちの小さな子供だった僕を知らないんだよ。“デク”がここに生きてるんだってことを、誰も、僕自身でさえ忘れていたんだ。

しやくりあげながら想いを告げて、果たしてどれほど伝わったのだろうか。勝己が目を見開いていく。切れ長の白の中にぼつんと浮かんだ紅が、翠と混ざりあう。黒に染まる。穢れてしまう。一点の曇りもないはずだった彼の人生に汚点を残してしまう、仮面ライダーであれデクであれ、自分は彼にとってそんな存在でしかないのだろう。それは永遠に変わらない、過去は変えられない。もう出会ってしまったのだから。

「……そうやって、俺を自分の弱さの捌け口にするつてか。てめエは本当に卑怯で厚かましくて、自分の都合でしかモノを見ねえ。てめエが英雄だなんて笑わせる」

笑わせる……ああ、果たして勝己は笑っていた。口角がほのかに上がって、対照的にいつも吊り上がっている薄い眉がへにやりと下がっ

ていて。一度みひらかれた目は、いつしか眩しいものを見るように細められている。

「かっちゃん……」

「ッ、」

まるで恥ずかしいものを見られたかのように、勝己の手が出久の後頭部をがしつと掴み、半ば強引に胸元に押しつける。怪我人にしては力強いがそれだけだ、抵抗しようと思えばできないことはなかったが、流されるように身を任せた。

もう一方の手が背中をおさらずと撫でる。泣いている自分と同じくらい、彼の身体も震えている。これは羞恥か、あるいはこのような柄にもないことを強いられて屈辱を御しきれないのかもしれない。

それでも。今はただ、このつかの間の安息に浸っていたいと思つた。たとえそれが、ヤマアラシのジレンマのように、互いの傷痕を抉るものであったとしても。

\*

小6の秋、デクが学校に来なくなつた。

デクと俺はどういうわけか一度もクラスが離れたことがなく、それゆえアイツがどんな立場に置かれているのかはその過程も含めよく知っていた。常に孤独だった。程度の差はあつたが、皆から避けられ、時には攻撃されていた。無個性だから、と馬鹿なアイツは今でも思っているのかも知れないが子供は案外とものごとの本質を見ている。愚図で要領が悪くて、そのくせ他人を俯瞰したような目で見ていて、そのくせヒーローになること、それに連なることには異常な執着を見せる。そういう得体の知れないところが嫌われ、憎まれていた。もちろん「周りが見下してるから、俺も」なんていうゴミクズもいたかもしれないが、少なくとも俺はそうだった。

一方で俺は、デクに好かれているのだと思っていた。意地の悪いことを言ったり、時に暴力を振るつてもなお、かっちゃんかっちゃんとして後ろをついてくる。俺のことだけは特別だから清算もなしに無条件

で赦しているのだと、無邪気に信じて安心していた。

だから、”それ”に気がついたとき俺は怒りを通り越して絶望した。デクは俺を同じ人間とは見ていないのだと。オールマイトのよくなヒーローになるための踏み台としか見ていなくて、だから俺の個性や付随する能力に興味があるだけで、俺の人間性なんて最初からどうでもよかったのだと。裏切られたと思った。同時に、ヒーローを目指すには不要な感情に振り回されることが苦しかった。別に正当化する気はないが、俺がデクにつらく当たるのにはそういう事情もあった。

前置きが長くなったが、そういうわけでデクが不登校になってしまったとき、俺の胸にまづもって広がったのは安堵だった。傷つくことを恐れるほどには、デクも同じ人間なのだ。

こう見えて俺の感性は少なくともデクよりはまともなので、心配する気持ちも少なからずあった。だがアイツの傍に俺の知らない友人の影があることにはもう薄々気がついていたし、誰よりも自分がアイツを傷つけていたことは自覚していた。アイツの家になんか近づくことさえできないまま、中学生になって、一年、二年と過ぎた。その間に俺には重大な記憶の欠落があって、そこでデクとの間に何かがあったらしいが、覚えていない以上俺にとってはなかったのと同じだった。

中2の終わりになって、デクは戻ってきた。大事な時期に、二年半もの引きこもり。ご自慢の頭脳も精神力もすっかり役立たずになって、見るものすべてに怯えるようになっていた。もうヒーローになるどころではない。すべてをあきらめたヤツにこれ以上何をあきらめさせる必要もないから、俺が苦しい思いをすることもない。今にして思えば、それは甘い幻想だった。

再び俺の前に姿を現したデクは、以前とは別人のようになっていた。ガキみてえな童顔は相変わらずのくせに、浮かぶ表情ひとつひとつがもう大人のそれだった。誰に馬鹿にされても、俺が死ぬとまで言ってもまるで傷つかなくなった。所詮は子供のそれだと、困ったような苦笑いを浮かべるばかりで。取り巻き連中は現実を直視できなくなつて壊れたんだと言っていたが、それを真に受けるほど俺は単純

ではない。悔しくて苦しくて荒れに荒れていたら、今度はヘドロ事件だ。そこで真実を知ってデクを詰問したら、どういうつもりかデクはすべてを白状してくれた。アイツにとつては精神衛生上それが正解だったのかもしれないが、俺自身にとつてどうかは今でも判断がつかない。問い詰めた俺にも責任はあるが、本当にアイツは手前勝手だ。

真相を聞かされた俺は、柄にもないと思われるかもしれないが涙を流した。二度。一度目はデクの淡々とした語り口から伝わってきた哀しみや苦しみによるもので、謂わば涙も枯れ果てたのだろうアイツの代わりに泣いたというものだった。その日は心ここにあらずのまままごして、夜ベッドに入ってから一気に感情が押し寄せてきて、また泣いた。デクは英雄になった、なってしまった。ではアイツにとつて俺はなんなのかと考えていて、最早なんでもないので思い至るまでに時間はかからなかった。

これまでその事実気づかなかった自分があまりに愚かで、哄笑していたら、涙があふれ出たのだ。オールマイトを超えるヒーローになると息巻いていた自分が、こんなにも了見の狭い男だったとは。そういうわけで二度目の涙は、ただ自分自身のために流したものだだった。俺は、デクにどう接すればいいかわからなくなった。

今さら「今まで悪かった。これからは力になるから、なんでも言ってくれ」なんて言えるようなヤツは俺じゃない。ただ、デクがこれから先俺に何かを求めてくることがあるなら、出来るだけそれに応えてやろうとは心していた。たとえば挨拶をされる、挨拶し返す。プライドは傷つかない、デクのためでなく俺のためだから。

いちばんプライドが傷ついたのは、拍子抜けするくらいにデクが俺に何も求めてはこなかったことだ。中学卒業までの一年間、アイツは挨拶以外ではほとんど俺に話しかけてすら来なかった。アイツのメンタルが実のところ以前とそう変わっていないことを思えば当然のことだったが、平静でなかった俺はそのことに気づけず、独りで悶々としていた。

雄英に入学して本格的に動きはじめたデクは、いよいよ俺の手の届かない存在になったと思った。以前よりさらに増した力、皆を纏め上

げるリーダーシップ。俺の知っている木偶の坊はもういないのだと思いきわった。演習じゃあ完膚なきまでに叩きのめされて、既にレゾンドーナツを見失っていた俺は「ああ、もういいか」と思った。疲れたから、俺はいつか今度は憧れを否定するなだ何だと喚き散らすものだから、俺はいつかのデクと同じく諦めを先延ばしにする羽目になった。撤回したわけではない、先延ばしだ。

だがそれも、今日までの話だ。

なあデク。おまえが泣いて縋ってきたとき、おまえを罵りながら、俺がどんな気持ちでいたかわかるか？

おまえの体温を感じながら、俺は震えちまうほどに嬉しかったんだよ。おまえが俺に頼る、俺の前で醜い姿をさらけ出す。そうしておまえが木偶の坊であることを確認するたびに、俺の心は歓喜に満たされる。それはきつとどす黒い色をしている。ちやうどデクと俺の瞳が融けあい混ざったかのように。

それでもデクの涙は透明で、純粹だった。そんなものに己の存在理由を見いだしている俺の想いはきつと、汚水のようなものなんだろう。

遠くない将来、その報いを受ける日がくるのだと。このときの俺はもう、ぼんやりと予感していた。

つづく

## 幕間―GW・廃屋の怪／恋は及第点―（前）

……………。

「です☆がろんチャンネル」をご覧の皆さんおはこんばんちわ。元クライシス帝国の怪魔ロボット、デスガロンだ。なぜそんな俺がここでこうしているかを初見さんに説明すると、それはもう我がアニキを褒め称えることになるわけであるからして――

「おいジョー、夕飯だつてば!!」

「うおッ!？」

いきなり部屋のドアが開け放たれたうえで大声に、ジョーことデスガロンは大きな身体をびくつかせて背後を振り返った。そこには同居人である少年の姿があつて。

「な、なんだ茂か……え、もう夕飯？早かつたな……一本くらい撮れると思つたんだが」

「メニューによつて出来る時間は違うの！ほら、中断中断」  
「あッ」

カメラの電源をぶつりと切られ、デスガロンはがくつと頭を垂れた。鋼鉄でできた身体なので、そんな一挙一動だけでも小気味よく音が鳴る。茂はため息混じりの苦笑いを浮かべた。

――ジョーが、最近動画配信を始めた。それも本来の姿、怪魔ロボット・デスガロンとして。

自宅にいるとき、暇さえあればこうして撮影・投稿に勤しんでいることは、既にチームRX一同の知るところとなっている。しかし以前から動画サイトを嗜んでいたとはいえ、まさか自分が配信する側に回るとは……ミィハーだなあと皆生暖かい目で見ていたのだが、一応彼なりにきちんとした理由もあつて。

「顔を売つておけば、アニキが傍にいない状況で戦闘になつてもヴィランに間違われずに済むからな。それに、元クライシスの怪魔ロボット

トを仲間として受け入れるアニキの懐の深さも宣伝できるだろう?」「こ、後半はともかく……いいんじゃないかな。僕は応援するよ!」アニキこと、出久がそう言っただけ背中を押してくれたのだ。

\*

日々の活動や、知己のプロヒーローと絡んでの投稿動画が受けてか、「です☆がろんチャンネル」の登録者数はうなぎ登りに上昇しつつある。それは嬉しいことなのだが、贅沢な悩みもあつた。リクエストを消化するどころか、確認作業さえ追いつかなくなる。怪魔ロボットである自分の処理能力をもつてしてもそうなのだから、常人の人気配信者はどうしているのだろう。勇敢なことにコラボ希望のメッセーヅもいくつか届いているので、実際に会って聞いてみるのもいいかもしれない。

まあ、それは追々として。

「おつ、これなんかいいんじゃない?」

向かいの席で、髪を項のあたりまで伸ばした少年がそう声をあげる。彼の手にあるスマートフォンを、もうひとりの少年が覗き込んだ。

「えー、ありがちじゃねこーいうの」

「ハハッ、確かに」

「……真面目にやってるか、お前ら?」

ジョーがひと睨みすると、ふたり揃って肩をすくめて「やっていますやっています」と応じる。ところは近所のファミレス、ふたりに動画ネタの選定作業を手伝ってもらっているのだった。どうせ放課後ヒマをもて余しているなら、チームRX見習い隊員として働かせてやろうという魂胆である。対価は奢りくらいだが。

「で、どういうネタなんだ?」

「あー、これっす」

ロン毛くんが画面を見せてくる。——そこに表示された視聴者からのリクエストは、以下のようなものだった。

『デスガロンさんは折寺在住ですよ？私は多古場海浜公園の近くに住んでいるのですが、近所にあるもう何年も人が住んでいない大きな屋敷に幽霊が出るという噂があるのをご存知ですか？度胸試しに潜入して、呪われてしまった人もいるとか……是非、噂の検証をお願いします！』

「……ふうむ」

「な、くだらないっしょ？」

確かに、よくある心霊スポットの噂話としか思われないが。

「調べてみる価値はあるかもな……」

「へっ、マジ？」

少年たちは意外そうに顔を見合わせた。怪魔界の科学の粋を集めて造られた怪魔ロボットの眉唾物の幽霊の噂に興味を示すというのは、確かに奇妙と思われるだろうが。

「俺たち全員折寺に住んでいるが、そんな噂は聞いたことがなかった。違うか？」

「あー……まあ、確かに」

「そんな屋敷、存在すら知らなかったもんなあ。つまり……どーゆーこと？」

コーヒーを味わいながらフ、と笑ってみせるジョー。こうして当たり前のように飲み食いする姿は“ロボット”という肩書のイメージとはかけ離れていたが、一年近い付き合いともなれば慣れたものだった。

「何か裏がある……ということさ」

\*

決戦はゴールデンウィーク。

——というわけで、

「廃屋探検隊、レッツゴー!!」

「ゴー！」

拳を掲げる佐原兄妹とジョー。その姿を胡乱な目で見つめる取り



巻き、s。彼らの姿は件の屋敷の前にあつた。ジョー以外は皆まだ学生ということ、休日の昼間という健全な時間帯をチョイスしたのだが……それでもなお、鬱蒼としている。

「なー……なんでこいつらまでついてきたワケ？」

堪えきれないとばかりに、刈り上げくんが声をあげた。

「なんでって……」茂が口を尖らせる。「ジョーには僕の護衛って任務があるんだ。逆に、ジョーが出かけるときには僕がくっついていくのが当然じゃないか……まあ一水はついでだけど」

「私を見張り！男どもがはっちゃけすぎないための！」

「……だそうです」

肩をすくめる茂。両親を喪い、ともにクライシス帝国に立ち向かった経験から、彼らの絆はふつうの兄妹より余程強固ではある。とはいえ年頃の兄妹であることに変わりはないから、平時にまで一緒に行動していることはそう多くはないのだ。茂は出久やジョー、一水は引子や響子と——チームRXにおいても、男女の組分けというものはどうしても出来上がってしまったているのだった。まあジョーは白鳥玲子がいるときは玲子とペアでいることも多いのだが。

「どーいう理屈だよ」

「あのなー、俺らはガキのお守りじゃないんですけどー？」

「なんだとう！」

高校生と中学生の間に、バチバチと火花が散る。

「僕らはジョーより前から出久兄ちゃんと一緒にいたんだぞ、センパイだぞ！敬いなさいよ！」

「大体、見習いのくせに生意気〜」

「いや見習いつて何だし……」

「お前らに敬う要素ねえも〜ん。アニキのことはリスペクトしてっけど」

馬鹿にしたような笑みを浮かべるふたり。彼らも根は悪い人間ではないのだが、現代っ子らしくどうしても冷笑主義的などころがある。出久を慕うようになってから鳴りを潜めはしたが、基本的な思考回路はそう容易く変わらないらしい。

——カシャ、

睨みあっていた子供らは、カメラのシャッター音で我に返った。そこにはスマートフォンを構えたジョーの姿があつて。

「な、なに撮ってんだよ？」

”仲間割れの肖像”、アニキに見せてやる」

「!!？」

四人の表情が一気にこわばった。この場にいる者はみな何だかんだ出久を尊敬しているだけあつて、彼にはよく思われたいのだ。

この一発が効果覷面だったので、ジョーはスマートフォンを懐にしまうと、改めて皆に向き直った。

「では改めて、突入〜！」

「「「おー」」」

今度は全員の声が揃った。やればできるのだ。

\*

「許可を得ているのは1700までだからな。素早く見て回るぞ」  
ヒトナナマルマル

屋敷の入口で改めて促せば、子供たちはぶんぶんと頷いた。何年も人が入っていない屋敷とはいえ管理者はいるので、許可なく足を踏み入れれば不法侵入になる。ジョー……というか仮面ライダーのネームバリューもあつて、今回管理会社から許諾を得ることができたのだ。超人が幽霊の噂を駆逐してくれることを期待してでもあるのだろうか。

「しっかし、荒れ放題だなあ……」

豪勢なつくりであることに違いはないが、辺り一面にはモノが散乱しており、白昼にもかかわらず玄関からして薄暗い。心霊映像などにも頻繁に登場する、いかにもなお屋敷だ。ああいうものは九割がた眉睡なのだとジョーも理解しているが、今この世は超常社会である。個性もそうだし、ゴルゴムなどという組織や怪魔界などという異世界まで存在するなか、死した魂が生前のかたちを保って漂っていたとしてもなんら不思議ではない。

一階は外から見てもわかる通り、洋間、ダイニングキッチン、和室、書斎……と多彩な部屋で構成されている。そのひとつひとつを見て回っていくわけだが、いきなりドーン！と幽霊が現れるわけもない。ただ湿っぽく薄暗い、がらんどうの空間が広がっているだけだ。「……なんか、なんもねーなあ……」

飽きっぽい不良少年が思わずそうこぼすのに、時間はかからなかった。彼らとしてはもつとこう、ドカーン！とくる劇的なスリルを味わえると思っていたのだ。しかし現実、雰囲気こそはあるものの調査は地味地味地味と言わざるをえない。

あからさまにがっかりしている彼らに、食ってかかるいま少し若い少年がいる。

「……真面目にやる気ないなら帰れよ！」

「……あ？なんでおまえにンなこと言われなきやなんねーんだよ」

「センパイだからだよ！」

「ガキはガキだろうが」

「なんだと!？」

「ンだよ」

メンチを切りあう茂と刈り上げ。前者は気のいい少年ではあるが真面目が行きすぎて喧嘩っ早いところがあるし、後者に至っては未だにタバコを手放せないような少年である。相性が良いわけはなかった。

ただ意外にも、先ほどは相方と一緒にあって茂たちを馬鹿にしていたロン毛くんが何も言わない。——そういえば、顔色が微かに悪い。

「……おい、どうした？」

体調でも悪いのかと心配して訊いたジョーだったが、

「い……いやあ、その、ト……」

「ト……」

「トイレ……行きたくなっちゃったっか……」

「はああああ？」

ひとりを除く全員の気持ちが一瞬になった瞬間だった。女性の一水ならまだしも、オマエがそれを言うのかという気持ちもある。

「おまえな……トイレくらい家を出る前に行っておけ！」

「いや行ってきたんだけど、ここほら、寒イし……。つーか屋敷だし、トイレくらいあるよな？」

「あるだろーけど、水出なくね？」

付近にコンビニもないし、どうしたものか。まあ手っ取り早い手段はあるのだが、それを言ったら追放するぞとジョーの目が如実に語っている。

しかしそのとき、意外な人物が声をあげた。「わたしがきた！」と、まったく似ていない物真似とともに。

「良い方法がある、まかせて！」

「良い方法って何よ？」

「一水、おまえまさか……！」

茂の苦みばしったような声に、一水はウインクでもって応えた。

と、いうわけで。

「ハア……！」

かたちだけは綺麗に保たれた水洗のトイレで、彼は無事に用を足すことができていた。汚れてはなくても不浄の最たる空間なので抵抗はあったのだが、尿意の前には勝てなかった。ただ、恐怖とは別の問題もあって。

「終わったら呼んでね、流すからー！」

「……………」

外で待つ少女の存在である。彼女は砂を水に変える個性をもっており、それを使って水洗を一時的に甦らせようというのである。見事な発想だとは思いますが、男子高校生のプライドというものをまったく考慮に入れていないところに少女の傲慢さを感じずにはいられない。

「ハア……！」

ため息をつきつつ、立ち上がって身支度を整える。刹那——頭上に何者かの気配を感じて、背中がぞわりと粟立った。

「へ——」

目線を上げた彼が見たのは、

「うわあああああ——!!?」

「えっ!？」

その悲鳴は、外で待機していた一水の耳に入った。当然トイレに飛び込んだのだが、結果として彼女もまた”それ”を目撃する羽目になったのだ。

\*

「遅いなあ……一水たち」

茂が苛々と地団駄を踏んだ。

彼ら三人、ダイニングルームで待っていたのだが、10分が経過しても戻ってくる様子がないのだ。

「あー、大だったりしてナ」

癖なのだろう、皮肉っぽい口調で言い放つ刈り上げを、茂はじとりと睨みつける。年頃の少年としては珍しく、彼はそういうシモの話が嫌いだった。

一方のジョーは、双方の言葉に応じることもなくじっと考え込んでいる様子だった。

ややあつて、

「……いつまでも待ちぼうけていても仕方がない。様子、見に行くぞ」  
いつもの明るさが鳴りを潜め、デスガロンの鋭い雰囲気纏いつつあるジョー。そんな彼に当惑しつつ、少年たちもあとを追った。

——そして程なく。彼らが目の当たりにしたのは、もぬけの殻になったトイレと、床に落ちた拳大の中着袋だった。かわいらしい水色のそれ、色違いの同じものを茂は所持している。

「これ……一水のだ」

「は、何これ？」

「……中に砂が入ってるんだ。俺たちの個性、砂を使うから」

茂は砂を植物に、一水は水に変えることができる。それを聞いた刈

り上げは、なぜ一水が相方の用足しに同行したか勘づいて苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「これが落ちてるってことは、一水たちは!？」

「……わからん。だが、この屋敷に俺たち以外の何者かがいるのは事実だろうな」

「まさか……マジで幽霊?」

わずかに頬を青ざめさせる刈り上げ。彼の問いに答えうる者は今の場にいない。

一方で、幽霊であろうとなかろうと、茂は気が気でなかった。

「ッ！」

「あつ、おい茂——!」

走り出す茂の腕を、ジョーは掴み損ねてしまった。当然、それでもあとを追うことはできるし、実際そうするつもりだったのだが。

「あんたはここにいろよ、分析とか色々やることあるんだろ」

「刈り上げ……おまえ」

「……いい加減名前で呼んでくんねえかなあ」

ため息をこぼしつつ、ジョーのもとを離れていく少年。斜に構えたような言動は抜けないが、彼にも案外面倒見の良いところはあるようだ。茂にそれが伝わればいいのだが。

「……ま、俺は俺の仕事をするでしょう」

怪魔ロボットとして生まれながらに高いサーチ能力を与えられているジョーは、既に去ったターゲットの、目には見えない痕跡まで発見することができる。もし一水たちが拐われたのだとしたら、それをした者が何者であれ手がかりを残しているはずだ。

「!、この熱紋は……そうか、やっぱりな」

——”それ”を見つけるまでに、数分とかからなかった。

\*

ひとり飛び出した茂は、膨大な数の部屋を手当たり次第に探して回っていた。しかしどこにも一水たちの姿は発見できず、焦りと苛立

ちばかりが募っていく。

「どこだよ、どこ行っちゃったんだよ一水……！」

再び走り出そうとしたところで、剥がれた床材に足をとられて盛大に転んでしまう。ギシリと床が音をたて、積もりに積もった埃が辺りに充満する。たまらず鼻と口許を押さえっていると、自分のものではない咳き込む声が頭上から響いた。

「ゲホゲホッ、埃やべー……。あー、おい、大丈夫か？」

「！」

顔を顰めながらもこちらに気を遣うような視線を向けていたのは、一応は仲間という括りに入るのだろう刈り上げの少年だった。

手を差し伸べるかどうか迷っている様子が伝わってきたので、茂はそっぽを向きながら自力で立ち上がった。服に引付いた埃を払っていると、また露骨に嫌そうな顔をされたのだが。

無視して移動しようとする茂だったが、年齢差もあって身体の大きい彼に行く手を阻まれてしまった。避けようとするも、彼は気のない表情で同じ方向に動いてくる。茂の憤懣がピークに達するのに時間はかからなかった。

「なんだよっ、邪魔するな！」

「……ちったあ落ち着けよ、おまえひとりでどーすんの？相手がなんなのか、まだわかんねーんだぞ」

「ッ、それは……」

茂は思わず拳を握りしめた。刈り上げの言葉は正論だとわかる。これがもし幽霊でなく此方に危害を加えようとするヴィランの類이었다ら、茂たちだけではあまりに危険だ。ジョー……デスガロンの力がなければ。

「でも……もうあんなのは、イヤなんだ……！」

「……あんなの？」

訊きかけて、刈り上げは「あ」と気まずげな声を発した。兄妹が出久たちと一緒に暮らすことになった顛末、彼らに血のつながった保護者のいない理由は、出久の口から聞かされている。

「父さんと母さんのとき、僕、何もできなかった……。一水のことまで

守れなかったら、僕は……」

「……わかるよ、その気持ち」

「ッ、軽々しくわかるなんて言うなよ！僕の気持ちは、目の前で家族を殺された人にしかわからない！」

「……」

茂の血を吐くような激情に、最近すっかり人付き合いの悪くなってしまう友人のことが思い起こされた。彼と茂とはまったく人となりも異なるというのに、不思議と。

「……確かに、そこまでの経験はねえけどさ。そーゆー無力感？みてーなのは感じたことあんだよね、俺らも」

なおも茂が胡乱な目を向けてくるので、刈り上げは剃った顛顛のあたりを人差し指で掻いた。まあ、この少年の気持ちもわかる。口先だけでならなんともいえる。

「ヘドロ事件、知ってるだろ？あんどき俺ら、カツキと一緒にいたんだ」

ヘドロヴィランに取り込まれていく勝己を、ただ見ていることしかできず。友人だというのに、終いには野次馬の後方も後方で固唾を呑んで見守っていたのだ——出久……仮面ライダーが現れるまで。

「ヒーローだって遠巻きに見てるだけだった。アニキが来なきや、カツキも死んでたかもしれない」

「……」

茂の瞳には初めて同感のいろが浮かんでいた。何事にも淡白に生きてきたこの少年にとって、あれは初めてまざまざと無力感を刻みつけられた出来事だった。その思いが、表情にあらわれていたのだろう。

何よりその爆豪勝己は今、重傷を負って入院している。当事者だった出久も悔しい思いをしただろうが、自分に至ってはその場に居合わせることも、見舞いに行くことさえ許されない。そうして蚊帳の外になっっていくのがやるせなかった。チームRXとやらの顔を出しているのは、彼らを遠い世界の人間にしたくないからでもあった——相手はそこまで考えていなさそうであるが。



——茂が落ち着いた様子なのを見計らって、ジョーのもとに戻ろうと促そうとした。そのとき、

彼の頭上……天井から、にわかには黒い塊が染み出してきた。

「——茂、どけっ!!」

「え——」

突然のがなりに呆けている茂を、刈り上げは躊躇なく突き飛ばしていた。予想通りというべきか、塊からはクラゲのような触手が伸びてきて、彼を絡めとってしまう。

「あ……!」

「ッ、逃げ、ろ……!」

一水たちが姿を消した原因を身体で理解させられている。このまま引きずり込まれたらどうなるのだろうか、不安はあったが、今さらどうにもならない。茂がジョーに今ここで起きていることを伝えてくれると期待するだけだ。

しかし、茂は予想外の行動をとった。一水が持っていたのと色違いのオレンジの中着袋を開いたかと思えば、中に入っている砂から蔦を生成して刈り上げの腕に絡めたのだ。

「な……おい、何やってんだ!」

「ぐ、う、ううう……ッ!」

歯を食いしばり、刈り上げを引きずり降ろそうとする茂。しかし少年のそれではない彼の個性では、この正体不明の黒い触手には力負けしている。

「逃げろ」と言い募る刈り上げだが、茂はあくまでかぶりを振った。

「僕だって……ッ、仲間を救けるくらい……!」

「!、おまえ……!」

仲間と言った。茂が、自分を。

冷めた心に熱が灯るのを自覚したところで、黒い塊は非情にも茂へ新たな触手を差し向けた。刈り上げを救おうと四苦八苦していた茂がそれを避けられるはずもなかった。

「うわあああっ!?!」

「くっそお、ジョー!助けてくれえジョー!!」

「――！」

叫び声を聞いたジョーは、目の色を変えた――文字通り。一般的な黒目が翠の煌めきを放ち、その輝きが全身に拡がっていく。

そして、跳躍。その衝撃によって成人男性を模した表皮が弾け飛び、一瞬怪魔ロボットの素体のシルエットを晒したあとで白銀のボディが形成される。仮面ライダーにも似た形状の複眼は、やはり純度の高い翠でできていた。

デスガロンの姿となつて勇躍するジョーは、おそらくは漆黒の塊の目論見より圧倒的に速くその場に到達した。各地で行つた武者修行や簡易な改造の繰り返しにより、彼は以前よりバージョンアップしているのだ。

『馬鹿ナ……!?!』

「遅いッ！」

背中から生え出でた巨大な突起を、ブーメランのようにして投げつける。風を切つて飛翔するそれは触手を断ち切り、刈り上げと茂の身体を空中に解放した。

「うわあああああ!?!」

「うおおおおお!?!」

投げ出されたふたり。しかしデスガロンが二本の腕で見事彼らを受け止めてみせる。ふたり合わせると体重100キログラム以上はあるのだが、そこはやはり怪魔ロボットのパワーと器用さに軍配が上がった。

「大丈夫か？危ないから下がってろ」

降ろしたふたりを後退させ、思考を戦闘モードに切り替える。同時に天井で蠢いていた黒い塊がゴトリと音をたてて床に落下してきた。

『ヴウ……ウオオオオ……い！』

「……………」

スライムのように形状を変化させつつ、襲ってくる黒。対するデスガロンはブーメランのほかにビームシューターやガトリングなど多彩な火器を備えているのだが、ここが屋内であることも手伝ってそれらを自ら封じていた。廃屋とはいえ管理者がいる屋敷なので、許可をも

らった手前万が一にも破壊するわけにはいかないのだ。

「……ならばー!」

拳を構え、迎え撃つ。アニキと敬愛する仮面ライダーとてロボ・バ  
イオライダーにならなければ徒手空拳で戦っているのだ。もとより、  
デスガロン自身の切り札もあらゆる火器ではなくその拳だった。  
パーツを高速振動させ、猛火のごとき熱を発散する。その一撃を、標  
的に叩き込む!

『!!』

手応えはあった。しかし打ち倒すには至らず、慌てて後退する黒い  
塊。影とでも言うべきそれが、隠されている本体を防御したというと  
ころだろうか。

いずれにせよ、今のやりとりでわかった。相手は人外の怪ではない  
ということ。

「ただのヒトが……このデスガロンに敵うと思うな!!」

「……………」

それ、悪役の台詞では?——見守る少年たちの感想が一致する中、  
デスガロンは勝機を見出だしていた。

『……………ッ!』

散らばったガラス片にデスガロンの拳の輝きを反射して、わずかな  
光が差す。それを浴びた瞬間、黒い塊は息を詰めるようにして後退し  
たのだ。そういえば一水たちの拐われたトイレもこの部屋も、外部か  
らの光がいつさい入ってこない。

「ふ……ふふふふ、ふははははっ!」

『な……何がオカシイ!?!』

「おかしいに決まってるだろう、おまえの弱点が判明したんだからな  
!」

やはり悪役じみた台詞とともに、デスガロンは右腕を突き出した。  
身構えている黒だったが、その行動に意味はない。

「喰らえデスメタル・フラアアアツシュ!!」

妙にしゃつちよこばった声とともに、彼はこの場で初めて火器を使  
用した。間違いなく周囲に被害を及ぼさないという確信があった。

放たれた光の弾は、数メートルほど前進したところで唐突に弾けた。辺り一面が閃光に覆い尽くされ、茂と刈り上げは思わず目を背ける。

そんな状況下でひとつ、断末魔のごとき激しい悲鳴が響きわたる。デスガロンはそれを冷静な面持ちで聞いていた。

ややあつて光が収まり、元の薄暗い部屋が戻ってくる。茂たちは恐る恐る目を開けた。

「じよ、ジョー……今の、何？」

「閃光弾さ」

「せ、せんこーだあん？」

なぜそんなものを撃つたのか——答えの代わりに、デスガロンが指し示した先。

黒い塊が陣取っていたはずの場所に、人が倒れていた。駆け寄ってみれば、それは茂と同年代の少年で。

「……目え、まわしてら」

光がよほど堪えたのか、彼はぴくぴくと身体を痙攣させながら気絶していたのだった。

\*

「ず、ずびばぜんでぢだあ……!」

人体の限界まで折り畳まれた土下座の状態で、少年は涙の謝罪を強いられていた。

それを見下ろす三人、うち一名怪魔ロボット。「謝罪はいいから」と、彼が口火を切った。

「俺のちゃんねるにメッセージを送ってきたのはおまえだな？」

「は、はい……」

スマートフォン画面を示しながらずい、と迫ってやると、恐れをなした少年が鼻水を垂らしながらぶんぶんとうなずく。

「じ、自作自演ってこと？なんでそんな……」

「おおかた、俺を出し抜いて笑いものにさせるつもりだったんだろう、

怪魔ロボットであるこの俺を。——違うか?」

ぶんぶん、二度目。屈服の意思を示すためか、すかさず頭をこすりつけているありさまだが。

「あ、それより一水たちは?一水たちをどこやったんだよ!」

何よりもそれが先決だった……はずなのだが、この黒幕くんがあまりに平身低頭に徹しているものだから訊くのがすっかり遅れてしまった。まあ、この様子なら危害を加えられたりはしないだろうが。「スミマセン……こつちです……」

立ち上がることを許された少年が、猫背ぎみに階段を登っていくの続く。しかし陰気なヤツだと茂たちは思った。個性が性格に影響を及ぼすのか、はたまたその逆か。その因果関係については、科学的立証が待たれていた。

\*

さて。

「王手飛車取り!」

「待った、一生のお願い!」

「だあめ、小学生じゃないんだから!」

「……何やってんの、お前ら?」

二階の子供部屋らしき一室に閉じ込められていたふたりは、呑気に将棋に興じていたのだった。

\*

一行が帰宅の途についたのは、タイムリミットである17時ぎりぎりだった。5月なのでまだ昼間といって差し支えない時間帯だが、不良組にしても約定を破ってまで屋敷に居座るだけの熱意はもうなかった。あれはただの廃屋で、幽霊なんて最初から存在しなかったのだ。

どうでもよくなったのだろうロン毛はというと、一水と将棋話に興

じている。年齢差はあれど精神年齢は同じか一水のほうが少し上くらいなので、共通の話題さえあれば話が續くらしかった。

一方でそれぞれ妹と相方を取られた茂と刈り上げはというと、

「……ハア」

「なんだよ、これ見よがしにため息なんかついて」

「おまえ、ずっと思ってたけどオトナみてーな口のきき方するよな」

「ふん、勉強してるからね」

「そりやアツパレなことぞ」

相変わらずの小競り合い。しかし一応は命の危機——蓋を開けてみればしようもない悪戯のようなものだったが——をともに乗り越えた彼ら。その過程で、互いの心にもふれた。

「……茂、あんがとな」

「！、な、何が？」

「俺が捕まったあと、罵出して助けようとしてくれただろ」

「……………」

「だから、さ」

ふ、と笑いながら夕空に視線を遣る刈り上げ。どこか醒めたような目付き、最初はそれが気に入らなかつたけれど、彼も色々と思うところがありながら生きてきたのだと、今ならわかる。

「……それを言うならあんたこそ、僕を庇ったから捕まったんじゃないか」

「あー……そうだったか」

「そうだよ。……だから、あ、ありがとう」

「……………」

「……どーいたしまして」

その頬にほのかな朱が差したのは、夕陽のせいばかりではなからう。

## 幕間―GW・廃屋の怪／恋は及第点―（後）

幽霊屋敷探訪はあまりおもしろくない結果に終わったことは、前編をみての通りである。

とはいえ心霊ものは何かが起こる起こらないにかかわらず定番の動画ネタで、視聴者からの人気も高い。そのためジョーはこれをボツにせず、投稿することに決めた。

さて、動画にするからには編集作業が必要になるわけだが、ジョーがまだ不慣れであることも手伝いこれには数日から一週間がかかる。怪魔ロボットの頭脳が動画投稿のために使われるとはよもやクライシス帝国の面々も想定していなかっただろうから、やむをえない。

というわけで、またしても”彼ら”の出番である。

「おじやましま〜す」

「まあ〜す」

午前九時すぎ、相変わらず気だるげな様子で緑谷家にやってきた取り巻きコンビ。実質的にはこの家の主ともいえる少年と親しくなつて一年近くが経つにもかかわらず、足を踏み入れるのはこれが初めてだったりする。地味に緑谷家のフアクターでもある佐原兄妹と今まで接点がなかったので、どうしても遠慮があったのだ。幽霊屋敷探訪のおかげでそれも解決したが。

が、迎えてくれたのは緑谷の名をもつ母子でも佐原兄妹でもなかった。

「あらいらっしやい、早かったわね」

「あ……どうもっす——玲子さん」

白鳥玲子、職業はフリーのカメラマン。彼女も当然、チームRXの一員である。取り巻きコンビを除くとこの家に居住しているわけではない唯一のメンバーだが、頻繁に入り浸っているのほとんど同じようなものであった。

「ジョーと茂くんたちは、もう部屋で作業してるみたいよ。あ、ジュースとお菓子持っていってくれる？色々用意したから」

「あ、あぎーつす」

「……………」

「ふふ。付き合わされて大変だろうけど、頑張ってるね」

ウインクをしてみせる玲子。彼女はふたりより六つ年長なのだが、大人の余裕と少女のような可憐さが同居し、親しみやすい雰囲気醸し出していた。少年たちが好感をもつのも当然というべきか。

——それにしたって、である。

「……………さつきから上の空にも程があるんじゃないか、こいつ？」

呆れた様子でつぶやくジョー。彼のみならず部屋にいる一同の視線が向けられているのだが、ロン毛は意に介する様子もなくぼーっとあらぬ方向を見つめている。

「風邪でも引いてるの？顔赤いけど……………」

気遣わしげに訊く一水に対し、答えたのは当人ではなく相方だった。

「いんや、ここ来るまではフツーだった」

そう、至って普通。それが豹変したのは、ある瞬間だった。まあ刈り上げは薄々勘づいているのだが。

「……………あのさあ、」

ここで唐突にロン毛が口を開く。何を言い出すのかと思えば、

「玲子さんって……………彼氏とか、いんのかなあ？」

「あつ……………」

察し、である。

「なー、どうなんだ？」

「うくん……………僕ら、玲子さんのことは随分昔から知ってるけど、彼氏の話は聞いたことないなあ。な、一水？」

「うん。いないよ、絶対いない」

酷い断言ぶりであるが、女同士ゆえそうした話題になることもままあるのだ。エビデンスに基づいた発言であるから仕方がない。

「そっかあ……………」

見るからにほわほわした表情になるロン毛。妙齡の女性に交際相



手がいなくて喜ぶ、それはつまり――

「……好きなの、玲子さんのこと？」

「!?、すっ、ば、バカヤローそそそそんなじゃねーし……!」

「小学生か」

「好きならく、コクつちやえばいいじゃん!」

一水が無邪気な提言をするも、ロン毛は「いやあ……」と煮え切らない様子だ。

「何か気がかりでもあるのか？」

「まあ……玲子さんみてーな人って、俺みてーななんちゃって不良なんか相手にしてくれなさそうな気がしねえ？」

「……おまえ、そーいうの考えちゃう系？」

中学からの腐れ縁とはいえ、この相方が色恋沙汰のことで真剣に悩んでいる姿を見るのはこれが初めてのことだった。基本的に物事を深く考えない性質の男のはずなのだが。

「特別取り柄があるわけでもないしなあ……。せめてマジメに生きときゃよかつたよくアニキみたいに」

「そんなこと言うな、おまえにはおまえの良いところがあるぞ」

「たとえば？」

「た、タトエバ」

沈黙の帳が降りる。空気が急速に冷えていくなか、ややあつて彼の相方が口を開いた。

「……ノーテンキなところ、とか？」

「それ……取り柄だと思ってる？」

「ま、まあ……」

疑り深い視線を向けられて、「時と場合による」と続けようとした口は閉ざされた。適当につるんでいるときは気楽だし落ち着くのだが、チームRXの一員としてはどうにも頼りないと刈り上げは悩んできた部分もある。まあ他人のことは言えないのだが、不真面目なだけで彼はまだ頭は回るほうなのだ。

「とつ、とにかくよー、そのノーテンキさを活かしてアタックしてこいよ!最初は相手にされねーかもしんねーけど、段々距離が縮まって

くってパターンもあるし」

「うー……」

なおも洩るロン毛に、佐原兄妹が「いったれロン毛〜！」と発破をかける。直後、ジョーがぼそつと言いつつ放った。

「小中学生に煽られるようじゃあ、仮面ライダーの弟分失格だな」

「!!」

——そう、茂も一水も容姿は中の上くらいだが、親譲りの快活さと修羅場をくぐり抜けてきたがゆえの落ち着きが相まって、学校では異性からも密かな人気があるのだ。その点は出久にさえも先んじていると言っている。

バカにしていた——今はもう和解しているが——子供ら相手に後れをとっているようでは、出久はおろか爆豪勝己の取り巻きだって務まらないのだ。ロン毛の尻に火がついた。

「っしーそこまで言うならっ、玲子さんをオトして俺のモノにしてみせらあ!!」

「その意気だ!」

「当たって砕け散れ〜!」

いや砕け散ったらダメだろう。刈り上げが突っ込みを入れるが、もはや誰も聞いていないのだった。

\*

数時間後。当の白鳥玲子はというと、緑谷引子・的場響子と一緒に気の利いたレストランでランチと洒落込んでいた。男子禁制のたまの嗜みであり、一水が仲間に加わることもある。

その席にて、響子は「ええっ」と声をあげていた。

「ナンパされたんですか……!?!」

「まあ……平たく言うとなんかところよね」

そう、彼女が緑谷家を発つ直前、かのロン毛くんを声をかけられたのだ。「おっおっおっおっお俺とデートに行きませんか!?!」と。ちなみに原文ママである。

「それで……どうするの？受けるの？」引子が訊く。

「うくん……正直悩んでます、だって出久くんと同い年の子だし」

玲子としては正直、頼りがいのある年上の男性がタイプなのだ。ただその割には独立志向が強く、あけすけにものを言うものだから、実際も長続きしないのだが。

「ね、響子ちゃんだったらどうする？」

「え……」暫しの沈黙のあと、「……ごめんなさい、わからないです。そういうの考えたことなかったし」

「あー……そっか」

響子はクライシス帝国に両親を殺され、その後はずっと出久たちとともに戦い続けてきた。世界を守るといふ使命を見出だすことができたために復讐鬼にはならず済んだが、流石に恋愛ごとについてはまだなれないのだろう。

「……受けてみてもいいんじゃないかしら」

「えっ？」

妙なくらい真剣な表情でつぶやくので、玲子も響子もフォークを置いて聞き入る態勢になった。

「千差万別、色々な人と友だちになったりお付き合いしたりするのって、若いうちの特権なもの。もちろん、相手が悪い人なら考えたほうがいいとは思うけど」

まあ、悪い子ではない……と思う。不良じみてはいるけれど。

「それに……」

「それに？」

「可愛いじゃない、ああいう背伸びしてる子って。出久も茂くんも素直ないい子だから助かってるんだけど……一人くらい、ああいう息子がいても良かったかなうんて……」

「……………」

この発言、茂はともかく出久が聞いたらどう思うのやら。まあ、無個性のひとり息子を独り抱えて悩んでいた頃と較べて凶太く逞しくなったともいえるので、そういう意味では喜ばしいことかもしれないが。

ともあれ。元々不良や軽薄な男は恋愛対象外である玲子だが、年下の少年の初々しいモーションは少なくとも不快なものではなかった。それに、本気で自分を好いている相手の気持ちを無下にするのは憚られる。

(まあ……あくまでデートのお誘いだもんね)

彼の気持ちにどう応えるかは、それから考えるのでも遅くはあるまい。玲子もわりあいオプティミストな性質なので、そういう結論になった。

\*

そして、その夜。

「つしやー……!!」

自室にて、彼は歓喜の声をあげていた。返事を貰うためということと玲子と連絡先を交換することには成功していたのだが、早速返事が来たのだ。「明日、仕事の資料を集めに買い物に行くから、よければ付き合ってほしい」——と。

これはつまり、デートの申し込みそのものは了承されたと考えていいだろう。

浮かれ極まった少年は、勢いよく飛び上がってそのままベッドにダイブした。軋むスプリング。そのまま足をばたつかせていたら、振動が伝わったのか一階にいる母親から「うるさい!!」と怒鳴られてしまった。まあ叱られるのなんて日常茶飯事なのだが。

\*

しかし翌朝、少年は歓喜から一転、焦燥に駆られる羽目になる。

(やべええええつ、寝坊したああ……!)

楽しすぎて眠れなかった——ありきたり極まりない理由だけれども、普段から夜更かし不規則上等な生活を送っているのが災いした。まさか度重なるアラームもスルーしてしまうとは。

不幸中の幸いだったのは、昨夜のうちに今日着ていく服を用意しておいたことか。大したものを持っていないが、やはりデートなので最大限洒落たものを選抜しておいたのだ。一時間ほどかけて。

問題は、たとえどんなに急いでも遅刻が確定しているということ。初デート、しかも自分から誘っておいでこれでは印象最悪だろう。下手をすると二度と口すら利いてもらえないかもしれない。

せめて誠意だけは明確に示しておかなければならないと思い、スマートフォンに手を伸ばす——と、まるで機先を制するかのよう本体が振動を始めた。

「うおっ!?!」

驚きのあまり往年の「シェー」のようなポーズをとってしまうロン毛だが、誰も見ていないので当然突っ込みが入るわけもなく、気を取り直してそれを手に取った。画面に発信者の名前が表示されている。

「はえ、れ、玲子さん?」

時間をもう一度確認するが、待ち合わせの刻限にはまだ至っていない。無論、今から向かうのではどんなに急いでも間に合わないというのは先に述べたとおりではあるが。

ともあれ「もしもし」と応答すると、受話口から朗らかな声が返ってきた。

『もしもし、おはよう』

「ああ、お、おはようございますっ」

『ねえ、今どこ?』

「……………」

流石は白鳥玲子、思わず言葉を失ってしまうほどすっぱりと斬り込んでくる。

誤魔化せば心証が余計に悪くなってしまふことはわかっているの  
で、彼は正直に寝坊を白状した。すると、

『やっぱりね、ジョーから聞いてた通りだわ』

「へっ?」

『外、見てみて!』

言われるがままに窓から道を見下ろす。と、そこには大型二輪に股

がった女性の姿があった。ぱちつと目が合うと同時に、笑みを浮かべて手を振ってくる。

かあつと顔が熱くなると同時に、彼女がなぜここに？という疑問も当然湧いた。まあ自分の家なんて秘密でもなんでもないので、これも相方伝いにジョーから聞いたという話かもしれないが。

ともあれ尚更待たせるわけにはいかないので、身支度もそこそこにロン毛は家を飛び出し、玲子と合流した。

「さ、サーセンお待たせしましたっ！……あの、どうしてウチに？」

「ジョーがねえ、”あいつはどうせ寝坊するだろうから、迎えに行つてやったらどうだ？”って。流石、一緒に配信やってるだけのことはあるわよね〜」

「へ、へへへ……」

苦笑いしつつ、彼は内心「あのバツタロボめ……」と唸っていた。これで寝坊していなかったら風評被害もいいところである。事実寝坊してしまったのだが。

「じゃ、早速だけど行きましようか。後ろ乗って」

「……あの、これって玲子さんのバイクなんスか？」

「そうだけど？」

活動的な女性だとは知っていたが、よもや仮面ライダー顔負けのごついバイクを乗り回しているとは。自分ほとんどもない女傑に惚れてしまったのではないかと彼は思ったが、のちのちの彼女の行動を思えばそれは序の口にすぎなかった。

\*

「まさか、あの玲子さんがなあ……」

ありふれたファミリーストランに、しみじみとつぶやく茂少年の姿があった。彼と妹の一水も、玲子がデートの申し込みを受けたことは昨夜のうちに知らされていたのだ。

「マジかー……絶対玉碎すると思つてたんだけどな、俺あ」

「ひどっ……友だちなんじゃないの？」

「長年つるんでっからわかることもあんの」

自分も彼も中学生にして授業をサボったりタバコに手を出したりしていたような人間なので、ああいう正義感の強い女子には嫌われていたものだ。まあ大人の玲子からすれば所詮ガキの粋がりというだけのことなのかもしれないが、結局のところ相手にされていけないのは同じだと思っていたのに。

「ま、お気楽なのはいいけどよ……」

ぼやきつつ、タバコに火をつけようとする刈り上げ。しかし隣に座る茂がすかさずそれを奪い取り、灰皿に捨ててしまった。

「あつ、テメ……ここ喫煙席なんだぞ」

「それ以前の問題だから！」

「チツ……」

どうにも彼は不機嫌というか、得心いかない様子であった。ハア、と気だるげにため息をつく様子は、確かに雰囲気だけは大人のそれである。嫉妬……なのだろうか？

「……ひよつとして、刈り上げお兄ちゃんも好きな人いるの？」

一水が訊くも、彼は是非を明らかにしなかった。その反応が男子組の関心を余計に煽り立て、「誰誰!」「俺の知ってる人間か？」と質問させるのだが。

「……ヒミツ」

返ってきたのは、そんなひと言とニヒルな笑みだけだった。

\*

買い物と言うからには大型ショッピングモールでのデートを予想していたロン毛だったが、そのあては早速外れることとなった。

「あの……ハンコは？」

「見ての通りの電器屋さんでしょ？」

事もなげに言い放つ玲子。いや、確かに電器屋なのは見ればわかるが、一般的な店舗とは異なる……こう、秋葉原の片隅でぽつんと営業しているようなアングラな雰囲気のお店であった。

思わず固まっていると、「何してるの、入るわよ」と引つ張られ、半ば強引に入店する羽目になった。

「おじさーん、こんにちはー」

早速とばかりに呼びかける玲子。と、誰もいないと思っていたカウンターからひよこりと小柄な老人が顔を出した。服装は普通だが、色付き眼鏡が妙に怪しい。

「どうもお玲子ちゃん。おや、今日は可愛いお連れさんがいるねえ。ボーイフレンドかい？」

「かわ……っ!？」

ボーイフレンドとみられたことへの喜び以上に、「可愛い」などと形容されたことへの驚愕が勝った。幼児相手ならいざ知らず、高校生の男に対して使っていい表現ではないだろう……一部例外はいるにしても。

しかし玲子は老人の言動について、特段なんとも思わなかったらしい。「どうかな〜」なんて軽く流している。そのうえで振り返ってウインクしてくるものだから、ロン毛はこれを彼女からの挑戦と受け止めた。相手にされていただけでも今は構わない、勝負はこれからだ。買い物にとことん付き合うという、相手の土俵での勝負にはなるが。

\*

蓋を開けてみれば、怪しい電器屋は序の口にすぎなかった。この辺りの懇意にしている店、彼女はとことん巡るつもりでいたのだ。

流石に自分の買い物ばかりに付き合わせるのには申し訳ないと思っただのか、あるいは好んで道草を食っただけかもしれないが、途中でゲームセンターに寄ったり、古着屋で似合う服を見繕ってくれるなど的一幕もあった。前者は格闘ゲームでボコボコにされたし、後者に至っては終いに着せ替え人形のような扱いを受ける羽目になったが

そうして玲子の奔放さを散々に思い知らされたロン毛くんは、ただ



いま彼女とともに街外れの喫茶店で休憩中であった。

「ここね、東京の文京区にあるお店の2号店なんだけどね、カレーウィナーサンドが絶品なの。栄養価も高いからって、出久くんもよく食べてたわ」

「へ、へえ……そうなんすか」

「ふたりだけで来たのか——とは、勇気がなくて訊けないロン毛である。出久と彼女が一緒にいるところは数えるほどしか見たことはないが、親密というか、お互い妙に距離が近いのである。自分より遙かにふたりのことを知っているジョーや佐原兄妹が今日のデートについて何も言っていないのだから、穿ちすぎかもしれないが。

燻る不安を知ってか知らずか、玲子は我らが仮面ライダーの話が続けるのである。

「そういえばきみ、出久くんとは知り合ってどれくらいになるの？」

「え、……そうっすねー、幼稚園からだから……もう十年ちよつと？」

「えっ、そんなになるの!?意外……」

「まあ、仲良く遊んでたのなんてほんとにガキの頃だけでしたし……」  
幼い頃はかっちゃんというガキ大将に数人がくつついて遊んでいて、自分も出久もその中にいた。出久が無個性とわかった頃から、みんな彼に対して褒められたものでない言動をとるようになってしまったけれど。

それが今では、彼のことをアニキなどと呼び慕うようになっていく。修学旅行先でヴィランに襲われた際、仮面ライダーとなった彼に救われたことがきっかけだったのだ。

「現金ねえ」

「ハハ……」

毒づく玲子。確かに否定はできないが、そうやって柔軟に生きるほうが人生楽しいではないか。プライドに振り回される人生なんて損だと思おうし、そもそも振り回されるだけのプライドをもつような人生も送ってこなかった。いつも先を行く少年がいて、その背中をぼんやりと見ていたにすぎない。そんな自分を恥とも思わない。

(嫌われるかなあ、こんなんじや)

緑谷出久という英雄を傍で見してきた女性には。不釣り合いなのは最初からわかっている、そうであっても仕方がないと思う。ただ自分にしては珍しく、ほんの少しばかり傷つくかもしれないけれど。

しかし彼女の自分を見る目に、蔑みはなかった。

「——でも出久くんについていくようになったのは、あの子の強さや優しさに憧れたからでしょう?」

「!、……まあ、ハイ」

「私ね、思うの。誰かに憧れるのは、もつと素敵な自分になりたいって気持ちがあるからだって。そういう気持ちをもてる人は、もうそれだけで十分素敵だわ」

微笑む玲子。その笑顔の可憐さに惹かれて今ここでこうしているのだが、それ以上に彼女の言葉が心に染み渡った。——嬉しかったのだ、それが好意であろうとなかろうと。

\*

「ハア、食べた食べた……。ついついデザートまで食べすぎちゃうのよねえ」

喫茶店を出たところで、お腹を撫でつつ満足そうにつぶやく玲子。それはロン毛としても同感だった。

「ごちそうさまでした。美味かったっす、マジで」

「でしょ、でしょ?あ……自分でお金稼げる歳になったら、今度は奢ってね」

「え、それってどういう……」

「どういう意味かな?」

鼻歌を歌いながら気持ちスキップぎみに歩き出す玲子。顔があつと熱くなるのを感じながら、少年もまたそのあとを追いかける。昼下がりの、どこまでも平和な光景。

しかしこの超常社会において、平和など容易く破られるものだ。

「ヴィ、ヴィランが出たぞおお!?」

「へっ?」

「!」

どこからか聞こえる、悲鳴のような声。呆けてしまうロン毛と咄嗟に身構える玲子、ここに場数の差が出てしまうのも無理からぬこと。そして数秒後、よりにもよってヴィランは彼らの目の前に現れた。それも、明確な悪意をもって。

「リア充の二オイさせてんのは貴様らかあああああっ!!」

「!?」

「リア充死ねええええ!!」とヒステリックに叫びながら、ヴィランが襲いかかったのは——玲子だった。彼女が若干先を歩いていたことが災いしたのだ。

「玲子さん……っ!」

それを目の当たりにしたロン毛は——走り出していた。

恐怖を感じないわけではない。逃げ出したいと、臆病風に吹かれなかったわけではない。

だが、何より。こんな自分を肯定してくれた……愛する女性を、守れる男でありたいと思っただのだ。

「その女ひとに……手え、出すなあ——ッ!!」

雄叫びとともに、自らの個性を発動させようとしたときだった。

ヴィランが、紙のように弾け飛んだ。——なぜ?

呆気にとられるロン毛の前で、「ふう」とため息をつく玲子。そのしなやかな脚が躍動し、ヴィランを蹴り飛ばした——その事実を認識するまでに、暫くの時間を要した。

ただこのロン毛ボーイは不憫というか、運が悪かった。玲子の回し蹴りを喰らったヴィランの身体は、そのまま彼のほうへ吹っ飛んできたのである。

「へ——」

刹那、衝撃。そのまま街路樹の幹に叩きつけられて、彼はずるずるとその場にへたり込んだ。

「あ、ロン毛くん——!?!」

玲子がしまったという顔をしている。それを目の当たりにしたのを最後に視界がぼやけ、すうっと狭まっていく。脱力感に身を任せる

ようにして、彼はそのまま意識を手放した。

\*

「頭打ってたみたいだから、念のため検査してもらったの」

次に目を開けたときには病室にいて、付き添ってくれていた玲子にそう告げられた。

結局、あのまま気を失ってしまったのだ、自分は。それは襲いかかってきたヴィランも同じだったようで、彼のほうは駆けつけた警察に逮捕されたらしい。ヒーローの出る幕はなかった、玲子が一撃でノックアウトしてしまったので。

「あの……強いんすね、玲子さん……」

思わずそうこぼすと、玲子は恥じらうでもなく「まあね」と微笑んだ。考えてみれば彼女自身も身体を張ってクライシス帝国と戦っていたというのだから、リア充がどうか言っている程度の低いヴィランをのすなど軽い運動の範疇だろう。つくづく、自分とはスケールの違う女性だと思い知らされる。

「……ははっ」

もう笑うしかなかった。小さな声だったので、立ち上がってカーテンを直していた玲子には届かない。だが彼女は、少年の思うところを見透かしたかのように言うのだ。

「……ヴィラン、ぶつけちゃってごめんね」

「！、あ、いや……事故みたいなもんですし……」

「そう……そうね、事故。きみが逃げずに、立ち向かおうとしてくれたから起きた事故よね」

「！」

気づいていたのか、自分が彼女を守ろうと飛び出したこと。できれば、知られずにいたかったのだけれど。

「……情けないっすよね。ま、これでも進歩したんすよ。前は見てるだけだったんで」

「そっか。じゃ、まだまだね」

まだまだだ——そう語る玲子の表情は、相変わらず悪戯っぽくて、愉しそうに見えた。

「でも——嬉しかったわ。ありがとう」

その顔が、不意に近づいてきて——

「これは、将来投資ってことで」

「……………」

頬に残された柔らかな感触。惜しむらくは衝撃的すぎて、前後の記憶が飛んでしまったことだった。

\*

玲子からキスしてもらったとは、流石に相方にも伝えなかつた。ただ、時折妙に勘の鋭い相方は、メッセーリアプリの文面から何かを察したようで。

『あーあ、じゃあカツキに謝んねえとなー』

「は、なんでカツキ？つーか退院したの？」

おろしたてのダンベルを片手に持ちながら、器用に返信を入れる。トーク画面を開きっぱなしなのだろう、一瞬で既読がついた。

『昨日したって。で、おまえの残念会やろうぜってお願いしたの、さんじゅっぺんくらい』

ロン毛は呆れを通り越して感心した。基本つれない勝己にそんなにもしつこくお願いをして、なんだかんだ承諾を得られるのは今のところコイツくらいなものだと思う。知り合ってから年月は自分より短いというのに。

『やっど』じゃあウチ来い』って言わせたんだぜ、どうしてくれる』

知るかよ、と打ち返す。そもそも、名目なんてなんでもいいではないかと思う。久しぶりにカツキの顔が見たいという気持ちは、ばっちり一致しているわけで。

「現金だよなあ、ホント」

だって結局、それがいちばん楽しいのだ。



## 開幕！体育祭（前）

ゴールデンウィークも明け、大多数の学生ないし社会人にとっては憂鬱な日常が戻ってきた。

ただし例外もいる——”彼”のような、明確なビジョンをもって日々邁進している者などは。

「いつてきまーすー！」

玄関から声をかけると、「いつてらっしやい」と複数人の声が返ってくる。それを背に聴きながら、ガレージで相棒と合流して出発する。

そんな、緑谷出久の一日のはじまり。英雄”仮面ライダー”として過酷な戦いを経験してきた彼にとって、涙を流さんばかりに大切な礎の日々である。

\*

——雄英高校1年A組。最高峰たるヒーロー養成校の一角であると同時に、世間では既に平和の象徴・オールマイトと並ぶ英雄と目されている仮面ライダーを擁していることでも知られている。無論、属する学生たちはまさか仮面ライダーが同級生になるとは想像だにしていなかっただろうが。まして外見だけなら、クラスで一、二を争うほどに華やかさとは程遠い少年がその正体だとは……。

とはいえ入学からひと月が過ぎて、出久の存在はクラス内に限っては悪目立ちしなくなりつつある。元々の性格が控えめとは言わないまでも一歩引いたところがあるし、何よりどうしてもナード根性を発揮してしまう。超人と言うには卑近すぎる性格が、彼をクラスに溶け込ませていた。

ともあれ皆と挨拶をかわし、着席する。——ひとつ前の席が、空いている。それがどうしても気にかかった。

（……かつちゃん）

かつちゃん——爆豪勝己。幼なじみ……とひと言で括るには複雑

な関係にある彼は、先のU S Jでの敵連合との死闘で重傷を負い、入院していた。ゴールデンウィーク中に退院し自宅に帰ったという話は聞いたが、一度見舞いに行つたあとは連絡もとっていない。

今日は登校してくるのだろうか。あるいはまだ自宅療養が続くとも考えられる。それならそれでやむをえないことなのだが、病室でのやりとりから自分たちの関係がどのように変わったか、早く確かめたいと思つたのだ。泣き虫のデクを、唯ひとり知る男。

と、教室前方の空気が急に浮き足立つたものとなつたので、出久は顔を上げた。

「バクゴー!!」

その名を呼びながら、切島鋭児郎が駆け寄っていく。「ウゼエ」と彼をあしらう金髪赤眼の少年。

「おめエ、もう大丈夫なのか!?!」

「どけや。……とつくに完治しとるわ」

「そっか……良かった、本当に」

切島はほつとするばかりか、わずかながら目を潤ませてさえいるようだった。U S Jでの共闘を経て、勝己との間に信頼関係が生まれつつあるのだろう。それは少なくとも、切島の一方的な想いではないように出久には見えた。

そのまま彼とひと言ふた言ふことばをかわすと、勝己はいよいよこちらに向かつてくる。出久は思わず立ち上がってそれを迎えた。

「おはよう、かっちゃん」

「……おー」

返事は、それだけ。そのまま彼は椅子に座る……つまりこちらに背を向けてしまったから、会話は続かない。出久も、無理に続けようとは思わなかった。

幼なじみ同士とは傍目にはとても思えないやりとりなのは、入学当初から変わらない。

ただ、入学以前から出久と親しくしているふたりには、互いの様子がどこか違ったものとなっていることに気づいた。

「なんか変わったね……デクくんと爆豪くん。会話がなくても、通じ



あつてゐるって感じがする?」

「そうだな。何にせよ、彼らの関係が改善されるのは良いことだ」

USJ戦での爆豪勝己の行動を聞き及び、飯田天哉は彼への評価を改めていた。むろん友人である緑谷出久と彼とを比較すれば、前者に肩入れしてしまうのはやむをえない。その出久が望んでいた方向に事が進みつつあるならば、それは喜ぶべきこと。これからは彼らを見守っていかうと、飯田はそう心に決めたのだった。

「そういえば、」話題を換えるお茶子。「爆豪くんはあれだけど、相澤先生……大丈夫なんかな?」

「うむ……」

我らA組の担任であり抹消ヒーロー・イレイザーヘッドでもある相澤消太の負傷は、勝己のそれを遙かに上回る深刻なものだった。彼は一体どうなったのか。無論、最悪の事態となればなんの知らせもないことはないだろうが――

そんなことをぐるぐると考えていたら、本鈴と同時に教室前方の戸ががらりと開かれた。

「!?!」

「え……」

「……マジ?」

呆氣にとられるクラス一同。入室してきたのは見るも恐ろしいミイラ男……しかし黒ずくめの服装や無造作に伸びた長髪などの特徴から、それが噂をすればのA組担任であることはすぐにわかった。

ともあれこの担任のもとで教わるようになって約ひと月。除籍の二文字が身につまされている生徒たちはざわつきもそこそこに、皆びしっと着席していた。

——そして彼の口から、二週間後、体育祭が開催されることが告げられたのだった。

\*

雄英体育祭。それはこの超常社会において、かつてのオリンピックに代わると言われるほど世間の注目を集める一大行事である。やや大袈裟に思われるかもしれないが、未来のプロヒーローたちが日々磨きあげた実力を披露し、競いあう場なのだ。

とはいえ、先のヴィラン襲撃などを鑑みれば純粹に学校行事として期待できるものには変わりはない。相澤の口から開催が伝えられた瞬間の色めき立ちようは相当なものだった。「学校っぽいのがきたアアア!!」というシャウトがそれを象徴している。

仮面ライダー・緑谷出久も胸を膨らませる一方で、一部の生徒のもつ懸念にも同意できる部分があるとも感じていた。雄英高校の施設内にヴィラン……それもゴルゴムの残党と手を組むような得体の知れない輩が侵入し、生徒やオールマイトを殺害しようとしたのだ。幸いにして死者はなかったが、仮面ライダーが苦戦し重傷者を出したという事実は世間に少なからず衝撃を与えていた。その矢先に、例年通りの体育祭を開くことが正しいのかどうか、議論の余地があるのかわかる。

癖であれこれ考えていたら、緑谷裁定により誕生した委員長・飯田天哉が声をかけてきた。

「緑谷くん！お昼休みだぞ、速やかに食堂へ移動して昼食をとろう!!」

「あ、うん……休憩まできびきびとるんだね」

兄のほうは真面目は真面目でも、基本的に鷹揚な面が強いのだが。まあ、友人のこういう振る舞いにも慣れてはきた。

友人といえば、もうひとり。

「デクくん、飯田くん……」

「あ、麗日さ——」

近づいてきた少女に笑いかけようとして……笑顔が、中途半端な形で硬直した。

「……ウララカ、サン？」

そこに立っていたものはまぎれもなく麗日お茶子の姿かたちをしていた。にもかかわらず疑問形で名を呼んでしまうのは、彼女が今までに見たことのないような麗らかでない笑みを浮かべていたからだ。

「……体育祭、頑張ろうねええ……！」

「え、あ、ああ……え？」

一体、どうした?! いや気合いが入っているのはわかるのだけれども。

彼女の発する鬼気迫るオーラは、出久たちばかりでなくクラス全体を震えあがらせた……いや、そこまでは言い過ぎか。ともかく、尋常でない様子なのは間違いなかった。

\*

麗日お茶子は一体どうしてしまったのか。

体育祭に向けて気張っているというのは、見ていればわかる。それは他のクラスメイトも、もちろん自分たちも同じだ。

ただ彼女に関しては、その気合いの入り方が尋常でない。何かを背負っている者のみが纏う、鬼気——出久もかつてはそうだったゆえ、それを感じとることができた。

背負うもの——ヒーローに、なりたい理由。

「麗日さん、訊いてもいいかな？」

「な、何っ？」

先を歩くお茶子が、弾かれたように振り向く。オーバリアクションは飯田の専売特許と思っていたのだが……今のこのふたりに挟まれると自分などは実に地味なものである。苦笑しつつ、出久は訊いた。

「どうして、ヒーローになりたいと思ったの？」

「えっ……」

力が入ったお茶子の表情が素に戻ったかと思うと、どこか所在なきげに目が泳ぐ。後ろめたいことでもあるのだろうか。

「……デクくんたちと比べたら、めっちゃしょうもない理由だよ？」

「いや、そんな……」

そんなことはない——とは、聞いてみないことには断言できないが。

ともあれふたりがばつちり聞く姿勢を整えているものだから、お茶子もあとには退けなくなった。

「えつと……その、……経済的な理由というか、つまり……」  
つまり——

「えつ……」

「お金……金銭、だと？」

ふたりは思わず顔を見合わせた。普段の彼女に拝金主義的な振る舞いは見当たらないし、人々を救けるというヒーローの使命が心に根づいていることは疑いようがない。この一ヶ月の水魚の交わりがあつて、それは自信をもつて断言できる。

「……何か、事情がある？」

「……」

「あ……ごめん、無理に聞き出すつもりはないけど」

わからないことは知りたいと思うのは出久の拭えぬ性だった。それはむろん悪いことではないが、だからといって友人を傷つけることがあつたらそれは悪癖でしかない。

ただ幸いなことに、その”事情”はお茶子にとって恥じらいはあれ、恥じるべきものではなかった。

「……私の実家ね、土建屋やってるんよ」

その告白を皮切りに、お茶子は己の生い立ちを語りはじめた。昼夜を問わず汗水垂らして会社の、従業員のために働く両親。彼らの背中を、物心ついたときから彼女は見続けていた。

しかしか懸命に働こうとも、昨今の不景気により厳しい状況が続く。苦勞に苦勞を重ねる両親のために、幼いお茶子は己の個性を活かして会社を継ぐことを考えた。ヒーローの夢は、胸にしまつて。

しかし——

「お父ちゃんとお母ちゃん、言ってくれたんだ。」おまえが自分の夢を叶えてくれるほうが、よっぽど嬉しい”って……”

「——だから私、りっぱなヒーローになって、いっぱいお金稼いで、お父ちゃんとお母ちゃんに楽させてあげたいんだ」

「麗日さん……」

”金銭目的”の真意を語ったお茶子は、はにかんだような笑顔を浮かべた。

「な、なんか恥ずかしいなあ。めっちゃフツの理由でさ……デクくんなんか、二回も世界救ってるのに」

「……それは結果だよ、麗日さん」

「えっ？」

「僕だって元々は、自分の大切なものを守りたいから戦っていたんだ」  
むしろその明確な動機こそ、ヒーローとしてのオリジンになったと出久は思う。漠然とした憧憬だけでは、あの過酷な戦いを生き抜くことなどできなかつただろうから。

「家族とか、友だちとか、仲間とか……身近な人たちのために頑張れるのって、すごく素敵なことだと思う。だから恥ずかしかることなんてない、きみは目一杯、胸を張っていいんだ。——ね、天哉くん？」

「うむーぼ、俺も家族や友人を守りたいという想いは常日頃から持っているつもりだ！」

出久の言葉ではないが、飯田も胸を張っていた。彼も兄をはじめ家族を純粹に敬慕し、大切にしている性質である。お茶子の想いには共感するところも大きいのだろう。

目を丸くしていたお茶子は、やがてふたりの言葉を噛み砕いたのだろう——まろい頬をわずかに染めて、微笑を浮かべた。

「……ありがとつ、ふたりとも！」

そうこうしていたらお腹がぐう、と鳴ったので、今度は別の意味で赤面する羽目になってしまったのだが。

「あ……は、早く食堂行こっ!?!お昼休み終わっちゃうし！」

「あはは……そうだね」

「うむ、行こう！」

改めて歩き出す——と、出久はいずこからか己を呼ぶ声を聞いた。

「少年……緑谷少年……！」

「！」

振り返れば、そこには——トゥルー・フォーム 真実の姿の——オールマイトの姿。流石に堂々とはしておらず、部屋から顔だけ出して手招きをしている。

「……………」

やや逡巡はしたが、憧れのNo. 1ヒーローからの呼び立てである。ノーとは言えなかった。

「あ……ごめん、ふたりとも。僕、先生に用事頼まれてたんだった」

「えっ、そうなん？」

「ム、それはいけないぞ緑谷くん！引き受けたことは最優先かつ迅速に遂行せねば！」

注意しつつ、気持ちよく送り出してくれる。ありがたみと同時に自身の隠し事の多さに罪悪感を覚えつつ、出久は友人たちと別れた。

\*

「すまないね少年、貴重なお昼休みに。あ、お弁当用意してあるよ。食べるよね？」

「あ、はい……じゃあいいただきます」

友人との団欒を邪魔してしまったことを申し訳なく思ってたか、出久をソファに座らせたまま弁当を用意したり、お茶を淹れたりと甲斐甲斐しく動き回るオールマイト。No. 1ヒーローとしての規格外な姿を長年じっくり見続けてきた身としては面映いような、なんとも言えない気持ちになる。なんというか………たまに母性的なのだ。

苦笑しつつも御相伴にあずかることにした出久は、あれこれが終わったオールマイト………もとい八木俊典が向かいに腰掛けたところで、自ら口を開いた。

「でも、どうしたんですか？一緒にお昼だなんて、初めてな気がしますけど………」

「ああ……そうだね、そうなんだよ」

ばつの悪そうな表情を浮かべ、頷く俊典。

「きみが雄英こへいに入学してからというもの、対面でじっくり話をする機会をまったく作れなかったことに思い至ってね………」

「ああ……でも仕方ないですよ。オールマイト、ただでさえ多忙なのに………あんなこともあったし」

口許にだけは笑みをつくりつつ、その実出久の表情は曇っている。——そう、確かにあんなことがあった。だからこそもつと、気を配るべきではなかったか。弟子……にはし損ねてしまったが、自身の個性の秘密を共有させ、一時的であれ受け継いでまでもらった。仮面ライダーであつたとしても、たつた15歳の少年に。

(この子はまだ少年なんだ。不幸の積み重ねで世界の命運をかけた戦いの矢面に立たせてはしまったが……本当なら、我々大人が守り育ててゆかねばならない難だ)

そんな決意を秘め、改めて口を開く。

「爆豪少年も相澤くんも無事に復帰したわけだが……何か話はしたかい？特に爆豪少年とは」

出久と入院していた彼を引き合わせるよう取り計らつたのは他ならない俊典自身だ。彼らの間にやりとりがあつたことも当然、認識している。ただ問答の内容や、その後についてまでは承知していない。そこまで他人が介入するようなことでないと言われれば、その通りだとも思う。そういつた線引きを器用にできる性質ではないのだ、このNo.1ヒーローは。

案の定曖昧な笑みを浮かべて、出久は口を開いた。

「挨拶だけです。それも、ほとんど僕から一方的に……って感じですけど」

「そ、そうなんだ……うーん」

「いや、それだけでも良いんです。かつちゃんも僕も、昔とは違つて……でも、変わらないものもあるから」

お互いに、そのことに気づくことができた。様々な感情が絡みあつた拗れた関係はそう簡単に元のようにはならないだろうけれども……きつと、やり直せる。

このときの出久は確かにそう信じていた。何度裏切られても捨てきれないその、無邪気さで。

ただこのときばかりは、俊典も出久の想いに惹かれた。父子ほどの年齢差はあれ、純粹さにおいては彼も少年のようなものだったのだ。(ふたりのことは、私が出る幕ではないか)

ゆえにそう結論付け、話題を変えることにした。

「それで、ここからが本題なんだが……」

「……ワン・フォー・オールのことですか？」

「！」

厳粛な顔つきになる出久。——彼もまた、機会を見計らってその話をしようと思っていたのだ。

「……きみはやはり、後継者を見つけ次第その力を手放すつもりでいるのかい？」

「はい」迷いはなかった。「その気持ちは変わりません……いや、この前のことでさらに強くなりました」

「少年……仮面ライダーが、分身したことかい？」

言葉にすると笑ってしまいそうな話ではある。無論、この場ではふたりともくすりともしないが。

「この一年……仮にもあなたから受け継いだ力を腐らせておくわけにはいかないと思って、使いこなすための訓練は確かに積んできました。でもあんなことは、予想外だった……」

「……」

仮面ライダーの”分身”——オールマイトも含め、あの光景を目撃した者たちはそう捉えていることだろう。それ自体外部には洩らしたくない——ヴィラン側から洩れる可能性は十分あるが——話のだが、出久自身が己の胸のうちにとどめていることもあった。

(あれはきつと……未来の、僕自身だ)

ワン・フォー・オールとキングストーンの共鳴により、時を越えて来訪した。彼らもワン・フォー・オールを使っていたということは、遙か未来においても自分はまだ譲渡をしていないのか。それとも共鳴による、奇跡か。

——どちらであろうが、恐ろしいことなのだ。現実には自分は、時間という神の領域さえ侵してしまった。

「僕が心まで人間でなくなったら……いよいよ、誰にも止められなくなってしまう」

「少年……」



そんなこと、あるわけがない。俊典は心の底からそう信じて、出久にも伝えたかった。しかし一度はすべてに絶望し、英雄の名を捨てひっそりと生きてゆこうとしていた彼は、その否定を頑なに否定する。

「——だからこの体育祭、僕にとってはある意味最大のチャンスなんです」

「!?」

そのひと言に、いよいよ俊典は度肝を抜かれた。

(まさか少年、次の体育祭でもう後継者を見極めるつもりか!?)

いくらなんでも早い、早すぎる。だいたい自分のようにオブザーバー観察者としてならともかく、彼はいち参加者の立場でそれをするつもりなのだ。

「ま、待ってくれ少年！せめて雄英に在籍している間くらいは、時間を取っても——」

「それじゃダメなんです。だから——」

「——僕、とことん勝ちに行きます！」

「……え？」

出久の大きな瞳が好戦的な光を放っていることに、ようやく俊典は気づいた。しかし自身の強大化を恐れていた先ほどまでの様子とは、人が変わったようではないか。

「ご、ごめん。話が見えないんだけど……?」

「あ、すみません。——平和の象徴の後継者は、いざというとき世紀王を止められる存在でなくちゃならない。そのために必要なのは、何よりどんな強敵にも尻込みせず喰らいついていく勇敢さだと思うんです」

クラスメイトたちの多くは、規格外すぎる仮面ライダーの実力を目の当たりにして圧倒され、慄いていた。確かにそれは無理からぬことかもしれない、ヒーローの卵というだけのふつうの少年たちに対して、この身体は魔王の器だ。本能的に戦意を喪失してしまうのも無理からぬことなのかもしれない。

だが、それさえも乗り越えて自分と対峙できる人間にこそ——この

力を。

そんな人間を、雄英生徒数百人の中から見出だすために。

「僕が来たってことを、世の中に知らしめてみせます」

緑谷出久が、自ら至った決意だった。

## 開幕！体育祭（後）

ヒーローの卵のひとりとして、ゴルゴムの世紀王より”脱皮”して誕生した英雄・仮面ライダーとして。

緑谷出久が新たな決意を固めた数時間後、1年A組の教室前は異様な雰囲気にも包まれていた。

教室の出入り口が、大勢の生徒たちによって塞がれているのだ。普通科の生徒の姿まである……というか人口比の関係で大部分がそうである。

こうしたことは今まででもないではなかった。何せあの仮面ライダーを擁するクラスなのだ。あの救世の英雄がいったいどんな男なのか、興味津々で覗き込みに来る者はいくらでもいる。まあ素の出久はどうにも地味なので、大抵の覗き魔どもは拍子抜けした様子で退散していくのだが。

しかしそうした事態も、入学後ひと月以上が過ぎて沈静化したはずだった。ましてや、この大人数が一度に押し掛けるとは。

「か、帰れねえじゃねえかよ。なんなんだよ……」

ぼやく峰田にジトリと睨みつけられ、出久は苦笑いを浮かべた。確かにまずもって心当たりとなるのは自分自身のことである。

しかし、

「自惚れてんじゃねーよ」

「！」

突き放したような言葉に、峰田は殆ど条件反射的に「ヒッ」と声をあげる。——人当たりの良い人間が多数を占めるこの教室において、そんな物言いをする人間は限られている。

「敵情視察だろ、雑魚の」

「かつちゃん……」

「ど、どういうことだよ？」

「ヴィランの襲撃を生き残った連中だ、体育祭の前に改めて見ときてーんだろ。今までどこぞのクソナード以外は眼中に無かったんだ

ろうからなア」

相変わらず容赦のない爆豪勝己だが、その優れた洞察力は出久も知るところである。ヴィラン襲撃をきっかけに、注目の対象が仮面ライダー単体からそれを擁するA組全体に広がった——そういうことだろう。

「そんなことしたって意味ねーから……どけやモブども」  
「!？」

A組の面々からすれば「ああまたか」という程度の振る舞いだが、殆ど初対面の客人たちにしてみればそうではない。空気がひりついたところで、生徒のひとりが声をあげた。

「……へえ、それが仮面ライダー率いる噂のA組の姿勢ってわけ」  
「!」

勝己の神経を逆撫でするような言葉とともに群衆から抜け出してきたのは、逆立った紫髪をもつ長身の生徒だった。

「こういうの見ちゃうと、幻滅するなあ……。普通科とか他の科ってさ、ヒーロー科落ちたから入ったってヤツ結構いるんだ、知ってた?」  
「はっ……だから何だってんだ」

「わかんないかなあ」と、少年は首筋を掻いた。

「学校は俺たちみたいなのにもチャンスを与えてくれたんだ。体育祭で好成績を残せば、ヒーロー科への転籍が認められる。……逆もまた然り、ってね」

「……………」

その言葉に、A組の何人かがごくりと唾を呑み込む。

「敵情視察? 少なくとも俺は、いくらヒーロー科とはいえ調子に乗ってつと足下掬っちゃうぞって宣戦布告しに来たつもり」

唇の端を吊り上げ、挑戦的な笑みを浮かべる少年。余程自信があるとも見える。それはこの御時世において大したものだが、それだけで英雄を標榜できはしない。

と、今度はB組の鉄哲を名乗る少年——心なしか容貌・言動ともども切島に似ている——がA組の傲慢ぶりに怒りの挑戦状を叩きつけてきた。むろんそれを招いた責任は爆豪勝己ただひとりにあるのだ

が、彼自身はもう挑戦者たちに一切の関心がないようであった。

「待てこら爆豪！」切島が抗議する。「どーしてくれんだ、おめエのせいでヘイト集まりまくってんじゃねえか!？」

「関係ねえよ」

「はあ!？」

「ウエに上がりや、関係ねえ」

「……!？」

それは己に言い聞かせるがごとき響きをもっていた。いずれにせよ彼はそれ以上どんな言葉も聞き入れず、人混みを突っ切って去っていく。

勝己の傲岸不遜な態度を、歓迎はしないまでも受容しつつあったA組だが……他のクラスとの対立を招いたことには当然、賛否が分かった。ヒーローを目指す以上、上昇志向を強くもつことは正しい。だが、彼のような言動は――

「確かに、言葉は悪かったと思う」

「!？」

このように空気が”揺らいだ”とき、前へ出ていくのはやはり彼の役目だった。委員長の座は他人に譲り渡したといえど、平和の象徴と並び称される英雄の言葉が重くないはずがない。

「でも僕は謝らない。彼の言った”ウエに上がる”がどういう意味か、わかる?？」

「……?？」

「……優勝?？」と、隣で峰田がつぶやく。無論、目の前のことに限定するならばその通りだが。

「ヒーローとしてトップに立つてことは、この社会の平和とか安寧とか……そういうモノすべてに、責任を負うってことだ」

責任と、簡単に言う。しかし今の御時世、それがどんなに困難なところか。

「ゴルゴムのように社会を裏から牛耳る連中、クライシス帝国のようになんの前触れもなく異世界から侵攻してくる連中……そういう、生半可な信念では到底太刀打ちできない悪が、いつまた現れてもおかし

くない。——そんな奴らと戦う、矢面に立つ覚悟が……きみたちにあるの？」

まぎれもない、自身の経験に裏打ちされた言葉だった。彼に与えられた英雄の称号は榮譽などではない、彼が味わってきた苦難の烙印にほかならない。

それゆえに発せられる凄みに、生徒たちは言葉を失う——ただ、ひとりを除いて。

「……あいつには、それがあつて言うのかよ？」

勝己にも臆せず喰つてかかっていた、紫髪の少年だった。仮面ライダー相手でも態度を変えない点は、むしろ見るべきものがある。

「あるよ」

ゆえに出久も、まっすぐ彼の目を見て即答する。

「かつちゃん……彼にはもう、覚悟も矜持もある」

それゆえ彼は、口だけではない。——彼らを最後まで相手にせずいの一番に下校したのは、一分一秒でも時間をムダにしたくないというものもあるだろう。ならば最初から徹底的に無視するのが最も合理的かつ穏便な方法なのだが、そうできないのが良くも悪くも彼の性であった。

いずれにせよ、

「悪いけど、僕も帰るよ。……優勝の為に、手を抜くつもりはないからね」

「！」

にこりと人の良さそうな笑みを浮かべて、出久もまた帰宅の途につき。最後のひと言がクラス内外に与えたであろう衝撃に、思いを致しながら。

\*

波乱を予期させる放課後から、体育祭までのわずかな期間。頂を目指す者たちは皆、個性を磨き、身体能力を磨き、来るべき日に備えていた。

無論、仮面ライダー・緑谷出久としてそのひとりである。優勝の為に手を抜くつもりはない——その言葉は心からのもの。しかし人間では歯が立たない怪魔怪人たちをことごとく粉碎してきたRXの力に、天候さえ変えると言われているワン・フォー・オールが掛け合わさっている今、”全力を出して戦う”ことはありえない。矛盾するようだが、出久のやらねばならないことはつまり。

「はあああ——ッ！」

がらんとした採石場にて、RXに変身した出久は白銀の怪魔ロボツトと激闘を繰り広げていた。クライシス帝国の生き残りであり、かつての強敵との対決。のめり込めばのめり込むほど、その拳には力がこもる。——討ち果たすべき仇敵を相手取るなら、それでまったく問題はないのだが。

「どうしたアニキ……いや仮面ライダー！そんな戦い方じゃ、俺が壊れちまうぞ！」

「ッ！」

対戦相手であるデスガロンの言葉に、慌てて構えを整えなおす。——倒して……殺してはいけない。

「強すぎるってのも考えものだよなあ」

少し離れたところで見学していた茂が、のんびりした口調でつぶやく。敵を殺さず、戦意を折り無力化する——そのための戦い方を、出久は習熟させようとしている。ヒーローとして同じ人間を相手取るなら、一度たりとも間違いがあってはならないのだ。

そうこうしているうち、RXはバイオライダーに変身を遂げた。

「お、出番みたいだぞ。一水、響子姉ちゃん！」

出番の来た少女ふたりが、嬉々として立ち上がる。

「出久兄ちゃん！」

「！」

振り向いたバイオライダーが目の当たりにしたのは、某妖怪よろしく一握の砂を手にした一水の姿だった。

「いっくよー、それっ！」

その砂を投げつける。嫌がらせのような行為だが、戦術的な意味は

ある。彼女の個性は、砂を水に変えるものなのだ。

無論、水をかけるだけでは仮面ライダーどころか一般市民にさえも脅威とはならない。ただ風邪をひく心配が増すだけである。

しかし彼女には、自身の個性を有用な攻撃手段へと変える相方がいる。それが、的場響子なのだ。

「はっ！」

ぶちまけられた水を、念波を送って操る。水を操る”超能力”——それは個性とイコールではない。人類が太古より持ちえながら、選ばれた一部にしか開花することのなかった力だ。

その後押しを得た無数の水分子は、生命を得たかのように動き出した。高速で回転しながら渦を作り出し、バイオリダーを取り囲む。「！」

咄嗟に液化化で離脱しようとするライダーだったが、水の竜巻に閉じ込められてはそうはいかない。その能力によりあらゆる物理攻撃を無効化できる……一見無敵とも思えるバイオリダーだが、高熱ともうひとつ、同じ液体についても使いようによっては弱点となりうるのだ。

「ッ、ぐ……い！」

液化化が災いし、身体の自由がきかず苦しむバイオリダー。——初めて攻撃が通用したと喜ぶ一水たちだったが、彼にはまだまだ奥の手があった。

(ワン・フォー・オール……!!)

——刹那、水の束は四方八方に弾き飛ばされていた。

「きゃあっ!!」

「おわっ!!」水、響子姉ちゃん！」

驚き尻餅をついてしまったふたりを、茂が咄嗟に助けに入る。まだ中学生の身ながら、よくできた少年であった。

「ふう……」

一方のバイオリダーは、RXの姿に戻ってひと息ついていた。

「やるねふたりとも。ちよつと焦ったよ」

「ちよつとつて……もー！出久お兄ちゃんずるい！チートっ！」



一水の可愛らしい罵声が飛んできて、思わず苦笑する。確かに多少の弱点はワン・フォー・オールによるごり押しで克服できてしまうのは、そのように言われても致し方ないことかもしれない。

(でもこの調子で、数少ない弱点も潰していけたら)

無敵になればこそ、人間相手に不殺の戦いを貫くことができる。心新たに、出久……RXは日が暮れるまで仲間たちとの修行に明け暮れるのだった。

\*

——そして、体育祭当日が訪れる。

つづく

## 独走!! (前)

体育祭当日。雄英高校内外は生徒の登校してくるより早くから人、人で賑わっていた。

詰めかける報道陣——今回はきちんと許可を得て——、一步敷地に入れば露店がずらりと出店されている。

そんな文字通りのお祭り騒ぎの中、登校してきた生徒たち。彼らは朝のホームルームが終わると早々に体操服に着替え、控室に集まっていた。入場開始までのわずかな時間、ここで緊張のひとときを過ごすのだ。

「あーあ……コスチューム着たかったなー」

ピンク色の肌をもつ少女——芦戸三奈がぼやく。他科との公平を期すという目的で、ヒーロー科の生徒もコスチューム着用は禁止されているのだ。

尤もコスチュームでなく、個性の使用にはなんの制限もない。——つまり、”変身”は可ということ。ハンディキャップどころか、自分に有利なルールだと仮面ライダー・緑谷出久は思った。

本当のところは”個性”とは異なるというのはこの際置いておくにしても、そのことについてクラスメイトたちはどう思っているか。引け目を感じないといえば嘘になる。ただ、それでも手抜きなく臨むと決めたのだ。仮面ライダーの力を、余すことなく世界に見せつけるまたとない機会。

それまでの時を心静かに過ごすことにした出久だったが、そんな彼に恐れ多くも話しかける者がいた。

「緑谷、少しいいか」

「……轟くん?」

出久の翠眼に、左右を紅白に分かたれた頭髪が映る。

「何かな?」

「……………」

自分から話しかけてきたにもかかわらず、一瞬の沈黙があった。揺

れるオッドアイは、言葉を選んでいようにも見える。

ややあつて、

「……客観的に見て、おまえのほうが実力的に上なのは間違いねえと思う」

「えっ……う、うん」

どうしたものかと一瞬迷った出久だったが、結局は戸惑いがちに頷いた。クラスメイトの間にも、何を当たり前のことを言っているんだという空気が広がっている。

「けどな……だとしても、他人の事情にずかずか踏み込まれる謂れはねえ」

「……？」

事情、に？ どういうことかと問いたただすのが憚られるほどに、轟少年の瞳がきつくなっていく。

「おまえには負けねえ、緑谷。……いや、仮面ライダー」

敵意を込めた、宣戦布告。一瞬、彼の姿にシャドームーンの影響がよぎった。憎悪や憤懣、悲嘆——あらゆる負の感情が、彼の周囲に渦を巻いているように出久には見える。

「……きみにそうまで言わせる理由に、正直心当たりはない」

「……」

「ただ、どんなわだかまりがあろうと……僕は誰にも頂点を譲るつもりはないよ」

いずれは誰かに、自分を超越る存在となつてほしい。この世界を裏から操ってきた者たち——そんな連中に神として祭り上げられかねない存在を、抑止しうる者に。

けれど少なくとも今は、そんなことおくびにも出さない。

「——独走、させてもらう」

\*

『HEY！刮目せよ、オーディエンスウ！今年もお前らが大好きな青春暴れ馬、雄英体育祭が始まりエビバディー、アユーレディー!!?』

巨大モニターに映し出されるプレゼント・マイクのコールによって、雄英体育祭の火蓋が切って落とされた。

まずは、選手一同の入場——クラスごとに分けられた濃紺の塊が、スタジアムに姿を現す。まずはA組、その先頭には最も注目を浴びる少年がいる。ヘドロ事件以来、彼が全国にその姿を晒した瞬間。

そして、同じくヒーロー科のB組。普通科C・D・E組、サポート科F・G・H、そして経営科I・J・K——雄英高校一年生全員が、初めて一堂に介した瞬間でもある。

そしてその盛大な開会の場において、第一に行われるのは生徒代表による選手宣誓。代表はヒーロー科のうち、入学試験において実技一位の者が担当することになっている。

つまり、

一年ステージの主審である18禁ヒーロー・ミッドナイトに呼ばれ、臺に上った緑谷出久。生徒たちの中では比較的小柄で童顔、決して華やかとはいえない顔立ち。

しかしその楕円形の翠眼がぐるりと視線を一周させると、同級生たちは自ずと居ずまいを正さずにはいられない。

全国の注目の的となった少年は、マイクの前に立つとひとつ、静かに深呼吸を行った。そして、

「えー……おはようございます。1年A組出席番号18番、緑谷出久です。正直、こういう大勢の前で喋るのは生まれて初めてなのでとても緊張しています」

がくっ。弱冠15歳にしてオールマイトと並び称される英雄の言葉としては、あまりに平凡すぎる。

その反応を敏感に察してか、出久は苦笑いを浮かべた。

「期待外れですみません。僕は所詮、目の前の敵と戦ってきただけですから」

そう、そこに美辞麗句など存在しえなかった。言葉をかわすべき仲間も存在しない、孤独な、独りぼっちの戦い。母をはじめ協力者は数えるほどにはいたけれど、彼女らはみな戦場に立ってはいけない存在だった——クライシス帝国とのそれは別にしても。

「だから……その……」

皆に伝えたいことは、ただひとつ。

”超えられるものなら超えてみる”——それだけです」

己の意気込みではなく、他に”それ”を求める。彼が何者かを既に全国が知っている以上、たとえそうであったとしても恐るべき宣戦布告に他ならなかった。

\*

第一種目、多くの者が振るい落とされる地獄の一丁目一番地。ルールト形式でランダムに選ばれたのは——障害物競走。

種目名だけならいかにも体育祭という趣だが、そこは雄英高校である。

グループ分けすることなく、一年生総勢200名以上が同時に位置につく。程なく彼らは、ヒーロー科首席の宣誓が如何に実現困難なものかを思い知らされることとなる。

「変——「スタートっ!!」——身ッ!」

開始を告げるミッドナイトの声と、出久の声とが重なりあう。

他の生徒にすっかり溶け込んでいた、同じ青い体操服の少年の姿が、世界に知られた異形の英雄の姿へと変わる。黒いボディ、真っ赤な眼。生徒たちが走り出す。英雄——仮面ライダーはまだ動かない。しかしその身に一瞬電流が奔るのを、ごく一部の人々は認識した。

(ワン・フォー・オール……フル、カウル)

誰もが知る英雄の力と、誰も知らぬ英雄の力。そのふたつが同時に目覚めたとき、誰も予想しえなかった事態が巻き起こる。

仮面ライダーの姿が、あらゆる人々・媒体の視界からかき消えたのだ。

「な、」

「え……」

「What, s!?!」

ステージに巻き起こるは、一陣の旋風。スタートからゴールまでに配置されている多数の”障害物”たちをひと薙ぎして、それは駆け抜けていった。

そして、

「な、なんという……なんということでしょう」

ゴールに独り立つ、巨人の人影。

『仮面ライダー、既にゴールウウウ……!!?』

そう——皆が一斉にスタートを切ってからひと呼吸ほどの間隔も置くことなく、仮面ライダーはゴールにたどり着いていたのである。「ゴイツはWHAT'S HAPPEND!?仮面ライダー、今度はレポートでも習得したかアア!」

実況のプレゼント・マイクを、隣に座るミイラ男がすげなく否定する。

「違うな、純粋な身体能力だ。”あれ”を見ればわかるだろう」

道中、障害物として設置されていた巨大ロボットたち。ヒーロー科の入試でも使用されたそれらは一般生徒はもちろん無事合格を遂げたヒーローの有精卵たちにとっても大いなる脅威になるはずだったのだが。

——その半数近くが、RXによって胴体に風穴を開けられて機能を停止していた。

『かかか、仮面ライダー!?ダントツでゴオオオール!!?ダントツつてか一瞬だコレエエエ!!?』

そんなことがあつてたまるか。いや、どんなにそう思おうがこれは現実の光景なのだ。外周四キロメートルを、仮面ライダーBLACK RXは一瞬で、駆け抜けた。道中に設置されている谷・<sup>ザ・フォール</sup>島、地雷原に至つてはその動きの妨害にすらなっていない。

「……………」

深く息を吐き出すRX。彼の脳内で、以前己が語った言葉のリフレインが叫んでいる。

——独走、させてもらう。

文句なしの独走、いきなり比喩でなく……となつたのは自分でも想

定していなかったが——年々競技は異なるので——。

歓声に囲まれてはいるが、ゴール地点には当然他に誰もおらず静かなものである。

気を落ち着けたRXは、ネクストウイナーの到来を待つことにした。参加者誰しもにその資格はある、とはいえまでもって思い浮かぶ顔はふたつだったが。

「——こんのクソチートがあああ!!」

掌から爆破を放ちながら、吼える少年がいる。彼は既にゴールしてしまつた幼馴染を追い、飛翔を続けていた。現状、彼の前を走る者はない。

尤も、横並びで張り合う者なら存在する。

「……ッ、」

地面に氷結を奔らせ、氷上をスケーティングする紅白の髪の少年——轟焦凍。

涼やかかつ颯爽としたその姿とは裏腹に、彼の表情には強烈な憤懣と焦燥とが滲んでいた。

(クソ親父が見ている前で……っ)

最大のライバルの背中を、追うことさえできないこの状況。ならばせめて、順位という形式上だけでも彼に次ぐ場所にいらなくてはならない。彼の競争心は隣を走る爆豪勝己には……否、ほかの誰にも向けられてはいなかった。

ただ、一点の曇りもない勝利を見せつけねばならないと思つていた。母を苦しめ、心をこわしたあの男に。

おまえの力など、要らないのだと。

「うおらあああッ!!」

「——ッ!」

そしてふたりは、ほとんど同時にゴールラインを越えた。

\*

二位——つまり仮面ライダーを除く雄英生徒のトップの座を射止めたのは、

「……………」

「ッ、クソがあ!!」

轟焦凍だった。爆豪勝己は三位につけている。

といっても、彼らは見かけのうえでは同着だったのだ。映像確認などかなり精密な審査を行ったうえで、こういう結果になってしまった。

それでも、敗けは敗け。悪鬼のごとき表情で悔しがる勝己だったが、この結果に文句をつけるつもりは微塵もない。この紅白頭を完膚なきまでにブツ飛ばせなかった自分の力不足のせいだ。

だが、まだ挽回のチャンスはある。これは一回戦にすぎないのだ。第二回戦は、騎馬戦。障害物競走の上位42名が参加資格を得る。

それ自体は特筆すべきものでもないのだが、問題は一回戦から引き継いだ”ポイント”だ。それぞれの順位に即したポイントの鉢巻を与えられ、それを奪い合うことになる。

一位はなんと、1,000万ポイント。二位以下とは隔絶した数値は、三回戦へ進まんとする挑戦者たちにとっては垂涎の的。

もしも彼が一般的なヒーロー科生徒であれば恰好の獲物と見定められていたことだろう。

だが”この世界線”において、彼は仮面ライダー……オールマイトとすら肩を並べる伝説の英雄である。それが誇張でないことはこの一ヶ月、彼とともに授業を受けてきた少年少女たちは皆肌で知っている。

結果、こうなるわけで。

「緑谷ー!」

「緑谷あー!」

「緑谷くくんっ!」

(う、うおお……………)

殺到……といってもA組の過半数程度の人数だが、出久にとっては慣れない光景だった。雄英に来るまで、こうした組分けの場では忌避



される立場だったので。

ただ、一回戦通過者が40名超えることを考えれば、その動きは全体の潮流とまで言えるものではない。

たとえば、B組の面々。彼らのほとんどは自クラスで固まっている。事前に何か話し合われているのか、チームメイクも素早い。

一方でA組の中でも、あえて勝ち馬に乗ろうとする動きから一線を画している者がいる。——代表的なのが、彼。

「けっ、どいつもこいつも」

そんなふうには吐き捨てる口の悪い少年は、もしかしくなくても出久の幼なじみ・爆豪勝己である。かの英雄を一貫してデクと呼び続けるこの少年は、彼の力を身をもって知った今も態度を変えていない。むしろより激しく、対抗意識を燃やしている。

対抗意識といえば、彼も。

「——爆豪、」

「あ?——!」

声をかけてきたのは、仮面ライダーを除いて勝己を唯一出し抜いた少年だった。

「……なんの用だ、半分野郎?」

露骨に警戒した態度をとる勝己に対し、半分野郎こと轟焦凍は眉ひとつ動かさず用件を告げた。

「俺と組め。仮面ライダーを、今度こそ倒すために」

「は?」

一瞬目を丸くした勝己だったが、即座に鼻を鳴らす。

「デクぶつ倒すのにてめエの力なんざ借りるかよ。だいたい、てめエだって俺にとっちゃ敵だわ」

「……爆豪、おまえはもう少し賢いと思っていたんだが。俺の見込み違いだったか?」

「ア、ア!!」

実際、見込み違いなどではない。勝己の頭の中でだって、轟との結託が仮面ライダー……デクに対抗する最適解という認識はあった。だが、超えるべき相手なのは轟だって同じだ。強力な個性、高い能力。

まずこの男を叩き潰さなければ、頂点には届かない。

「いいか、この二回戦はどう足掻いてもチームバトルだ。自分の実力ひとつの問題じゃない」

わかりきったことを言う。

「例年通りならこのあとに個人戦がある。ならそこで真に実力を証明するために、ここは確実に勝ちに行くべきだ。俺はそう思う」

「……………」

勝己が黙り込んだのは、轟の言葉を正論と認識したからだだけではなかった。その宝石のようなオッドアイの奥で、しずかに燃える瞋恚。ただの対抗心や競争心の類いでない昏い感情であることは、体育祭開始直前の宣戦布告の時点で薄々勘づいていた。

何が、コイツを駆り立てるのか。——どうでもいいと言い切ることはできないのが、爆豪勝己という少年の性分で。

「…………俺と組むってんなら、まさか仕切れるとは思ってねえよなア？」

「…………リーダーがやりてえなら、別に構わねえ。意見はするが」

「意見もすんなや!!」

「状況による。——交渉成立ってことで良いか？」

「チツ、」

舌打ちで、事実上の承諾を告げたときだった。

「轟くんは爆豪くん！俺たちもチームに入れてもらえないだろうか!?!」

「あ?——!」

ふたりの前に、現れたのは。

\*

一方、ネクストステージが騎馬戦と知った時点で、緑谷出久は組む相手を心に決めていた。

『ホントウニコレデイイノカ、ライダー?』

「うん。なんたって僕は、仮面ライダーだからね」

(そうだ、)

(僕が選んだ相棒は——彼だ)

——出久は、独りアクロバッターに跨がっていた。

## 独走!! (後)

緑谷出久が撰んだ文字通りのダークホースは、彼以外のおそらく全  
国の人間の意表を突いたと言っても過言ではなかった。

『かかか仮面ラァ〜〜イダ!?一回戦の超速ゴールから息つく間もなく  
またブツ飛んだことをかましてきやがったア!! つかルール的にア  
リなのかコレえ!?!』

実況のプレゼント・マイクからもっともな突っ込みが入る。

とはいえこの雄英体育祭、個性アリのガチバトルである以上奇想天  
外なことは毎年往々にして発生する。そういうとき判断を委ねられ  
ているのは主審たるミッドナイトである。果たして。

「う〜ん……唯一無二の相棒ってアツいからアリ!!」

これである。彼女の判断は独自の情理に基づくものなのであった。

「こ、コイツはシヴィーだぜ……色んな意味でえ」

「……審判がそう判断したなら仕方ないだろう」解説役のミイラ……  
もとい相澤の反応はつれない。「それに、奴は”壁”になるつもりだ。  
自らの宣言通りにな」

「超えられるものなら超えてみる」——無茶言うなど叫びたくなる  
最強コンビに、生徒たちがどれほど喰らいつけるか、二回戦にしてこ  
の体育祭、例年を遥かに凌ぐ盛り上がりになると相澤は踏んでいた。

一方の生徒たちはというと、

「う、ウソだろお……緑谷ア」

この世の終わりのような声を発したのは峰田実である。USJで  
出久と連携をとった彼は、わずかながら仮面ライダーの助けとなった  
という自負があつたのだ。だから今度も、と思つたのだが。

「まさかバッターちゃん組むなんて。でも、緑谷ちゃんらしいわね」

一方で峰田ともどもチームアップをした蛙吹梅雨はというと、極め  
て落ち着いた反応だった。普段、峰田のセクシヤルハラスメントに容  
赦ない報復を行う彼女だったが。

「峰田ちゃん、よかつたらわたしと組まない？」

「エッ!!?」思わず素っ頓狂な声をあげる。「ま、マジでか梅雨ちゃん!?!」

「アナタとわたしの個性なら、相性が良いわ」

とはいえ、ふたりだけで組むには攻撃・防御ともに難がある。矛と盾、そのふたつが揃えば相手が仮面ライダーだとしても。

と、いうわけで。

「盾役は任せろ」

「ボクに声かけてくれてMer-ci☆」

障子目蔵、青山優雅。このふたりを加入させ、峰田をリーダーとするチームが出来上がったのだった。

\*

心操人使は悩んでいた。目の前では、A組の面々が次々にチームを形成している。

普通科の生徒のなかで唯一あの障害物競走いっかいせんを乗り越えた身ながら、彼はこの二回戦……否、表彰台の頂にまで自身の足跡を刻むつもりでいた。

ただ、そのためには目の前の現実には立ち向かわねばならない。仮面ライダーの影に隠れたダークホースであるがゆえに、誰にも見向きされない存在であるという。

とはいえ彼の個性は、その課題を解決——と言い切れるものかは怪しいものだが——することが可能なものだった。実際それで、トイレに行っていて偶然チーム入りが遅れたらしいB組生徒のひとりを確認することに成功していた。

ただそれは、たまたま運が良かったというだけのことだった。B組は事前に組分けを決めていたのか淀みなくチームアップを行っているし、逆に大多数が仮面ライダーこと緑谷出久に群がる恥も外聞もない振る舞いを見せていたA組の面々は、出久が人間とは誰とも組まないという選択をした途端、その塊の中でチームを形成していった。

る。そこに心操がつけこむ余地は見いだせない。

(あの中に割り込むか? いや、しかし……)

無理にそれを実行すれば、自らの手のうちを晒すことにもなりかねない。ゆえに彼は、一步を踏み出せずにいた。

「おや、ひよつとしてアナタは普通科の方ですか?」  
「!」

そんな心操に、自分から声をかけに行く者があった。ピンク色の髪に瞳孔の開いた金色の瞳が特徴的な女の子、ヒーロー科の面々にはない装備を背負っている。

「……あんたは?」

「おっと失礼。——こちらを」

同じ高校生だというのになぜか名刺を持っていて、差し出してくる。そこには” 雄英高校サポート科 発目明”とあった。

「サポート科……なるほどね、はみ出し者同士手を組もうってことか」  
皮肉めいた物言いは、半ば癖になっているものだった。プライドの高い人間であれば癪に触れることもあるう、しかしこの発目という少女はまったく意に介する様子もなかった。

「本音を言えば仮面ライダーさんと組みたかったんですが、普通科の方なら私のベイビーちゃんのモニターにちょうどいいですしねえ」

「……ベイビーちゃん?」

掴みどころのない物言いをする少女を胡乱な目で見つめていると、さらにもうひとつ足音が近づいてくる。そちらに視線を向けた心操が思わず後ずさりしかかるのも無理なきこと。なぜならそこには、女体のかたちに膨らんだ体操着が浮遊していたので。

「あゝっ、ひどい! 幽霊でも見たみたいな反応!」

フライング・ユニフォーム  
浮遊する体操着が少女の声でしゃべったので、心操は彼女が身体を透明にする個性の持ち主なのだと思いついた。ここまで完璧に姿かたちを認識しがたいのも珍しいが。

「……悪かったよ。で、どちら様?」

愉しそうに肩を揺らして、少女は答えた。

『A組の葉隠透です!。よろしくね!』

\*

「てめエらデクのオトモダチだろ、ンで俺と組む気になった？」

クラス内の人間関係を詳しく知る者なら誰でも抱くであろう疑問を、爆豪勝己はメンバーにぶつけた。”デクのオトモダチ”には当然、轟焦凍は含まれていないが。

「だからだ」答えたのは飯田天哉だった。「喜びも苦心も対等に分かち合えるような友人で、俺はありたい。そのために、物怖じせず彼と全力で戦おうというきみたちと組むのが最善だと判断した！」

そして、彼女も。

「私も！デクくんの力になれるようなヒーローになるために、今は……全力でぶつかろっ！」

「そうかよ」と、勝己は小さく笑った。自分とも轟ともかけ離れた、お手本のようなやさしい理由だ。

まあ実際のところ、彼らの事情などどうでもよかった。全力で勝ちに向かいさえすれば。そういう意味ではこのチーム、間違いなくベストメンバーだ。

「なら、せいぜい足引っ張んじゃねーぞ！半分野郎、てめエもな」  
「当然だ」

自分と轟の攻撃力に、飯田のスピード、そして麗日の攪乱& a m p ; 補助——並べると聞こえは良いが、必ずしもまとまりが良いとは言いきれない。

リーダーとはつまりその調律を担うのが役目なのだ、勝己は理解していた。ただ脊髄反射でその肩書きに執着したわけではない。

\*

彼らも含め、急場でチームアップを行ったA組の面々に対して、B組は心操人使の想像した通りあらかじめ編成を決めていた。

「鉄哲、恨みっこなしだぜ？」

「おうよー」

B組チームのふたりのリーダー、物間と鉄哲がそんな会話をかわしあう。彼らの弄する策を知るのは、彼ら自身をおいて他にはいない。策というのはそういうものだ。

問題は、小細工が世紀王たる英雄——仮面ライダーに通じるか、であるが。

『さアいくぜえ！残虐バトルロワイヤル、カゝウントダアウン！』

——3、

「……狙いは、」

——2、

「ひとつ……！」

——1、

「……」

「さあ行くよ、アクロバッター」

『バッチコイ、ダ！』

そして彼らは、走り出す。

つづく



## 魔王邀撃（前）

——騎馬戦、スタート。

手に汗握るような静寂に包まれていたスタジアムは、途端に歓声と雄叫びの坩堝と化した。

「おらアいくぜ半分野郎、クソ眼鏡、丸顔オ!!」

「誰ひとりとして名前でも呼ばないんだなキミは!!?」

初っ端から漫才のようなやりとりを披露しながらも、スタートダッシュを極めたのは爆豪チームだった。彼らが狙うのはやはり最大の標的、仮面ライダー……ではなく。

『おおつと爆豪チームつ、いちばん近くにいた鱗チームに襲いかかったア! 手当たり次第ポイントをぶんどる作戦かああ!!?』

「凶星だわクソが!!」

「先生に向かってクソがはないだろう!?!」

「聞こえなきや関係ねーんだよ!!」

「もー、耳がキンキンする!」

「……………」

まとまりがないのはこの際仕方がない。ただ、彼らの目指すところは一致している。——”次”へ行く。そのためにこのステージにおいて必要なのは、点を獲ること。

言い方を変えれば、仮面ライダーに総取りされないこと。

「ハチマキよこせやボケコラクソカス!!」

「ヒッ!?!」

仮面ライダーを除いたA組の——常識的な範囲での——実力者が組んだ爆豪チームに対し、鱗チームは少数精鋭……と言えば聞こえはいいがB組のクラス内事情により通常の最少人数である二名編成となってしまう。個々の実力差も鑑みれば、蛇に睨まれた蛙も同然である。

「ッー」

正面衝突を避け、躊躇なく逃げの態勢をとった鱗チーム——鱗と穴

戸は決して愚かではない。

ただ、狩獵者<sup>ハンター</sup>はそれ以上に上手だった。

「逃がさねえ」

騎馬の一翼を担う轟が、己の個性を発動する。右手を振りかざすと同時に空気中の水分が一気に冷却され、巨大な氷の塊となってステージを奔る。その瞬間、獲物たちの運命は決していた。

「あ、足が……!?!」

馬である穴戸の足を氷結が包囲し、彼らは一歩たりとも身動きがとれなくなる。鱗は無事だがそういう問題ではない、自由になるために騎馬を降りたりしたらその時点で失格なのだ。言うまでもないことだが。

だから彼らには、その場にとどまり邀撃するほかにとりうる道はなかった。ただそのための覚悟や用意を整える猶予すら、A組準最強の布陣は与えない。

「行くぞ……！振り落とされなくてくれよ！」

今度は飯田が己の個性を発動させた。脹脛のエンジンが獣の咆哮のごときけたたましい音を立て、持主の筋骨逞しい肉体を加速させる。十代半ばとは思えないほど完成した身体はそのスピードに慣熟しているが、彼とスクラムを組んでいる者たちはそうではない。

「……ッ！」

飯田の身体にしがみつки、耐える轟とお茶子。ただそうになると、陣形を維持する余裕はなくなってしまう。

「ンなこと、わーっとるわカス!!」

誰ぞに吼えつつ、勝己は地上めがけて爆破を放った。その衝撃に圧されて身体がぶわりと浮かび上がる。——彼の編み出した、あらたな戦法。

「ブツ殺死ねええええ!!」

今度は重力に従って急降下し、獲物めがけて爆破——

「うぎゃあああああ!!?!」

哀れな草食獣たちの悲鳴が、響き渡った。

\*

爆豪チームが素早いスタートダッシュを切る一方で、文字通り一騎当千の緑谷チーム？もまた走り出していた。

「さあ、全員まとめて——」

『——カカツテコイ！』

ほかの生徒たちがせいぜい二ヶ月弱の交流であるのに対して、出久——仮面ライダーとアクロバッターは濃密な三年の苦楽をともにしている。その連携を突き崩すには彼らを上回るだけの實力が必要になるのだが、現時点でその条件を満たしている生徒がいるかどうかは……言うまでもあるまい。

「う、うわあああああ!!?」

「こ、来ないでえええええ!!」

「ママー————!!」

……阿鼻叫喚。観客席から見ると大袈裟ではないかとも思えるのだが、少年少女たちがこうまで恐れを露にするのはひとえに仮面ライダーの放つ強烈極まりない威圧感によるものだった。

だが、ビビって作戦もなく逃げ出したところで仮面ライダーとアクロバッターから逃げきれないわけがない。彼らは早々に追いつかれ、ハチマキを奪われる末路を迎えた。

『情ケナイゾ、オマエタチ！』

さらに、アクロバッターがひと言。ここまで追い打ちを食らっては、彼らの戦意は完全に萎えてしまう。そうなれば騎馬が崩れなくとも、もはや敗北は決定づけられたようなものである。決勝トーナメントに残ることができるのは、この中でも半数ほどにすぎないのだから。

一方で、

「……やっぱり、凄いや。緑谷のやつ」

その光景を遠巻きに見ながら、尾白猿夫がぼつりとつぶやく。彼は切島鋭児郎をはじめとする腕っぷしに自信のある面々とチームを組

んでいた。

「だよな、漢らしいよな！」切島が同調？する。「さて……どうする、尾白？」

「え？」

「緑谷と戦うか、それとも他とるか。この中じゃいちばん頭いいのおめエだし、判断はまかせるぜ！」

「俺は戦いてえけどな……」といちおう自分の意見を表明するのも忘れない切島。リーダーは彼なのだが、チームの中では最も知力に長けた——あくまで比較的ではあるが——尾白に参謀役を委ねるつもりらしかった。

(荷が重い、なんて言えないよなあ……)

自信があるわけではないが、ヒーローにはオールマイティーが求められる。これも将来のためだと思い直し、彼は思考を凝らした。

「……俺たち三人だけで真正面からぶつかっても、返り討ちに遭う確率が高い」

「う……ま、まあな」

戦いたい切島としても、そこは同意せざるをえない。相手は”あの”仮面ライダーなのだ。

「もし、戦うなら——」

参謀の献策に、リーダーは「その手があったか！」と手を打った。

\*

その身を陽光に煌めかせた漆黒の異形が、蒼天を貫くように勇躍する。

(ワン・フォー・オール、フルカウル!!)

翅をもつでもないのに、異形は滞空したまま急加速を遂げる。あ、接近してくる。呑気にそんなふうに捉えていたチームの連中は、次の瞬間騎馬を突き崩され、あえなく脱落させられていた。

「ほ……」

意を遂げた仮面ライダーは、そのまま空中でぐるりと一回転、自走

していたアクロバッターに着地した。

『順調だな、ライダー。ダガ、モウ1、000万ポイントモアルノニコレ以上点数ヲ稼グ必要ガアルノカ?』

「逃げてるだけじゃ、みんなのためにならないからね」

小さい点数のハチマキが、RXの身体のあちこちにぶら下がっている。既に高得点を確保しているチームを除けば、決勝に進むためには否が応でも自分と戦わざるをえない。結果は見えている……などと言って尻込みしているようでは、それまでということだ。

とはいえ、このまま自分が点数を集める一方では決勝トーナメントが成り立たないかもしれない。まあそうなったらなつたで教師たちが対応を考えるだろう、そんなことを考えていたら、いよいよ目の前に立派な体躯の騎馬が立ち塞がった。

「快進撃もここまでだぜ、仮面ライダーさんよ!」  
「!」

逃げるどころか、真正面から仕掛けてくる者たち。彼らがクラスメイイトであることを、仮面ライダーは内心喜んだ。どんなに実力差があるろうと、背中に守るものがある限り立ち向かわねばならない。ヒーローとは、そういうもの。

「アクロバッター、行くよ!」

『了解だ!』

RXの腰を取り巻くベルト状の意匠——サンライザーが光を放ち、アクロバッターもろともその身を包み込んでいく。

一瞬の遮蔽、そののち光が消散し、さらなる変化を遂げた異形の戦士たちの姿が露になった。

「RX——ロボライダー!」

『アクロバッター改メ、ロボイザー!』

漆黒とバーミリオンに覆われた、鋼鉄の身体。真つ赤な複眼から垂れた、血涙のような意匠。”悲しみの王子”の別名をもつ、RXの別形態である。

その姿に変身したこと自体は、驚きをもって受け止められることもなかった。仮面ライダーが複数の形態を使いこなすことは既に周

知の事実なので。ただ、アクロバッターもロボイザーに姿を変えることはあまり知られていなかったが。

一方対峙する者たちは、戦闘態勢をとりつつ分析を張り巡らせていた。

「ッ、また変身した……。あの姿、確か——」

「ロボライダー。パワーと頑丈さ、あと銃をもっていて遠距離戦闘ができることがウリの形態だね」

尾白の言葉に、切島は考える。飛び道具があるとなると不利は覆しがたいが、今のところ相手はまっすぐ突進してきている。

「パワー勝負か……なら負けるわけにやいかねえ」

「——そうだろ、砂藤！」

「おうよ！」

切島チームの戦闘の要——砂藤力道が力強く頷く。A組生徒の中でもとりわけ体格の良い彼は、その外見に違わず腕力増幅の個性をもっている。そう、切島チームはとかくパワーを重視して編成されているのだ。出久も当然それを読んで、ロボライダーとなったのだ。た。

『ライダー。奴ら、逃ゲルツモリハナイヨウダゾ』

「だろうね。——このまま突っ込むわけにもいかないから、ここで待ってて」

『折角変身シタノニ……』

アクロバッター改めロボイザーは不満そうだったが、実際轢いて怪我でもさせたら一発退場である。彼をパートナーとすることは認められたが、なんでもありの無法地帯ではないのだ、ここは。

再びワン・フォー・オールを発動し、ロボイザーから跳躍する。R Xの姿より若干スピードは落ちているが、それでも弾丸のような肉薄だ。狙うは当然、リーダーの切島がもつハチマキ。

（獲るー！）

（獲らせるかってんだ！）

——そして、激突。

「……ッ！」

尾白の尻尾がロボライダーの行く手を阻まんとする。当然それは払いのけられ、あっさりと突破される。しかしほんのわずかでも勢いを削ぐことが彼の目的だった。同時に切島、砂藤が己の個性を発動させ、弾丸と化したロボライダーを真正面から受け止める。

「ぐ、おお……！」

「なんつー、パワーだ……！」

どうにか一瞬でハチマキを奪われることは防げたが、ロボライダーのパワーを前に三人がかりでずりずりと後退させられる。馬となっているふたりの屈強な身体が揺らぐ。ハチマキを奪われただけなら挽回の可能性はあるが、騎馬を崩されればその時点で勝利への道は閉ざされる。ゆえに彼らは、堪えに堪えた。無論、それだけで展望は開けない。

——彼らには、策があつた。

『ウワアアアア!?!』

「!?!」

背後から響く悲鳴が、ライダーの心を激しくかき乱した。慌てて振り向く。と、そこには悶え苦しむロボイザーの姿。

「アクロバッター!?!」

彼は、攻撃を受けていた。——もうひとつのチーム。

「悪いな緑谷、おまえの馬は潰させてもらうぜ！」

得意げな笑みを浮かべ、電撃を放つ金髪の少年。

「ッ、上鳴くんか……！」

上鳴電気、電撃を操るクラス一のお調子者。軽薄なところはあるが、仮面ライダーである出久に対しても遠慮のない明るい性格はA組の清涼剤でもある。

そんな彼の属するチームを牽引するのは、八百万百。彼女の優秀な頭脳のもと、さらにメンバーである耳郎響香と口田甲司が動く。A組の中では、どちらかといえば目立つほうではない生徒たち。その個性も、たとえば爆破や半冷半燃のように華やかなものとは言い難い。

しかし単に破壊力があるわけではないからこそ、仮面ライダーの蟻のひと穴にもならないような隙を突くことができる。

『シビレル……！耳ガツ、——ウワアアアツ、虫ガ、虫ガアア!!?』

ロボイザーは電撃を浴び、轟音に揺さぶられ、挙げ句の果てに大量の蟲に集られていた。それぞれ単体の攻撃だけならさほどの脅威ではなかったが、相乗効果によって彼はパニックを起こしていた。車体がオーバーヒートし、一ミリたりとも走ることができなくなる。

「なるほど……！将を射んとすれば、つてことか！」

むろん、馬が動けずともRXの圧倒的なパワーは揺らがな。しかしこれは試合だ、将が自らの足で大地に立つことの許されないというルールもある。

「やってくれるね……！——それならっ！」

切島たちとのぶつかりあいを中断して、ロボライダーはワン・フォー・オールによつて空へ飛び上がった。とはいえこの個性はあくまで身体能力の強化である、跳躍力は上昇しても飛翔を続けられるわけではない。壁か何かを蹴りつけて跳ばねば、やがては重力に捕らわれる時がくる。

——尤も、そう容易く勝利を掴ませるつもりはない。

「悪いけど、僕は飛ぶよ。どんな姿になつてでも！」

言うが早いのか、RXは再びその身を光に包んだ。鋼鉄のロボから、生物のバイオへ。

怒りの王子の別名をもつ彼の、代表的な能力といえは。

「うおッ、スライムみてーになつた……！」

その能力はむろん知っているが、眼前で変身されると衝撃は大きい。しかも液化化することで質量を分散し、滞空時間を伸ばしている。

（待つてアクロバッター、今救ける！）

相棒を救出すべく標的を変え、液体の塊のまま上鳴チームへ向かつていくバイオライダー。彼らさえ抑えれば、再び正しい”騎馬戦”に戻ることができる。

——それに、

「アクロバッターにこれ以上……手出しはさせないっ！」

彼を一度は喪った記憶が、出久を突き動かす。むろん、ルールの範



疇で全力を出しているだけの同級生たちに罪はない。だからこちらもルールの範囲で、全力で止めるだけだ。

「はあああああ——ッ!!」

液体からバイオリダーの姿に戻り、上鳴チームの頭上から急降下する。ロボイザーからマッククジャバーに姿を変えたアクロバッターに攻撃を続けている彼らは、すぐには動けない。だいたい攻撃をやめればマッククジャバーが即座に動き出すかもしれない。迂闊にその手を弛めることもできないのだ。

ゆえにいつときの優勢は、まもなく終わる——誰もがそう思った、次の瞬間。

バイオリダーは、飛来した光の束に呑み込まれた。

## 魔王邀撃（後）

飛来した光の束が、バイオライダーを呑み込んでいく。

その光景を目の当たりにして、尾白猿夫は「よし……！」と拳を握りしめた。今この瞬間はまさしく、彼の立てた作戦が奏功したあかしなのだ。

——そう、彼らが手を結んだのは上鳴チームだけではなかった。

「見てくれたかい？ボクのネビルレーザー☆」

「ええ、バッチリ見せてもらったわ。青山ちゃん」

青山優雅、個性”ネビルレーザー”。ヘソからレーザービームを発射する、単純だが強力な個性である。

「やるじゃねーか青山、緑谷に直撃かますなんてよ！」

「フツ、Merci☆」

きらん、と彼の瞳から星が瞬く。独特なキャラクターゆえ今まで交流もあまりなかったのだが、意外と気立てのいい少年なのだとわかった。

「峰田ちゃん、次はアナタの番よ」

「わかつてらー！」

峰田実。アライアンスにおける彼の役割は、足止め・第二弾である。誰も、仮面ライダーの愛馬が少し攻撃したくらいで行動不能に追い込めるとは思っていない。

「喰らえアクロバッター！実サマのもぎもぎだあ——ツ！」

葡萄のような頭の果実をもぎり取り、アクロバッターめがけて投げつける。強力な粘着性のあるそれは次々とアクロバッターの車体やホイールにくつつき、その身動きを阻害する。万全な状態であれば無理矢理にでも弾き飛ばしてみせたかもしれないが、ダメージを受けている今は困難だった。

『仮面ライダー、なんと馬を失ってしまったアアア!!?地面に足を着いた時点でアウトだぞ、どうするウ?!』

熱のこもったプレゼント・マイクの実況が、ステージ上に響く。実

際、ライダーはその危機のさなかにあった。熱に弱いバイオライダーの形態でレーザービームをもろに浴びてしまったのだ。青山、というよりアライアンスの狙いが活きた。

「ッ、やるじゃ、ないか……!」

ゆつくりと墜落しながら、バイオライダーは……笑っていた。このまま地に伏せれば、余力があるかなきかに関係なく自分は敗退する。繰り返すようだが、それはこういうルールの試合なのだから。

ちら、と見れば、切島たち挑んできた面々は、これからのことをいったんは忘れて喜びをわかちあっている。既に勝利を確信しているようだが……まだ、甘い。現実にまだ、敗北は決定づけられていないのだ。

「……ワン・フォー・オール、5パーセント……!」

力を絞りつつ、ワン・フォー・オールを発動させる。ステージそのものを壊滅させるわけにはいかないのです、これくらいが精々だろう。

「DETROIT——SMASH!!」

力を集約した拳の一撃は——地面めがけて、放たれた。

「何っ!?——うわああああ!!」

その副産物たる衝撃波に、周囲にいたチームは呑み込まれていく。彼らは理解しきれていなかったのだ——仮面ライダー……魔王のごとき英雄の、真価というものを。

\*

ステージの広さゆえ、仮面ライダーを中心とした丁々発止とは距離を置いて戦っていた者たちは、スマッシュの影響を受けずに済んでいた。

「うわあ、デクくん……また派手にやつとる」

そちらを見遣りつつ、お茶子が感嘆の言葉を発する。実際のところは、逆転に繋がる一手”というところなのだが、彼女らは実況を聞くでもなく目の前の戦闘に邁進していた。

「くっ、相変わらず規格外のパワーだ……! 緑谷くん、やはり僕は——

「戦いたい。全力の彼と、真正面からぶつかってみたい——そんな欲求が、飯田天哉の心を支配しかかる。」

しかし、

「——痛だっ!!?」

頭のとっぺんを突然殴りつけられ、飯田はうめいた。そのようなことをしてくる相手はひとりしかいないわけで。

「な、何をするんだ爆豪くん!?!」

「うるせー。がつついてんじゃねーよ、クソメガネ」

「……!」

勝己の言葉は、決して独りよがりなものではなかった。

「爆豪の言う通りだ。緑谷と正面切って戦うのはまだ早い」轟が同調しつつ、「それに……俺たちと戦いたい連中もいるみたいだぞ」

「!」

目の前に立ちちはだかる騎馬。当然ながら見覚えのある顔が並んでいるが、顔と名前は必ずしも一致しない。他人の名前にとんと無頓着な我がりがリーダーに限らず、である。

「……B組の連中か」

「鉄哲徹鐵だッ、覚えとけ!!」

鋼鉄のような白銀の剛毛が、風にゆれる。吊り上がった眼といい、切島鋭児郎によく似ていると爆豪チームの面々は感じた。彼より顔つきも性格も些かきついようではあるが。

「はっ、お断りだわ!——半分ヤロオ!!」

「……轟だ」

いい加減チームメイトの名前くらいは覚えてほしいものだと思うつつ、轟は右手に力を込めた。彼の苛烈さは必ずしも好ましいものではないが、同意できる部分もある。

「悪イが、おまえたちは敵じゃねえ」

勝己だったらば、ただ的でしかないとまで吐き捨てるだろうか。いずれにせよそう言い放って、轟焦凍は己の個性を発動させた。足下から氷結が奔り、獲物に喰らいつかんとする。

対して、

「へッ……B組の底力、舐めんなよ——ッ!!」

不敵な笑みを浮かべた鉄哲少年。次の瞬間、その姿に異変が起こった。

肌が音をたてて硬質化し、光沢をもった鈍色へと染まっていく。——まるで、鋼鉄のように。

体操服の一部が破れるほどに硬さと鋭さを得た鉄哲は、雄叫びとともに己が拳を振り下ろした。迫りくる氷結へと。

そして、氷は粉々に砕け散った。

「……………」

轟が初めて顔を顰める。それを見て気をよくしたか、鉄哲チームは真正面から接近してくる。格闘戦——切島鋭児郎によく似た個性の持ち主であれば、その志向も頷ける。他の面々も、その判断には乗り気のようにだった。

「返り討ちにしてやらア!!クソメガネ、丸顔!」

「わかっているとも!」

「まかせて!」

相手が接近戦をお望みなら、こちらもそれに合わせてやるまで。飯田がエンジンを発動させ、騎馬ごと加速する。一気に距離が詰まる。そして、

「お、らアアッ!!」

勝己の爆破と、鉄哲の拳とが炸裂しあう。人体が起こすにはおよそ似つかわしくない、巻き起こる旋風。

そのどちらもが、決定打を与えるには至らない。互いに大きく後退させられながらも、騎手を落とすようなへまはしなかった。

「ッ、もういつぺんだあ!!」

「上等だア2Pヤロオ!!」

「誰が2Pだ、誰が!」

今度こそケリをつけるべく、再び肉薄する両チーム。互いに相手が侮れない強敵であると理解し、だからこそ完膚なきまでに叩き潰すべく全身全霊をかける。少年同士のルールの中での死闘としては、まぎ

れもない在るべき姿だ。

しかしながら、問題がひとつだけあった。——これは一騎打ちではなく、複数のチームが入り乱れる乱戦ということだ。

「——ッ、」

その事実思い至ったのは、我らがリーダーの首筋に何者かの手が触れた瞬間だった。

「な……!?!」

慌てて振り向く勝己。それでも身体ごとというわけにはいかず、首をぎりぎりまで傾けるのが精々なのだが。

果たしてそこには、見知らぬ金髪が揺れていた。

「やあ。随分と好き勝手暴れてくれたみたいだね」

「てめエは……」

「1年B組、物間寧人」碧眼が鋭く細められ、「キミらを——吹っ飛ばす」

烈しい爆炎が、爆豪チームを呑み込んだ。

\*

試合を見守る者たちの殆どは、”ありふれた”激戦のことなど目に入っただけでなかった。

彼らの目は一様に、ある一点に注がれていた。——ステージの西側、仮面ライダーBLACK RXが戦っていた……その場所。

そこには、巨大なクレーターが出来上がっていたのだ。

「ッ、いったい、何が……」

砂塵にまみれながら、切島が息も絶え絶えにつぶやく。RXの拳が一瞬光ったかと思うと、一秒も経たないうちに閃光が視界を覆い、次いで突風と衝撃波が襲いかかってきたのだ。

「尾白、砂藤、大丈夫か!?!」

「お、おう……俺たちは」

「それより、他のチームの皆は……?」

土煙に視界が塞がれ、周囲の現況がわからない。それでも仮面ライダーが不意打ちを仕掛けてくるとは不思議と思わなかった。……そもそもそんなことをする必要がないのだと、既に本能が悟っていたのかもしれない。

「切島あ〜!」

「!」

呼び声に振り向けば、砂塵をかき分けるようにして接近してくる騎馬の影。それが同盟を結んでいる八百万チームのものであることを認めて、切島たちはほつと息をついた。

「無事だったか!」

「まー、なんとかな」上鳴が応じる。「八百万がシールド出してくれなきやバかったけど。な?」

「当然のことですわ」

極めて落ち着いた表情で八百万百が応じる。皆と同じく土埃にまみれながら、その凜とした表情は崩れない。お嬢様、なのは間違いないようだが、ヒーローを指すものとしての精神的素養は調っているようだった。リーダーというのはこういうものかと、改めて切島は思う。

(感心してる場合じゃねえ、今は俺もリーダーなんだ)

この一瞬で動きを封じられ、さらには仮面ライダー本体を見失ってしまった。このまま態勢を立て直されてしまえば、形勢は一気にこちらへ傾く。それだけはなんとしても避けなければならぬ。

「!、そうだ、梅雨ちゃんのチームは?」

そう、口に出したときだった。

「うわあああああ——ツ!!」

「!?!」

高校生らしからぬ、まだ変声期も迎えていないような少年の悲鳴が響く。ぎよつとした2チームの面々が振り向くのと、もうもうと立ち込め続ける砂塵が一気呵成に吹き飛ばされるのが同時。

そこには、信じられない光景が存在していた。

『み、峰田チーム……ノックアウトオオオ!!』

峰田、梅雨、青山——そして騎馬を担当していた、障子。彼らはばらばらに、地面に倒れ伏していた。——ハチマキがない。

「そ、そんな……」

同盟の一角が崩れた。その事実には気圧されながらも身構える両チームだったが、

「……緑谷さんは、どこへ行ってしまいましたの？」

「……!」

百の言葉に、一回ははっとした。四方八方、どこを見ても姿がない。いや、目のいかない場所がひとつある。人であれば常人でない彼ならば、フィールドにしうる場所——

——彼らの頭上に、巨大な翳が差した。

「悪いけど……足を奪ったくらいで、仮面ライダーは止まらない!」

光を纏ったRXの姿は天使のようであって……少年たちにとって  
は、魔王そのものだった。

つづく



## 凍てつく記憶（前）

「足を奪ったくらいで、仮面ライダーは止まらない！」

——頭上より迫るその姿は、まさしく魔王のごときものだった。

「ッ、上鳴さん!!」

「おーよっー!」

百の指示で、上鳴が己の個性を発動させる。——電撃が、ライダーに襲いかかったのだ。

「ッ、」

生物の常として、感電すれば激痛とともに筋肉が硬直し、身動きがとれなくなる。意識を失うことも……最悪の場合、死に至ることさえある。

むろん上鳴はそこまでいかないよう調整しているが、仮面ライダーが相手とあつては遠慮が薄れるのも事実。

いずれにせよ……ライダーであっても、痺れるものは痺れるのだ。

「っしー効い……きい、て……」

「……上鳴さん？」

最大放電を続けていた上鳴の様子がおかしいことに仲間たちが気づいたときには……もう、手遅れだった。

「うえ……ウエエエエイ……」

仲間たちは見てしまった。一応は整っている上鳴の顔がだらしなく弛み、無意味な鳴き声というほかない声しか発することができなくなっているさまを。

「ッ、ヤバい……過放電だ」耳郎響香が声をあげる。

「でも、ここまでやれば——」

「ここまでやれば、何？」

「!？」

——かの漆黒の英雄には、足止めにさえなっていなかった。

「ッ!」

まったく怯んだ様子もなく迫る仮面ライダーに、彼女らは一様に恐

怖した。だがそれに吞まれて戦意を喪えば、この先のステージへ進む道は閉ざされる。

「させるかっ！」

咄嗟に割り込む切島チーム。その一員である尾白が巨大な尻尾を振るい、迫りくる仮面ライダーめがけて叩きつけたのだ。

「！」

流石に不意打ちだったのか、その重量のままに吹っ飛んでいくライダー。しかしそれを為した尾白はじめ、歓喜を覚える者はもはやいなかった。この程度のこと、あの仮面ライダーが止められるはずがない……！

果たして、それは正しかった。ライダーは空中で態勢を立て直して一回転……着地をめざす先には、彼が唯一選んだ相棒の姿があった。「そろそろ良いかな、アクロバッター？」

『ウン、十分休マセテモラッタゾ』

独り滞空し続けるRXに皆が気を取られているうちに、アクロバッターはすっかり回復していたのだ。

「なら、行こう！」

『借りヲ返スゾ！』

狼狽えながらも身構える両チームを標的として、鋼鉄の蟲馬は走り出す――

\*

わずかに時を戻して、同じステージ内の、もうひとつの戦場。

B組の鉄哲チームとぶつかっていた爆豪チームは、彼らを隠れ蓑にした物間チームの奇襲を受けていた。

「キミらを――吹っ飛ばす」

リーダー・物間寧人が放った攻撃は……爆破。予想だにしない劫火に、勝己たち四人は呑み込まれた。

「ははっ、他愛もないね」

甘いマスクに意地の悪い笑みを貼りつける物間少年。彼の率いる

騎馬に対し、そのクラスメイトが抗議の声をあげた。

「おいコラ物間！良いトコ持っていきやがってっ、ずりイぞこのヤロウ！」

「ふん、恨みっこなしって言ったろ？」

それに、B組同士で争っても仕方がない。A組のような明確なリーダー・柱が不在なだけあって、彼らは横一線での戦局を乗り越えようという腹だ。むろんそれは、ひと昔前に言われていたような徒競走でおてて繋いでゴール、というような平等主義とは同義でない。話題をかつさらうA組の面々に喰らいつき、蹴落とし、決勝戦を自分たちの独擅場に変えるための策にすぎない。実際、仮面ライダーに蹂躪されながらも、こうして複数チームが生き残っているわけで。

(これで一個、ツブせりゃいいんだけど)

爆豪チームのリーダーといえば、B組にも噂が届いている。仮面ライダー・緑谷出久とは同じ中学出身、彼に何かと対抗心を燃やし食ってかかっていると。二日目の模擬戦闘では惨敗を喫した一方で、先ごろのヴィラン襲撃では弱体化された緑谷を庇って単身敵と衝突、重傷を負いながらも奮戦したと聞く。

(読めないヤツだな、正直)

そんな得体の知れない男が……容易く終わるとは、到底思えなかった。

——物間の予想は、不幸にも的中することになる。大地奔る氷結が、彼らに襲いかかったのだ。

「ッ！」

ある程度その到来を予期していた物間チームは咄嗟に回避行動をとり、難を逃れた。同時に爆炎により巻き上がった粉塵が晴れ、敵チームの姿が露になる。

「不意打ちとは、やってくれるじゃねえか」

切れ長のオッドアイが、物間を鋭く睨みつける。彼とのスクラムを保つ、委員長と丸顔女子——

「リーダーがいなくて、物間！」

チームメンバーが慌てた声音を発する。そんなこと、見ればわか

る。どこへ行つたかも。

頭上に翳が差すより寸分早く、物間は“爆破”の個性を使って飛んでいた。

「上に吹っ飛べなんて言っていないけどねえ、僕は！」

目の前で不敵に笑う男を挑発する。尤もその程度のこと、彼の笑みが崩れることはなかったけれど。

「てめエに指図される謂れはねーんだよ、モノマネ野郎！」

「……ま、別にモノマネを否定する気はないけどっ」

空中で肉薄し——互いに右腕を、振りかざす。

——BOOOOOM!!!

「ッ！」

爆炎と爆炎とが互いを喰らいあい、その衝撃を発信元にまで伝播させる。堪らず後方に吹っ飛ばされるふたり。しかし重力によつて地上に落下しながらも、双方とも敗退と見做されることはなかった。

「爆豪くんっ！」

「物間！」

互いのチームメイトが、その身を無事に受け止めてみせたためだ。

「大丈夫か、爆豪くん!？」

「舐めんなヨユーだわ！」

仲間の気遣いに乱雑に応じつつ、勝己は内心相手への評価を改めていた。

(あの野郎、モノマネのくせにまあまあ使いこなしてやがる)

爆破の勢いを利用して、飛翔する——勝己自身はこともなげに行っているが、これはまぎれもない応用技だ。それをたつた今コピーして、完璧に真似てみせた。よほど鋭い観察眼と、すぐれた運動神経をもっているのだろう。能力の高さは認める——だが、

「1年A組17番、爆豪勝己。個性は爆破で、仮面ライダーこと緑谷出久とは同中の出身」

「！」

まるで資料でも手繰っているかのように、ぺらぺらと勝己のパーソナルデータを紡いでいく物間。こちらの集中力を散らす算段か。ま

すます警戒心を強める爆豪チームとは裏腹に、彼は碧眼の奥に意地悪い光を宿らせていく。

「で、緑谷をライバル視して何かと突っかかるも初日の模擬戦闘でボロ負け。その後のヴィラン襲撃じゃ弱体化した彼を押しつけてまで突っ込んで返り討ちに遭ったんだっけ？ いやあ少しは懲りておとなしくなってるのかと思っただけど、馬鹿は死ななきゃ治らないみたいだねえ？ あはははははは!!」

悪意に満ちた言葉を憚ることもなく放ち、哄笑する。映像はもちろん観客席にもその声は届かないが、オーバーな挑発であることは伝わる。チームメイトらが驚くでもなく呆れているところを見るに、元来こういう性格なのだろう、彼は。

ともあれ、物間は勝己の激発を狙っていた。実力者揃いではあるが、そのぶん我が強くまとまりのないメンバー。さらに苛烈な性格をもつ司令塔が彼らをまとめているが、それが冷静さを失えばたちまち瓦解へと向かうだろう。

彼の挑発はなるほど、差向けられた者の怒りを買った。だがそれは、物間の意図とイコールではない。

「その口を閉じろ!!」  
「!」

そう怒鳴ったのは他でもない、勝己と犬猿の仲であったはずの我らが委員長だった。眼鏡越しの四角ばった瞳が、烈しい瞋恚を露わにしている。

「確かに彼の、当初の緑谷くんへの接し方は褒められたものではなかった……。だがだからといって、何も知らない人間に馬鹿呼ばわりされる筋合いなどない!!」

「飯田くんの言うとおりやー!」お茶子も同調する。「だいたい、爆豪くんよりあんたのほうがよっぽどむかつく!」

彼女の素直すぎるひと言に……物間のチームメイト、そして鉄哲チームの面々までもがことごとく賛同した。いや賛同とまでは言い過ぎだが、少なからず納得の空気が漂っていることは否定できなくて。

「……なんでもいいが、お前らは敵だ。——潰す」

唯一感情の揺らぎを見せない轟焦凍が、宣戦とともに放った氷結。それが、戦闘再開の端緒となった。

「ッー」

咄嗟に掌をかざし、爆炎を放つ物間。地面を奔りながら生まれ出づる氷山が衝撃で一挙に粉碎され、さらに溶融していく。

「轟焦凍……こっちはこっちで、馬鹿のひとつ覚えだね」

むろん、強力な個性ではある。だからこそ工夫のひとつもない、ごり押し of 戦法を好みがちになってしまう——勝己に言わせれば”モノマネ”のお得意な物間は、個性とその持つ人ごとの特徴をよく理解していた。

だが、今この場はチーム戦である。こちらが物間だけでないように——敵もまた、轟あるいは勝己だけではない。

「——ッー」

もうもうと立ち込める水蒸気を突き抜けるようにして、一迅の疾風が迫る。——飯田天哉が自らの個性”エンジン”で仲間を引っ張り、一気に迫ってきたのである。

「轟くんッ、もう一度だー」

「ああ」

冷静に応じる轟の”右”から、再び氷結が奔る。——しかし……先ほどまでより、勢いが弱々しい。

「円場、回原っ！」

「ああ！」

馬を務める男子生徒、円場硬成と回原旋がリーダーの指示に応えた。

「ふうふうっ！」

——円場硬成、個性”空気凝固”。吐き出した空気を固めて透明の壁をつくり出す。

奔る氷柱はその壁に阻まれてふたつに割れてしまう。ただ、氷結の余波までは防ぎきれない。一部は未だ、彼らに喰らいつかんとしている。

そこで、

「お、らあッー！」

——回原旋、個性“旋回”。身体の一部をドリルのように回転させることができる。今回は、腕。オーソドックスだが、意表を突く必要のない非生物相手なら最も威力を発揮する。回転させた状態で勢いよく突き出せば、迫っていた氷の群れは容易く砕け散った。

「ふん、それだけかい？轟焦凍」

「……ッ、」

ぎりりと歯を食いしばる焦凍。その右半身が急速に冷えて結露すら起こしていることに、彼に担がれている勝己は気づいた。

「おい、半分野郎。てめエの個性——」

「——黙れ!!」

彼の口から入学以来聞いたことのないような怒声が、仲間の鼓膜を震わせた。

「俺の力は……これだけだっ!!」

仲間の当惑など気にとめるそぶりもなく、ただがむしやりに氷結を繰り出す轟。しかしなんの策もなく一度読まれた攻撃を放ったところで、相手に通用するはずがない。物間が放った爆破によって容易く散らされてしまう。

さらに、

「俺らのこと、忘れてねえかあ!!?」

「ー！」

いい加減一騎打ちを傍観するのも我慢の限界だったか、ここで鉄哲チームが攻撃を仕掛けてきた。鋼鉄化した拳が、騎手に迫る。

「——ッー！」

勝己が回避行動をとろうとするより早く、飯田が動いた。脹脛のエンジン音を勢いよく噴かし、鋭い回し蹴りを放つ。

拳と、足。一応は生身同士のぶつかりあいであるにもかかわらず、その余波は激しい旋風を巻き起こす。

「ッ、おめエA組の委員長だったか？やるじゃねえか！」

「きみこそ……！」

睨みあう両チームは、今度こそ総力をかけての死闘を演じようとしている。

「……おい物間、今度は俺らが締め出されちまったぜ？」

股下の回原の言葉に、物間はふうむと顎に指を当てて考え込んだ。この騎馬戦、色々とルールに縛りはあるが一騎打ちを強いてはいない。多数で少数を取り囲んで戦うことも、絵面を考えなければ問題はないのだ。というかそうでないと、仮面ライダーの独擅場になってしまうのだが。

「さて、どうするか……？」

言葉とは裏腹に、物間の肚は決まっていた。爆豪チームが鉄哲たちとのタイマンに熱中したところで、後方からひと突き。正面切つての対決を好む鉄哲は怒るかもしれないが、そんなの知ったことではない。

点数を得る——それ以上に重要なのは、爆豪チームを潰すこと。論に値しない仮面ライダーを除けば、この連中はA組のトップクラスに位置する面々である——約一名は微妙だが——。最終戦でA組上位を独占されなかったためには、なんとしてもここでご退場いただく必要があった。

……いや、それは表向きの理屈だ。そうでなければ、この西欧人のような甘い顔立ちの少年がこんな、獲物を狙って舌なめずりする肉食獣めいた表情を浮かべることはないだろう。

「なアんかき、いけ好かないんだよな」

全員そうだが、特にあのアンチヒーローめいた言動のリーダー。ヤツの鼻を明かし、顔を真っ赤にして悔しがる姿を見たい欲求に駆られるのだ。

それはひよつとして、近親嫌悪というやつではないか——仲間たちは内心そう思ったが、あえて口にすることもない。あの厄介な難敵たちとガチンコで戦うことは、可能な限り避けたかったのだ。

「俺たちはいつでもいいぜ、物間」

「……じゃあ——」

再び動き出そうとする物間チーム。そのとき、



「おい」

「！」

唐突に背後からかかった声。半ば反射的に振り向いたその瞬間に、  
彼らの運命は決していた。

## 凍てつく記憶（後）

『ギア、2回戦も残り一分を切ったア——!!どつかの大魔王が上でも下でも大暴れしたせいで非常にシヴィくな激戦になっちまったが、残ったヤツらは果たして生き延びることができてるのかア〜!!?』

プレゼント・マイクのシャウトの通り、騎馬戦はいよいよ佳境を迎えていた。

残る数チームは生き残りをかけて必死に戦い続けている。——彼の言うところの”どつかの大魔王”もまた、そのひとりには違いなかった。

『誰ダ今イナゴツテ言ツタノハ!!?』

「誰も言っただけえ——!!?」

主に彼の相棒は、狩人気取りでひたすら興奮しているのだが。

「ツ、尾白!砂藤!もつと速く走れねえか!?!このままじゃ……」

「追いつかれるって!わかってるけど……!」

「ヒイ、ヒイ……もうぶっちゃけ、エネルギーが……!」

尾白はまだしも、糖分を吸収することで身体能力を強化している砂藤はもう限界に近いようだった。仮面ライダーを相手取った激戦の矢面に立ってきたのだ、無理もない。

対して、騎手である自分にはまだ”肉体的には”余裕がある。ふたりにばかり負担を強いている状況に切島は歯噛みしたが、まずは生き残ることを考えなければ。

——無論、彼らはただ逃げているだけではない。

「ヤオモモ、そろそろアイツらも限界だ。それに、これ以上緑谷に近づかれると……」

チームメイトのひとりである耳郎響香の進言に、リーダー・八百万百はこくんと頷いた。

「ええ。一撃で、吹っ飛ばしてご覧に入れますわ……!」

彼女は自らの個性を最大限に活用し——なんと、その場に迫撃砲を生み出していた。

”創造”——非生物であれば、なんでも己の身から生成できる。ただしデメリットもある。体内の脂質を変換しなければならぬこと……そして、皮膚を介する都合上大きなものを創ると衣服が破れてしまうこと。

それゆえ緊急時のフォローを除き、個性の使用は極力控えてきた——本領発揮のチャンスを伺って。

切島チームが標的を引きつけている今こそ、そのときだ。

「いきますー！3・2・1——」

——FIRE!!<sup>発射</sup>

砲弾が空中めがけて撃ち出され、青空に融けるまでに上昇していく。かと思えば、ある地点から綺麗なアーチを描くように落下を開始し、

今にも切島チームへ迫ろうとしている、騎馬の異形の傍で爆裂した。

「ッ!？」

思わぬ衝撃に、吹き飛ばされそうになる仮面ライダー。実際、彼が常人の身であればその通りになっていたことだろう。耳を劈くような轟音、そして世界を白一色に染める閃光——五感の限界を容易く超えるあらゆる責めによって、意識を奪いとるといっておまけ付きで。

だが、そこは核にも耐えるボディの英雄とその相棒である。吹き飛ばされるどころかぎりぎり倒れることもなく踏みとどまる。ただ姿勢制御と引き換えに、転進を余儀なくされたのだが。

『アト少シトイウトコロデ……!』

「……遠慮がなくなってきたね。あと四十五秒、それで時間稼ぎをするつもりかな？」

またワン・フォー・オールで飛翔して、一気に距離を詰めてもいいが……そうなると、活躍の場をなくしたアクロバッターが拗ねるだろう。

少し考えて、出久はこのまま騎上の人であることを選んだ。自分を狙って襲ってくる砲弾を巧みにかわしつつ、八百万チームに迫っていく。

「ヤバイ、来る……！」

これ以上接近されたら、砲撃もできない。

「——任せてー！」

体格に見合わない甲高い声を発した口田甲司が、己の個性を発動させる。大量の羽虫を呼び寄せ、その群集を迫る強敵に差し向けたのだ。

「ツー！」

視界を塞がれ、スピードが鈍る。尤も騎手より、騎馬であるアクロバッターのほうが甚大なダメージを受けていた。

『ウワア、マタコレ……虫ハ苦手ダア!』

「ええっ……！」

じゃあきみは一体なんなんだ。喉もとまで出かかった言葉を、出久はかろうじて飲み下した。バッタを象った姿をしてはいるが、彼は世紀王のために創られた生体マシンである。人語を解することからわかるように、その精神は人間のそれと変わりない。

ともあれ、時間稼ぎは奏功した。八百万チームが後退し、両者の間に切島チームが割り込む。当初は呉越同舟の立場だった彼らも、今となっては完全に一心同体となって絶大なる脅威に立ち向かっていた。

『さあッ残り十五秒だア！いよいよカウントダウン開始といくかア〜!?!』

「ツ、やっとか……！」

「まだ油断はできないぞ！切島、砂藤」

「おうよ！八百万たちには、指一本触れさせねえぜ……！」

本当の勝負はここから。ひとケタ秒の中でも自分たちが突破され、八百万チームまでもが蹂躪される可能性はまだ十分にある。そうなればここまでの努力は水の泡。——なんとしてでも、全員で生き残つてみせる。

そんな彼らの熱意を汲み取りながら、仮面ライダーも手を緩めるつもりはなかった。

「時間がない、アクロバッター！一気に突破するんだ!!」

『ヨッシ……！』

ライダーがアクセルを捻り、覚悟を決めたアクロバッターが一気に加速する。

「ワン・フォー・オール……フルカウル！」

光を纏う英雄。迎え撃つ少年もまた、己の全力をもつて肉体を硬化させていく。

「負けねえ……絶対！！」

「その情熱ごと、ブチ砕く！！」

カウントダウンの声が響く中で——彼らは、己の掌を突き出しあつた。最後の最後、得点を獲りに行くために。

——そして、

『ゼロ——！試合、終了オオオ！！』

プレゼント・マイクのシャウト、ミッドナイトのホイッスル——そして、観客の歓声。

二回戦の終焉が、告げられた。

「……よく頑張ったね、みんな」

心の底から発せられた、若き英雄の労いの言葉。彼の指先は——あと数ミリメートルのところで、切島のハチマキを捉え損ねていた。逆もまた然り、であるが。

「……た、」

「耐え、たあ……」

極度の緊張状態から解放された切島の身体が、ぐらりと騎上から揺れ落ちる。彼を乗せているのが本物の馬であればそのまま地面に叩きつけられるところだが、実際のところは幸いにして気脈の通じた仲間たちである。

「！」

すかさず尾白が尻尾で受け止め、砂藤が掬い上げる。切島はぐったりしていたが、意識はあるようだった。

そんな切島チームの背後で、八百万チームの面々もまた精魂尽き果てたようなありさまであったことは、言うまでもなかった。

——そして、もう一方の戦場。

「……痛み分け、か」

「クソが……！」

心底悔しげに顔をゆがめる爆豪勝己。その手には敵から奪ったハチマキが握られていたが——彼もまた、鉄哲の手によりハチマキを奪われていたのだった。

「くっ……！あと少しというところだったのに……！」

「でも、それなりの点数は確保できたし！突破は、できたんちゃう？」

お茶子の言葉もいちおうは的を射たものだった。仮面ライダーによる蹂躪によって、既に過半数超のチームが脱落させられている。鉄哲チームが元々保有していたポイントも大きいから、決勝へ駒を進めることはできたのではないか。

「そういう問題じゃねえッ、つかもう降ろせやクソども!!」

「痛ッ!?ほんとうにきみは口も手も酷いな!」

もぐら叩きのように頭に拳をぶつけられ、飯田たちは勝己を地面に降ろさざるをえなかった。——彼の緋色の瞳が睨みつけるのは、今の今まで争っていた鉄哲チームではなくて。

「半分野郎、てめエ……！」

「……」

半分野郎——そうあだ名された轟焦凍は、チームメイトの憤怒を黙殺するかのようにならぬ方向を見つめていた。

\*

第二回戦の結果が出揃った。

1,000万ポイントを保持し続けた仮面ライダー……もとい緑谷チームが首位であることに揺るぎはないとして、鉄哲チーム、爆豪チーム、切島チームが続く。本来ならこの4チームのみが決勝戦進出の有資格者となるところなのだが、

「12人じゃ盛り上がりに欠けるわねえ……。よし、1チーム増やし

ちやいましょう！」

主審であるミッドナイトの鶴のひと声によって、5位のチームも決勝へ駒を進めることとなった。となると、鉄哲たちと交代するまで爆豪チームと骨肉の？争いを繰り広げていた物間チーム、誰もがそう思っていたのだが――

「え……う？」

電光掲示板に表示された名前は――心操チーム。

「悪いね。――」苦勞さん

「……ッ！」

心操人使の嘲りを多分に含んだ笑みに、物間たちはただぎりりと歯を食いしばることしかできない。

いったい、何が起きたのか。二大合戦が場を占めている中であつて、それを知る者は当事者以外に殆ど存在しなかった。

ただ、偶々その光景を目撃していた者たちは、燃えるような声援ではなく怪訝な声音ばかりを洩らしていた。

なぜなら、そこに力のぶつけあいにはなかったからだ。心操チームが後ろから近づき、不意打ちをするでもなく声をかけ……振り向いた物間は次の瞬間、自ら心操にハチマキを手渡していた。何かとんでもない弱みでも握られているのでは？――そんなふうには邪推する者が現れるのも、むべなるかな、である。

無論、そうではない。すべては、心操人使の個性によるものであった。

\*

第二回戦が終了したところで、ちょうど正午である。決勝戦は午後を待つこととして、参加者も観客もみな昼休憩という名の小休止に入った。決勝進出者計16名にとっては、嵐の前の静けさがごとき時間である。

――決勝進出者といえば、こんなひと幕もあつて。

「僕は……決勝トーナメントを、辞退したい」

後ろめたい表情でそう宣言したのは、心操チームのメンバー・庄田二連撃であった。

当然、その申し出を受けたミッドナイト及びB組担任のブラドキングに事情を訊かれる。それに対し、彼は思ってもみないようなことを口にした。

「実は……騎馬戦の記憶が、ほぼ無いんだ。心操人使くん、彼に声をかけられて振り向いた途端、突然頭に靄がかかったようになって……」

——気づけば、心操チームの一員として戦っていた。

そんな自分が何をしたのかもよくわかっていないような状態で、決勝トーナメントに進出する資格はない。手法は様々あれ、”プルス・ウルトラ”……さらに向こうへ行くために、死力を尽くした者こそ進むべき道。

庄田少年の主張は信念に基づいたもので、多少の説得はあったものの結局は容れられることとなった。

彼の抜けた穴を埋めるために次点の八百万チーム内でくじ引きが行われ、上鳴電気が決勝への切符を手に入れた。

「……ほんとに良いのか？俺で……？」

選ばれた上鳴だったが、自信満々というわけにはいかなかった。何も貢献していないわけではないが、終盤は反動でアッパラパーになってしまっていた。庄田ではないが、気づいたら試合が終わっていたというような状態だ。

それに対して、チームメイトたちはというと。

「くじ引きだもん、しょうがないっしょ」

「僕は、上鳴くんなら良いと思うよ……！」

耳郎、口田——そして、八百万も。

「皆さんに功績があり、同時に至らない点がありました……無論、わたくしも含めて。ですから、どなたが進出しても恨みっこはなしですわ。わたくしたちのぶんまで頑張ってくださいね、上鳴さん」

仲間たちの後押しを受けて、彼は庄田とは異なる道を選んだのだった。



——改めて、ランチタイムである。

戦い終わって早々に合流したお茶子・飯田両名を引き連れ、出久はアクロバッターを押しながら歩いていった。観客たちのひしめく敷地内だが、ひと目で生徒とわかる濃紺の体操服に似たような色のバツタ型マシンの組み合わせは非常に目立つ。すれ違う人々から声援を受け、出久は面映い思いを抑えて笑顔で応じた。

「やはり凄まじいな……緑谷くんの人気は」

「そりゃ大活躍やもん、いつも。はあ、あやかりたいなあ……私なんか、騎馬戦でも全然やったし」

「そんなことはないぞ！確かに麗日くんの個性は真っ向勝負向きでないかもしれないが、そのぶんの確にアシストしてもらった！ありがとう!!」

人並みに負けない大声にお茶子が苦笑していると、

「出久くん……こっちこっち……」

「！」

聴く者の心を和らげるような声だった。見れば、少女と呼ぶには成熟した女性がこちらに手を振っている。

「あ、いたいた。玲子さん」

「ム、彼女が噂に聞く……」

「うん、白鳥玲子さん。クライシス帝国と一緒に戦った仲間だよ」

プロヒーローですら正攻法では歯が立たなかった、あのクライシス帝国の怪魔怪人と——もちろんサシでの勝負をしていたわけではなからうが、だとしても一般市民にあるまじき偉業である。

「やっほー出久くん、アクロバッター！」

『ヤッホー』

「や、やっほー。来てると思わなかったよ」

「うん、こういうイベントは生で見てもそだもん。それにしても案の定大活躍……っていうか、やりたい放題だったわねえ。大丈夫？周りから恨み買ってない？」

「あはは……」

出久がブラックジョークに鼻白んでいると、

「そんなことはありません！緑谷くんは尊敬すべき先達であると同時に、信頼できる友人です!!」

「!」

思わず声をあげてしまった飯田は、慌てて「失敬」と頭を下げた。

「はは……ありがとうございます天哉くん。——紹介するよ玲子さん、飯田天哉くんと麗日お茶子さん。あ、もう知ってるかな?」

「ウン、さつき活躍してたモン」

「恐縮ですツ!!」

背筋を限界まで真っ直ぐに声を張り上げる飯田。恐縮という言葉とは矛盾しているようだが、むろん実際にはしていない。

一方のお茶子は、じいっと玲子の顔を凝視していた。睨みつけている……わけではないようだが。

「……何か、私の顔についてる?」

「う、麗日さん?どうしたの?」

心配した出久が恐る恐る訊いた瞬間、お茶子はその場に崩れ落ちた。

「め、めちやくちや美人や……」

「!」

「あらありがとう。でもお茶子ちゃんもキュートよ、とつても!」

「……性格まで美人や……勝てへん」

『休憩マデ勝負スルノカ?』

「容姿も性格も勝ち負けではないぞ麗日くん!!」

個性豊かにも程があるやりとりに、思わず苦笑する出久。——しかし次の瞬間彼は、人波の向こうに見知った姿を認めた。

（あれは……かつちゃん、轟くん?）

爆豪勝己と轟焦凍、同級生の中でも印象深いふたりが連れ立って歩いていく。昼食をともにするつもりなのだろうか、同じチームで共闘した関係なのだ、そうであっても不思議ではない。

だが、それにしては……一瞬見えたふたりの表情はあまりに陰しく、冷えきっているように感じた。

「……皆、ごめん。僕、ちよつと」

「えっ?」

「ちよつとつて出久くん、お昼は? 引子さんたちとお弁当作ってきたのに!」

「先食べててつ、あとで絶対食べるから!」

そう声をあげて、人だかりの向こうへ消えていってしまふ。

残された高校生二名、カメラマン一名、バイク一機はといえば。

「……とりあえず、食べよつか。皆のぶんもあるから」

「ほんとですか!? 是非!」

「少しは遠慮しよう麗日くん!……せつかく作ってくださいだったのであれば、恐縮ながらご相伴にあずかってもよろしいでしょうか!」

『マドロッコシイナ。トコロデ、私ノブンハアルノカ?』

\*

出久の睨んだとおり、勝己と轟は一触即発の状態にあつた。

観客はもちろん生徒らの姿もないスタジアム裏で、前者が後者を吊し上げていたのだ。

「てめエどういうつもりだ、ア、ア!!?ンで全力を出さねえ!? てめエが氷しか使わねーワンパターンなせいで、ムダに手こずつたじゃねえか!!」

「……………れ……………」

「ア、ア!? 聞こえねえんだよ!!」

「黙れ、つつつてんだ……………」

睨みつけるオツドアイ。触れたものを凍りつかせるような、冷たい、酷薄な目をしていた。

それでも勝己は怯まない。怯んでなるものか、と思つた。あの瞬間の勝ち負けが本旨ではない——自分がライバルと認めた男が、全力を出すこともせずに敗北へと転げ落ちそうになつた。遠くない未来に立つべき戦場において、敗北すなわち死を意味するということのに。

「おまえに何がわかる……。俺は絶対、”左”は……………あいつの力は、使

わねえ……!」

「……あいつ、だア？」

思わぬ言葉に、込めていた力が緩む。その隙に轟は胸ぐらを掴む手を振り払ったが、立ち去りはしなかった。勝己に背を向ける形で立ち尽くしたまま、言葉を紡ぐ。

「フレイムヒーロー、”エンデヴァー”……俺の父親だ。知ってんだろ」

知らないはずがない。エンデヴァーといえばオールマイトに次ぐNo. 2ヒーローであり、事件解決数だけならそれに匹敵する実績をもつ。

尊く誇りうる地位と名誉を備えた父親——しかし轟焦凍にとって、”それ”は憎悪の対象でしかなかった。

「あの男の、歪んだ野望の成れの果て——それが俺だ」

「何、言って……」

「——母は俺に、煮え湯を浴びせた」

醜く爛れた顔の左半分——火傷痕を撫ぜる轟の姿に、勝己は言葉を失った。

つづく